

2010 年度国際医療福祉大学

自己点検・評価報告書



学校法人 国際医療福祉大学

「自己点検・評価報告書（2010年度版）」の刊行にあたって

国際医療福祉大学は、保健医療福祉の専門職をめざす人材を育成することを目指しており、単なる専門知識や技術の習得のみならず幅広い教養や豊かな人間性を養うための教育理念とカリキュラムを通して、平成7年、医療福祉の総合大学として開学し、以来その目標の実現に努力してまいりました。

2010年度自己点検・評価は本学にとって5度目となりますが、2002年度の自己点検・評価では、教育に直面した「学生生活」の実態とその評価に中心をおき、学生から寄せられた様々な意見を参考にしながら、カリキュラム、シラバスなど教育内容の充実はもとより図書館の拡充整備、レストランの新設、学内バリアフリー対策の実施、職員の接遇教育など、教育環境の充実に真摯に取り組んでまいりました。

2004年度の自己点検・評価では、前回の評価の延長線上にある卒業生を対象に、大学から離れた第三者的視点から問題点等を調査把握し、そこで得られた課題等について全学的に検討し教育の改善を図りました。同時に、今後の臨床教育実習の更なる充実強化をはかるために、卒業生の就職先にも調査を依頼し、その意見等も活用させていただきました。

2006年には、翌2007年度に(財)日本高等教育評価機構による第三者評価を初めて受審すべく認証評価委員会を立ち上げ、同機構が定める大学評価基準「建学の精神」「教育研究組織」「教育課程」「学生」「教員」「職員」「管理運営」「財務」「教育研究環境」「社会連携」「社会的責務」の11の項目に対して自己点検評価を行い、自己評価報告書の作成及び関連資料の提出、書面調査及び実地調査などを経て、「同機構が定める大学評価基準を満たしている」と、平成20年3月19日付で認定を受けました。

前回実施した2008年度自己点検・評価は、本学の3つの基本理念のひとつである「社会に開かれた大学」に関して自己点検を行いました。1995年の開学より14年がたち、これまで本学の持てる教育成果という貴重な財産をどの程度、どのように社会及び地域等へ還元してきたかを検証するために整理し、今後の地域連携の方法や在り方について見直し検討することも必要と考えました。

さらに、各学科・大学院・センター等における臨床実習を含めた教育全般の充実度、成熟度、学生生活のみならず就職および国家試験対策をも視野に入れた学生への支援体制などについても自己点検を行いました。

今回2010年度の自己点検評価は、3つの基本理念のうちの「国際性を目指した大学」に関し主に国際交流にテーマをしぼり、開学より本学が海外に対してどのような活動を行ってきたかを整理しまとめました。これまでに取り組んできた活動を振り返りながら、「国際性を目指した大学」として、今後も継続して真摯な努力を惜しみなく発揮し国際交流を進めるべきと考えます。

大学を挙げて本学の発展のために、本報告書を実際の教育・研究および教育環境の場に活用出来るよう努めてまいり所存であります。

本報告書をご一読いただき、本学の活動をご理解いただく一助となりますれば望外の喜びと感じます。また、皆様方からの忌憚のないご意見、ご批判を賜れば幸いに存じます。

2011年12月

国際医療福祉大学
学長 北島政樹

目 次

目 次

I. 2010年度自己点検・評価のねらい	1
II. 建学の精神・基本理念、使命・目的、個性・特色等	
1. 建学の精神・基本理念、アドミッションポリシー	4
2. 使命・目的	5
3. 個性・特色等	6
III. 沿革と現況	
1. 沿革	9
2. 現況	13
IV. 大学の新たな課題：国際交流	
1. 留学生及び研修生の受入れ	17
2. 国際協力協定締結	31
3. 海外研修	33
4. JICA プロジェクトの概要	37
5. 教員による海外活動	42
V. 各学部各学科の自己点検・評価と今後の課題	
(1) 保健医療学部看護学科	89
(2) 保健医療学部理学療法学科	91
(3) 保健医療学部作業療法学科	93
(4) 保健医療学部言語聴覚学科	95
(5) 保健医療学部視機能療法学科	99
(6) 保健医療学部放射線・情報科学科	103
(7) 医療福祉学部医療福祉・マネジメント学科（医療経営管理学科）	106
(8) 医療福祉学部医療福祉・マネジメント学科（医療福祉学科）	110
(9) 薬学部薬学科	113
(10) 小田原保健医療学部看護学科	116
(11) 小田原保健医療学部理学療法学科	118
(12) 小田原保健医療学部作業療法学科	120
(13) 福岡看護学部看護学科	122
(14) 福岡リハビリテーション学部理学療法学科	124
(15) 福岡リハビリテーション学部作業療法学科	126
(16) 福岡リハビリテーション学部言語聴覚学科	128
VI. 2010年度自己点検・評価の総括	130
国際医療福祉大学自己点検・評価委員会規程	132
2010年度自己点検・評価委員会名簿	133
資料1. 学生アンケート結果	134

I . 2010 年度自己点検・評価のねらい

I. 2010年度自己点検・評価のねらい

本学は、これまで5回の自己点検・評価を実施しそれらを報告書としてまとめ公表しているが、改めてそれらの経過を以下に示し、今回の自己点検・評価のねらいについて述べる。

国際医療福祉大学は、平成7(1995)年度に保健学部(平成19(2007)年4月に保健医療学部へ改称)5学科で栃木県大田原市に開学した。その後、大田原本校に医療福祉学部、薬学部、福岡県福岡市に福岡リハビリテーション学部、神奈川県小田原市に小田原保健医療学部を開設し、また、その間には大学院修士課程、博士課程を開設し、全国各地で同じ授業が受けられるよう各地にサテライトキャンパスを設け、本学の新たな展開を図った。

本学の自己点検・評価は、平成12(2000)年度に初めて実施したが、この時の報告書は本学にとって初めての報告書ということもあり、全体的に網羅した内容となっている。テーマは大学の基本理念と教育理念、大学の沿革と組織、各学科等の教育・研究の方針と取り組み、学生の受け入れ、カリキュラム、教育指導状況、成績評価と単位認定、学生生活への配慮、卒業生の進路状況、研究活動、国際交流、社会と連携などであるが、資料的なものも多く見られる。

平成14(2002)年度の自己点検・評価は、「学生生活の実態把握・評価」という副題を置き、それらを中心に実施されている。また、その他に教育研究における各学科・センター等の課題と今後、大学としての新たな課題等が取り上げられている。この時の自己点検・評価を機会に行った学生生活に関するアンケートの実施により、学生が抱えている問題の把握及び大学として如何にそれらに対処しているかが報告されている。一方、精神衛生面に関して、在籍する学科の教員のあり方、学科全体の理解が今後の重要な課題であることが指摘されている。また、大学としての今後の課題として、教育理念の点検、カリキュラムの改編、大学関連施設との連携(備品の設置・増設と本学臨(地)床実習施設としての利用状況、大学附属施設としての熱海病院、大学クリニック)、衛星放送授業の導入、国際交流の進展について検討されている。

平成16(2004)年度に実施された自己点検・評価は、卒業生の社会活動、教育と臨床現場の一体化による専門職教育、それ以外に、教育研究における各学科・センター等の課題と今後、大学の新たな課題及び大学院の総合的な自己点検・評価が取り上げられた。卒業生の社会活動では、卒業生の意識調査と雇用者によるアンケート調査報告がなされている。雇用者である施設長からのアンケートでは概ね良好で、高い評価を得ている。卒業生の9割が就業していること、国家試験等を活かした就業をしていること、5割以上の学生が学会などに属し研鑽を重ねていることなど専門職としての意識が高いことが報告されている。また、大学の新たな展開として、①薬学部の設置、②リハビリテーション学部の設置、③国際医療福祉大学附属三田病院の設置について言及されている。附属三田病院は平成17(2005)年3月に東京専売病院から継承し、薬学部及びリハビリテーション学部(現福岡リハビリテーション学部)は平成17(2005)年4月の開設であり、これらの新たな展開については本学の教育研究の発展に大いに寄与するとともに、それぞれが所属する地域社会の発展への貢献も大である。

本学の、他地域への学部キャンパスの設置、新たな附属病院及び大学関連施設の設置などを振り返ると、開学以来 10 年間の発展はまことに目覚ましい限りである。今後は、国際医療福祉大学を中心とした大学院や大学関連施設間の教育研究機能の連携のあり方について具体的に検討を重ねていくことが大切であり、さらにそのあり方をそれぞれの持ち場で互いに共有することが本学のますますの発展につながると考えたと報告されている。

平成 19(2007)年度には、財団法人日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価を受審した。建学の精神、大学の沿革と現況、基準ごとの自己評価（教育研究組織、教育課程、学生、教員、職員、管理運営、教育研究環境、社会連携、社会的責務）という予め決められたテーマに沿って本学の臨床実習教育、国際交流活動、社会的貢献教育・活動、大学院などについてまとめた。総評としては、建学の精神及び基本理念などは周知されていること、FD、学生の授業評価アンケート結果から教育方法の改善がみられていること、種々の公開講座の開催など社会貢献も活発であること、学部及び大学院の定員超過に対する対策、遠隔授業、医療福祉チャンネル 774（本学関連施設が運営する衛星放送）の授業が教育効果をあげていること、財政的努力がなされていること、各種委員会などの組織等が適切に運営されていることなどについて評価を得た。一方、入学希望者及び保護者等外部の方に対して本学の建学の精神、教育理念、大学の使命・目的を明確に示すこと、3 キャンパスの同一学科の講義内容・試験のレベル評価・進級基準などの統一に齟齬がないこと、総合教育科目については授業評価結果等を参考に見直しをすること、定期試験不合格者に対する対応の検討、大学院生の定員の過剰に対する対応、大学院生学位授与率の向上への対応、国家試験不合格者への対応、院生数の増加に伴う大学院教員の配置、科学研究費等の外部研究費の申請率の向上と獲得件数の増加、研究協力課などの設置の検討、図書館の蔵書数、および閲覧座席数、学生食堂、学生ホールの整備、大学コンソーシアムとちぎとの単位互換制度の検討、危機管理体制の整備などが参考意見として指摘された。

平成 20（2008）年度自己点検・評価の主たるねらいを、地域連携、学生生活活動としてサークル及び同窓会の運営と学生調査、各学科・センター等の課題と今後に絞った。また、大学機関別認証評価時の(財)日本高等教育評価機構から指摘を受けたことも踏まえながら実施を計画した。

地域連携のこのねらいの背景には、開学当初からの基本理念に“人間中心の大学”“社会に開かれた大学”“国際性を目指した大学”が掲げられており、この“社会に開かれた大学”の中で、地域連携による社会的貢献度をこの機会に確認し、再度見直し、今後の地域連携の拡大及びあり方を検討する目的が据えられている。

本学では毎年継続的に学生アンケートを実施しているが、これまでは最終学年の 4 年生のみを対象に実施していたものを、より多くの意見を集約しよりよい学生生活のための支援策などを検討するため、今回は全学年を対象に実施した。

卒業生の動向などについては、平成 14(2002)年度の自己点検・評価報告書にもまとめられているが、キャリアアップのための卒業生支援を検討する上で、同窓会の運営についても言及した。

平成 22(2010)年度自己点検・評価は本学の基本理念である、人間中心の大学、社会

に開かれた大学、国際性を目指した大学の3大理念のうち、国際性である国際交流について総括を行った。国際交流では、他大学との協定、留学生の状況、研修生の受け入れ、海外研修旅行、海外協力（JICA など）、各教員による海外での学術発表などを中心に言及した。

また、例年実施している学生の生活アンケート調査、学科・センターの自己点検評価を継続して行った。

Ⅱ. 建学の精神・基本理念、アドミッション ポリシー、使命・目的、個性・特色等

Ⅱ. 建学の精神・基本理念、アドミッションポリシー、使命・目的、個性・特色等

1. 建学の精神・基本理念、アドミッションポリシー

国際医療福祉大学（以下「本学」という）は、建学の精神である「共に生きる社会」の実現のために、「3つの基本理念」及び「7つの教育理念」を掲げている。

これら「3つの基本理念」を念頭に、専門職種である前に人間としての人格向上に努力すること、大学が地域社会と共に生きるということ、広く世界的視野に立つということを目標に、保健・医療・福祉の各界や国際的ニーズに応え得る大学を目指しており、障害者も病者も健常者もお互いを認め合って暮らせる「共に生きる社会」の実現のため、各々の学科が、それらの専門性を学びながら「人間」を追究するという共通した目標で結ばれることにより、将来の医療福祉専門職へのより明確な動機付けができると考えている。

また、「7つの教育理念」を掲げることで、教員同士が目的を一つにし、保健・医療・福祉の各界や、国際的ニーズに応え得る大学が実現でき、社会の発展に大きく寄与できると考えている。

本学は、学科の壁を越えた、チーム医療に貢献できる医療福祉専門職としての総合的な資質を身につけた人材の育成をめざしている。

『3つの基本理念』

1) 人間中心の大学

プロフェッショナルとしての専門的な知識や技能の習得にとどまらず、幅広くバランスの取れた良識ある人間を育成すること。

2) 社会に開かれた大学

学問を創造的に追究するとともに、地域社会と一体となり、地域の医療福祉のニーズに応え、地域社会や医療福祉に関わる各界の人々の生涯教育の拠点としても機能できる大学となること。

3) 国際性を目指した大学

国際的センスを備え、いかなる国の人々とも伸び伸びと協働できる真の国際人を育成すること。

『7つの教育理念』

1) 人格形成

知識・技術のみに偏しない知・情・意を兼ね備えた人材を育み、「共に生きる社会」を目指していく。自ら考え、自ら行動する幅広くバランスの取れた人格の形成を図る。

2) 専門性

日進月歩する医療福祉の高度化・専門分化に対応した、学問の確立と研究の推進を行う。医療福祉のプロフェッショナルとしてふさわしい能力を学生生活で身につけていく。

3) 学際性

医療福祉分野の大学の特性を生かして、他学科の専門科目も教養として習得し、授業外活動も重視する。総合的教養を併せ持つ医療福祉専門職を目指す。

4) 情報科学技術

情報化社会の進展に対応できるよう、すべての学科において最新の知識・技術を習得

させ、情報科学技術に強い医療・福祉専門職を育成する。

5) 国際性

語学教育など一般教育だけでなく、専門教育や学生生活を通じて、人間(私人)としても専門家(公人)としても国際的視野を持った人材を育てる。

6) 自由な発想

人間としての品位や、社会のルール・マナーの遵守を前提におきながら、学生個人の自由な発想や行動を歓迎し、特に宗教・思想・社会運動への関心や探究を尊重する。

7) 新しい大学運営

時代の変化に即応して、大学の運営も年功序列を廃し、学生の立場から教員の評価もできるシステムを導入するなど、適時見直しを進め、自由闊達な校風の中で学生の自主性を育む努力をする。大学院教育については、特に生涯学習の視点に立って専門職育成のための教育、研究の充実を図る。

『アドミッションポリシー（入学者受入れの基本方針）』

<国際医療福祉大学が求める学生像>

- 1) 国際医療福祉大学の基本理念と教育理念とを十分に理解し、専門職業人として「共に生きる社会」の実現に強く貢献したいと考える人
- 2) これからの時代の健康、医療、福祉分野を担っていこうとする情熱をもち、自ら積極的に学ぶ意欲と能力とをもつ人
- 3) 健康、医療、福祉分野における科学技術の高度化、専門化、及び国際化に対応するための努力を継続できる人
- 4) 幅広い教養と広い視野を備えた豊かな人間性を養うため、積極的に自らを磨いていける人
- 5) あらゆる人に対して自らの心を開き、コミュニケーションをとれる人
- 6) 学業・社会貢献・技術・文化・芸術・スポーツの分野で優れた活動実績を有し、さらに国際医療福祉大学での学びを活かして将来それぞれの分野で活躍したいという意欲をもつ人
- 7) 国際医療福祉大学での学びを活かし、将来、母国および国際社会における健康、医療、福祉分野の発展に貢献したいという強い意志をもつ人

2. 使命・目的

本学は、学則第1章第1節第1条に「目的」を次のように規定している。

第1条 国際医療福祉大学（以下「本学」という。）は、教育基本法及び学校教育法に基づき、保健医療福祉に関する理論と応用の教授研究を行い、幅広く深い教養及び総合的判断力を培い、豊かな人間性を涵養し、保健医療福祉に関する指導者とその専門従事者を育成するとともに、学術文化の向上と国際社会の保健医療福祉に貢献する有能な人材を育成することを目的とする。

本学の掲げる「3つの基本理念」及び「7つの教育理念」の下、障害者や病者、健常者がお互いに尊重しあいながら「共に生きる社会」の実現を目指し、広い視野を持つ医療福祉の専門職を育成することを、全学を挙げて取り組んでいる。

臨床実習の経験を重視し、医療福祉分野での技術の高度化や専門化に迅速に対応できるような、高い技能を有した人材の教育にも本学では力を入れている。

また、自分の専門科目はもちろんのこと、他の医療福祉関連職種や一般教養についても学習できるようなカリキュラムを組み、幅広い総合的な資質を身につける機会を設けている。

3. 個性・特色等

本学は「保健医療福祉の総合大学」として、医師以外の医療や福祉の専門職（メディカルスタッフ）の育成とその地位向上を志し、栃木県及び大田原市の協力・支援の下「公私協力方式」として、平成7(1995)年に栃木県大田原市に開学し、平成17(2005)年には開学10周年を迎えた。

より質の高い教育を行えるよう、また、「チーム医療」に貢献できる高い技術と教養を身につけた医療福祉の専門職を育成できるよう臨床実習教育を重視し、本学は現在4つの附属病院とクリニック及び各地に多数の関連施設（臨床医学研究センター）を有し、臨床実習の充実を図っている。豊富な施設での臨床実習教育は、本学の特色の一つでもある。

平成12(2000)年度には、大田原キャンパス内に福祉施設「国際医療福祉リハビリテーションセンター」を開設し、学生は日常的に障害者や病者と直接触れ合い、将来の医療福祉専門職としての自覚を持ち、患者様との人間関係を体験して「共に生きる社会」を実感している。

また、本学は、大学名に記されているように「国際」的貢献にも力を入れている。本学独自の奨学金制度を設け、アジアや開発途上国等からの留学生を受け入れ、本国において医療福祉分野のリーダーになり得る人材を育成することで、各国の医療発展に貢献することができると考えている。これらの教育事業と併せて、JICA（国際協力機構）の依頼による医療協力専門家の派遣及び研修員の受け入れや、長期休暇を利用した学生の海外研修では各国の医療施設でボランティア活動を行うなど、海外の医療福祉事情を直に体験できるような世界を視野に入れた教育にも力を注いでいる。

学生は、その専門学科についての知識や技術を習得すると同時に、医療福祉という性格上人と向き合う職種柄、豊かな人間性を養うという観点から、全学科共通の科目を取り入れている。共通科目は総合教育科目と専門基礎科目があり、専門基礎科目では21世紀の「チーム医療」を視野に入れ、各々の学科の壁を越えて必要な知識が共有できるようになっている。

本学はそのための施設や設備、必要な情報の提供等、学習の支援を図っている。

入学試験においては、高校推薦入試を始めAO入試、社会人特別選抜入試、一般入試前期日程及び後期日程などの多岐に渡る受験機会を設けている。

一般入試前期日程は全国で実施しており、地方からの受験生にも入学のチャンスが広がっている。第1期生より全国各地の医療・福祉の現場で多くの卒業生が活躍している。

・語学教育

「国際」を冠する大学名のとおり、外国語教育、特に英語教育に力を入れている。「英

語が使える医療・保健・福祉の専門家」を英語教育の目標と定め、専門別英語教育への取り組みを実施している。

また、毎年 1 回英語の語学力を競う「学長杯スピーチコンテスト」を実施しており、学生の学習意欲の動機づけとなっている。

・国際交流

本学では国際交流センター及び国際部を学内組織に設置し、海外情報の収集、留学生との交流会の開催、短期研修生の受入れ、海外からの優れた招聘学者による講演会の開催など、多彩な活動に取り組んでいる。また、長期休暇を利用した学生たちの海外研修活動では、各国の病院にて現地スタッフの指導によるボランティア活動を通して医療の現場に直接触れられる機会を設けるなど、貴重な経験の提供を行っている。

・実習施設の充実

大田原キャンパスには、健康管理センター及びアジアで有数の専門施設である言語聴覚センターを併設する「国際医療福祉大学クリニック」がある。また、県内及び東京都・静岡県に計 4 つの附属病院を設置している。

関連施設には、重症心身障害児施設・身体障害者療護施設を併設した国際医療福祉リハビリテーションセンター、通所リハ・通所介護・グループホームを併設したおわたわら総合在宅ケアセンターを始め、老人保健施設、特別養護老人ホーム等多数の医療福祉施設があり、臨床実習教育に多くの場を提供している。

・最先端の教育機器

学内には最先端の教育機器を揃え、学生が現場に出ても即座に対応できるような教育を実施している。各学科にある実習室等においても、実際の病院・福祉施設のイメージを模したレイアウトをしており、教員からは「細かな指導ができる」、学生からは「指導がイメージしやすい」と評価されている。

・図書館及び図書室

大田原キャンパスには、図書館、小田原保健医療学部・福岡リハビリテーション学部・附属病院にはそれぞれ図書室を設置しており、専任の司書を配置している。

図書館・図書室は医療福祉関係の学習・教育・研究に必要な専門書、雑誌、視聴覚資料を主な蔵書としており、本学学生・教職員のほか、医療福祉に関わる一般の方・医療福祉を目指す高校生にも利用されている。

館内には文献検索用のコンピューターやインターネット環境が整備されており、研究・学習の一助となっている。図書館のすべての資料は学内の LAN 端末から自由に検索ができ、文献複写の申込み Web を通じて申し込むことができるようになっている。また、図書館のホームページをインターネット上に公開しており、学外からの蔵書検索も可能となっている。

その他、栃木県内 7 大学図書館の横断検索システムへの参加、県内公立図書館との相互貸借等、地域に開かれた図書館となっている。

・衛星放送授業（平成 23(2011)年度からは VOD 授業に特化）

本学は、CS 放送「医療福祉チャンネル 774」（㈱医療福祉総合研究所）の番組企画・制作を全面的にサポートし、学生には入学と同時に衛星放送の受信システムを無償貸与及び衛星放送授業での単位取得を可能とするなど、補助教材としても役立てるよう取り組んできた。同授業は、平成 23(2011)年度からはビデオ・オン・デマンド（VOD）シ

ステムに特化し、学生の利便性を図っている。

• **健康管理**

大田原キャンパス内には「国際医療福祉大学クリニック」が開設されている。クリニックには「健康管理センター」と「言語聴覚センター」が設置されており、「健康管理センター」により、学生・教職員の健康診断と日常の健康管理を行っている。アジアでも有数の先進的な設備を有する「言語聴覚センター」では、言語・聴覚等の機能に障害をもつ人の検査、診断、治療、及びリハビリテーションを行うとともに、言語聴覚学科へ臨床実習の場としての機能も提供している。

Ⅲ. 沿革と現況

Ⅲ. 沿革と現況

1. 沿革

本学は医師以外の医療や福祉の専門職（メディカルスタッフ）を育成する「保健医療福祉の総合大学」として、平成7年に開学し、平成17(2005)年には開学10周年を迎えた。

初年度は保健学部5学科で開学し、平成9(1997)年度には医療福祉学部を開設した。その後平成11(1999)年度には大学院医療福祉学研究科を開設、平成14(2002)年度には保健学部視機能療法学科を増設して、2学部8学科、1研究科の体制となった。

また、平成17(2005)年度には大田原キャンパスに薬学部薬学科を開設するとともに、福岡県大川市にリハビリテーション学部2学科を、平成18(2006)年度には神奈川県小田原市に小田原保健医療学部3学科を開設し、大田原キャンパス以外にも学部の展開を行った。

平成19(2007)年度には、保健学部を保健医療学部へ改称、リハビリテーション学部を福岡リハビリテーション学部へ改称及び言語聴覚学科を増設して3学科とした。

平成21(2009)年度には、医療福祉学部の医療経営管理学科及び医療福祉学科を統合し、医療福祉・マネジメント学科として再スタートを切った。新たに、福岡県福岡市に本学の6番目となる福岡看護学部、大学院には薬科学研究科を開設した。

これにより、本学の教育研究体制は6学部15学科2研究科に拡充した。

全国各地から入学者を迎え、それぞれの地域社会で活躍できる保健医療福祉専門職の人材育成を図っている。

平成17(2005)年度には、学生のボランティア活動を支援するため大田原キャンパスにIUHWボランティアセンターを開設し、専属のコーディネーターによるボランティアに関する学生の相談やボランティアの斡旋のほか、病院や施設等への学生ボランティアの紹介をするなど、地域との連携を促進している。

<大学院>

平成11(1999)年度の保健医療学専攻修士課程の開設に続き、平成13(2001)年度には医療福祉経営専攻修士課程及び保健医療学専攻博士課程を開設、平成19(2007)年度には臨床心理学専攻修士課程を加え、1研究科3専攻の体制となった。

平成21(2009)年度には、新たに薬科学研究科修士課程を開設し、2研究科4専攻の体制となった。ただし、翌年の平成22(2010)年度には、医療・生命薬科学専攻の募集を停止し、生命薬科学専攻を開設した。

大学院は、平成13(2001)年度からサテライトキャンパスの展開を始め、働きながら学びたいという社会人の要請にも応えている。現在、東京、小田原、熱海、福岡、大川、熊本の各キャンパスにおいて、遠隔授業システムを用いた同時双方向の授業を併用して、より高度な専門職の養成と研究指導を行っている。

平成20(2008)年度からは文部科学省の「がんプロフェッショナル養成プラン」に選定された「全人的ながん医療の実践者養成」推進のため、自治医科大学にも遠隔システムを設置し、連携して取り組みを進めている。

<附属施設及び関連施設>

臨床実習教育及び臨床研究の場として、附属病院等の整備を進めている。平成8(1996)年度に学内に国際医療福祉大学クリニックを開設、本学学生・教職員の健康管理センターとしてスタート。平成9(1997)年度からは言語聴覚センターを、言語聴覚障害学科（現言

語聴覚学科)の臨床実習施設として開設した。また、平成14(2002)年度に国際医療福祉大学熱海病院(静岡県熱海市)、平成16(2004)年度に国際医療福祉大学三田病院(東京都港区、東京都認定がん診療病院)、平成18(2006)年度に国際医療福祉大学病院(栃木県那須塩原市、平成10(1998)年度に医療法人経営の病院として開設後、平成18(2006)年度に学校法人が承継、同時に介護老人保健施設マロニエ苑・にしなすの総合在宅ケアセンターも学校法人が承継)、平成21(2009)年度には国際医療福祉大学塩谷病院(栃木県矢板市)をそれぞれ開設した。

その他、キャンパス敷地内には関連法人である社会福祉法人邦友会により、平成12(2000)年度に重症心身障害児施設なす療育園、身体障害者療護施設那須療護園、身体障害者デイサービスセンター那須デイセンターの複合施設である国際医療福祉リハビリテーションセンターを開設。平成15(2003)年度にはおおたわら総合在宅ケアセンターを、平成18(2006)年度には特別養護老人ホームおおたわら風花苑を、それぞれ学内に開設した。

充実した豊富な医療・福祉施設群は、本学の特色の一つであり、障害者や高齢者が学生と生活空間を共有する、「共に生きる社会」を実感できるキャンパスとなっている。

<国際交流活動>

(1)中国

平成10(1998)年度、通信・放送機構(TAO)のプロジェクトとして、「那須遠隔リハビリテーションリサーチセンター」を設置し、北京の中国リハビリテーション研究センターと衛星通信によるリハビリテーション教育の実証実験を開始した。この事業は、平成13(2001)年度から、国際協力機構(JICA)によるプロジェクトに発展し、首都医科大学における理学療法士・作業療法士の養成課程(4年制)の設立と、1期生が卒業するまでの教育課程を支援している。これに伴い、教員の派遣、研究員の受け入れを行った。

平成20(2008)年度からはJICAの「中国中西部地域リハビリテーション人材養成プロジェクト」として新たな展開を行っている。

(2)ケニア

平成9(1997)年度から平成16(2004)年度まで、ケニア国立医療訓練カレッジの教育レベル向上を目的とするJICAのプロジェクトを支援し、チームリーダーを含む教員の派遣と研修員の受け入れを行った。

(3)カンボジア

平成13(2001)年度から事前調査も含め「JICAカンボジア医療技術者育成プロジェクト」に協力、医療従事者養成学校整備のためPT・RTの教員を派遣。現在も継続中。

(4)タイ

平成15(2003)年度から平成17(2005)年度まで「JICA寄生虫対策アジアセンタープロジェクト」(マヒドン大学及びタイ国保健省との共同プロジェクト)に協力、チーフアドバイザーとして教員を派遣。

平成19(2007)年度には本学大学院とマヒドン大学公衆衛生学部との学部間協定を締結、大学院助産学分野の大学院生がタイで実習を行った。平成20(2008)年7月には同大学から研修生を受け入れた。

(5)ベトナム

平成18(2006)年度から、JICAの委託を受け、「JICA草の根技術協力プロジェクト」として、ベトナム・ホーチミン市のチョーライ病院に身体障害者支援センターを設立し、教

員を派遣して平成 20(2008)年 12 月まで活動を続けた。

平成 21(2009)年度以降は技術協力プロジェクトとしての展開を検討中。

(6)台湾

平成 18(2006)年度、元培科技大学との協定書に調印。今後の連携事業について検討に入る。平成 20(2008)年 3 月同大学にて開催された国際学生交流会議に大学院生 2 名を派遣した。7 月には同大学からの研修生を受入れた。

平成 21(2009)年 3 月国際学生交流会議に大学院生 1 名を派遣。

(7)留学生

開学以来の留学生の受入れに加え、平成 13(2001)年度からは本学独自の奨学金制度、「IUHW アジア学生奨学金制度」を設け、アジア各地から毎年留学生を受入れ、本国において医療分野面でリーダーとして活躍できる人材の育成を行っている。

(8)海外研修活動

国際的センスを磨くため、平成 9(1997)年度から始まった、夏休みを利用した海外ボランティア活動は、平成 12(2000)年度から、総合教育科目「海外保健福祉事情」として単位を認定することとなった。現在は毎年中国、ベトナム、オーストラリア、アメリカの 4 カ国での活動に学生が参加している。平成 20 年度は北京パラリンピックの開催に合わせて全学科の学生 2 名ずつ計 30 名を派遣した。

<沿革>

- 平成 7(1995)年 4 月 国際医療福祉大学開学保健学部開設
(看護学科、理学療法学科、作業療法学科、言語聴覚障害学科、放射線・情報科学科)
- 平成 9(1997)年 2 月 国際医療福祉大学クリニック開設
(健康管理センター、言語聴覚センター)
- 平成 9(1997)年 4 月 医療福祉学部開設 (医療経営管理学科、医療福祉学科)
- 平成 9(1997)年 8 月 学生による第 1 回国際ボランティア活動 (ベトナムチョーライ病院)
(平成 20(2008)年 8 月現在 4 カ国にて実施)
- 平成 10(1998)年 3 月 JICA/ケニア医療技術教育強化プロジェクト協力
(平成 16(2004)年 3 月本プロジェクト終了)
- 平成 10(1998)年 4 月 「通信・放送機構(TAO)那須遠隔リハビリリサーチセンター」開設
(平成 13(2001)年 3 月本プロジェクト終了)
- 平成 11(1999)年 4 月 大学院医療福祉学研究科保健医療学専攻 (修士課程) 開設
- 平成 12(2000)年 4 月 社会福祉法人邦友会国際医療福祉リハビリテーションセンター開設
(重症心身障害児施設なす療育園、身体障害者療護施設那須療護園、身体障害者デイサービスセンター那須デイセンター)
- 平成 13(2001)年 2 月 JICA カンボジア医療技術者育成プロジェクト協力
- 平成 13(2001)年 4 月 大学院医療福祉学研究科に保健医療学専攻 (博士課程)、医療福祉経営専攻 (修士課程) 開設
- 平成 13(2001)年 4 月 大学院サテライトキャンパス開設 (東京・福岡・柳川)
- 平成 13(2001)年 4 月 IUHW アジア学生奨学金制度による留学生受入れ開始
- 平成 13(2001)年 4 月 衛星放送授業番組の放送開始 (医療福祉チャンネル 774)

- 平成 13(2001)年 11 月 J I C A/中国リハビリテーション専門職養成プロジェクト協力
(教育課程支援)
- 平成 14(2002)年 4 月 保健学部に視機能療法学科、医療福祉学部医療福祉学科に介護福祉士
コース開設
- 平成 14(2002)年 7 月 国際医療福祉大学附属熱海病院開設
- 平成 15(2003)年 4 月 言語聴覚障害学科を言語聴覚学科に改称
- 平成 15(2003)年 4 月 社会福祉法人邦友会おおたわら総合在宅ケアセンター開設
(通所リハビリテーションおおたわらマロニエデイケアサービス、
通所介護おおたわらマロニエデイサービス、グループホームおおたわ
らマロニエホーム)
- 平成 15(2003)年 5 月 栃木県立大田原女子高校との高大連携事業開始
- 平成 16(2004)年 4 月 国際医療福祉大学大学院乃木坂スクール (公開講座) 開講
- 平成 17(2005)年 3 月 国際医療福祉大学附属三田病院開設
- 平成 17(2005)年 4 月 大田原キャンパスに薬学部を開設 (薬学科)、福岡県大川市にリハビ
リテーション学部を開設 (理学療法学科、作業療法学科)
- 平成 17(2005)年 4 月 国際医療福祉大学 Video on Demand (VOD) サービス開始
(衛星放送授業科目の常時視聴サービス)
- 平成 17(2005)年 10 月 I U H W ボランティアセンター開設
- 平成 18(2006)年 4 月 神奈川県小田原市に小田原保健医療学部を開設 (看護学科、理学療法
学科、作業療法学科)
- 平成 18(2006)年 4 月 国際協力機構 (J I C A) 草の根技術協力プロジェクト受託 (ベトナム
における地域リハビリテーション及び障害当事者エンパワメント
を通じた身体障害者支援事業)
- 平成 18(2006)年 10 月 台湾元培科技大学との協定締結
- 平成 19(2007)年 2 月 国際医療福祉病院の経営を学校法人にて承継し、国際医療福祉大学病
院と改称、併せて介護老人保健施設マロニエ苑・にしなすの総合在宅
ケアセンターを承継
国際医療福祉大学附属熱海病院を国際医療福祉大学熱海病院に改称
国際医療福祉大学附属三田病院を国際医療福祉大学三田病院に改称
特別養護老人ホームおおたわら風花苑開設 (大田原キャンパス敷地
内)
- 平成 19(2007)年 4 月 保健学部を保健医療学部に改称
リハビリテーション学部を福岡リハビリテーション学部に改称
福岡リハビリテーション学部に言語聴覚学科開設
福岡リハビリテーション学部理学療法学科 40 名から 80 名へ定員増
大学院医療福祉学研究科に臨床心理学専攻開設
- 平成 19(2007)年 7 月 本学大学院とタイ国マヒドン大学公衆衛生学部とで学部間協定締結
- 平成 19(2007)年 8 月 文部科学省「がんプロフェッショナル養成プラン」に自治医科大学と
連携して取り組む「全人的ながん医療の実践者養成」が選定
- 平成 20(2008)年 4 月 国際協力機構 (J I C A) 中国中西部地区リハビリテーション人材養
成プロジェクト協力
- 平成 20(2008)年 7 月 元培科技大学 (台湾) 研修生受入れ
マヒドン大学 (タイ) 研修生受入れ
- 平成 20(2008)年 9 月 北京パラリンピックに学生派遣

平成 20(2008)年 11 月 平成 20 年度設置計画履行状況調査「実地調査」(薬学部薬学科)
 平成 21(2009)年 4 月 福岡看護学部看護学科開設
 医療福祉学部の医療経営管理学科と医療福祉学科を統合し、医療福祉・マネジメント学科を開設
 薬科学研究科医療・生命薬科学専攻(修士課程)開設
 国際医療福祉大学塩谷病院開設
 平成 22(2010)年 4 月 薬科学研究科医療・生命薬科学専攻(修士課程)の募集を停止し、生命薬科学専攻(修士課程)を開設

2. 現況

国際医療福祉大学は、栃木県北部に位置する大田原市に平成 7 年 4 月に 1 学部 5 学科で開学し、平成 17(2005)年には開学 10 周年を迎えた。

現在では、6 学部 15 学科及び大学院 2 研究科 4 専攻を設置している。

また、大田原キャンパスを始め、神奈川県小田原市、福岡県大川市にキャンパスを有しているが、どのキャンパスに在籍していても、公平な教育が受けられるようなカリキュラムを組んでいる。

大学院は大田原キャンパスの他、東京都港区、神奈川県小田原市、静岡県熱海市、福岡県福岡市・大川市、熊本県熊本市にもキャンパスを開設しており、これらの地域のどこに在籍していても同時双方向遠隔授業システムを利用して受講できるようになっている。

本学は、クリニック及び 4 つの附属病院を有しており、学生の臨床実習の場としても活用されている。

・学部及び大学院の構成

学部	保健医療学部	看護学科 理学療法学科 作業療法学科 言語聴覚学科 視機能療法学科 放射線・情報科学科	
	医療福祉学部	医療福祉・マネジメント学科 (医療経営管理学科 医療福祉学科)	
	薬学部	薬学科	
	小田原保健医療学部	看護学科 理学療法学科 作業療法学科	
	福岡看護学部	看護学科	
	福岡リハビリテーション学部	理学療法学科 作業療法学科 言語聴覚学科	
大学院	医療福祉学研究科 [修士課程]	保健医療学専攻	看護学分野 ナースプラクティショナー養成分野 助産学分野 理学療法学分野 作業療法学分野 言語聴覚分野 視機能療法学分野 放射線・情報 科学分野 福祉援助工学分野 リハビリテーショ ン学分野 生殖補助医療胚培養分野
		医療福祉経営専攻	医療経営管理分野 医療福祉国際協力学分野 診療情報アナリスト養成分野 医療福祉学分野 創薬育薬医療分野 先進的ケア・ネットワーク開 発研究分野 医療福祉ジャーナリズム分野
		臨床心理学専攻	

大学院	薬科学研究科 [修士課程]	生命薬科学専攻	医療薬学分野 生命薬学分野
	医療福祉学研究科 [博士課程]	保健医療学専攻	看護学分野 助産学分野 理学療法学分野 作業療法学分野 言語聴覚分野 視機能療法学分野 放射線・情報科学分野 福祉援助工学分野 リハビリテーション学分野 生殖補助医療胚培養分野 医療福祉経営学分野 診療情報管理・分析学分野 医療福祉国際協力学分野 医療福祉学分野 創薬育薬医療分野 先進的ケア・ネットワーク開発研究分野

・ 学部の学生数 (平成 22(2010)年 5 月 1 日現在) ()内の数値は完成年次の収容定員

学部	学科	入学定員	収容定員	在籍学生数						合計
				1年	2年	3年	4年	5年	6年	
保健医療学部	看護学科	100	400	131	135	124	127			517
	理学療法学科	80	320	101	103	103	97			404
	作業療法学科	80	320	97	104	93	109			403
	言語聴覚学科	80	320	92	96	97	92			377
	視機能療法学科	40	160	50	54	50	47			201
	放射線・情報科学科	100	400	136	147	115	120			518
医療福祉学部	医療経営管理学科	-	-	-	6	80	85			171
	医療福祉学科	-	-	-	4	103	105			212
	医療福祉・マネジメント学科	160	320	185	161	0	0			346
薬学部	薬学科(4年制)	-	-	0	0	0	2			2
	薬学科(6年制)	180	900(1080)	237	133	161	144	161	0	836
小田原保健医療学部	看護学科	50	200	52	57	55	55			219
	理学療法学科	40	160	60	49	52	47			208
	作業療法学科	40	160	53	51	49	48			201
福岡看護学部	看護学科	80	160(320)	102	99	0	0			201
福岡リハビリテーション学部	理学療法学科	80	320	83	89	115	83			370
	作業療法学科	40	160	45	38	46	55			184
	言語聴覚学科	40	160	45	45	43	28			161
合 計		1190	4460(4800)	1469	1371	1286	1244	161		5531

※注 1 平成 15(2003)年 4 月 1 日 保健学部の言語聴覚障害学科を言語聴覚学科に改称

※注 2 平成 19(2007)年 4 月 1 日 保健学部を保健医療学部に改称

※注 3 平成 19(2007)年 4 月 1 日 リハビリテーション学部を福岡リハビリテーション学部に改称

※注 4 平成 19(2007)年 4 月 1 日 福岡リハビリテーション学部に言語聴覚学科開設

※注 5 平成 19(2007)年 4 月 1 日 福岡リハビリテーション学部の理学療法学科 40 名から 80 名へ定員増

※注 6 薬学部薬学科は、平成 17(2005)年度のみ 4 年制・入学定員 150 名、平成 18(2006)年度から 6 年制・入学定員 180 名 (4 年制は平成 18(2006)年度以降学生の募集停止)

※注 7 平成 21(2009)年 4 月 1 日 福岡看護学部看護学科開設

医療福祉学部の医療経営管理学科と医療福祉学科を統合し、医療福祉・マネジメント学科を開設

・大学院の学生数 (平成 22(2010)年 5 月 1 日現在)

研究科	専攻	入学 定員	収容 定員	在籍学生数			
				1年	2年	3年	合計
医療福祉学研究科 (修士課程)	保健医療学専攻	100	200	132	127		257
	医療福祉経営専攻	50	100	70	41		111
	臨床心理学専攻	25	50	25	24		49
薬科学研究科 (修士課程)	医療・生命薬科学専攻	—	15	1	12		13
	生命薬科学専攻	15	15	8	—		8
合 計		205	410	235	206		441
医療福祉学研究科 (博士課程)	保健医療学専攻	50	150	74	53	66	193

※注 1 平成 19(2007)年 4 月 1 日 医療福祉学研究科臨床心理学専攻 (修士課程) 開設

※注 2 平成 21(2009)年 4 月 1 日 薬科学研究科医療・生命薬科学専攻 (修士課程) 開設

※注 3 平成 22(2010)年 4 月 1 日 薬科学研究科医療・生命薬科学専攻 (修士課程) の募集を停止し、生命薬科学専攻 (修士課程) を開設

・教員数 (平成 22(2010)年 5 月 1 日現在)

学部・大学院・その他	教授	准教授	講師	助教	助手	合計
保健医療学部	34	20	26	18	6	104
医療福祉学部	17	10	8	5	2	42
薬学部	24	6	4	13	8	55
小田原保健医療学部	22	11	16	13	1	63
福岡看護学部	2	7	6	6	3	24
福岡リハビリテーション学部	17	7	14	3	3	44
大学院	13	5	3	1	0	22
その他	111	41	40	3	1	196
合 計	240	107	117	62	24	550

・職員数 (平成 22(2010)年 5 月 1 日現在)

事務系	技術係	医療系	教務系	その他	合 計
514	8	1239	12	205	1978

・所在地

大田原キャンパス (保健医療学部・医療福祉学部・薬学部・大学院)

〒324-8501 栃木県大田原市北金丸 2600-1

東京青山キャンパス (大学院)

〒107-0062 東京都港区南青山 1-3

小田原キャンパス (小田原保健医療学部・大学院)

〒250-8588 神奈川県小田原市城山 1-2-25

熱海キャンパス (大学院)

〒413-0012 静岡県熱海市東海岸町 13-1 国際医療福祉大学熱海病院内

大川キャンパス (福岡リハビリテーション学部)

〒831-8501 福岡県大川市榎津 137-1

福岡天神キャンパス (福岡看護学部・大学院)

〒810-0072 福岡県福岡市中央区長浜 1-3-1

熊本サテライトキャンパス (大学院)

〒860-0008 熊本県熊本市二の丸 1-5 国立病院機構熊本医療センター内

・ 附属施設

国際医療福祉大学クリニック	〒324-8501	栃木県大田原市北金丸 2600-6
国際医療福祉大学病院	〒329-2763	栃木県那須塩原市井口 537-3
国際医療福祉大学三田病院	〒108-8329	東京都港区三田 1-4-3
国際医療福祉大学熱海病院	〒413-0012	静岡県熱海市東海岸町 13-1
国際医療福祉大学塩谷病院	〒329-2145	栃木県矢板市富田 77
介護老人保健施設マロニエ苑	〒329-2763	栃木県那須塩原市井口 533-4
にしなすの総合在宅ケアセンター	〒329-2763	栃木県那須塩原市井口 537-3

IV. 新たな課題:国際交流

1. 留学生及び研修生の受入れ
2. 国際協力協定締結
3. 海外研修
4. JICAプロジェクトの概要
5. 教員による海外活動

IV. 新たな課題：国際交流

1. 留学生及び研修生の受入れ

平成7(1995)年から平成22(2010)年までの学部留学生は79名である。最も多い年が平成18(2006)年の18名である。留学生の出身国は、中国が最も多く約半数の42名である。その次が韓国(19名)、台湾(6名)、その他、ベトナム、ネパール、モンゴル、ミャンマー、タイ、カンボジア、ラオス、インドネシアである。国際医療福祉大学奨学金では中国からの留学生を受入れている。内訳は、平成9(1997)年に中国衛生部推薦1名、平成11年より中国リハビリテーション研究センターの推薦で今までにPT、OT各5名、合計10名を受入れている。また、中国以外ではアジア大使婦人友好会から推薦いただいた5名の留学生を受入れている。

学科別に見ると、理学療法学科が26名、看護学科16名、医療福祉・マネジメント学科が14名である。本学の留学生が少ない理由は、国家試験があること、アルバイトをする時間が少ないことが挙げられる。以前に医療福祉の関係の大学、仕事をしていた人が多く入学している。国家試験の合格率について、理学療法学科は全員合格をしているが、他の学科では不合格者もみられる。

留学生は経済的な問題も多くみられる。しかし、留学生に対する奨学金、安い家賃のアパートの提供(大田原市の市営住宅)など、安定した生活が出来るよう支援している。

大学院の留学生は、101名である。学部と同様、中国が70名と大変多い。次が韓国の12名、その他、ベトナム、ネパール、モンゴル、フィリピン、パラグアイ、ケニア、カンボジア、ポルトガルからの留学生である。JICA(中国のプロジェクト)による留学生が20名、他のプロジェクト(ケニア、パラグアイなど)3名、文部科学省(フィリピン)1名である。

研修生は、JICAプロジェクトによる短期研修、長期研修など個別に受入れている。

JICA(中国のプロジェクト)では、短期研修1週間、長期研修2ヶ月間を継続的に実施している。またJICAでは、他にカンボジア、ミャンマー、ベトナムなどからの研修の受入れを実施している。

その他、各学科での受入れは、平成8(1996)年では中国リハビリテーション研究センターからPT及びOTの2名、PT学科ではスリランカ、放射線・情報科学科ではケニア、カンボジア、韓国などからである。福岡リハビリテーション学部では、韓国が最も多く、中国、台湾、ミャンマーなどの研修生を受入れている。韓国は協定校による交換学生が盛んに行われている。

その他、海外の研究者による特別講演、海外からの視察、海外の研究者による特別講演なども多く見られる。

1-1) 留学生の状況

①在籍者数

所属	入学年度	国籍	人数	性別	備考
保健医療学部 看護学科	平成7 (1995)	中国	2	女	
	平成8 (1996)	台湾	1	女	
	平成10	韓国	1	女	
	平成13	ベトナム	1	女	
	平成14	韓国	1	女	
	平成14	中国	1	女	
	平成14	北朝鮮	1	女	
	平成15	韓国	1	女	
	平成15	中国	1	女	
	平成16	中国	1	女	
	平成16	ミャンマー	1	女	
	平成18	中国	1	女	
	平成20	韓国	1	女	
	平成21	中国	1	女	
	平成21	モンゴル	1	女	
計			16	人	
保健医療学部 理学療法学科	平成7 (1995)	中国	1	女	
	平成9 (1997)	中国	1	男	
		韓国	2	男	1名：退学
	平成10	中国	1	男	
	平成11	韓国	2	男	
	平成12	中国	1	男	
	平成13	台湾	1	女	
		中国	1	男	
		韓国	1	男	
	平成14	中国	2	女	
		中国	1	男	
		台湾	1	女	
	平成15	韓国	1	女	留年後退学(5年在籍)
	平成16	中国	2	女	
	平成17	韓国	2	男	
	平成18	中国	1	男	
		韓国	1	女	退学(2年在籍)
	平成19	韓国	1	男	
	平成20	インドネシア	1	女	
		韓国	1	男	
平成22	中国	1	女		
計			26	人	
保健医療学部 作業療法学科	平成10(1998)	中国	1	男	
	平成12(2000)	中国	1	男	
	平成13(2001)	中国	1	男	
	平成14(2002)	中国	1	女	
	平成16(2004)	中国	1	女	
	平成18(2006)	中国	1	女	
	平成20(2008)	韓国	1	男	
	平成20(2009)	中国	1	男	
	平成21(2009)	中国	2	男	
計			10	人	
保健医療学部 言語聴覚学科	平成22(2000)	中国	1	男性	修士号取得
	計			1	人

保健医療学部 放射線・情報科学 科	平成7(1995)	韓国	1	男	
		台湾	1	男	
	平成9(1997)	韓国	1	男	
		台湾	1	男	
	平成17(2005)	中国	1	男	
	平成18(2006)	タイ	1	男	
	平成20(2008)	中国	1	女	
計			9	人	
医療福祉学部 医療福祉・マネジメ ント学科 (医療経営管理学 科)	平成13(2001)	ネパール	1	女	
	平成15(2003)	モンゴル	1	女	
	平成16(2004)	中国	3	男	
	平成16(2004)	中国	2	女	
	平成17(2005)	中国	2	男	
	平成18(2006)	中国	2	男	
	平成18(2006)	カンボジア	1	女	
	平成20(2008)	ネパール	1	女	
	平成22(2010)	ラオス	1	女	
計			14	人	
医療福祉学部 医療福祉・マネジ メント学科 (医療福祉学科)	平成13(2001)	台湾	1	男	
	平成17(2005)	中国	1	男	
	平成17(2005)	韓国	1	女	
	平成18(2006)	韓国	1	女	
	平成20(2008)	中国	1	男	
計			5	人	
薬学部薬学科	平成18(2006)	タイ	1	女	タイ国費留学生
計			1	人	

②開学当初の留学生との交流会等実績

開催日	内容	IUHW 掲載
平成 7 年 4 月 19 日	留学生と帰国生徒を囲む昼食会	
平成 7 年 5 月 9 日	留学生と海外生活者の集い	5 号-9 頁
平成 7 年 6 月 7 日	国際交流のタベ	6 号-7 頁
平成 8 年 5 月 25 日	栃木県国際交流協会主催懇親パーティ	8 号-3 頁
平成 8 年 7 月 3 日	栃木県経済交友会主催国際交流のつどい	16 号-3 頁
平成 8 年 7 月 25 日	留学生懇親会	16 号-3 頁
平成 8 年 11 月 29 日	国際交流活動研修会シンポジウム 「私の考える交流・協力のあり方」 PT2 年 付栄さん発表	12 号-4 頁
平成 9 年 10 月 29 日	留学生懇親会	17 号-2 頁
平成 9 年 5 月 21 日	留学生、帰国子女（現帰国生徒）、海外生活者の集い	14 号-2 頁
平成 10 年 5 月 30 日	栃木県国際交流協会主催懇親パーティ	21 号-4 頁
平成 10 年 6 月 23 日	留学生懇親会	21 号-4 頁

③留学生の入試結果一覧（開学～現在）

入学年度	受験者	合格者	入学者	退学者	卒業者	国試合格者
平成 7 (1995)	8	5	5	0	5	3
平成 8 (1996)	1	1	1	0	1	0
平成 9 (1997)	4	4	4	1	3	2
平成 10 (1998)	4	4	3	2	1	1
平成 11 (1999)	3	3	3	0	3	2
平成 12 (2000)	2	2	2	0	2	2
平成 13 (2001)	10	7	6	0	6	3
平成 14 (2002)	12	10	8	1	7	6
平成 15 (2003)	7	6	5	2	3	1
平成 16 (2004)	15	10	10	0	10	3
平成 17 (2005)	14	8	8	2	6	2
平成 18 (2006)	18	11	10	2	7※	4
平成 19 (2007)	5	2	2	1		
平成 20 (2008)	10	7	7	0		
平成 21 (2009)	9	3	3	1		
平成 22 (2010)	11	3	2	0		
合計	133	86	79	12	56	29

※1名 在学中 (2011.1月現在)

④国別 留学生一覧（開学～現在）

入学年度	学部/大学院	中国	台湾	韓国	バトナム	ネパール	モコル	ミyanmar	フィリピン	パナマ	インドネシア	ラオス	カンボジア	タイ	ケニア	グアテマラ	ボリビア	ポルトガル	計	総計
1995	学部	3(3)	1	1															5(3)	5(3)
1996	学部		1(1)																1(1)	1(1)
1997	学部	1	1	1															3	3
1998	学部	2		1															3	3
1999	学部	1(1)		2															3(1)	5(2)
	大学院	1(1)	1																2(1)	
2000	学部	2																	2	3(1)
	大学院	1(1)																	1(1)	
2001	学部	1	2(1)	1	1(1)	1(1)													6(3)	10(4)
	大学院	2		2(1)															4(1)	
2002	学部	6(3)	1(1)	1(1)															8(5)	18(11)
	大学院	8(5)							1(1)						1				10(6)	
2003	学部	1(1)		3(3)			1(1)												5(5)	14(9)
	大学院	6(3)		2(1)											1				9(4)	
2004	学部	9(6)		1				1(1)											10(7)	21(12)
	大学院	6(1)	2(2)						1(1)	1(1)									11(5)	
2005	学部	6(1)		2(1)															8(2)	19(5)
	大学院	8(3)		2															11(3)	
2006	学部	5(2)		2(2)										2(1)					10(6)	18(11)
	大学院	6(3)				1(1)	1(1)						1(1)						8(5)	
2007	学部			2															2	12(7)
	大学院	6(3)	1(1)		1(1)		2(2)												10(7)	
2008	学部	2(1)		3(1)		1(1)													7(4)	20(12)
	大学院	12(7)		1(1)															13(8)	
2009	学部	2(1)					1(1)												3(2)	13(4)
	大学院	6(1)		2		1												1(1)	10(2)	
2010	学部	1(1)																	2(2)	14(6)
	大学院	8(1)		2(1)	1(1)								1(1)						12(4)	
合計	学部	42(20)	6(3)	19(8)	1(1)	2(2)	2(2)	1(1)					1(1)	2(1)					78(41)	179(88)
	大学院	70(29)	4(3)	12(4)	2(2)	2(1)	3(3)		2(2)	1(1)		1(1)	1(1)	1(1)	3			1(1)	101(47)	

()内は女性の数

⑤2010年度留学生対象奨学金一覧

団体名	支給対象・応募資格	年齢制限・その他の制限	出身国・地域	重複受給	再応募	内容	期間	募集期間・締切	方法	推薦者数
社アジア国際奨学金財団	・アジア諸国からの留学生(学部・大学院)	個人応募不可 (約15校の指定校からの推薦による)	アジア諸国	△	要確認	月額10万円	原則2年間	学生課松本さん対応	書類選考	H22年度2名
ローラー・米山記念奨学金	大学・大学院在籍者	1966年4月1日以降に出生した者	日本以外の国籍	x	x	学部: 10万/月 修士・博士: 14万/月	2年を限度	2009年10月1日～10月15日(当日消印有効)	選考試験(面接) (12月～1月)	2名
大田原市奨学金	・市内の大学に正規の学生として在籍する者 ・大田原市に外国人登録をしている外国人留学生 ・第1学年及び第2学年に在籍する者			○	○	1万/月	1年間(第2学年まで継続申請可)	2009年5月8日	書類選考	申請者全員
平和中島財団奨学金	・応募時に日本の大学に在籍する学生 ・資格が「留学」である者。			△	x	学部: 10万/月 大学院: 12万/月	最長2年	2009年9月1日～10月31日	書類選考	学部: 1名 大学院: 1名
外-国際奨学金財団奨学金	・国際理解と親善に関心をもち、当財団の交流会に必ず出席出来る事。 ・在留資格が「留学」である者。 ・日本語でのコミュニケーションが取れること。		アジア各国(詳細は国際室にお問い合わせ)	x	○	学部: 12万/月 大学院: 18万/月	2年	4月期/9月期4月については、2010年1月18日～1月22日(当日消印有効)	書類・面接	各期で10名前後
佐川留学生奨学金	学部: 3年次に進学する者 修士: 1年次 博士: 2年次	学部生: 27歳未満 大学院生: 35歳未満	東南アジア諸国(ASEAN加盟国)	x	要確認	10万/月	2年	2009年4月17日	書類	学部: 1名 大学院: 1名
日本学生支援機構学習奨励費	・私費外国人留学生(「留学」の在留資格を有する者) ・国費外国人留学生以外の者。	前年度成績評価係数が、大学院レベル: 2.30以上 学部レベル: 2.00以上 (指定の計算式あり)その他条件あり		△	要確認	学部: 4.8万/月 大学院: 6.5万/月	1年	2009年5月21日 17:00	書類 インターネットによる推薦者の報告	学部: 2名 大学院: 2名
飯塚教育英会	・栃木県内の4年制以上の大学又は大学院に在籍する外国人留学生。 ・経済的援助が必要と認められる者。	30歳未満		○	要確認	3万/月	4年を限度	2009年1月15日～2月10日	書類・面接	5名
国費外国人学部留学生(国内採用)	・私費外国人留学生 ・学部の正規生(最終学年次に在籍予定の者) ・入学～3年次前期までの成績係数が2.5以上	1982年4月2日以降に出生した者(6年制の学部) 1984年4月2日以降に生まれた者(それ以外の学部)	日本政府と国交のある国の国籍(台湾不可)	x	x	12.5万/月(予定) 授業料は日本政府が負担。	原則1年間	2009年11月30日～12月4日	書類・面接	研究留学生と合せて1名
国費外国人研究留学生(国内採用)	・私費外国人留学生 ・大学院の修士又は博士の正規生	1975年4月2日以降に出生した者	日本政府と国交のある国の国籍	x	△	修士: 15.4万/月(予定) 博士: 15.5万/月(予定) 授業料は日本政府が負担。	大学院正規課程終了までに要する期間	2009年11月30日～12月4日	書類・面接	研究留学生と合せて1名
日本政府と国交のある国の国籍	・大田原キャンパスに在籍している私費外国人留学生			△	○	10万/年	1年	2009年4月27日	書類	1名

⑥2010年度留学生対象奨学金応募資格

団体名	支給対象・応募資格	年齢制限・その他の制限	出身国・地域	重複受給・再応募	内容	期間	募集期間・締切	方法	推薦者数
文部科学省 国費外国人研究留学生(国内採用)	・私費外国人留学生 ・大学院の修士又は博士の正規生	1975年4月2日以降に出生した者	日本政府と国交のある国の国籍	×	修士: 15.4万/月(予定) 博士: 15.5万/月(予定) 授業料は日本政府が負担。	大学院正規課程終了までに要する定められた期間	2009年 11月30日～12月4日	書類・面接	学部留学生と合せて1名
	・私費外国人留学生 ・学部の正規生(最終学年次に在籍予定の者) ・入学～3年前期までの成績係数が2.5以上	1982年4月2日以降に出生した者(6年制の学部) 1984年4月2日以降に出生した者(それ以外の学部)	日本政府と国交のある国の国籍(台湾不可)	×	12.5万/月(予定) 授業料は日本政府が負担。	原則1年間	2009年 11月30日～12月4日	書類・面接	研究留学生と合せて1名
独立行政法人	JASSO(日本学生支援機構) 私費外国人留学生奨励費支給制度	前年度成績評価係数が、 大学院レベル: 2.30以上 学部レベル: 2.00以上 (指定の計算式あり) その他条件あり		△	学部: 4.8万/月 大学院: 6.5万/月	1年	2009年 5月21日 17:00	書類 インターネットによる推薦者の報告	学部: 2名 大学院: 2名
	IUHWアジア学生奨学金	・大使館からの推薦状 ・アルバイト不可 ・留年した場合返納	アジア諸国	×	生活費月6万円	学部4年間 院2年間	6月募集開始 11月締切 12月決定	書類 面接	1名
IUHW	マロニエ会海外留学等奨学金制度	・「マロニエ会」の会員 ・人物、活動、学業がいずれも良好 ・海外での就学・研究助成の必要性 ・入学先・スケジュールの決定 ・留学先で支障のない語学力 ・心身共に健康なこと	—	○	上限250万円 留学に係る費用については選考委員会にて審査を行う	原則1年 最大3年	12月募集発表・受付開始 3月31日 申込締切 5月上旬・中旬 面接審査 6月下旬 選考結果通知	書類 面接	1名
	辻アジア国際奨学金財団	・アジア諸国からの留学生 (学部・大学院)	アジア諸国	△	月額10万円	原則2年間	学生課松本さん対応	書類選考	不定 H22年度 2名
その他 留学生奨学金	ローリー・米山記念奨学金	1966年4月1日以降に出生した者	日本以外の国籍	×	学部: 10万/月 修士・博士: 14万/月	2年を限度	2009年 10月1日～10月15日 (当日消印有効)	選考試験 (面接) (12月～1月)	2名
	大田原市奨学金	・市内の大学に正規の学生として在籍する者 ・大田原市に外国人登録をしている外国人留学生 ・第1学年及び第2学年に在籍する者		○	1万/月	1年間 (第2学年まで継続申請可)	2009年 5月8日	書類選考	申請者 全員
	平和中島財団奨学金	・応募時に日本の大学に在籍する学生 ・資格が「留学」である者。		△	学部: 10万/月 大学院: 12万/月	最長2年	2009年 9月1日～10月31日	書類選考	学部: 1名 大学院: 1名
	サト国際奨学金財団奨学金	・国際理解と親善に熱心を持ち、当該回の交遊会に必ず出席出来る事。 ・在留資格が「留学」である者。 ・日本語でのコミュニケーションが取れること。	アジア各国 (詳細は国際室にお問い合わせ)	×	学部: 12万/月 大学院: 18万/月	2年	4月期/9月期 4月については、 2010年 1月18日～1月22日 (当日消印有効)	書類・面接	各期で10 名前後

団体名	支給対象・応募資格	年齢制限・その他の制限	出身国・地域	重複受給	再応募	内容	期間	募集期間・締切	方法	推薦者数		
佐川留學生奨学金	学部: 3年次に進学する者 修士: 1年次 博士: 2年次	学部生: 27歳未満 大学院生: 35歳未満	東南アジア諸国 (ASEAN加盟国)	x	要確認	10万/月	2年	2009年4月17日	書類	学部: 1名 大学院: 1名		
						△	要確認	学部: 4.8万/月 大学院: 6.5万/月	1年	2009年5月21日 17:00	書類 インターネットによる推薦者の報告	学部: 2名 大学院: 2名
						△	○	10万/年	1年	2010年8月23日	書類	1名
						○	要確認	3万/月	4年在学限度	2009年1月15日～2月10日	書類・面接	5名
飯塚教育英会	・栃木県内の4年制以上の大学又は大学院に在籍する外国人留学生。 ・経済的援助が必要と認められる者。	30歳未満		△	○	10万/年	1年	2009年4月27日	書類	1名		
			○	要確認	3万/月	4年在学限度	2009年1月15日～2月10日	書類・面接	5名			
あしざん国際交流財団奨学金	・大田原キャンパスに在籍している私費外国人留学生			△	○	10万/年	1年	2009年4月27日	書類	1名		
			○	要確認	3万/月	4年在学限度	2009年1月15日～2月10日	書類・面接	5名			
日本政府と国交のある国の国籍	・大田原キャンパスに在籍している私費外国人留学生			△	○	10万/年	1年	2009年4月27日	書類	1名		
			○	要確認	3万/月	4年在学限度	2009年1月15日～2月10日	書類・面接	5名			

⑦ 留学生対象奨学金一覧 年間スケジュール

		月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
		団体名	留学生に対する奨学金											
文部科学省	国費外国人留学生(大学推薦)				採用者決定			入国手続き	採用者来日	募集通知	候補者推薦 締切			推薦締切
	国費外国人研究・学術留学生(国内採用) *「学部」はH23年度の募集は行わない。		国費留学生に 採用				募集通知			中旬 現受給者 特別延長締切			選考委員会 開催	下旬 特別締切
独立行政法人	JASSO(日本学生支援機構) 私費外国人留学生奨励費給付制度			中旬 推薦締切 大学→機構	下旬 選考結果通知 機構→大学	初回振込 4月～6月分 機構→学生								下旬 募集通知 機構→大学
	IUHWアジア学生奨学金				募集開始					募集締切	要学生決定			
その他	マロニエ会海外留学等奨学金制度			上旬～ 面接審査	下旬 選考結果通知									下旬 申込締切
	社アジア国際奨学金財団													申請
留学生奨学金	ロータリー・米山記念奨学金						募集開始		上旬:応募締切					
	大田原市奨学金			上旬締切										
	平和中島財団奨学金							上旬募集開始	下旬締切					

	月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
	団体名										4月期分 中旬締切		
	外-国際奨学財団奨学金												
	佐川留学生奨学金	中旬締切											
	共立国際交流奨学財団									下旬 締切			
	あしぎん国際交流財団奨学金							月末: 必要書類の提出	11月-12月上旬の助成式: 10万円を手交				
	飯塚教育英会										中旬 締切		
その他	留学生奨学金												
大学に対する助成金													
文部科学省	政府開発援助留学生就学奨助費補助金 (授業料免除学校法人援助)	実績報告書 提出									中旬 調書提出		補助金申請書 提出 翌4月交付
私学事業団	国際化に向けた取り組み	4~6月 前年度提出分 調査票見直し 修正		実績報告 補助金額の確 定	補助金の 返還等			交付申請 調査票提出		第一次交付	変更交付申請	変更交付決定	最終交付

1-2) 研修生の受け入れ

保健医療学部理学療法学科

滞在期間	国	目的	人数(または氏)	所属・役職等
2006.5/24～ 6/15(4週間)	カンボジア	JICAカンボジア国医療技術者養成プロジェクト	Hay Sundry Hkoy Vuthiy	
2011.2.28～ 3.4 1週間	スリランカ	日本理学療法士協会研修		

保健医療学部言語聴覚学科

滞在期間	国	目的	人数(または氏)	所属・役職等
2010.1.19～ 22	中国	JICA中国中西部地区リハビリ人材養成プロジェクト 基礎研修	10	中国中西部地区リハビリテーション従事者
2010 10.20	中国	JICA中国中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクト臨床研修生	7	中国中西部地区リハビリテーション従事者
2011.2.17	中国	JICA中国中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクト臨床研修生	8	中国中西部地区リハビリテーション従事者

保健医療学部放射線・情報科学科

滞在期間	国	目的	人数(または氏)	所属・役職等
	ケニア		1	ケニア医療技術者養成大学放射線科教員
	カンボジア			
2005.9.21～ 2006.7/6	韓国	現在の3年制大学を4年制大学にするための調査	1(金正敏)	高麗大学保健大学教授

福岡看護学部看護学科

滞在期間	国	目的	人数(または氏)	所属・役職等
2011.1.7	台湾	日本の医療福祉施設におけるヘルスプロモーション活動の見学研修(福岡山王病院、総合ケアセンターももち、福岡看護学部、舞鶴保育園、ふくふくプラザ、トヨタカローラ特販等)	国立台湾師範大学健康科学部ヘルスプロモーション学専攻大学院生27名	国立台湾師範大学健康科学部ヘルスプロモーション学専攻大学院生

福岡リハビリテーション学部

滞在期間	国	目的	人数(または氏)	所属・役職等
2007.10.28 ～11.13のうち 10/29～	中国	JICA国別研修 中国「教育管理」コース	5(李建軍 他)	中国リハビリテーション研究センター
2009.1.	韓国	視察	7	建陽大学
2009.1.17～ 2.14	韓国	施設見学及び作業療法研修	1	仁済大学
2009.7.17～ 7.18	台湾	施設見学	33	元培大学
2009.11.17 ～11.27	ミャンマー	JICAミャンマーリハビリテーション強化プロジェクト(脳卒中患者のリハビリテーション)	5	マンダレー総合病院 国立リハビリテーション病院
2010.1.18～ 2.12	韓国	日本のリハビリテーション研修及び施設見学	4	仁済大学
2010.7.5	韓国	施設見学	40	東元大学
2010.7.22～ 8.3	韓国	日本のリハビリテーション研修及び施設見学	10	建陽大学
2011.1.17～ 2.13	韓国	日本のリハビリテーション研修及び施設見学	10	仁済大学

1-3) 海外研究者等の特別講義 (学科招聘)

保健医療学部理学療法学科

実施日	氏名	国	所属・役職等	講義名
2006.11/6	Giorgio Gabella	イギリス	ロンドン大学教授	Neuroscience of mind, body and culture(心と身体と文化の神経科学)
2006.12/18	Milivoj Velickovic		神経発達科教授	Diagnostic and therapeutic approaches for early brain damage(診断および初期段階での脳の損傷の治療法)
2008	Giorgio Gabella	イギリス	ロンドン大学教授	総合臨床実習終了後の知識と整理
2009.11/6	Giorgio Gabella	イギリス	ロンドン大学教授	心と身体と文化の神経科学

保健医療学部言語聴覚学科

実施日	氏名	国	所属・役職等	講義名
2011.1.7	M.E. Groher	アメリカ	Redlands 大学	Using Surface Electromyography to Treat Swallowing Disorders (2年生～4年生聴講)

保健医療学部視機能療法学科

実施日	氏名	国	所属・役職等	講義名
2007.11	セレーナ・ジェロニミ	フランス	視能訓練士	フランスでの視能訓練士の現状や教育システムについて

小田原保健医療学部看護学科

実施日	氏名	国	所属・役職等	講義名
2010. 7. 22	Dr. Yiing Mei Liou (劉 影梅)	台湾	国立陽明大学 看護学部 教授	国立陽明大学における看護教育
2010. 9. 25	Dr. Asta Heikkilä	フィンランド	セイナヨーキ大学 看護福祉学部 学部長	①セイナヨーキ大学の教育プログラム ②セイナヨーキ大学看護学部および大学院の教育
2010. 9. 27～30	Dr. Kathy Magilvy	米国	コロラド大学 看護学部 副学部長	米国の看護教育コロラド大学 看護学部および大学院の教育, ①コロラド大学の地域保健看護学 ②コロラド大学倫理審査委員会で求められる研究の内容, 領域別ディスカッション: 成人看護学領域、小児看護学領域、基礎看護学領域、在宅看護学領域
2010. 11. 23	Dr. Soon-Lae Kim	韓国	韓国カトリック大学 看護学部 元学部長	①韓国カトリック大学 看護学部の教育 ②韓国カトリック大学 大学院の教育

小田原保健医療学部作業療法学科

実施日	氏名	国	所属・役職等	講義名
2011.2.2	リム・ファ・ベン	シンガポール	ナンヤン・ポリテク スクール	シンガポールの作業療法の発展

福岡看護学部看護学科

実施日	氏名	国	所属・役職等	講義名
2009.6.26	カリスタ・ロイ	アメリカ	ボストン大学看護学部 博士課程教授	福岡看護学部開学記念講演
2011.1.24	鄭恵美	台湾	国立台湾師範大学健康科学部ヘルスプロモーション学教授	台湾におけるヘルスプロモーション活動

福岡リハビリテーション学部

実施日	氏名	国	所属・役職等	講義名
2009.12.19	李 建軍 劉 恵林	中国	中国リハビリテーション研究センター 院長 中国リハビリテーション研究センター 理学療法科主任	日中におけるリハビリテーション医療の現状と未来 (日中リハビリテーション シンポジウム)

1-4) 海外研究者等の特別講義 (大学招聘)

特別講義

実施日	氏名	国	所属・役職等	講義名
1995.8.23	H.S.ディロン	インド	インド厚生省・顧問	健康教育の新しい流れ～ヘルスプロモーションのニーズの中で～
1995.10.4	Mary Evert	アメリカ	米国作業療法士協会前会長、Washington University助教授	作業療法学科学生を対象に、米国の作業療法の現状と課題及び自校の教育プログラムについて講演
1999.10.28	シェン・ペウ 功能聡子	カンボジア 日本	NGOグループSHARE	カンボジア農村での地域医療についての講演会
2005.4.12	ルドルフ・J・フォルマー 博士	ドイツ	元ドイツ連邦保健省大臣 官房介護保険部長	ドイツにおける介護保険制度の導入とその経過ならびに今後の検討課題
2006.10.16	青木 盛久氏	日本	在ケニア大使 (元ペルー大使、元青年 海外協力隊元事務局長)	医療福祉における青年海外協力隊の活動

著名人による視察

時期	氏名・役職等
1996.1.16	JICA公衆衛生教育セミナー研修生(14ヶ国18名)
1996.7.13	フン・セン カンボジア第二首相来学
1999.7.1	WHO西太平洋地域事務局フェロー・中国衛生部 張朝陽副局長、林岩医療管理課長、何雅如計画課員
2000.5.14-19	世界作業療法士連盟代表者会議ウェブスタ会長ら6名の役員来校

1-5)2009年度-2010年度 視察受入れ

	日付	組織名	視察者	視察場所	目的/内容
2009年度	1 5月15日(金)	2010上海万博 障害者パビリオン	朝京石氏	山王病院、グループホーム青山、新宿けやき園	
	2 5月27日(水)	クイーンズランドTAFE	ナタリー女史、ニコール女史	山王病院、大学院	ナタリー女史が協定書を持参して来日(日本で留学フェアもあったとの事)。夕食の会食あり。
	3 5月28日(木)	ローリエイトエデュケーション	Sam氏		<伊藤雅治理事長からのご紹介> 世界各地で37校の大学を運営するローリエイトエデュケーションのアジア代表が来日。看護学校を日本に設立する案件で、面会の依頼があった。
	4 6月1日(月)~3日(水)	建陽大学	総長、副総長、国際担当員	三田病院、山王病院、本校、国福病院、塩谷病院視察	協定の可能性を検討する
	5 6月3日(水)	UBSアジア	アジア地域会長	山王病院(キャンセル、面談のみ)	UBSが富裕層へ医療サービスを紹介するビジネスを展開するため、面談の依頼あり
	6 6月22日(月)	秀傳記念病院(台湾)	黄 総裁	本校、風花苑、国福病院、マロニエ苑、柳の実荘	東京女子医科大学 羽生名誉教授よりご紹介(黄総裁は羽生名誉教授の弟子)。日本の医療・福祉施設の見学をするため、視察の申込あり。
	7 7月2日(木)	高麗大学	金 教授、大学院生4名、学部生 1名	本校、マロニエ苑、国福病院、柳の実荘	2003年にマロニエ苑に視察で訪れた金教授(社会福祉学科)より再視察の申し出あり。大学院生を引率し、社会福祉施設の見学および東京大学との討論会のために来日。
	8 7月17日(金)~18日(土)	元培科技大学	教員 13名、大学院生 7名、学部生 13名	福岡リハ学部、福岡看護学部、福岡山王病院、総合ケアセンターもち	日本の大学および病院・社会福祉施設を見学し、日本の医療・福祉・介護について学ぶ。(当グループの他、提携先の佐賀大学にも訪問)
	9 8月6日(木)	建陽大学	金総長夫妻、金副総長夫妻、李忠浩前領事、金国際教育院長	福岡山王病院	金総長の出張(西南大学)に合わせ、福岡山王病院を見学し、日本の最新医療および施設について学ぶため。
	10 8月26日(水)	中日友好医院	中日友好医院副院長、教授等6名+建築士3名	山王病院、メディカルセンター、福岡山王病院、大学院	中国にて建設予定の中央保健医療健康センターの参考にするため。
	11 10月6日(火)	大邱韓医(テグハニ)大学	大邱韓医大学 権主任教授、金教授	東京事務所 3F大会議室	本学と協定書を交わすことを希望しているため。
	2010年度	12 10月24日(土)	中日友好医院	李副院長ご一行3名	福岡山王病院
13 12月15日(火)~12月20日(日)		中国リハビリテーション研究センター	李主任、劉副主任、陳小梅女史	山王メディカルセンター、福岡山王病院、(亀田総合病院)	福岡で開催される12月29日の日中シンポジウムへの出席および協定書(本学、中国リハセン、首都医科大学)締結のために来日
14 5月10日(月)		マヒドン大学	教員2名、学生8名	本校、なす療育園、那須療護園、風花苑	OTおよびリハビリテーションについて学ぶため。(例年の助産分野の視察と異なる)
15 7月5日(月)		マヒドン大学	教員1名、学生6名	新宿けやき園、大学院、山王MC、山王病院	例年の助産分野の視察。今年度は、マヒドン大学の都合で東京のみの視察。助産所やクリニックを視察するための来日だが、本学の東京地区の施設も見学したいとのこと。
16 7月29日(木)		中国寧夏回族自治区民政庁	ウイグル地区からの視察者9名 + 院生	グループホーム青山	日本高齢者施設の建築設計、インテリア設計、設備の配置、管理方法、人材育成、運営管理、法律規範など的高齢者医療・介護知識の交流の研究のため
17 9月7日(火)		香港特別行政区政府	立法議会衛生事務委員会	新宿けやき園、山王MC、山王病院	日本国内の私立病院の視察し、病院運営および1)感染症への対処 2)医療事故への対処 3)病院の規制および監視等について理解を深めたいとのこと
18 9月29日(水)		台湾工業技術院・産業学院	医療福祉関係の会社員、研究員、学校教員、病院関係者等約29名	おおたわら総合在宅ケアセンター、国際医療福祉リハビリテーションセンター、おおたわら風花苑	台湾も高齢化社会になりつつあり、日本の対応事例を勉強したい
19 10月14日(木) 10月18日(月)		ピッツバーグ大学医学部	Professor Harsha Rao, Professor Kanchan Rao	14日山王病院、大学院 18日大田原本校、国際医療福祉リハセン、国福病院、三田病院、山王MC	本学アメリカ医学部施設視察を受入をしていただき、この度は慶応大学と本学の視察のため来日。
20 11月29日(月)		韓国国民健康保険公社 柳韓大学 保健医療福祉研究所	健康管理室長 金三永、日本事務所所長 西山幸之他10名	15時 山王病院 16時 山王メディカルセンター	人間ドック関係の視察
21 12月7日(火)		中国障害者福祉基金会 中国リハセンター 嘉興市政府	リハセン時海峰 嘉興副市長 趙樹梅 他9名プラスガイド	栃木地区 本校、風花苑、リハセン、在宅総合ケアセンター、国福病院	嘉興市政府と福祉基金会で行っているリハビリテーション事業「国際健康生態城」の視察
21 12月20日(月)山王 12月21日(火)栃木	仁済大学校	林 憲燦 副学長 濱田 亮輔先生 福井 謙先生 他学生20名 計23名	山王病院 大田原キャンパス内簡易見学	教育力量強化事業団 メディカルコーディネーター課程東京研修のため(外国人患者の多さ、という観点から山王病院の視察を希望。歯科、眼科レーシック等に興味あり) 大田原:管理模倣型でキャンパスの概要説明 国旗掲揚台の前で記念撮影 バスに乗り込んでキャンパス内(福祉施設含む)を案内(合計約40分)	

2. 国際協力協定締結

平成18年の台湾から始まり、タイ、アメリカ、中国、韓国、オーストラリア、ベトナム等の大学、研究所および病院との間で国際協力協定締結がなされた。各大学等により協定内容が異なる。

施設	国別	提携先	締結日
大学	台湾	元培科技大学 Yuanpei University	2006.10.22
	タイ	マヒドン大学 (公衆衛生学部) Mahidol University, Faculty of Public Health	2007. 7.23
		クリスチャン大学 Christian University Thailand	2009. 4. 7
	USA	ハワイ大学 カプリアニ校 Kapi'Olani Community College, University of Hawaii	2009. 4. 2
		フィラデルフィア科学大学 メイスカレッジ Mayes College, University of The Science in Philadelphia	2009.8.28
		コロラド大学デンバー校 (看護学部) University of Colorado Denver College of Nursing	2009.12.22
	中国	首都医科大学康復医学院 Capital Medical University, School of Rehabilitation Medicine	2009.3.23
韓国	建陽大学 Konyang University	2009.10.24	
	仁済大学 Inje University	2009.10.26	
機関	中国	中国リハビリテーション研究センター China Rehabilitation Research Center	1998.1
	オーストラリア	ゴールドコーストインスティテュートオブ ティフ Gold Coast Institute of TAFE	2009. 5.27
病院	ベトナム	国立チョウライ病院 Cho Ray Hospital	2011.6.7

国際協力協定一覧

	国別	提携先	締結日	協定内容
大学	台湾	元培科技大学 Yuanpei University	2006.10.22	1.教職員交換交流 2.学生交換交流 3.出版物および関連学術情報の共有 4.共同研究の実施、講演会・シンポジウムの共同開催 5.両大学の協議と同意に基づくその他の教育及び学術交流 期間：1年、その後1年自動更新 費用：記載なし
	タイ	マヒドゥン大学 (公衆衛生学部) Mahidol University Faculty of Public Health	2007.7.23	1.大学職員、学生交換交流 2.共同開発の実施 3.講演会、シンポジウムの実施 4.学術情報と学術刊行物の共有 5.両大学の協議と同意に基づくその他の教育及び学術交流 期間：2年以内、両者の同意の上延長する場合もある 費用：宿泊費、交通費については、派遣側が負担する。
		クリスチャン大学 Christian University Thailand	2009.4.7	1.共同研究活動、共同刊行物の実施 2.学術研究のための教職員と学生の交流 3.講演会、学術会議、シンポジウムの開催 4.両大学の関心分野での情報共有 5.両大学の協議と同意に基づくその他の教育及び学術交流 期間：5年、その後5年の自動更新 費用：宿泊先はホスト側が提供するが、費用は学生負担。交通費、生活費、保険料も派遣側負担。ただし、入学試験費用、入学金、授業料は発生しない。
	USA	ハワイ大学 カハラニ校 Kapīʻolani Community College University of Hawaii	2009.4.2	1.学術情報の共有（印刷物、年次報告書、教科書、定期刊行学術書、カリキュラム支援情報書） 2.短期訪問時の教職員、学生の交流（履修科目または研修プログラムによるもの） 3.単位取得のための短期学術研修または単位付与なしの学術・国際交流のための学生交換 4.両大学合意による共同取り組みの開発向上 期間：5年、両者の同意の上で改訂、修正を行う。5年の自動更新 費用：2,255ドル 含まれるもの：20時間の英会話クラス、2時間のハワイ文化クラス、3時間のアメリカ保健システムと介護講義、6回の病院、診療所、老人ホーム見学、真珠湾、アリゾナ記念へのフィールドトリップ、教科書、カフェテリアでのランチ券、空港送迎代、プログラム実施時の交通費、オーシャンリゾートホテル13日分、歓迎会・送別会費 含まれないもの：保険料、報酬中の夕食代
		フィラデルフィア科学大学 Mayes College University of The Science in Philadelphia	2009.8.28	1.教職員の交換交流 2.学生の交換交流 3.刊行物、学術情報の共有 4.共同研究の実施、講演会、シンポジウムの共同開催 5.両大学の協議と同意に基づくその他の教育及び学術交流 期間：1年、その後1年延長可 費用：記載なし
	コロラド大学デンバー校（看護学部） University of Colorado Denver College of Nursing	2009.12.22	1.教職員の交換交流 2.共同研究の実施 3.学部生、大学生の交換プログラムの実施 4.両大学の関連分野における学術情報、刊行物の共有 期間：5年間、4年目にもう5年の契約を更新するか協議 費用：滞在先の給食が行うが、費用については派遣側負担、交通費その他費用についてもすべて学生負担。	
中国	首都医科大学康復医学院 Capital Medical University School of Rehabilitation Medicine	2009.3.23	IUHW、中国リハセン、首都医科大学リハ医学院の三者間で締結 1.留学生の受入れ 期間：2年間 専門分野：PT、OT、ST、義肢装具矯正、経営・管理、放射線、看護の各分野 授業・論文：日本語で行う。修士・博士課程の論文は英語または日本語で書くものとする。 費用：学費（入学金・授業料）は全額免除 学業に係る諸経費（教科書・ユニフォーム）、宿舍（※水道・ガス・電気・電話料金、インターネット通信費等は留学生負担）、交通費（定期券）、生活費（月6万円）支給・提供。 2.留学生受入れに関する条件 ・センター・学院は病院正門に「国際医療福祉大学国際交流センター」の看板を設置する ・センター・学院は広報誌およびパンフレットを発行する際、「国際医療福祉大学」を広報する便宜を無償で提供する。 3.センター・学院への臨床実習生の派遣 人数：毎年20名程度 期間：夏期休暇中の約2週間 内容：大学の各学科に関連する分野 その他：センター・学院が宿泊施設と交通手段を無償で提供する。食事及び観光費は学生負担とし、センター・学院は必要に応じて食事の場所を提供する。	
	韓国	延禧大学 Konyang University	2009.10.24	1.学部学生及び大学院生の交換 2.講演及び講義の交換 3.教員及び研究者の交換 4.学術情報及び学術資料の交換 5.学術定期刊行物の交換 6.共同研究 7.共同のワークショップ、セミナー及び会議の後援 8.教育及び学術交流目的での相互の施設提供 9.両大学の協議と同意に基づくその他の教育及び学術交流 期間：3年、3年が経過する3か月前の月末までにもう3年延長するかの協議を行う 費用：財政的負担は個別に協議しかつ合意をする。
	仁済大学 Inje University	2009.10.26	1.学部学生及び大学院生の交換 2.講演及び講義の交換 3.教員及び研究者の交換 4.学術情報及び学術資料の交換 5.学術定期刊行物の交換 6.共同研究 7.共同のワークショップ、セミナー及び会議の後援 8.教育及び学術交流目的での相互の施設提供 9.両大学の協議と同意に基づくその他の教育及び学術交流 期間：3年、3年が経過する3か月前の月末までにもう3年延長するかの協議を行う 費用：財政的負担は個別に協議しかつ合意をする。	
機関	中国	中国リハビリテーション研究センター China Rehabilitation Research Center	1998.1	IUHW、中国リハセン、首都医科大学リハ医学院の三者間で締結 1.留学生の受入れ 期間：2年間 専門分野：PT、OT、ST、義肢装具矯正、経営・管理、放射線、看護の各分野 授業・論文：日本語で行う。修士・博士課程の論文は英語または日本語で書くものとする。 費用：学費（入学金・授業料）は全額免除 学業に係る諸経費（教科書・ユニフォーム）、宿舍（※水道・ガス・電気・電話料金、インターネット通信費等は留学生負担）、交通費（定期券）、生活費（月6万円）支給・提供。 2.留学生受入れに関する条件 ・センター・学院は病院正門に「国際医療福祉大学国際交流センター」の看板を設置する ・センター・学院は広報誌およびパンフレットを発行する際、「国際医療福祉大学」を広報する便宜を無償で提供する。 3.センター・学院への臨床実習生の派遣 人数：毎年20名程度 期間：夏期休暇中の約2週間 内容：大学の各学科に関連する分野 その他：センター・学院が宿泊施設と交通手段を無償で提供する。食事及び観光費は学生負担とし、センター・学院は必要に応じて食事の場所を提供する。
	オーストラリア	ゴールドコーストインスティテュート Gold Coast Institute of TAFE	2009.5.27	1.学生間交流 2.教育交流 3.教員研修 4.双方同意によるその他の学術協力支援 5.研修旅行、調査訪問 期間：記載なし 費用：記載なし
病院	ベトナム	国立チョウライ病院 Cho Ray Hospital	2011.6.7	1.研究・研修のための専門家、教員、および学生の交換交流 2.病理学および放射線学におけるIUHWとCRH間の遠隔画像診断研究 3.IUHWとCRHの相互関心事項に関する情報交換 4.両者同意によるその他の学術協力の推進 期間：3年、両者に異論がなければ、1年自動延長。改訂・修正は、両者協議の上で行われる。上記協力により発生する費用負担については、事前に書面により協議される。

3. 海外研修

大学の授業科目の1つとして、海外研修を実施している。平成9年のベトナムから始まり、中国、アメリカ、オーストラリア、韓国、台湾などの諸外国へ訪問している。

3-1) 海外研修活動概要

「海外保健福祉事情」 ※単位認定

受入れ施設名	施設の特徴	主な活動内容
チョーライ病院 (ベトナム・ホーチミン市)	国立（日本の無償援助により再建）の総合病院	PT室・脳神経外科小児病棟にてボランティア活動、病院内・外部施設の見学
Millennia Holdings社企画プログラム (アメリカ・ロサンゼルス市)	訪問看護ステーション経営 日本人に対する米国医療施設に関する研修プログラムを運営	米国医療制度・保険制度等についての講義、ロサンゼルス市内病院・保健施設の見学、高齢者ホームでのボランティア活動
中国リハビリテーション研究センター (中国・北京市)	中国身体障害者連合会直属機関	リハセン内にある北京博愛病院にて、各学科ごとの特別プログラムによる実習・見学
TAFE(Technical and Further Education) ゴールドコースト校 企画プログラム (オーストラリア・クイーンズランド州・ブリスベン市)	公立の専門学校。連邦政府の援助を受けて運営されている実践教育を目的とする機関	英語の授業・オーストラリアの医療について講義・病院見学 (ホームステイ)
ハワイ大学 カピオラニコミュニティカレッジ (アメリカ・ハワイ州)	ハワイ大学機構のコミュニティ・カレッジ7校のうち、最大規模のカレッジ。2年制の短期大学	英語の授業・ハワイの医療について講義・福祉施設の見学
建陽大学・仁済大学 (韓国)	建陽大学：社会福祉など40を超える学科を有する総合私立大学 仁済大学：医科大学が発祥の総合私立大学	建陽大学・仁済大学との交流、医療・福祉施設の視察
元培科技大学 (台湾)	台湾のシリコンバレーと言われる新竹市にある私立大学で、今年創立45周年を迎える医学技術専門の大学	台湾の医療・福祉施設視察、中国語の授業、台湾文化の講義

3-2)海外研修引率教員一覧

年度	国名	学科	氏名	職位(当時)	参加者数	IUHW掲載 号-頁
1997	ベトナム	NS	河口 恭子	講師	11	16 -4
		OT	矢谷 令子	教授		
		語学	田中 美子	教授		
1998	ベトナム	HM	島津 望	教授	7	22 -4
	中国	PT	藤沢 しげ子	講師	14	
		OT	杉原 素子	学科長		
	アメリカ	語学	南井 紀子	助教授	9	
1999	ベトナム	PT	石井 恵美	助手	14	28 -4,5
		HM	加藤 尚子	講師		
	中国	RT	金場 敏憲	副学科長	4	
	アメリカ	ST	城間 将江	助教授	3	
		語学	溝口 昭子	講師		
	オーストラリア	PT	齋藤 昭彦	講師	7	
2000	ベトナム	NS	中村 勝	講師	14	34 -6,7,9
	中国	OT	谷口 敬道	講師	17	
	アメリカ	NS	池松 裕子	講師	6	
	オーストラリア	ST	城間 将江	助教授	13	
2001	ベトナム	NS	中村 勝	講師	14	40 -6,7
	中国	HS	東口 重信	教授	9	
	アメリカ	語学	Charles K.Dobbs	助教授	21	
	オーストラリア	ST	田中 裕美子	講師	9	
2002	ベトナム	HS	山口 光治	講師	16	46 -6,7
	中国	PT	黒澤 和生	助教授	16	
		OT	古川 昭人	助教授		
	アメリカ	語学	G.C Cota	講師	9	
	オーストラリア	RT	清水 慶昭	助教授	8	
2003	ベトナム	HM	加藤 尚子	講師	16	
	アメリカ	NS	日高 陵好	講師	8	
	オーストラリア	OT	奈良 進弘	教授	15	
2004	ベトナム	RT	富澤 比呂之	講師	13	57 -4~6
	中国	HS	浅香 勉	講師	9	
	アメリカ	NS	金 升子	講師	10	
	オーストラリア	ORT	三柴 恵美子	講師	15	
2005	ベトナム	HM	福永 肇	講師	11	63 -10,11
	中国	OT	澁井 実	講師	2	
	アメリカ	NS	松澤 和正	講師	4	
	オーストラリア	RT	小池 貴久	講師	12	
2006	ベトナム	HS	須藤 昌寛	講師	17	67 -4~7
	中国	ST	小渕 千絵	講師	8	
	アメリカ	語学	宮崎 路子	助教授	10	
	オーストラリア	PT	潮見 泰蔵	教授	9	
2007	ベトナム	HM	大西 正利	教授	11	75 -4~7
	中国	PT(小)	昇 寛	准教授	9	
	アメリカ	NS	重久 加代子	講師	21	
	オーストラリア	PS	角南 明彦	教授	8	

2008	ベトナム	PT	秋山 純和	教授	15	79 -6~9
	アメリカ	NS(小)	森 真喜子	准教授	14	
	オーストラリア	NS	松澤 和正	教授	15	
	韓国	福岡リハ	満留 昭久 古川 昭人 徳田 和恵 神塚 泰史	副学長/学部長 学科長/教授 准教授 事務部副部長	23	
2009	ベトナム	塩谷 NS	小野 貴志雄 岩崎 和代	教授 准教授	17	83 -4~7
	中国	HM 福岡看護	福原 毅文 中西 順子	教授 助教	13	
	ハワイ	NS	岩尾 總一郎 金 升子	副学長 准教授	9	
	オーストラリア	小田原看護	岩尾 總一郎 森 真喜子	副学長 准教授	18	
	韓国	福岡リハ	濱本 邦洋 為数 哲司 石橋 英恵 久米 徹	教授 准教授 講師 事務部部長	5	
	ベトナム	ST	谷合 信一	助教	20	
2010	中国	OT	山路 博文	准教授	24	87
	オーストラリア	語学	神戸 百合香	助教	32	
	台湾	RT	座間 佳男	助手	19	
	ハワイ	大川PT	藤城 直二	准教授	14	
	韓国	福岡リハ	甲斐 悟 長谷 麻由 池 扶可也	講師 助教 国際室室長	48	
		福岡看護	永井あけみ	講師		

国際保健協力フィールドワーク・フェローシップ研修(フィリピン)

内容	実施期間	IUHW掲載
2日間の国内研修(国際協力についての講義や学生同士のディスカッションなど)を経て、現地フィリピンにて保険制度の講義や健医療施設の視察を実施	H8.3.11~3.21	7-2
	H9.3.10~3.20	13-4
	H10.3.9~3.19	19-4
	H11.3.4~3.14	25-5

3-3) 学科企画事業 (研修旅行)

各学科企画の海外研修は、理学療法学科 (オーストラリア、中国)、言語聴覚学科 (韓国) 放射線・情報科学科 (韓国) で行っている。

保健医療学部理学療法学科

実施日	名称	国	対象 (参加者数)
1998.9.14~9.19	海外研修	オーストラリア	学科教職員 (8名)
2000.9.6~9.11	理学療法学科研修旅行	オーストラリア	学科教員
2001.9.10~9.15	理学療法学科研修旅行	オーストラリア	学科教員
2002.9.8~9.13	理学療法学科研修旅行	オーストラリア	学科教員 (5名)
2003.3.23~3.26	学生の研修	中国	学科教員・学生
2003.8.4~8.9	研修旅行	オーストラリア	学科教員
2004.3.20~3.23	研修旅行	中国	学科教員 (4名)
2005.3.18~3.22	研修旅行	中国	学科教員 (3名)
2005.9.6~9.11	学生研修旅行	オーストラリア	学科教員・学生
2006.9.11~9.16	学生研修旅行	オーストラリア	学科教員 (6名)・学生
2007.3.16~3.21	学生研修旅行	中国	学科教員 (7名)・学生
2008.3.28~3.31	学生研修旅行	中国	学科教員 (6名)・学生
2009.3.27~3.30	学生研修旅行	中国	学科教員 (7名)・学生
2010.3.26~3.29	学生研修旅行	中国	学科教員 (6名)・学生

言語聴覚学科

実施日	名称	国	対象 (参加者数)
2009年	韓国ナザレ大学 言語聴覚学科研修旅行	韓国	学科教員・学生 (16名)

放射線・情報科学科

実施日	名称	国	対象 (参加者数)
2007.9.17~9.20	高麗大学学術発表	韓国	学科教員・学生 (5名)
	延世大学永東セブランス病院研		
2008.9.7~9.10	高麗大学学術発表	韓国	学科教員・学生 (10名)
	延世大学セブランス病院研修		
2009.9.6~9.9	高麗大学学術発表	韓国	学科教員・学生 (9名)
	延世大学セブランス病院研修		
2010.9.5~9.8	高麗大学学術発表	韓国	学科教員・学生 (8名)
	延世大学セブランス病院研修		

4. JICAプロジェクトの概要

・通信・放送機構(TAO)那須遠隔リハビリリサーチセンター『アジア地区に於ける衛生を利用した遠隔リハビリテーションシステム』研究プロジェクト

H10(1998)年から始まった、中国リハビリテーションセンター(中国健復中心・中国北京市)との衛星通信による共同研究プロジェクト。

中国リハビリテーションセンターと本学那須遠隔リハビリテーションリサーチセンター(J棟)が通信衛星を介して双方向の交信を行う通信技術を研究するもので、交信の内容は、両国のリハビリテーション医療技術の現状を伝え合う教育プログラムが主なものである。

研究リーダー:杉原素子教授・OT学科長、センター長:井原廣一

H10(1998).6.5通信・放送機構(TAO)那須遠隔リハビリテーションリサーチセンター開所式(IUHW掲載21号-2頁)

H13(2001).6.5最終報告会(平成12年度(H13.3)終了)(本研究は、JICAプロジェクトに引継ぎ)(IUHW掲載39号-9頁)

教育プログラムの内容		
日本からの発信 全10回	第1回:平成10年8月「日本における医療画像の現況」放射線・情報科学科 金場敏憲	IUHW 掲載 号-頁
	第2回:平成10年11月「脳性麻痺の座位保持装置」作業療法学科 谷口敬道	
	第3回:平成10年12月「脊髄損傷のリハビリテーション」作業療法学科 濱口豊太	
	第4回:平成11年2月「片麻痺の運動療法」理学療法学科 齋藤昭彦	
	第5回:平成11年3月「リハビリテーション医療とチームワーク」作業療法学科 杉原素子	
	第6回:H11.6 「下腿切断の理学療法」理学療法学科 藤沢しげ子	
	第7回:H11.7 「言語聴覚におけるコミュニケーション機器」言語聴覚障害学科 城間将江	
	第8回:H11.8 「救急放射線医学」放射線・情報科学科 金場敏憲	
	第9回:H12.1 「軽度発達障害を評価する一つの方法」作業療法学科 杉原素子、福田恵美子	
	第10回:H12.4 「高次脳機能障害・記憶障害」言語聴覚障害学科 城間将江、藤田郁代	
	第11回:H12.7 「神経系のモビライゼーション」理学療法学科 齋藤昭彦	
中国からの発信 全5回	第1回:H11.10 「片麻痺の鍼灸治療」許 建鵬医師	24-3 29-4 35-5 ~7 35-5
	第2回:H11.12 「脳性麻痺のリハビリ治療」作業療法科 胡先生	
	第3回:H12.3 「脊髄損傷の前期リハビリテーション」脊髄損傷早期リハ科 鄭先生	
	第4回:H12.6 「脊髄損傷の後期リハビリテーション」脊髄損傷後期リハ科 関先生	
	第5回:H12.9 「成人失語症の評価と治療」言語分野 李先生	
日中合同会議	第1回:H10.11 (中国)中国リハビリテーション研究センターにて	35-5
	第2回:H11.4 (日本)国際医療福祉大学にて	
	第3回:H11.10 (中国)中国リハビリテーションセンターにて	
	第4回:H12.4 (日本)国際医療福祉大学にて	
	第5回:12.12 (中国)リハビリテーションセンターにて	

・JICA/中国リハビリテーション専門職養成プロジェクト(～H18.10終了)

H12(2000)年11月から5年間の予定で、中国・首都医科大学に理学療法士、作業療法士の養成課程(4年制)の設立と教育課程の支援を目的に始まったJICAのプロジェクトである。

首都医科大学付属リハビリテーション学院(理学療法士・作業療法士4年制課程)の設立を目指して、教員の養成及び本学理学療法学科・作業療法学科教員を中国リハビリテーションセンター(北京)に派遣し(短期派遣・長期派遣)、設立準備の協力に当たった。

中国リハビリテーションセンター 何静杰医師、王燁医師がH13(2001).5.11～6.6約4週間、理学療法学科及び作業療法学科にて研修を受けた。

中国リハビリテーション研究センター 時海峰副主任一行が来校、学内の他に「大田原総合在宅ケアセンター」など関連施設を視察された。H16(2004).10.5 (IUHW掲載58号-7頁)

本国で指導者となる人材の養成のための中国リハセンからの留学のうち、PT3名、OT2名が日本の国家資格を取得し、首都医科大学リハビリテーション医学院四年制教育課程の教員として教育活動を開始した。(IUHW掲載68号-6～7頁)

・JICA/国際寄生虫対策アジアセンタープロジェクト

H12(2000)年3月5ヵ年計画で始まったJICAとタイ国マヒドン大学熱帯医学部及び保健省感染症局との共同プロジェクトである。

H12(2000)年8月～H17(2005)年3月まで、本学から小島莊明教授をチーフアドバイザーとして派遣し、タイ及び周辺4カ国における学校保健を基盤としたマラリア・寄生虫対策推進のための人材育成及び保健省・教育省・国際機関とのネットワーク作りに貢献した。

・JICA/カンボジアプロジェクト

医療用放射線領域状況調査(H13(2001).2.20～3.13)、医療従事者養成学校プロジェクト基礎調査(H14(2002).2.13～2.23)、医療技術者育成プロジェクト(H16(2004).2.1～3.25)に放射線・情報科学科教員を専門家として派遣した。

・草の根技術協力事業

「ベトナムにおける地域リハビリテーション及び障害当事者エンパワメントを通じた身体障害者支援事業」

谷修一学長(当時)を代表として理学療法学科、作業療法学科及び国際部が共同してJICAへ申請し、H17(2005)年3月に採択されたプロジェクト。JICAによるベトナム政府の了承取り付け後、事業を開始した。

4-1) JICA事業に関わる派遣および受入れ一覧(2003年～2013年)

	事業名	派遣/ 受入	内容	人数	委託期間	IUHW掲載 号-頁
中国	中国中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクト	派遣	<中国リハビリテーション研修センター> 2001年から行われた事業の継続事業。 地方人材の養成を目指す事業。 (2008年4月～2013年3月)	29名	H20.4 ～H25.3	
	リハビリテーション専門職養成プロジェクト	派遣	<中国リハビリテーション研修センター> 国際基準に合った専門家を養成する事 業(2001年11月～2006年10月)	13名	H13.11 ～H18.10	
	平成22年度国別研修「地方人材に対する 本邦研修」	受入	研修生の受入れ(短期)	8名	H22.10.下旬 ～12.下旬	
	平成21年度国別研修「言語聴覚士・義肢 装具士」コース	受入	研修生の受入れ(長期、大学院)	2名	H22.4.5 ～H23.3.15	
	平成21年度国別研修「地方人材に対する 本邦研修」	受入	研修生の受入れ(短期)	8名	H22.1.19 ～1.23	
	平成20年度国別研修「理学療法・作業療 法」コース	受入	研修生の受入れ(長期、大学院)	2名	H21.4.6 ～H22.3.16	
	平成20年度国別研修「理学療法・作業療 法」コース	受入	研修生の受入れ(長期、大学院)	2名	H20.4.8 ～H21.3.9	
	平成19年度国別研修「理学療法・作業療 法」コース	受入	研修生の受入れ(長期、大学院)	2名	H19.4.5 ～H20.3.11	
平成18年度国別研修「理学療法・作業療 法」コース	受入	研修生の受入れ(長期、大学院)	2名	H18.4.4 ～H19.3.12		
ミャンマー	平成21年度国別研修「脳卒中患者のリハ ビリテーション」コース	受入	研修生の受入れ(短期)	5名	H21.11.17 ～11.30	
	リハビリテーション強化プロジェクト	派遣	国立リハビリテーション病院における質の 高いリハビリテーションサービスを提供す るためのシステムが強化されることを目標 とする事業 (2008年3月～2013年3月)		H20.3 ～H25.3	
ベトナム	南部地域医療リハビリテーション強化プロ ジェクト	派遣	<チョウライ病院> 2008年まで行われていた事業の継続事 業。(2010年4月～2012年3月)		H22.4 ～H24.3	
	ベトナムにおける地域リハビリテーション及 び障害者当事者エンパワメントを通した身 体障害者支援事業(第4年次)	(事業 実施)	<チョウライ病院> 草の根技術協力事業(草の根パートナ ー型) 林先生を中心として本学とJICAで共同実 施。 チョウライ病院のリハビリ分野の強化。 (2005年4月～2008年12月)		H20.4.1 ～12.31	
	ベトナムにおける地域リハビリテーション及 び障害者当事者エンパワメントを通した身 体障害者支援事業(第3年次)				H19.4.1 ～H20.3.31	
	ベトナムにおける地域リハビリテーション及 び障害者当事者エンパワメントを通した身 体障害者支援事業(第2年次)				H18.4.1 ～H19.3.31	
	ベトナムにおける地域リハビリテーション及 び障害者当事者エンパワメントを通した身 体障害者支援事業(第1年次)				H17.4.1 ～H18.3.31	
カンボジア	カンボジア医療技術者養成プロジェクト			派遣	医療専門家養成所におけるリハビリ分野 専門家教育の強化をめざす事業 (2003年9月～2008年9月)	
	平成18年度カンボジア医療技術者育成プ ロジェクト 国別研修「理学療法教育」	受入	研修生の受入れ(短期)	2名	H18.5.24 ～6.15	
ケニア	ケニア医療訓練カレッジ・プロジェクト	派遣	長谷川豊国際部部長がJICAのプロジェ クト運営指導調査団・団員としてケニアへ 派遣	1名	H11.3.6 ～16	25-4
	ケニア医療訓練カレッジ・プロジェクト	受入	Mr.Kiwinga MWANDIME(3.8～4.28 情報管理研修)、 Mr.DavidBWONYA(3.15～4.28教材 制作・放射線技術研修) Ms.Mueni MUENDO(3.30～31看護 研修)	3名	H11.3.8 ～4.28	25-4

ケニア	ケニア医療訓練カレッジ・プロジェクト	受入	JICA派遣のMr.Paul Tuukuo(副校長)①、Ms.Anne Bwika(看護学部長)②、Ms.Gladys Koyengo(臨床医学部長)③、Mr.Joshua Sang環境保健部教官)④に対し、大学の管理運営及び看護教育の運営管理について、本学で研修	4名	①H11.9.27～10.22 ②H11.9.27～10.8 ③H11.11.1～11.12 ④H11.11.1～11.5	28-3 29-5
	ケニア国医療技術教育強化プロジェクト kenya Medical training College(KMTC ケニア医療専門カレッジ)への国際協力	派遣 受入	国内委員:細井良三(1998～2002) 1998年から5ヵ年計画で本学と国立公衆衛生院の連携で、KMTC(ナイロビ市)へ医療技術協力 ①KMTC教員研修員に対して研修の実施(本学) ②KMTCナイロビ校に於いて講義		H10.から5ヵ.計画 ①1998.4～5 1999.3～4 ②1998.11.16～26	22-3
		派遣	①山崎統四郎国際部副部長兼国際交流委員が、本プロジェクトのチーフアドバイザーとして1年間ケニアに赴任 ②長谷川国際部長が運営指導調査団の一員としてケニアを訪問		①H12.2.13～1.年間 ②H12.2.27～3.8	31-7

4-2) 教員派遣リスト2001～2010(JICA 中国プロジェクト)

①2001年11月～2006年10月 合計 29名を派遣

氏名	所属・職位等/指導分野	派遣期間
藤沢しげ子	国際医療福祉大学・助教授 /プロジェクトリーダー・PT	2001.11.19～2002.05.18
丹羽 敦	国際医療福祉学院・専任教員/OT	2001.11.19～2002.05.18
黒沢和生	国際医療福祉大学・助教授 /プロジェクトリーダー・PT	2002.05.15～2002.08.12
古川昭人	国際医療福祉大学・助教授/OT	2002.07.19～2002.09.20
丸山仁司	国際医療福祉大学・理学療法学科長 /プロジェクトリーダー・PT	2002.08.10～2002.10.01
多賀 誠	国際医療福祉学院・専任教員/OT	2002.09.26～2002.12.24
潮見泰蔵	国際医療福祉大学・助教授 /プロジェクトリーダー・PT	2002.09.26～2002.12.23
西條富美代	国際医療福祉大学・講師 /プロジェクトリーダー・PT	2002.12.19～2003.08.08
西田征治	柳川リハ専門学校・専任教員/OT	2002.12.26～2003.08.24
秋山純和	国際医療福祉大学・助教授 /プロジェクトリーダー・PT	2003.08.06～2004.04.02
新川寿子	柳川リハ専門学校・専任教員/OT	2003.08.19～2003.10.31
丸山仁司	国際医療福祉大学・理学療法学科長/PT	2003.09.03～2003.09.23
杉原素子	国際医療福祉大学・作業療法学科長/OT	2003.09.21～2003.09.29
伊藤元信	国際医療福祉大学・言語聴覚学科長/ST	2003.10.24～2003.10.26
奈良進弘	国際医療福祉大学・教授/OT	2003.10.28～2004.01.17
原口健三	国際医療福祉学院・学科長/OT	2004.01.14～2004.04.14
藤沢しげ子	国際医療福祉大学・教授 /プロジェクトリーダー・PT	2004.03.30～2004.10.01
菅原洋子	国際医療福祉大学・助教授/OT	2004.04.10～2004.08.27
西條富美代	国際医療福祉大学・講師/PT	2004.08.09～2004.08.23
山崎せつ子	国際医療福祉大学・講師/OT	2004.08.09～2004.08.24
奈良進弘	国際医療福祉大学・教授/OT	2004.08.09～2004.11.30
荻原喜茂	国際医療福祉大学・教授/OT	2004.08.30～2004.09.10
秋山純和	国際医療福祉大学・助教授/PT	2004.09.01～2004.09.14
丸山仁司	国際医療福祉大学・理学療法学科長/PT	2004.09.09～2004.09.23
石井博之	国際医療福祉大学・講師/PT	2004.09.20～2005.09.30
斉藤昭彦	国際医療福祉大学・助教授/PT	2005.01.13～2005.01.25
藤田博暁	国際医療福祉大学・講師/PT	2005.01.13～2005.01.25
奈良進弘	国際医療福祉大学・教授/OT	2005.02.24～2005.06.09
秋山純和	国際医療福祉大学・助教授/PT	2005.09.26～2006.01.27

②2008年4月～2010年8月現在 13名を派遣

奈良進弘	国際医療福祉大学・教授/OT	2008.04.24～2008.06.17
藤沢しげ子	国際医療福祉大学・教授/PT	2008.06.29～2008.11.02
昇 寛	国際医療福祉大学・准教授/PT	2008.10.28～2009.03.04
山路博文	国際医療福祉大学・准教授/OT	2009.02.28～2009.06.30
藤沢しげ子	国際医療福祉大学・教授/PT	2009.06.29～2009.08.01
佟 伸幸	国際医療福祉大学・准教授/PT	2009.06.29～2009.08.01
金子 純一郎	国際医療福祉大学・講師/PT	2010.01.18～2010.01.31
佐藤 仁	国際医療福祉大学・講師/PT	2010.01.18～2010.01.31
石井博之	国際医療福祉大学・講師/PT	2010.08.01～2010.08.10
佟 伸幸	国際医療福祉大学・准教授/PT	2010.08.12～2010.08.25
新川寿子	国際医療福祉大学・准教授/OT	2008.09.01～2010.08.13
藤沢しげ子	国際医療福祉大学・教授/PT	2010.08.23～2012.08.22
上村さと美	国際医療福祉大学・助教授/PT	2010.08.23～2011.08.22

4-3) 中国リハビリテーション研究センターからの院留学生名簿(JICA)

No.	氏 名	姓	入学年度	専 攻
1	閻 曉梅 エン ギョウバイ	女	2002(H14)	保健医療学専攻(OT)
2	劉 璇 リュウ セン	女	2002(H14)	保健医療学専攻(OT)
3	龐 紅 ボウ コウ	女	2002(H14)	保健医療学専攻(PT)
4	李 潔輝 リ ケツキ	女	2002(H14)	保健医療学専攻(PT)
5	劉 建宇 リュウ ケンウ	男	2002(H14)	保健医療学専攻(PT)
6	劉 建華 リュウ ケンカ	男	2002(H14)	保健医療学専攻(PT)
7	劉 恵林 リュウ ケイリン	男	2004(H16)	保健医療学専攻(PT)
8	陳 彤紅 チン トウコウ	男	2004(H16)	保健医療学専攻(OT)
9	戴 東 タイ トン	男	2005(H17)	保健医療学専攻(OT)
10	顧 越 クウ ユエ	男	2005(H17)	保健医療学専攻(OT)
11	常 冬梅 ジョウ トウバイ	女	2006(H18)	保健医療学専攻(PT)
12	呉 葵 ゴ キ	女	2006(H18)	保健医療学専攻(OT)
13	張 冬 チョウ トウ	女	2007(H19)	保健医療学専攻(OT)
14	胡 春英 コ シュンエイ	女	2007(H19)	保健医療学専攻(PT)
15	黄 秋晨 ファン シュシエン	男	2008(H20)	保健医療学専攻(PT)
16	黄 富表 ファン フービヤオ	男	2008(H20)	保健医療学専攻(OT)
17	牛 志馨 ギョウ シキョウ	女	2009(H21)	保健医療学専攻(PT)
18	何 斌 カ ヒン	男	2009(H21)	保健医療学専攻(OT)
19	王 林 オウ リン	男	2010(H22)	医療福祉学専攻(福援工)
20	張 慶蘇 チョウ ケイソ	男	2010(H22)	保健医療学専攻(ST)

5. 教員による海外活動（大学に届出のあったもの）

（1）保健医療学部看護学科

1. 業務出張

氏名	国	都市 渡航先名	目的	期日
池松 裕子	アメリカ	ハワイ	学生海外ボランティア引率	H12 .7.31 ~ 8.14
中村 勝	ベトナム		学生海外ボランティア引率	H12 .7.31 ~ 8.14
中村 勝	ベトナム		第5回(平成13年度)ベトナム海外ボランティア研修引率	H13 .7.3 ~ 8.13
日高 陸好	アメリカ		海外研修学生引率(7/28~8/11) 研究調査(8/11~8/28)	H15 .7.28 ~ 8.28
金 升子	アメリカ	ロサンゼルス	2004年夏季海外研修プログラムアメリカロサンゼルス学生引率のため	H16 .7.29 ~ 8.12
松澤 和正	アメリカ	ロサンゼルス	「海外保健福祉事情」学生引率	H17 .8.1 ~ 8.15
江幡 芳枝 小島 荘明	タイ		助産学実習Ⅰの打合せ・視察	H19 .2.22 ~ 2.26
重久 加代子	アメリカ	ロサンゼルス	「海外保健福祉事情」学生引率	H19 .7.3 ~ 8.13
松澤 和正	イギリス	ブリスベン	「海外保健福祉事情」海外研究活動参加学生引率のため	H20 .7.28 ~ 8.11
金升子	韓国		研究ゼミ学生引率	H21 .8.3 ~ 8.5
佐山文子	韓国		研究ゼミ学生引率	H21 .8.3 ~ 8.5
森川奈緒美	韓国		研究ゼミ学生引率	H21 .8.3 ~ 8.5

2. 公的協力(JICA)

氏名	国	都市 渡航先名	目的	期日
川口 恭子	バングラデシュ		JICAバングラディッシュ人口基礎調査	H10 .3.17 ~ 3.27
川口 恭子	バングラデシュ		JICA短期派遣専門家としてバングラディッシュ国・地域家族計画評価のため	H12 .2.21 ~ 3.5
竹尾 恵子	サウジアラビア		JICA専門家派遣	H19 .11.14 ~ 12.5

3. 国際学会などの委員

なし

4. 国際学会学術発表

氏名	国	都市 渡航先名	目的	期日
池松 裕子	アメリカ		第7回ローズマリーエリス 看護理論学会参加/博士論文研究立案	H9 .4.26 ~ 5.14
住吉 蝶子	アメリカ	ワシントン	国際感染予防コントロール学会	H10 .2.18 ~ 4.9
藤原 聡子	中国	珠海	第7回日中看護学会	H13 .9.11 ~ 9.16
藤原 聡子	キューバ		第16回世界性科学学会発表	H15 .3.8 ~ 3.17
金 升子	韓国		The 13th Congress of the Critical Care Medicine	H16 .6.1 ~ 6.13
江幡 芳枝	中国	重慶	第9回日中看護学会発表	H16 .9.18 ~ 9.25
中西 睦子	韓国	ソウル	The 9th International Congress on Nursing Informatics	H18 .6.1 ~ 6.13
田尻 后子	中国		学会発表	H19 .3.17 ~
田尻 后子	イギリス	グラスゴー	ICM 28th Triennial Congress(学会発表)	H20 .6.1 ~ 6.5
田尻 后子	イギリス	グラスゴー	国際助産学会	H20 .6.1 ~ 6.5
曾我部美恵子	イギリス	グラスゴー	国際助産学会	H20 .6.1 ~ 6.5
今井栄子	アトランタ		The SHEA Annual meeting Fifth Decennial International	H22 .3.17 ~ 3.24

5. その他

氏名	国	都市 渡航先名	目的	期日
金井ハック雅子	韓国		韓国にて本学看護学科で開発されたコンピュータプログラム発表	H8 .6.12 ~ 6.15
住吉 蝶子	ヨーロッパ・ アメリカ		米国看護免許単位取得研修会	H8 .6.2 ~ 10.7
住吉 蝶子	アメリカ		臨床看護教育実践	H8 .12.25 ~ H9 1.17

住吉 蝶子	アメリカ		プロビデンス病院での学習	H9 .2.21 ~ 4.1
城ヶ端 初子	スイス・フランス・イギリス		「ナイチンゲールを学ぶ会」での研修旅行	H9 .3.23 ~ 3.3
藤原 聡子	スイス・フランス・イギリス		「ナイチンゲールを学ぶ会」での研修旅行	H9 .3.23 ~ 3.3
住吉 蝶子	アメリカ	ワシントン	専門分野での看護の臨床経験と看護ライセンス更新のための単位取得のため	H9 .6.15 ~ 10.7
池松 裕子	アメリカ		ケースウェスタンリザーブ大学博士課程続行のため	H9 .8.1 ~ 9.2
金井ハツ雅子	アメリカ	ハワイ	看護婦免許継続のための研修、自己研究の調査	H9 .8.5 ~ 8.19
藤原 聡子	中国		中国天津医学院、第一付属病院見学	H9 .8.15 ~ 8.23
細井 良三 金井ハツ雅子	スウェーデン		MITIプロジェクト発表	H9 .9.26 ~ 10.3
城ヶ端 初子	アメリカ	L.A.、ラスベガス、アトランタ、ワシントンDC、NY	研究テーマについての資料収集	H9 .10.4 ~ 10.12
池松 裕子	アメリカ		ケースウェスタンリザーブ大学博士課程続行のため	H9 .12.24 ~ H10 1.15
川口 恭子	タイ	バンコク	現地NGOの学校建設に関する相談、現地看護学校訪問	H10 .1.15 ~ 1.25
城ヶ端 初子	北欧		看護・福祉を学ぶ研修旅行、教材として用いるための撮影	H10 .3.18 ~ 3.25
工藤 ちい子	アメリカ	ワシントン	プロビデンス病院産科で研修	H10 .3.4 ~ 3.13
須佐 公子	イタリア	ローマ、フィレンツェ	医療福祉の現状を知るため	H10 .3.5 ~ 3.14
樋口 京子		コペンハーゲン、ヘルシンキ、ストックホルム	研修旅行：サービス等を学ぶ	H10 .3.18 ~ 3.25
池松 裕子	アメリカ		ケースウェスタンリザーブ大学博士課程の研修指導を受ける	H10 .5.9 ~ 5.3
橋本 久子	アメリカ	ワシントン	個人研修(住吉先生)	H10 .8.2 ~ 8.25
川口 恭子	バングラデシュ		NGOのプロジェクト プロポーザル検討調整活動	H10 .8.12 ~ 8.23
小宮 裕二	アメリカ		プロビデンス病院 看護過程セミナー講義・実習	H10 .7.25 ~ 8.1
荒井 蝶子	ケニア		医療技術教育強化プロジェクト	H10 .8.3 ~ 9.12
住吉 蝶子	アメリカ	ワシントン	日本と米国の医療施設の共同研究会議	H10 .12.2 ~ H11 1.12
川口 恭子	バングラデシュ		NGOのカンボジアにおける医療保健協力の活動評価のため	H10 .12.23 ~ H11 1.16
川口 恭子	カンボジア		NGOのカンボジアにおける医療保健協力の活動評価のため	H11 .2.11 ~ 2.19
住吉 蝶子	アメリカ		看護分野でのリサーチのためのデータを特別コンピュータソフト入力するため	H11 .2.18 ~ 3.17
川口 恭子	バングラデシュ		HDOの保険プログラムへの指導助言のため	H11 .10.7 ~ 10.15
藤原 聡子	中国	北京	日中看護協会、学内研究の資料収集	H11 .10.24 ~ 10.29
中村 勝	ベトナム	ホーチミン	博士論文作成のための研究調査	H13 .2.22 ~ 3.8
中村 勝	ベトナム		調査・研究	H13 .9.6 ~ 9.17
日高 陸好	アメリカ		アンケート調査、資料収集	H14 .7.26 ~ 8.3
江幡 芳枝	イギリス	ロンドン	調査のため	H14 .9.19 ~ 9.27
日高 陸好	アメリカ		調査・研究のため	H16 .4.23 ~ 5.7
竹尾 恵子	サウジアラビア		サウジアラビア看護指導者能力強化プロジェクト	H18 .6.1 ~ 6.22
竹尾 恵子	オーストラリア	シドニー	Australia看護大学訪問他	H18 .12.3 ~ 12.26
竹尾 恵子	オーストラリア		シドニー大学訪問	H19 .9.3 ~ 9.18
金升子	アメリカ		2009年スペシャルオリンピックスボランティア	H21 .2.7 ~ 2.13
谷 規久子	シンガポール		第24回国際ADI会議	H21 .3.24 ~ 3.31
谷 規久子	台湾		財団法人台南市基督教教育年会社会福祉慈善事業基金会・国立成功大学訪問	H21 .7.24 ~ 7.27
田尻后子	中国		学内研究のデータ収集	H21 .12.24 ~ 12.31
岩崎和代・濱真由	スウェーデン ノルウェー		2010リプロ・ヘルス欧州研修旅行	H22 .8.14 ~ 8.22
田尻后子	中国		博士後期および学内研究データ収集	H22 .8.23 ~ 8.30
谷 規久子	台湾		財団法人台南市基督教教育年会社会福祉慈善事業基金会・国立成功大学訪問	H22 .10.22 ~ 10.25
谷 規久子	ドイツ	ベルリン	高齢者の現状(デイケア施設)の視察	H22 .12.21 ~ 12.27

(2) 保健医療学部理学療法学科

1. 業務出張

期間	目的	渡航先	渡航者
1996. 6. 29～7. 3	中国入学試験	中国	高木理事長、丸山、谷田部
1996. 11. 21～11. 24	中国入学試験	中国	高木理事長、丸山、谷田部
1998. 1. 21～1. 23	衛星放送事業	中国	
1999. 12. 11～12. 19	海外留学生獲得に向けての調整のため	オーストラリア	斉藤 昭彦
2001. 3. 18～3. 21	衛星放送事業		
2006. 7. 31～8. 14	「海外保健福祉事情」海外研修活動参加学生引率のため	オーストラリア	潮見
2008. 7. 28～8. 11	「海外保健福祉事情」海外研究活動参加学生引率のため	ベトナム	秋山
2008. 9. 4～9. 10	パラリンピック付き添い	中国	藤沢・霍明

2. 公的協力 (J I C A)

○中国リハビリテーション専門職養成プロジェクト(2001年11月1日～2006年10月31日)

(※2008年3月15日まで延長)

藤沢しげ子	H13. 11. 19～	H14. 5. 18	長期派遣
黒澤 和生	H14. 5. 15～	H14. 8. 12	長期派遣
丸山 仁司	H14. 8. 10～	H14. 10. 1	長期派遣
潮見 泰蔵	H14. 9. 26～	H14. 12. 24	長期派遣
西條富美代	H14. 12. 19～	H15. 8. 8	長期派遣
秋山 純和	H15. 8. 6～	H16. 4. 2	長期派遣
藤沢しげ子	H16. 3. 30～	H16. 10. 1	長期派遣
石井 博之	H16. 9. 20～	H17. 9. 30	長期派遣
秋山 純和	H17. 9. 27～	H18. 1. 28	長期派遣
石井 博之	H18. 1. 23～	H18. 8. 4	長期派遣
藤沢しげ子	H18. 7. 31～	H18. 10. 31	長期派遣
秋山 純和	H16. 9. 1～	H16. 9. 14	短期派遣：科目指導
丸山 仁司	H16. 9. 9～	H16. 9. 23	短期派遣：科目指導
斉藤 昭彦	H17. 1. 13～	H17. 1. 25	短期派遣：科目指導
藤田 博暁	H17. 1. 13～	H17. 1. 25	短期派遣：科目指導
丸山 仁司	H17. 6. 12～	H17. 6. 21	短期派遣：科目指導
金子純一郎	H18. 5. 12～	H18. 5. 19	短期派遣：科目指導
斉藤 昭彦	H18. 5. 28～	H18. 6. 5	短期派遣：科目指導
潮見 泰蔵	H18. 5. 28～	H18. 6. 5	短期派遣：科目指導
丸山 仁司	H18. 8. 14～	H18. 8. 22	短期派遣：科目指導
藤沢しげ子	H19. 5. 20～	H19. 6. 1	短期派遣：科目指導
丸山 仁司	H19. 7. 12～	H19. 7. 24	短期派遣：科目指導

○中国中西部地区リハビリ人材養成プロジェクト(2008年4月1日から2013年3月31日)

藤沢しげ子	H20.6.29～	H20.11.2	長期派遣
藤沢しげ子	H22.8.23～	H24.8.22	長期派遣
藤沢しげ子	H21.7.18～	H21.8.1	短期派遣：科目指導
金子純一郎	H22.1.18～	H22.1.31	短期派遣：科目指導
石井博之	H22.8.1～	H22.8.10	短期派遣：科目指導
石井博之	H22.9.～	H22.9.	短期派遣：科目指導

○JICA 草の根技術協力事業 (2006年1月～2008年12月)

ベトナムにおける地域リハビリテーション及び障害当事者エンパワメントを通じた身体障害者支援事業

丸山 仁司	H18.3.13～	H18.3.16	短期派遣
潮見 泰蔵	H18.3.13～	H18.3.20	短期派遣
藤田 博暁	H18.3.13～	H18.3.20	短期派遣
斉藤 昭彦	H18.8.21～	H18.8.26	短期派遣
石井 博之	H18.8.21～	H18.9.2	短期派遣
潮見 泰蔵	H18.8.28～	H18.9.3	短期派遣
潮見 泰蔵	H19.1.27～	H19.2.3	短期派遣
石井 博之	H19.1.27～	H19.2.3	短期派遣
金子純一郎	H19.1.27～	H19.2.3	短期派遣
石井 博之	H19.7.23～	H19.8.5	短期派遣
金子純一郎	H19.7.23～	H19.8.5	短期派遣
潮見 泰蔵	H19.7.31～	H19.8.17	短期派遣
丸山 仁司	H20.1.21～	H20.1.26	短期派遣
金子純一郎	H20.2.18～	H20.2.23	短期派遣
丸山仁司	H20.11.25～	H20.11.26	短期派遣
金子純一郎	H23.3.5～		短期派遣

○カンボジア医療技術者育成プロジェクト (2003年9月15日から2008年9月14日)

藤田 博暁	H18.7.16～	H18.8.24	短期派遣
秋山 純和	H19.2.19～	H19.4.14	短期派遣
藤沢しげ子	H19.8.12～	H19.9.9	短期派遣
藤沢しげ子	H20.2.3～	H20.3.30	短期派遣

○障害者支援政策 (2007年8月29日～2008年8月28日)

石井 博之	H19.3.8～	H19.4.4	短期派遣
石井 博之	H19.8.28～	H20.8.27	長期派遣
秋山 純和	H20.2.1～	H20.3.30	長期派遣

3. 国際学会などの委員

丸山仁司：第1回中 国際理学療法科学学会学術大会 大会長 2005.8.20 北京
丸山仁司：第2回中 国際理学療法科学学会学術大会 大会長 2006.3.18 北京
丸山仁司：第3回理学療法科学学会国際学術大会 大会長 2007.3.17 北京
丸山仁司：第5回理学療法科学学会国際学術大会 大会長 2008.3.29 北京
丸山仁司：第10回アジア理学療法学会 学会長 2008.29,30 千葉
丸山仁司：第7回理学療法科学学会国際学術大会 大会長 2009.3.28 大連
丸山仁司：第8回理学療法科学学会国際学術大会 大会長 2010.3.26-28 成都
丸山仁司：第9回理学療法科学学会国際学術大会 大会長 2011.3.25-27 西安

4. 国際学会学術発表

1995

*Shiomi T, Nakayama A, Maruyama H: Development of new exercise stress test using standing-up exercise and its evaluation of availability and clinical application. 12th International Congress of the World Confederation for Physical Therapy. June 25-30, 1995. Washington, DC, USA Proceedings p.88, 1995.

*Maruyama H, Kosaka K, Nagasaki H: Reliability of physical performance measures in young healthy adults. 12th International Congress of the World Confederation for Physical Therapy June 25-30, 1995. Washington, DC, USA Proceedings p.151, 1995.

*Kurosawa K, Maruyama H: Probe-reaction time during treadmill walking at various cadences and its relation with physiological cost index. 12th International Congress of the World Confederation for Physical Therapy June 25-30, 1995. Washington, DC, USA Proceedings p.169, 1995.

*Ito H, Nagasaki H, Furuna T, Sugiura M, Hashizume K, Kinugasa T, Maruyama H: Balance function as a predictor of the walking ability of elderly people. 12th International Congress of the World Confederation for Physical Therapy June 25-30, 1995. Washington, DC, USA Proceedings p.620, 1995.

*Furuna T, Nagasaki H, Ito H, Hashizume K, Kinugasa T, Maruyama H: Motor performances of older Japanese adults in urban and rural communities. 12th International Congress of the World Confederation for Physical Therapy June 25-30, 1995. Washington, DC, USA Proceedings p.632., 1995.

1996

*Furuna T, Nagasaki H, Okuzumi H, Kinugasa T, Maruyama H: Longitudinal changes in motor performance of older adults in a suburb area of Japan. 6th ACPT (Asia confederation for Physical Therapy) General Assembly. Sept. 16-18, 1996. Malaysia

1997

1998

1999

*Kurosawa M, Iijima S, Maruyama H: Improvement of experimentally-induced decreases in cerebral cortical blood flow by stimulation of the nucleus basalis of Meynert and somatic afferents in anesthetized rats. The 13th International Congress of the World Confederation for Physical Therapy 1999.5 Yokohama. Proceedings 1999, p.77.

*Kubokawa T, Maruyama H, Lundberg T, Kurosawa M: Blood pressure change and its mechanism caused by abdominal massage-like stroking of anesthetized rats. The 13th International Congress of the World Confederation for Physical Therapy 5 Yokohama. Proceedings 1999, p.310.

*Akiyama S, Maruyama H: Relation between the change of P wave in electrocardiogram and blood gases. The 13th International Congress of the World Confederation for Physical Therapy 1999.5 Yokohama. Proceedings 1999, p.77.

*Abiko S, Kubo A, Maruyama H: Personal appearances on campus and during clinical educational programs. The 13th International Congress of the World Confederation for Physical Therapy 1999.5 Yokohama. Proceedings 1999, p.332.

*Shiomi T, Maruyama H, Saito A, Umemura M: Effect of different limb movements on physiological responses during ergometric exercise. The 13th International Congress of the World Confederation for Physical Therapy 1999.5 Yokohama. Proceedings 1999, p.368.

*Kubo A, Matsumoto T, Maruyama H: Energy expenditure during ambulation with the aid of axillary crutches and pick-up walker. The 13th International Congress of the World Confederation for Physical Therapy 1999.5 Yokohama. Proceedings 1999, p.375.

*Kubo A, Maruyama H, Takahashi R: Falls among patients in a geriatric hospital. The difference in rates between two methods. The 13th International Congress of the World Confederation for Physical Therapy. 1999.5 Yokohama. Proceedings 1999, p.394.

*Saito A, Arai S, Shiomi T, Tani H, Maruyama H, Eguchi K, Hashimoto M, Komaba T: Measurement of cross-sectional areas of quadriceps femoris using MRI technique. The 13th International Congress of the World Confederation for Physical Therapy 1999.5 Yokohama. Proceedings 1999, p.415

*Kurosawa K, Maruyama H, Fujisawa S: Relationship of attentional demand and movement efficiency in treadmill walking. The 13th International Congress of the World Confederation for Physical Therapy 1999.5 Yokohama. Proceedings 1999, p.417.

*Fujii N, Maruyama H, Umemura M: Effect of walking speed on temporal variability during walking. The 13th International Congress of the World Confederation for Physical Therapy 1999.5 Yokohama. Proceedings 1999, p.430.

*Saito A, Shiomi T, Tani H, Eguchi K, Maruyama H, Arai S, Hashimoto M, Komba T. The effect of neck positions on the cross-sectional area on C5-6 intervertebral foramen. The 13th International Congress of the World Confederation for Physical Therapy 1999.5 Yokohama. Proceedings 1999, p.494

*Tani H, Maruyama H: The effect of manipulation of KR learning a partial-weight-bearing task. The 13th International Congress of the World Confederation for Physical Therapy 1999.5 Yokohama. Proceedings 1999, p.590.

*Maruyama H, Ishii M, Suzuki M: Relationship between step length and walking rate. The 13th International Congress of the World Confederation for Physical Therapy 1999.5 Yokohama. Proceedings 1999, p.606.

2000

2001

2002

2003

*Junji KATSUHIRA, Sumiko YAMAMOTO, Hitoshi MARUYAMA, Kazuhiro OBARA: Low back joint moment during ascending and descending stairs and slopes. RE SNA 26th International annual conference. June 19-23,2003, Atlanta, Georgia.

*Mieko KUROSAWA, Rie KOBAYASHI, Hitoshi MARUYAMA: Reflex regulation of hepatic glucose output via the autonomic nerve by electrical stimulation of the muscle in anesthetized rats. Auton. Neurosci. Basic and Clinical 106:53,2003.

2004

2005

- ・昇寛、丸山仁司、高橋直子：膝関節固有感覚と膝関節トルクの関係について一考察。 第1回理学療法科学学会国際学術大会 演題抄録集,8-9. 2005.8.20. 北京.
- ・水戸川彩、堤堀内カロリーナさやか、丸山仁司：Fittsの法則からみたプローブ反応時間の検討。 第1回理学療法科学学会国際学術大会 演題抄録集,12-13. 2005.8.20.北京.
- ・終幸伸、丸山仁司：小型センサによる局所的動作分析。 第1回理学療法科学学会国際学術大会 演題抄録集,16-17. 2005.8.20 北京.
- ・霍明、丸山仁司：高齢者の転倒に関する足踏み時プローブ反応時間の検討。 第1回理学療法科学学会国際学術大会 演題抄録集,32-33. 2005.8.20. 北京.
- ・Hiroshi NOBORI, Hitoshi MARUYAMA, Naoko TAKAHASHI: The effect of a toe-Heel pedal exercise machine. WCPT-AWP & ACPT 2005-10-30-2005-11-2 Koean.

- Carolina S. TSUTSUMI H, Hitoshi MARUYAMA:Evaluation of physical competence and the related factors in the Paraguayan elderly of Japanese descent. WCPT-AWP & ACPT 2005-10-30-2005-11-2, Korean.. p.156.
- Dorothy MORALA, Taizo SHIOMI, Hitoshi MARUYAMA:Illustrating physical, psychological and sociological characteristics of the community-dwelling elderly people in the Philippines. WCPT-AWP & ACPT 2005-10-30-2005-11-2 Korean. p.166.
- Aya MITOKAWA, Carolina S. TSUTSUMI H, Hitoshi MARUYAMA:Study on probe reaction time from the the perspective of movement speed. WCPT-AWP & ACPT 2005-10-30-2005-11-2 Korean. p.177.
- Heon-Soo Han, Hitoshi MARUYAMA:ROM patterns of hip joint rotation in healthy young adults and healthy old persons. WCPT-AWP & ACPT 2005-10-30-2005-11-2 Korean. p.178.
- J KANEKO, H KATO, T SHIOMI, K TAKEDA, N SHIMODA, H MARUYAMA: Consideration of cerebral activity in repetitive movement of the lower limbs with near infrared spectroscopic topography(NIRS). WCPT-AWP & ACPT 2005-10-30-2005-11-2 Korean. p.25
- Ming HUO, Hitoshi MARUYAMA, Huilin LIU:Optimal Pedaling Rate in Bicycle Ergometer Exercise Determined by Probe Reaction Time and Its Relevance to Rhythm of Movement. WCPT-AWP & ACPT 2005-10-30-2005-11-2 Korean. p.239
- Takei K, Shiomi T: Inhibitory factors of transfer activity in stroke patients. WCPT-AWP & ACPT 2005-10-30-2005-11-2 Korean. p
- Satomi Kamimura, Sumikazu Akiyama, Study of Needs of Nursing Care and Visiting Rehabilitation Service Cooperation of Physical Therapist and Caremanager、WCPT-AWP&ACPT 2005、146、2005-10-30-2005-11-2 Korean. P
- KanameTakeda, Shigeko Fujisawa : I pay attention to training results of a science treatment subject student and emotion and will characteristic stress coping and a character WCPT-AWP & ACPT 2005-10-30-2005-11-2 Korea 2005
- K. Takeda, J. Kaneko, H. Kato, et-al : NEAR-INFRARED SPECTROSCOPY FOR MONITORING CEREBRAL ACTIVATION AFTER HEMIPARETIC STROKE, Neuroscience Washington, DC ,2005.12.12-16.
- 武田要、藤沢しげ子 : 妊産婦の身体特性と歩行分析—3次元動作解析面から— 第2回中国国際物理(理学)療法科学学術大会 北京 2005
- 昇寛、丸山仁司、高橋直子 : 膝関節固有覚と膝関節トルクの関係. 2005 中 脳性麻痺学術大会&リハビリ新技术フォーラム 2005.11.25-29 北京 学術大会誌 p.40.
- 上村さと美 秋山純和 : 訪問リハにおける在宅介護者の介護負担感軽減に対する支援方法について、Factors to Reduce Burden of Family on Caring a Home-Based Patient through visiting Rehabilitation、第1回中国国際物理(理学)療法科学学術大会、抄録4、5、H17.8. 中国北京
- 上村さと美 秋山純和 : 車椅子タイヤ空気圧の違いが生体に及ぼす影響、第2回中国

際物理(理学)療法科学学術大会、H18.3、中国北京

- 霍明 井上佑美 菊地貴行 高橋純也 丸山仁司：プローブ反応時間を用いて歩行習得度の評価. 第2回理学療法科学学会国際学術大会 演題抄録集, 101-102. 2006. 318. 北京.
- Katsuhira Junji, Yamamoto Sumiko, Maruyama Hitosi with other 3 coworkers Effects of dimensions of stairs and handrail on low back joint moment during ascent and descent 14th Annual Meeting of the European Society of Movement Analysis of Adults and Children バルセロナ国際会議場 スペイン バルセロナ 2005.9.21 ~26
- Sano Y, Kurosawa H, Matsumoto et al: Mechanisms on pursed-lip breathing to work without nose-clipping. ATS San Diego San Diego. 2005.5.25.
- Sano Y, Kurosawa H, Matsumoto et al: Respiratory system impedance and nasopharyngeal closure during pursed-lip breathing. CHEST International Conference Montreal Montreal 2005.11.2.
- Sano Y, Kurosawa H, Matsumoto et al: Respiratory system impedance and nasopharyngeal closure during pursed-lip breathing. Meakins-Christy laboratories Japanese Sake seminar Meakins-Christy laboratories Montreal. 2005.10.31.

2007

- Nomura T, Katuhira J, Maruyama H: Study on motion dynamics while going up and down stairs among ACL patients. The 3rd international meeting of physical therapy science. Beijing 2007.3.17.
- Guo D, Maruyama H: Development of simple motion analysis device using engineering technique. The 3rd international meeting of physical therapy science. Beijing 2007.3.17.
- Huo M, Maruyama H, Chang D: Research on the Assessment of Falls in the Elderly -Probe Reaction Time during Marking Time-. 3rd International Meeting of Physical Therapy Science China Rehabilitation Research Center 2007.3.17.
- Chen L, Huo M, Maruyama H: Research on the Assessment of Falls in Young Semi-Paralytics Caused by Cerebral Infarction and Hemorrhage from Probe Reaction Time. 3rd International Meeting of Physical Therapy Science China Rehabilitation Research Center 2007.3.17.
- Chang D, Huo M, Maruyama H: Relationships between Falls and the Ability of Cognition among the Elderly. 3rd International Meeting of Physical Therapy Science. China Rehabilitation Research Center 2007.3.17.
- Liu H, Huo M, Maruyama H: Study on the Occurrence of Falls and Probe Reaction Time among PTs. 3rd International Meeting of Physical Therapy Science. China Rehabilitation Research Center 2007.3.17.
- Toshinori SHIMOI, Kazuma UEDA, Takafumi KATO, Yukari KIMOTO, et al.: A comparison of gait cycle and muscle activity during tandem and normal gait with electromyographic study. The 8th International Congress of Physiological Anthropology, 9-14 October 2006, Kanagawa
- 下井俊典, 鈴木理恵子, 矢野弥生他: 地域在住高齢女性における継ぎ足歩行テストの年齢層別標準値の作成, The 3rd International Meeting of Physical Therapy Science in Beijing, 17 March

2007, Beijing China

- 倉本アフジャ亜美 : Providing Social Services for Mothers of Children with Disabilities in a Semi-Urban Setting in Japan :Challenges for the Future. World Congress of Physical Therapy. June 6 2007. (Vancouver)
- Norika SAITO : Orthopedic Injuries and Treatment for Musicians : Challenges for the Future. World Congress of Physical Therapy. June 6 2007. (Vancouver)
- Toshinori Shimoi: Intra-rater and inter-rater reliability of two methods of tandem gait assessment in community-dwelling elderly, The 2nd Beijing International Forum on Rehabilitation, Beijing China, 17-20 August 2007
- Toshinori Shimoi : A study of the reliability on Tandem Gait Test with the Bland-Altman analysis, 2008 Annual International Health and Physical Fitness Conference, Taiwan, 1-2 March 2008
- Junichiroh KANEKO, Hitosh MARUYAMA, et-al : MEASUREMENT OF CEREBRAL ACTIVATION DURING DIFFERENT MOTOR TASKS OF A LOWER LIMB USING NEAR INFRARED SPECTROSCOPY, Brain' 07 and BrainPET ' 07 the 23rd International Symposium on Cerebral Blood Flow, Metabolism & Function (Brain' 07) and the 8th International Conference on Quantification of Brain Function with PET (BrainPET' 07) グランキューブ大阪、大阪、2007. 5. 20-24
- Junichiroh KANEKO, Hitosh MARUYAMA, et-al : MEASUREMENT OF CEREBRAL ACTIVATION DURING A WEIGHT-BEARING TASK OF A LOWER LIMB USING NEAR INFRARED SPECTROSCOPY, World Physical Therapy 2007、バンクーバー国際会議場 Vancouver, 2007. 6. 2-6
- Hitoshi Sato¹, Hitoshi Maruyama : The Effect of the Diagonal Movement in Proprioceptive Neuromuscular Facilitation. The Fourth International Meeting of Physical Therapy Science. June 1-4, 2007. Vancouver Canada. J Phy Ther Sci 19(suppl. 1)9-10, 2007.
- Yukinobu HIIRAGI¹, Hitoshi MARUYAMA : Evaluation of Shoulder Girdle Movement During Gait Using the Angular Velocity Sensors. The Fourth International Meeting of Physical Therapy Science. June 1-4, 2007. Vancouver, Canada. J Phy Ther Sci 19(suppl. 1)17-18, 2007.
- Huo Ming, Akiyama Sumikazu, Maruyama Hitoshi : Reliability of Probe Reaction Time Measurements during Walking or Marking Time in the Elderly. The Fourth International Meeting of Physical Therapy Science. June 1-4, 2007. Vancouver, Canada. J Phy Ther Sci 19(suppl. 1)19-20, 2007.
- Aya Mitokawa¹, Hitoshi Maruyama², Huo Ming : Examination of Probe Reaction Time During Exercise of the Upper Limb and Lower Limb. The Fourth International Meeting of Physical Therapy Science. June 1-4, 2007. Vancouver, Canada. J Phy Ther Sci 19(suppl. 1)23-24, 2007.
- DONGMEI CHANG¹, MING HUO², HITOSHI MARUYAMA : Effect of Abdominal and Gluteus Medius Muscle Supporter When in Standing Position and Lateral Movement. The Fourth

International Meeting of Physical Therapy Science. June 1-4, 2007. Vancouver, Canada.
J Phy Ther Sci 19(suppl. 1)25-26, 2007.

- Shiomi T¹, Saito A¹, Maruyama H¹, Fujita H: DOES FUNCTIONAL REACH TEST REFLECT MULTIDIRECTIONAL BALANCE CONTROL ABILITY? 15th International Congress of The World Confederation for Physical Therapy, 2-6 June 2007, Vancouver, Canada. Physiotherapy 2007;93(S1):S442
- Kurosawa K, Ohta H, Okuyama F, Maruyama H: DOES THE DIFFERENCE IN CRUTCH LENGTH MAKE ANY EFFECTS ON ENERGY CONSUMPTION AND HANDLING DIFFICULTY? 15th International Congress of The World Confederation for Physical Therapy, 2-6 June 2007, Vancouver, Canada. Physiotherapy 2007;93(S1):S222
- Kaneko J, Takeda K, Shiomi T, Shimoda N, Maruyama H, Kato H: MEASUREMENT OF CEREBRAL ACTIVATION DURING A WEIGHT-BEARING TASK OF A LOWER LIMB USING NEAR INFRARED SPECTROSCOPY. 15th International Congress of The World Confederation for Physical Therapy, 2-6 June 2007, Vancouver, Canada. Physiotherapy 2007;93(S1):S424
- Saito K, Sugawara K, Fukui Y, Yamamoto M, Abiko T, Fukumura K, Tomita Y, Maruyama H: THE IMMEDIATE EXERCISE EFFECT OF VOLUNTARY FACILITATION AT LOWER LIMB BY MIRROR THERAPY. 15th International Congress of The World Confederation for Physical Therapy, 2-6 June 2007, Vancouver, Canada. Physiotherapy 2007;93(S1):S424
- Fujita H, Shiomi T, Kaneko J, Maruyama H: MODIFIED TIMED UP AND GO TEST FOR JAPANESE LIFE STYLE. 15th International Congress of The World Confederation for Physical Therapy, 2-6 June 2007, Vancouver, Canada. Physiotherapy 2007;93(S1):S269
- 丸山仁司、齋藤里果: 学生の自己効力感に関する研究. 第2回教育FD研究会(理学療法科学学会) H19.7.1 東京
- Dongmei CHANG, Ming HUO, Hitoshi MARUYAMA: Relationship between elderly people's cognition of the height of objects and movement and the fall. The 2nd Beijing International Forum on rehabilitation. Aug 18, 19, 2007. Beijing Abstracts of The 2nd Beijing International Forum on rehabilitation. p.284-285
- Dan GUO, Hitoshi MARUYAMA: Creditability and propriety of marking a simple motion-analyzer with measure technique. The 2nd Beijing International Forum on rehabilitation. Aug 18, 19, 2007. Beijing Abstracts of The 2nd Beijing International Forum on rehabilitation. p287288.
- Ming HUO, Chunying HU, Hitoshi MARUYAMA, Sumikazu AKIYAMA: An approach to assessment of the risk of falls by probe reaction time during walking in the elderly. The 2nd Beijing International Forum on rehabilitation. Aug 18, 19, 2007. Beijing Abstracts of The 2nd Beijing International Forum on rehabilitation. p.289.
- Norika SAITO, Hitoshi MARUYAMA: Classification of characteristics by the freshman-from to use the general self-efficacy scale. The 2nd Beijing International Forum on rehabilitation. Aug 18, 19, 2007. Beijing Abstracts of The 2nd Beijing

International Forum on rehabilitation. p.307-308.

- Ayumi KISHIDA, Hitoshi MARUYAMA: Relationship between tapping and probe reaction time. The 2nd Beijing International Forum on rehabilitation. Aug 18, 19, 2007. Beijing Abstracts of The 2nd Beijing International Forum on rehabilitation. p.308-309.
- Junji KATSUHIRA, Eri NIIMI, Hidekazu SASAKI, Hitoshi MARUYAMA: The effects of techniques on the low back joint movement during a person-transferring. The 2nd Beijing International Forum on rehabilitation. Aug 18, 19, 2007. Beijing Abstracts of The 2nd Beijing International Forum on rehabilitation. p.232-324.
- Ming HUO, Hitoshi MARUYAMA, Sumikazu AKIYAMA: Correlation of resistance and probe reaction time during PNF treatment while sitting. J Physical Therapy Science, 2008, 23 (S2), p19-20.
- 上村さと美 秋山純和 杉本諭 瀬戸一秀: 反復起立運動実施時の%到達心拍数と心肺機能評価一介護老人保健施設における検討一、第42回 本理学療法学会、朱鷺メッセ、2007.5.25
- SATOMI KAMIMURA, SUMIKAZU AKIYAMA: the difference in services offered by physical and occupational therapists in visiting rehabilitation、第2回北京国際フォーラム、中国理ハビリテーション研究センター、2007.8.18-20
- Katsuhira Junji Eri Nimi Hideaki Sasaki Maruyama Hitosi: The effects of techniques on the low back joint moment during a person-transferring The 2nd Beijing international Forum on Rehabilitation Beijing Rehabilitation Center Beijing、2007.8.17 -20
- J. Katsuhira, H. Sasaki, E. Nimi, H. Maruyama Hitosi Effects of distance between center of gravities of caregiver and patient on the low back joint moment during transferring 16th Annual Meeting of the European Society of Movement Analysis of Adults and Children アテネ市国際会議場 ギリシャ/アテネ市、2007.9.26-29
- T. Nomura, K. Yamaguchi, T. Suzuki, D. Hatano, T. Hanayama, J. Katsuhira, N. Fujii, H. Maruyama: Comparison between normal subjects and patients with anterior cruciate ligament reconstruction during stair descent 16th Annual Meeting of the European Society of Movement Analysis of Adults and Children アテネ市国際会議場ギリシャ/アテネ市、2007.9.26-29
- SATOMI KAMIMURA, SUMIKAZU AKIYAMA: The difference in services offered by physical and occupational therapists in visiting rehabilitation、第2回北京国際フォーラム、2007.8.18-20
- 秋山純和, 霍明, 龐紅: 中国における理療関連職種に対するアンケート調査、第5回中国理学療法学会、中国リハビリテーション研究センター、2008.3.29
- 霍明, 丸山仁司, 秋山純和: 座位PNF時の抵抗力とプローブ反応時間との相関、第5回中国理学療法学会、中国リハビリテーション研究センター、2008.3.29
- Kaname Takeda, Junji Katsuhira, Shigeko Fujisawa, The effect of the change in po

sture and movement of low back joint during the gestation period., 4th International Meeting of Physical Therapy Science, Century Plaza Hotel, Vancouver city, 2007. 6. 2

- ChunYing Hu, Ming Huo, Hitoshi MARUYAMA: Would probe reaction time of lower extremity be predicted from upper extremity. 5th International Meeting of physical therapy science. Beijing Mar 29, 2008. 理学療法科学 23(suppl:2):13-14, 2008.
- 下井俊典: 2008 Annual International Health and Physical Fitness Conference, Taiwan, 1-2 March 2008 参加

2009

- 秋山純和: 常生活動作と神経筋促通 (PNF) 法の共通運動パターン解析の検討, 中 理学療法科学学会, 大連大学附属中山医院, 中国大連市, 2009. 3. 28
- Satomi KAMIMURA, Sumikazu AKIYAMA: The Relation between Repeated Standing Exercise Load and Anaerobic Threshold, 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy, MAKUHARI MESSE, Ciba-ken, 2008. 8. 29
- Sumikazu AKIYAMA: Measurement of Lung Vital Capacity Through the Use of Anesthetic Mask, 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy, MAKUHARI MESSE, Ciba-ken, 2008. 8. 29
- Masahiro OSANAI, Yasuhide TATIKAWA, Katuhiko HUKUYAMA, Sumikazu AKIYAMA: Influence of the Sitting Posture to Abdominal Lateral Muscles in Its Muscle Thickness and Activities, 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy, MAKUHARI MESSE, Ciba-ken, 2008. 8. 29
- Yusuke SAKAGUCHI, Sumikazu AKIYAMA: Effects of the Carrying Ways of Bag on Respiratory Function, 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy, MAKUHARI MESSE, Ciba-ken, 2008. 8. 29
- 廣瀬昇、高橋高治、丸山仁司: 若. 層健常者における 常生活の時間因子が身体活動量に与える影響. 第43回 本理学療法学会大会 H20. 5. 15-17 福岡 理学療法学会 2008, 35(suppl):222.
- Katsuhiro FUKUYAMA, Masahiro OSANAI, Kazunari HOSOGI, Takeshi YAHAGI, Rhuichi NIHEI, Tetsuhiko KIMURA, Hitoshi MARUYAMA: The function of floating toes. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug. 29-30, 2008. Program & Abstracts p.152. 2008.
- Takahiro NOMURA, Jyunichi KATSUHIRA, Hitoshi MARUYAMA: Biomechanical analysis of patients with anterior cruciate ligament reconstruction during stair descent. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug. 29-30, 2008. Program & Abstracts P.189, 2008.
- Ming HUO, Hitoshi MARUYAMA, Sumikazu AKIYAMA: An approach of risk of falls in the elderly and the patient with stroke. 10th International Congress of the Asia

- n Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.194, 2008.
- Chunying HU, Ming HUO, Hitoshi MARUYAMA: Relationship between the probe reaction times of upper extremities and lower extremities. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.199, 2008.
 - Hitoshi SATO, Hitoshi MARUYAMA, Kazuo KUROSAWA: The effects of the indirect treatment in Proprioceptive Neuromuscular Facilitation. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.212, 2008.
 - Aya MITOKAWA, Hitoshi MARUYAMA, Ming HUO: Probe-reaction time during movement of the upper and lower extremities in elderly. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.229, 2008.
 - Kiyohide SUZUKI, Junji KATSUHIRA, Hitoshi MARUYAMA: Biomechanical analysis of pelvic movement on a balance-ball. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.235, 2008.
 - Junji MATUBA, Masaki AINO, Ryuji NAGAMINE, Hitoshi MARUYAMA: The development of effective leg resistance. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.239, 2008.
 - Ayumi KISHIDA, Ming HUO, Hitoshi MARUYAMA: Interactions between probe reaction time and circadian variation. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.250, 2008.
 - Huilin LIU, Lijia CHEN, Ke YIN, Ming HUO, Hitoshi MARUYAMA: Reliability of trapezius muscle stiffness measurements using a muscle stiffness meter. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.267, 2008.
 - Takuu YAGUCHI, Hitoshi MARUYAMA, Takafumi UCHIDA, Aya MOTOHARU, Kayoko SASAKI, Kayo FUYUKI, Michiko INOUE: Investigation on the evaluation of standing balance strategy. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug. 29-30, 2008. Program & Abstracts P.275, 2008.
 - Junichiroh KANEKO, Kotaro TAKEDA, Nobuaki SHIMODA, Misao OGANO, Hitoshi MARUYAMA, Hiroyuki KATO: Evaluation of cerebral activity in weight bearing of the lower limb with near-infrared spectroscopy. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.303, 2008.

- Hidenori EGUCHI, Hitoshi MARUYAMA, Harumi TAKADA, Takashi SAKAMOTO, Eiji ISHIGAKI, Midori KAI, Taro KANDA, Hiroshi SAITO, Atsuyoshi WATANABE, Norikazu YOSHIDA, Akira TOYOTA, Shin NAKAMURA: Difficult comparison at motion phase of getting up from side-lying in hemiplegic patients. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.306, 2008.
- Takashi MURAKAMI, Hitoshi MARUYAMA: Prediction of the period between the onset of CVA and when a patient starts walking again independently at home. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.311, 2008.
- Noboru HIROSE, Hitoshi MARUYAMA: The effect of preference for exercise to the amount of physical activities in daily lives in young generation. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.350, 2008.
- Kazunobu IIDA, Kouji KATAKABE, Nobuya FUKUMOTO, Takashi MITSUHASHI, Yoehei TAKAHASHI, Erika SIMIZU, Yuuko TAKAHASHI, Hitoshi MARUYAMA: The effects of bathing with the water temperature of 41 degree on body function. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.359, 2008.
- Koji IWAO, Maki OKADA, Seiko KAWAMOTO, Tomoyuki KUBOTA, Sho TASHIMA, Akihiko HISHIYAMA, Takuya FURUKI, Satoe MOTOHASHI, Ming HUO, Hitoshi MARUYAMA: Effects of the planter reflex stimulation on the muscle stiffness of Trapezius muscle. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.359, 2008.
- Mutsumi ONUKI, Hitoshi MARUYAMA: A survey on actual conditions of e-Learning, use of ICT in Japanese physical therapy schools. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.363, 2008.
- Satoru SUZUKI, Kazunari HOSOGI, Katsuhiko FUKUYAMA, Tan KAKU, Michiko HASHITANI, Toshio YASUMURA, Ryuichi NIHEI, Tetsuhiko KIMURA, Hitoshi MARUYAMA: Consideration of learning effect by PBL tutorial. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.364, 2008.
- Dan GUO, Takeshi SHIMBA, Hitoshi MARUYAMA, : Validity and reliability of a spatial position measuring system utilizing surveying techniques. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.367, 2008.
- Masae MORIMOTO, Jyunichiro KANEKO, Norika SAITO, Tugumi-Ahuja KURAMOTO, Hitoshi MARUYAMA: Effects of feedback after objective structured clinical examination

- for self-efficacy. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.374, 2008.
- Toshiki HOSOI, Hitoshi MARUYAMA: The effect of rehabilitation provided by the full-time physical therapist on quality of life nursing home residents. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug. 29-30, 2008. Program & Abstracts P.388, 2008.
 - Jyunji KATSUHIRA, Hideaki SASAKI, Hitoshi MARUYAMA: The effects of strategies using body mechanics on the low back joint moment during transferring tasks. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.391, 2008.
 - Shun YAMAZAKI, Jyunji KATSUHIRA, Hitoshi MARUYAMA: The effects of the seating position and armrest of wheelchair on low back load during transfers. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.392, 2008.
 - Hideaki SASAKI, Jyunji KATSUHIRA, Hitoshi WATANABE, Fumiyo SAIJYO, Akihiko SATO U, Hitoshi MARUYAMA: Low back load of caregiver during transfer movement using assistive devices. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.393, 2008.
 - Tatsuya IGAWA, Jyunji KATSUHIRA, Hitoshi MARUYAMA: Effects of different body height on low back load during transferring tasks. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.394, 2008.
 - Kaoru NOGUCHI, Hitoshi MARUYAMA, Hiroyuki ISHII, Masafumi ITOKAZU: Effects on an originally designed chair on a child with cerebral palsy. p.397, 2008.
 - Dongmei CHANG, Ming HUO, Hitoshi MARUYAMA: Elderly people's awareness of physical strength and falling. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts p.403, 2008.
 - Yuichi MATSUDA, Rei KASAI, Hitoshi MARUYAMA: The examination of reaction time of peroneus longus muscle for the prevention of vasus sprain. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts p.411, 2008.
 - Takashi HAYASHI, Hitoshi MARUYAMA: Stress of the staff working at geriatric health services facilities. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts P.428, 2008.
 - 勝平純司、山崎俊、丸山仁司：動的な腰部椎間板圧縮力を使用した移乗介助動作時の腰部負担評価方法の開発。第7回理学療法科学学会国際学術大会 2009-3-28 大連。理学療法科学 24(suppl.3):46-47, 2009.
 - 劉惠林、王松林、伊科、王晶余、龐紅、李潔輝、霍明、丸山仁司：脳卒中における立位PNF時抵抗力和プローブ反応時間との関係について。第7回理学療法科学学会国際学術

- 大会 2009-3-28 大連. 理学療法科学 24(suppl.3):48-49, 2009.
- Qiuchen Huang, Hitoshi MARUYAMA, Ming HUO: Changes of probe reaction time in the post-standing up from chairs. 7th International meeting of physical therapy science. 2009-3-28 Dalian理学療法科学 24(suppl.3):59-60, 2009.
 - 岸田あゆみ、霍明、丸山仁司：歩行路の違いによるプローブ反応時間への影響. 第7回理学療法科学学会国際学術大会 2009-3-28 大連. 理学療法科学 24(suppl.3):83-84, 2009.
 - 伊科、伊立全、李松涛、郝小波、張旭、呂元宝、霍明、丸山仁司：健常高齢者における立位PNF時抵抗力とプローブ反応時間との関係について. 第7回理学療法科学学会国際学術大会 2009-3-28 大連. 理学療法科学 24(suppl.3):85-86, 2009.
 - 霍明、丸山仁司：高齢者における転倒予測に関する研究. 第7回理学療法科学学会国際学術大会 2009-3-28 大連. 理学療法科学 24(suppl.3):87-88, 2009.
 - Minghui ZHANG, Ming HUO: The Investigation into the Actual Conditions of the Etiology of Cerebral Palsy. 10th International Congress of the ACPT, 2008, p328.
 - Koji IWAO, Maki OKADA, Seiko KAWAMOTO, Tomoyuki KUBOTA, Sho TASHIMA, Akihiko HISHIYAMA, Takuya FURUKI, Satoe MOTOHASHI, Ming HUO, Hitoshi MARUYAMA: Effects of the Plantar Reflex Stimulation on the Muscle Stiffness of Trapezius Muscle. 10th International Congress of the ACPT, 2008, p359.
 - Qiuchen HUANG, Hitoshi MARUYAMA, Ming HUO : The Change of Probe Reaction Time about Fatigue on the Stairs. J Physical Therapy Science, 2008, 23 (S4), p14
 - Ming HUO, Hitoshi MARUYAMA : An Approach to the Assessment of Risk of Falls in the Elderly -Probe Reaction Time at the Standing PNF Position. J Physical Therapy Science, 2009, 24 (S3), p87-88
 - K Yin, L Yin, S Li, X Hao, X Zhang, Y Lu, M Huo, H Maruyama: The Relationship Between the Standing PNF Resistance and Probe Reaction Time in the Elderly. J Physical Therapy Science, 2009, 24 (S3), p85-86
 - H Liu, S Wang, K Yin, J Wang, H Pang, J Li, M Huo, H Maruyama: Relationship Between PNF Resistance of Stroke Patients While Standing and Probe Reaction Time. J Physical Therapy Science, 2009, 24 (S3), p83-84.
 - Q Huang, H Maruyama, M Huo: Changes of Probe Reaction Time in the Post-Standing Up from Chairs. J Physical Therapy Science, 2009, 24 (S3), p59-60.
 - Hara T., Yoshimatsu T., Kubo A. : Effect of movement strategy on the lower limb loading force measurement in adults. 第10回アジア理学療法学会 ACPT 学会(Japan), 2008/8/30
 - Yoshimatsu T., Kubo A., Nishida Y. : The difference of calf circumferences between the mid-calf and tibial tuberosity in long-term care elderly patients. 第10回アジア理学療法学会 ACPT 学会(Japan), 2008/8/30
 - Toshinori SHIMO I : The gender- and age-related distinction of three different tandem gait tests in community dwelling elderly. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy, Chiba, Aug 29-Sep 1st

- Toshinori SHIMOI : The reliability and practice effect of three different tandem gait tests in community-dwelling older adults. 7th International Meeting of Physical Therapy Science in Dalian, Dalian China, 28th March

2010

- 牛志馨、霍明、丸山仁司：膝関節運動における足関節角度の影響について。第8回国際学術大会理学療法科学学会 H22. 3. 27 理学療法科学 25(suppl. 2)、28-29, 2010.
- 小林薫、丸山仁司：転倒回数と10秒間座位足開閉テストの関係。第8回国際学術大会理学療法科学学会 H22. 3. 27 理学療法科学 25(suppl. 2)、38-39, 2010.
- 岸田あゆみ、霍明、丸山仁司：歩行と1Hz タッピングを主課題としたプローブ反応時間の関係。第8回国際学術大会理学療法科学学会 H22. 3. 27 理学療法科学 25(suppl. 2)、52-53, 2010.
- 田尻后子、霍明、丸山仁司：腹横筋と肛門挙筋との運動連鎖について。第8回国際学術大会理学療法科学学会 H22. 3. 27 理学療法科学 25(suppl. 2)、56-57, 2010.
- 霍明、尹科、丸山仁司：脳卒中における立位リズム・スタビリゼーション時抵抗力とプローブ時間との関係について。第8回国際学術大会理学療法科学学会 H22. 3. 27 理学療法科学 25(suppl. 2)、58-59, 2010.
- Takeda K, Katsuhira J, Takano A : An analysis of gait in the third trimester of pregnancy - gait analysis of the single support phase in the frontal plane, The 009 FIGO World Congress, South Africa, H21.10.4-9.

5. その他

(講演・シンポジウム、講習会)

2004

- 丸山仁司：日本における脳卒中の現状 長春脳卒中理学療法研究会 吉林大学中友誼医院 2004.8.8~13 中国長春
- 霍明：PNF 研修会 長春リハビリ医学会研修会 2004.8.5 ~8.12 中国長春 2005.
- 秋山純和：呼吸器系理学療法の紹介、吉林医科大学（長春）、2005. 8.
- 秋山純和：神経筋促通治療法（PNF治療法）の紹介と小児への応用、2005中 脳性麻痺学術大会&リハビリ新技術フォーラム（北京）2005. 11.
- 秋山純和：神経筋促通治療法（PNF治療法）の紹介、PTとOT講習会、中国運動療法学会（北京）2005. 12.

2006

- 霍明、秋山純和：PNF講習会 第1回国際講習会 北京 H18 . 11 . 23-25

2007

- ・Hitoshi MARUYAMA: The trend of physical therapy. The 2nd Beijing International Forum on rehabilitation. Oct 18,19,2007. Beijing Abstracts of The 2nd Beijing International Forum on rehabilitation. p.52.
- ・Hitoshi MARUYAMA: 本の老人リハビリテーション関連制度とその実践 韓国第12回老人病院協議会秋季学術大会 韓国 ソウル 2007.11.10
- ・霍明: PNF講習会 第3回国際講習会 北京 H19.11.29 ~12.2

2008

- ・霍明: PNF講習会 第4回国際講習会 海南島 H20.3.24-27
- ・Hitoshi MARUYAMA: Trends of physical therapy in Asia. 10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy. Chiba Aug.29-30, 2008. Program & Abstracts p.71. 2008.
- ・霍明: PNF講習会 第5回国際講習会 長春 H20.12.25~28 中国吉林省リハビリテーション医学センター

2009

- ・秋山純和、黒澤和生、霍明: マニュアルセラピー 第6回国際講習会中国大連 H21.3.24~27
- ・秋山純和・霍明: 神経筋促通法、理学療法科学学会、海南省人民医院(中国)、海南省/海口市、2009.9.4,5
- ・丸山仁司 霍明: 第7回全国実用 PNF ならびに NJF 講習会 2009.8.28-9.1 中国長春新碧緑湖ホテル、中国吉林省医学会 講習内容: PNF、モビライゼーション、NJF 講習
- ・霍明: 第9回全国神経筋関節促通法(NJF)理論講習会 2009.12.25-28 中国長春新碧緑湖ホテル、中国吉林省医学会 講演内容: クリニカルリーズニング、基礎運動学、病態運動学、NJF 理論とデモンストレーション
- ・丸山仁司: 本の障害者と高齢者のためのリハビリテーションサービス. 2009 韓・障害福祉国際シンポジウム 韓国 国会憲政記念館 2009.7.2,3

2010

- ・丸山仁司: 本の理学療法教育、臨床、研究の現状 第8回国際学術大会理学療法科学学会 中国成都 H22.3.27 理学療法科学 25(suppl.2)、6-9,2010.
- ・霍明: 第10回全国 PNF とモビライゼーション講習会 2010.3.25-26 中国四川省成都市華西病院 内容: PNF 講習
- ・下井俊典: 本における地域リハビリテーション。第8回国際学術大会理学療法科学学会 H22.3.27 中国成都

(3) 保健医療学部作業療法学科

1. 業務出張

- ・田中 繁、ドイツ、義肢・装具に関する ISO 会議、1996.9.7～9.15
- ・谷口 敬道、トロント・キングストーン、クイーンズ大学生理学教室、1996.8.22～8.28
- ・田川 義勝、アメリカ、米国リハビリ施設研修等、1996.9.25～10.9
- ・田中 繁、フランス、歩行器に関する国際規格の会議、1996.12.6～12.10
- ・田中 繁、イギリス、歩行器の国際規格に関する会議、1997.5.28～6.1
- ・田中 繁、スペイン、歩行器の国際規格に関する会議、1997.11.25～11.26
- ・杉原 素子、中国、中国障害者連合会、1997.11.2～11.4
- ・杉原 素子、中国、コンテンツ打ち合わせ、調印式出席、1998.1.20～1.22
- ・田中 繁、イギリス、歩行器の国際規格に関する会議、1998.5.7～5.8
- ・杉原 素子、オタワ、世界作業療法士連盟代表者会議出席、1998.5.23～5.28
- ・田中 繁、イギリス、世界義肢装具学会、ISPO 大会、1998.6.25～6.29
- ・谷口 敬道、アメリカ、ランチョ病院見学、1998.8.10～8.25
- ・濱口 豊太、アメリカ、ランチョ病院見学、1998.8.10～8.25
- ・田中 繁、中国、リハ機器の国際規格に関する会議、1998.11.10～11.11
- ・田中 繁、ベネチア、リハ機器の国際規格に関する会議、1999.4.25～4.29
- ・田川 義勝、アメリカ、米国リハ施設研修、研究打ち合わせ、1999.6.23～7.6
- ・杉原 素子、中国、TAO 業務、1999.10.17～10.20
- ・谷口 敬道、中国、TAO 業務、1999.10.17～10.20
- ・濱口 豊太、中国、TAO 業務、1999.10.17～10.20
- ・田中 繁、歩行補助具の国際規格委員会、1999.10.28～10.29
- ・田中 繁、ヨーロッパ、歩行者の安全規格に関するヨーロッパ試験機関の実態調査、1999.12.5～12.11
- ・杉原 素子、イギリス、英国医療福祉事情研修、2000.3.21～3.28
- ・杉原 素子、中国、TAO プロジェクト終了のための研究報告会実施のため、2001.3.1～3.21
- ・濱口 豊太、スウェーデン、13th World Congress of Occupational Therapists、2002.6.22～6.30
- ・下田 信明、スウェーデン、13th World Congress of Occupational Therapists、2002.6.22～6.30
- ・高橋 邦泰、中国、The 6th International Conference on Biomedical Engineering and Rehabilitation Engineering、2002.5.28～5.31
- ・古川 昭人、中国、中国リハセンターPT・OT 養成大学設立準備支援、2002.7.13～9.21
- ・山崎 せつ子、ストックホルム、13th World Congress of Occupational Therapists、2002.6.20～6.30
- ・河野 眞、カンボジア、カンボジア人の精神保健従事者に対する「心理社会リハビリテーション専門教育養成コース」での講師、2003.8.15～8.24
- ・奈良 進弘、シンガポール、第3回アジア太平洋作業療法士学会、2003.9.14～9.19
- ・河野 眞、林 由美子、ベトナム、ホーチミン市チョーライ病院におけるリハビリテーション技術協力、2004.1.27～1.31
- ・河野 眞、カンボジア、カンボジアにおける精神障害者の実態調査、2004.3.19～4.3

- ・菅原 洋子、中国、中国リハ専門職養成プロジェクト短期派遣、2004.4.10～8.27
- ・奈良 進弘、南アフリカ共和国、世界作業療法士連盟代表者会議 南アフリカ作業療法学会
- ・林 由美子、ベトナム、ベトナム国での補装具分野における適正技術の見極めに関する研究調査、2004.6.5～6.9
- ・森田 千晶、香港、第 11 回国際技師装具協会世界大会、2004.8.1～8.6
- ・河野 眞、カンボジア、カンボジアにおける精神障害者の受療行動調査、2004.6.6～6.10
- ・山崎 せつ子、中国、中国リハビリテーション専門職養成プロジェクト、2004.8.6～8.19
- ・河野 眞、カンボジア、カンボジアにおける精神障害者の受療行動調査、2004.8.2～8.13
- ・荻原 喜茂、中国、中国リハビリテーション専門職養成プロジェクト短期派遣、2004.8.30～9.10
- ・林 由美子、ベトナム、H 1 6 年度学内研究のための調査研究、2005.3.2～3.7
- ・前田 真治、ブラジル、3rd World Congress fo the International Society of Physical and Rehabilitation Medicine-ISPRM、2005.4.9～4.16
- ・河野 眞、カンボジア、カンボジアにおける精神障害者通所リハビリテーション実態調査など、2005.5.28～6.1
- ・澁井 実、中国、「海外保健福祉事情」学生引率、2005.8.1～8.15
- ・菅原 洋子、中国、中国における国際作業療法学会、2005.9.16～9.21
- ・前田 真治、韓国、第 4 回世界理学療法士学会アジア大会、2005.10.29～11.1
- ・前田 真治、ベルギー、15th European Stroke Conference、2006.5.16～5.20
- ・河野 眞、オーストラリア、The 14th WFOT Congress、2006.7.24～7.28
- ・下田 信明、アメリカ、NEUROSCIENCE2006、2006.10.13～10.16
- ・前田 真治、エジプト、第 3 回世界リハビリテーション医学会、2007.4.10～4.15
- ・前田 真治、韓国、第 4 回世界リハビリテーション医学会、2007.6.9～6.14
- ・河野 眞、下田 信明、香港、4 t h Asia Pacific Occupational Therapy Congress(APOTC) 2007、2007.6.24～6.27
- ・前田 真治、イスタンブール、第 55 回世界リハビリテーション医学会、2009.6.13～6.19
- ・林 由美子、ベトナム、ベトナム保険省からの勲章受章、2009.8.3～8.6

2. 公的協力 (JICA)

- ・矢谷 令子、中国、中国リハビリテーション研究センタープロジェクトアフターケアのための JICA、1997.11.12～12.11
- ・杉原 素子、中国、中国リハビリテーション専門職養成プロジェクト、2003.5.5～5.16
- ・杉原 素子、中国、中国リハビリテーション専門職養成プロジェクト、2003.9.21～9.29
- ・奈良 進弘、中国、中華人民共和国リハビリテーション専門職養成プロジェクト短期派遣専門家に係る派遣協力、2003.10.28～2004.1.16
- ・杉原 素子、中国、プロジェクト中間評価、2004.10.25～10.30
- ・菅原 洋子、中国、JICA リハビリテーション専門職養成プロジェクト、2005.10.17～11.11
- ・林 由美子、ベトナム、草の根技術協力事業・プロジェクトマネージャーとして業務遂行のため、2006.1.6～2008.12.31
- ・荻原 喜茂、中国、リハビリテーション専門職養成プロジェクト、2006.5.12～6.2
- ・杉原 素子、中国、中国リハビリテーション専門職養成プロジェクト最終評価調査団員として、2006.5.21～5.27

- ・杉原 素子、中国、中華人民共和国・リハビリテーション専門職養成プロジェクト短期派遣専門家(作業療法教授法)、2006.7.31～8.10
- ・小賀野 操、ベトナム、草の根プロジェクト・現地指導のため、2006.8.12～8.19.
- ・荻原 喜茂、中国、中国リハビリテーションセンター専門職養成プロジェクト技術協力、2007.5.20～6.1
- ・小賀野 操、ベトナム、草の根事業、2007.8.3～8.14
- ・河野 眞、ベトナム、草の根プロジェクト中間評価、2007.9.16～9.20
- ・林 由美子、草の根事業 国立チョーライ HP での地域リハビリテーションプロジェクト、2007.10.20～
- ・小賀野 操、ベトナム、草の根事業 国立チョーライ病院での地域リハビリテーションプロジェクト、2007.1.20～1.31
- ・河野 眞、ウズベキスタン、草の根事業、タシケント市における地域に根ざした障害者支援事業、2008.7.17～7.31
- ・下田 信明、草の根事業 国立チョーライ病院での地域リハビリテーションプロジェクト、2008.7.20～7.27
- ・河野 眞、ウズベキスタン、草の根事業、2008.9.2～9.17
- ・河野 眞、草の根事業 タシケント市における地域に根ざした障害者支援事業、2008.10.8～10.22
- ・河野 眞、ベトナム、草の根プロジェクト最終評価実施及びクロージング、2008.11.10～
- ・林 由美子、ベトナム、草の根プロジェクト、2008.10.31～12.1
- ・河野 眞、ウズベキスタン、草の根事業 タシケント市における地域に根ざした障害者支援事業、2009.1.20～1.28
- ・河野 眞、ウズベキスタン、草の根事業 タシケント市における地域に根ざした障害者支援事業、2009.2.27～3.14
- ・河野 眞、ウズベキスタン、草の根事業 タシケント市における地域に根ざした障害者支援事業、2009.5.1～5.6
- ・河野 眞、ウズベキスタン、草の根事業 タシケント市における地域に根ざした障害者支援事業、2009.7.19～8.1
- ・河野 眞、ウズベキスタン、草の根事業 タシケント市における地域に根ざした障害者支援事業、2009.9.1～9.12
- ・河野 眞、ウズベキスタン、草の根事業 タシケント市における地域に根ざした障害者支援事業、2009.11.23～12.2
- ・河野 眞、ウズベキスタン、草の根事業 タシケント市における地域に根ざした障害者支援事業、2010.1.22～1.30
- ・荻原 喜茂、中国、中華人民共和国中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクト短期派遣専門家業務、2010.3.1～3.14

3. 国際学会などの委員

- ・森田 千晶、国際義肢装具学会、平成 16(2004)年度～平成 17(2005)年度
- ・前田 真治、国際リハビリテーション医学会、平成 17(2005)年度～
- ・前田 真治、国際水治療法学会、平成 17(2005)年度～
- ・杉原 素子、世界作業療法士連盟、平成 18(2006)年度

- ・杉原 素子、米国作業療法士協会、平成 18(2006)年度
- ・河野 眞、World Federation of Occupational Therapists、平成 19(2007)年度～

4. 国際学会学術発表

- ・前田 真治、Changes in HSP70(Heat Shock Protein 70)due to CO₂ warm water bathing,35thCongress of the international society of medical hydrology &Climatology(35thISMH),2006.6.5-10,Istanbul Turkey
- ・河野 眞、下田 信明、高橋 幸加、Development of community mental health service system in Siem reap Cambodia,14thinternational congress of the world Federation of Occupational Therapists,2006.7.23-28,Sydney Australia
- ・前田 真治、Effects of Bath Product named as Sake Concentrate Preparation(SCP), 35thCongress of the international society of medical hydrology &Climatology (35thISMH),2006.6.5-10,Istanbul Turkey
- ・下田 信明、An involvement of secondary motor areas during recovery from mild hemiparetic stroke: An NIRS study, society for Neuroscience,2006.10.14-18,Atlanta U.S.A
- ・下田 信明、Comparison of local cerebral hemodynamic response in frontal and parietal cortices during a mental rotation task between normal left-and right-handed subjects: a NIRS study, society for Neuroscience,2006.10.14-18,Atlanta U.S.A
- ・前田 真治、The questionnaire survey of the in therapist sducation,5th International Society of Physical and Rehabilitation Medicine (ISPRM),2007.6.10-14,COEX,Seaul, Korea
- ・前田 真治、Clinico-psychological Worker for Rehabilitation Service in Japan: A National-wide Survey, 5th International Society of Physical and Rehabilitation Medicine(ISPRM),2007.6.10-14,COEX,Seaul,Korea
- ・前田 真治、Relationship between fractures and bone mineral density, physical functions in people who have severe disability in a residential facility,15th International Congress of The World Confederation for Physical Therapy(WCPT), 2007.6.2-6, Vancouver, Canada
- ・下田 信明、Measurement of cerebral activation during a weight-bearing task of a lower limb using near infrared spectroscopy, 15th International Congress of The World Confederation for Physical Therapy(WCPT),2007.6.2-6,Vancouver,Canada
- ・下田 信明、Comparison of local cerebral hemodynamic response in frontal and parietal cortices during a mental rotation task between normal left-and right-handed subjects: a NIRS study,4th Asia Pacific Occupational Therapy Congress,2007.6.23-26,Hong Kong, China
- ・下田 信明、Comparative study of motor related activation areas after hemiparetic stroke between well-and poorly recovered patients using near-infrared spectroscopy, Society for Neuroscience,2007.11.3-7,San Diego, U.S.A
- ・下田 信明、Local cerebral hemodynamic response in frontal and parietal cortices during mental location of hand: a near-infrared spectroscopy study, Society for Neuroscience,2007.11.3-7,San Diego, U.S.A
- ・前田 真治、COMPARISON OF THERMO-KEEPING EFFECTS AMONG THREE KINDS OF HOT WATER CONTANING NA₂CO₃,NAHCO₃ AVD CO₂,36th Congress of the international society of medical hydrology & Climatology(36th ISMH),2008.6.25-28,Prto,Portugal

- 前田 真治、三浦 慈子、Energy Consumption by Bathing in Highly-Carbonated Hot Water, 36th Congress of the international society of medical hydrology & Climatology(36th ISMH),2008.6.25-28,Prto,Portugal
- 下田 信明、Longitudinal NIRS study on motor-functional recovery after hemiparetic stroke, Society for Neuroscience,2008.11.15,Washinton,DC
- 前田 真治、三浦 慈子、Questionnaire survey report concerning rehabilitation for rheumatoid arthritis to 1998 patients in the Japanese RA patients association,5th World Congress of the ISPRM International Society of Physical and Rehabilitation Medicine(ISPRM),2009.6.14-18,Istanbul,Turaky
- 下田 信明、Motor imagery in mental rotation of hands in left-and right-handers: a behavioral near-infrared spectroscopy study, The 39th Annual Meeting of Society for Neuroscience,2009.10.19,Chicago,USA

(4) 保健医療学部言語聴覚学科

1. 業務出張

- ・城間将江、フランクフルト・ドイツ、国際共同研究打合せ会議、2010.2.10～2.15
- ・城間将江、アテネ・ギリシャ、International Association of Logopedics and Phoniatrics 言語聴覚士教育委員会会議 2010.8.19～8.28
- ・城間将江、ソウル、World Voice Congress、2010.9.5～9.9、シンポジウム司会・発表
- ・谷合信一、ベトナム社会主義共和国、海外保健福祉事情引率、2010.8.3～8.18

2. 公的協力 (JICA)

3. 国際学会などの委員

Masae Shiroma; International Association of Logopedics and Phoniatrics, Education Committee (Since August 2010 ·)

4. 国際学会学術発表

- ・Masae Shiroma, Hideaki Kato, Kyoko Fujimoto, Yoshinobu Kikuchi, Kimitaka Kaga. Acquisition process of Japanese phonemes on a child who received cochlear implant at the age of three and half in comparison to normal hearing children
ソウル、World Voice Congress、2010.9.5～9.9
- ・Shibamoto I, Cortical representation during oral and pharyngeal transport in solid and liquid boluses, Dysphasia Research society Meeting 2009, 2009.3.5-7, Westin Hotel, New Orleans, USA,
- ・Obuchi C, Harashima T & Shiroma M. Age-related changes in auditory and cognitive abilities in elderly persons with hearing aids fitted at the initial stages of hearing loss. Adult Hearing Screening Conference, The first meeting, 2010.6.11, Como lake, Italy
- ・Uchida S., Nakahara, K., Midorikawa, A., Kuraoka K., Saito A., Takemoto A., Kawamura M., Nakamura K., Interhemispheric functional connectivity in a subject with complete agenesis of the corpus callosum, 16th Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping, 2010.6.4～6.14, Barcelona, Spain
- ・Kuraoka K., Uchida S., Nakamura K., Neural substrate to enhance social relationships, 16th Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping, 2010.6.4～6.14, Barcelona, Spain

(5) 保健医療学部視機能療法学科

1. 業務出張

三柴恵美子 オーストラリア 海外研修学生引率 平成 16 (2004) 年 7.29-8.12

2. 公的協力 (JICA)

なし

3. 国際学会などの委員

なし

4. 国際学会学術発表

Fujita J, Niida T, Mukuno K Assessment of sensory ocular dominance. Xth International Orthoptic Congress, 2004.11.15-17, Melbourne, Australia

Nitta M, Niida T, Higa R, Shimizu K Monovision by implanted intraocular lenses. Xth International Orthoptic Congress, 2004.11.15-17, Melbourne, Australia

Handa T, Uozato H, Mukuno K, Niida T A clinical quantitative measurement of ocular dominance. Xth International Orthoptic Congress, 2004.11.15-17, Melbourne, Australia

Ito M, Niida T, Horibe M, Handa T, Ishikawa H, Shimizu K Evaluation of sensory dominance using binocular rivalry as related to ocular deviations. XIth International Orthoptic Congress, 2008.6.28-31, Antwerp, Belgium.

Yukie M, Nakahara D, Suenaga T, Yaguchi K, Niida T Amygdaloid connections with area F5 and other frontal cortex in macaque monkeys. 7th Forum of European Neuroscience, 2010.6.30-7.7. Amsterdam, The Netherlands.

Yaguchi K, Morohashi A, Tanaka U, Yukie M, Nakahara D, Tojo Y Does the autism spectrum disorder show different laterality from the typically developed person?:an event related potential (ERP) study. 7th Forum of European Neuroscience, 2010.6.30-7.7, Amsterdam, The Netherlands.

Edamura M, Hata T, Meng H, Suenaga T, Uchijima M, Suzuki T, Nagata T, Yaguchi K, Yukie M, Koide Y, Nakahara D Enhanced locomotor sensitization to cocaine in beta2-micloglobulin deficient mice. 7th Forum of European Neuroscience, 2010.6.30-7.7, Amsterdam, The Netherlands.

5. その他

Obara, K 研究仲間とのセミナー. 2006.8.19-8.29. シカゴ, アメリカ,

(6) 保健医療学部放射線・情報科学科

1. 業務出張

- ・金場敏憲、マレーシア、第11回アジア放射線技師学会、1996.8.26～8.31
- ・牧野元治、ロサンゼルス、学会（IEEE Nuclear Science8 Medical Imaging Conference）1996.11.1～11.10
- ・都築正和、アメリカ、Winter Conference on Recent Advancement of Medical Research and Education 1997.1.25～2.2
- ・金場敏憲、台北市国賓大飯店、第8回アジア・オーストラレーシア会議への参加及び留学生確保のため 1997.3.26～3.29
- ・井原廣一、シアトル、IEEE等参加 1997.6.23～7.2
- ・牧野元治、Nuclear Science Symposium and Medical Imaging Conference 1997.11.9～11.15
- ・飯沼一浩、プエノスアイレス、世界超音波医学学術連合大会出席 1997.8.30～9.7
- ・秋貞雅祥、ソウル、国際会議 IMAC' 97、1997.10.9～10.11
- ・秋貞雅祥、中国、打合せ 講演、1997.10.23～10.27
- ・井原廣一、台湾、学会、国立台湾大学訪問、1997.12.14～12.20
- ・井原廣一、中国、コンテンツ打合せ、調印式出席 1998.1.20～1.23
- ・井原廣一、ストックホルム、Merucatole社訪問他 1998.6.21～6.30
- ・志田寿夫、フィリピン、フィリピン職業病学会、じん肺結核の招待講師 1998.8.21～8.22
- ・志田寿夫、フィリピン、日韓職業性呼吸器疾患会議 1998.8.24～8.25
- ・牧野元治、トロント、IEEE Nuclear Science Symposium and Medical Imaging Conference 1998.11.7～11.14
- ・金場敏憲、香港、第12回アジア RT 学会 1999.4.30～5.4
- ・山崎統四郎、ナイロビ、JICA 研究委託事業の調査研究打合せのため 1999.9.17～9.26
- ・井原廣一、ワシントン、AMIA 学会他、1999.11.1～11.10
- ・新井正一、アメリカ、アメリカ心臓学会、1999.11.16～11.11
- ・山崎統四郎、北京、IAEA 国際会議出席、1999.11.13～11.18
- ・井原廣一、中国、TAO 日中合同会議のため 1999.10.17～10.20
- ・井原廣一、シンガポール、e-Health 2001 in Singapore 2000.10.15～10.19
- ・金場敏憲、シンガポール、ジェネラルホスピタル ナショナルユニバーシティ訪問 2000.11.28～11.30
- ・井原廣一、アラブ首長国連合、NAISO/ICSC (natural and Artificial Intelligent Spstaus Organigation/International Cumputer Science Conveution(招待講演) 2001.3.15～3.25
- ・井原廣一、スウェーデンコペンハーゲン、IEEE DNS FTC Committel 出席、IFIPWG10.4 20周年記念式典招待、2001.6.28～7.12
- ・金場敏憲、ソウル、13th Asian Conference of Radiographers&Radiological technologists 2001.9.19～9.22
- ・金場敏憲、カンボジア、医療従事者養成基礎調査団（放射線技師担当）2002.2.13～2.23

- ・熊野信雄、ソウル、学生教育医用画像ネットワークシステム運用に当たりキョンヒ大学を訪問、調査、2002.3.19～3.21
- ・宮地幸久、フランス モナコ、International Conference on Radioactivity in the Environment、2002.9.1～9.5
- ・清水慶昭、オーストラリア、夏季海外研修・活動オーストラリアグループ引率、2002.7.29～8.12
- ・岡田吉隆、アメリカ シカゴ、第88回北米放射線学会 2002.12.1～12.7
- ・宮地幸久、オーストラリア ブリスベン、12th International Congress of Radiation Research 2003.8.17～8.22
- ・金場敏憲、タイ バンコク、第14回ACRT学会 2003.8.8～8.23
- ・冨沢比呂之、ベトナム、海外保健福祉事情学生引率、2004.7.29～8.12
- ・金場敏憲、韓国、日韓合同学術会議、2004.9.10～9.13
- ・小池貴久、オーストラリア、海外保健福祉事情学生引率、2005.8.1～8.15
- ・室井健三、韓国、高麗大学画像研究会 デジタル画像評価・処理の実習、2006.8.16～8.19
- ・山本智明、韓国ソウル、第9回世界核医学会(WCNMB2006) 2006.10.22～10.28
- ・金場敏憲、カンボジア、国際医療技術交流財団 2007.2.19～2.24
- ・熊野信雄、インドネシア、原子力安全研究協会 2007.2.25～3.1
- ・佐々木康人、ドイツ・イタリア、放射線医学における被ばく線量研究国際会議招待講演及びヨーロッパ腫瘍研究所視察打合せ、2007.8.21～8.30
- ・小野木雄三、オーストラリア、MedInfo2007 2007.8.19～8.24
- ・山本智朗、横塚記代、韓国、卒業研究引率、韓国高麗大学および延世大学セブランス病院にて見学と演習 2007.9.17～9.20
- ・山本智朗、横塚記代、韓国、卒業研究引率 韓国高麗大学および延世大学セブランス病院にて見学と演習、2008.9.7～9.10
- ・土屋仁、中国、医療事故とヒューマンエラー、2009.3.19～3.25
- ・山本智朗、横塚記代、韓国、卒業研究引率 韓国高麗大学および延世大学セブランス病院にて見学と演習、2009.9.6～9.9
- ・室井健三、韓国ソウル、デジタルX線画像の画質評価に関する研究および講演 2009.9.10～9.12
- ・山本智明、中国、NPO 国際医療放射線学術協会による日中の放射線技師教育講演会、2010.3.18～3.24
- ・山本智朗、韓国、卒業研究引率 韓国高麗大学および延世大学セブランス病院にて見学と演習、2010.9.5～9.8
- ・山本智朗、中国、NPO 国際医療放射線学術協会による日中の放射線技師教育に関する講演、2010.3.18～3.24
- ・座間佳男、台湾、海外保健福祉事情学生引率、2010.8.5～8.18

2. 公的協力 (JICA)

- ・山崎統四郎、ケニア、JICA ケニア国医療技術教育強化プロジェクトをプロジェクトリー

ダーとして担当、2000.2.13～2001.2.12

- ・金場敏憲、ベトナム、カンボジア医療技術者教育プロジェクト短期派遣専門家（X線技師教育）に係る派遣、2004.2.1～3.25
- ・金場敏憲、カンボジア、カンボジア国保険省及び医療技術者養成学校の状況調査
2005.7.22～7.27

3. 国際学会などの委員

- ・山本智朗、Advisor of Japan・Scientific Committee、Medical Olympic Association、Greece、2010.10～Present

4. 国際学会学術発表

- ・牧野元治、シンポジウムでの学会発表、1998.5.11～5.15、アメリカ
- ・岡田吉隆、第86回北米放射線学会 2000.11.25～ 12.3 シカゴ
- ・富沢比呂之、2000 環太平洋国際科学会議 2000.12.14～12.19 ハワイ
- ・T.Koike et.al

Calculations of Intense Laser Pulse Propagation and Soft X-Ray Lasing in
Capillary Plasma Channels

8th International Conference on X-Ray Lasers

2002.5.24～6.2, Aspen, Colorado, USA

- ・Takahisa Koike et.al

CALCULATIONS OF ENERGY DISTRIBUTION OF HEAVY-ION BEAMS IN
TISSUES,

8th EPS Conference on Atomic and Molecular Physics, ECAMP8,

2004.7.5～7.20, Renne France

- ・山本智朗、The new approach for SPECT imaging analysis using Markov random field、
9th Congress of world federation of nuclear medicine & biology (WCNMB2006)
2006.10.22～10.28、韓国ソウル

- ・T.Koike, et.al

Development of New Type Gaseous Gamma Camera with GEM,

IEEE-MIC (Medical Imaging Conference) ,

2009.10.29, Orlando Florida, USA

(7) 医療福祉学部医療福祉・マネジメント学科 (医療経営管理学科)

1. 業務出張

氏名	国	都市 渡航先名	内容	期日
高橋 淑郎	ベトナム		チョーライ病院プロジェクトにおける短期専門家(病院管理)としての派遣	H9 5/1~5/9
紀伊國 献三		NY、ジュネーブ	10/30~11/2 ニューヨークで打合せ、11/2~11/5 ジュネーブにて会議(世界医療賢人会議)	H9 10/30~11/6
橋本 迪生	アメリカ		ISO uA Accreditation Symposium	H9 11/11~11/15
高橋 淑郎	オーストラリア		30th International Hospital Federation Congress	H9 11/14~11/24
紀伊國 献三	中国		中日医学奨学金 10周年記念式典	H9 12/4~12/6
紀伊國 献三		マニラ	WHO 西太平洋地区医学教育会議	H10 9/14~9/19
橋本 迪生		ブタペスト	ISQ ua's 15th International Couference and Velated meeting	H10 10/5~10/12
高橋 泰		台北	講演、台北大学講義	H10 11/12~11/15
紀伊國 献三		北京	日中奨学生の打合せのため	H11 1/7~1/9
高橋 淑郎	フィンランド		Next 30 year 国際会議	H12 8/18~8/26
紀伊國 献三		ロンドン	医学教育打合せ	H12 11/27~12/4
紀伊國 献三		ローマ	ハンセン病人権回復集会	H12 10/30~11/2
バルア・スマナ	カンボジア		カンボジアにおける寄生虫対策コントロールプログラム実施についての協議を行うため	H12 11/26~12/4
バルア・スマナ	ミャンマー、フィリピン		ミャンマー・フィリピンにおける寄生虫対策プログラム実施のための協議	H13 3/18~4/3
バルア・スマナ	カンボジア、フィリピン		カンボジア・フィリピンにおける寄生虫対策コントロールプログラム実施についての協議を行うため	H13 2/18~3/6
矢野 聡	タイ、シンガポール、インドネシア		アジア社会保障協力ヒヤリング及び国際協力会議出席	H13 3/4~3/11
開原 成允	サウジアラビア	ジュンダ	e-Health21	H13 5/2~5/12
小出 大介	ベトナム		ヴェトナム・バックマイ病院プロジェクト短期派遣専門家(病院管理(情報2))に係る派遣協力依頼	H13 8/1~8/14
バルア・スマナ	フィリピン	マニラ	2001 Fieldwork Fellowship for International Health cooperation	H13 8/4~8/12
加藤 尚子	オーストラリア	シドニー	オーストラリア病院見学、現地調査	H13 8/8~8/19
バルア・スマナ	ベトナム	ハノイ	Program Consultant of Sasakawa Memorial Health Funndation, on Leprosy Elimination in Vietnam	H13 11/20~11/24
菊池 優子	アメリカ	ワシントン	MMLS-Metathesames 日本語版作成のための会議	H14 2/3~2/10
加藤 尚子	タイ、カンボジア		平成13年度社会保障分野派遣専門化人材養成	H14 3/3~3/16
開原 成允		パリ、バルセロナ	医療情報システム開発センターISO 関連打合せ	H14 8/9~8/16
高橋 泰	オーストラリア		PCSE (Patient classificaton system/Europe)	H14 9/27~10/6
加藤 尚子	ベトナム		海外研修	H15 7/28~8/11
菅原 琢磨	ドイツ		「介護保険制度の国際比較研究」の一貫とし	H16 3/27~4/5

			て情報収集	
福永 肇	タイ		タイ王国チュラロンコン大学経済学部にて 4年生ゼミ生が対抗ゼミナール開催のため	H16 12/3~12/10
外山 比南子	オランダ	アムステルダム	Brain'05&BrainPET'05	H17 6/7~6/11
福永 肇	ベトナム	ホーチミン	2005 海外研修・活動	H17 8/1~8/15
外山 比南子	シンガポール		第22回患者分類制度国際会議	H18 10/10~10/15
今野 広紀	デンマーク		医療経済学における国際動向の調査	H19 7/7~7/14
西堀 眞弘	中国		International Symposium on Multispectral Color Science and Application	H19 5/30~6/3
大西 正利		ホーチミン	「海外保健福祉事情」学生引率	H19 7/30~8/13
外山 比南子	ポルトガル	リスボン	第24回 PCSI (患者分類する会議) に参加し て日本の DPC システムについて発表	H20 10/8~10/13
岡村 世里奈	シカゴ		平成20年度老人保健事業推進費等補助金視 察調査	H21 2/23~3/2
高橋 泰	タイ		タイ・コミュニティにおける高齢者向け保健医療・福 祉サービスの統合型プロジェクト	H21 2/15~3/1
岡村 世里奈	ロサンゼルス		World Medical Tourism & Global Health Congress	H21 10/25~10/29
河口 洋行	デンマーク ドイツ	ベルリン	デンマーク・ドイツにおけるがん検診の実態調査	H22 2/23~2/28
岡村 世里奈	韓国		韓国医療機関・介護施設視察	H22 4/11~4/17
岡村 世里奈	ロンドン		厚生労働省特別事業	H22 9/21~9/26

2. 公的協力 (JICA)

氏名	国	都市 渡航先名	内容	期日
高橋 淑郎	ベトナム		JICA ベトナム国チョーライ病院経営改善プ ロジェクト	H8 8/3~8/28
紀伊國 献三		WHO 本部	WHO 出席	H9 5/5~5/12
紀伊國 献三		モスクワ	国連 人道業務部シンポジウム出席	H9 5/26~5/30
紀伊國 献三		マニラ	WHO 医療担当者教育会議	H9 7/11~7/12
紀伊國 献三	ベトナム		チョーライ病院 JICA 短期専門家	H9 8/10~8/19
高橋 淑郎	ベトナム		JICA チョーライ病院プロジェクト	H9 8/6~8/19
紀伊國 献三		ジュネーブ	世界保健機関 (WHO) 理事会出席	H10 1/23~1/28
高橋 淑郎	ベトナム		JICA の国際協力のため	H10 2/24~3/4
紀伊國 献三	中国		中国衛生部との打合せ	H10 5/3~5/5
紀伊國 献三	ミクロネシア		WHO らい対策会議	H10 5/24~5/27
紀伊國 献三		ハバナ	非同盟国保険大臣会議	H10 6/23~6/29
紀伊國 献三	ウクライナ共和国		国際甲状腺組織バンク設立打合せ	H10 10/8~10/11
紀伊國 献三		ジュネーブ	WHO 理事会出席	H11 1/24~1/29
紀伊國 献三		ジュネーブ	WHO との研究打合せ	H11 3/13~3/17
紀伊國 献三	マレーシア		マレーシアウィルス対策の立案	H11 4/16~4/18
紀伊國 献三		ジュネーブ	WHO 出席	H11 5/16~5/23
紀伊國 献三		マニラ	WHO 医学教育会議	H11 7/7~7/10
矢野 聡		ヨーロッパ	EU 内国際機関訪問	H11 9/5~9/17
紀伊國 献三		クアラルン プール	第5回アジアエイズ会議	H11 10/24~10/26

紀伊國 献三	スイス	ジュネーブ	WHO 委員会参加他	H12 1/25~1/30
紀伊國 献三	スイス	ジュネーブ	WHO での研究打合せ	H12 3/2~3/6
矢野 聡	中国 タイ シンガポール		厚生省社会保障専門化研修事業参加	H12 2/27~3/18
紀伊國 献三		ジュネーブ	WHO との研究打合せ	H12 3/26~3/29
紀伊國 献三	中国	北京	中国衛生部との打合せ	H12 4/23~4/25
紀伊國 献三		ジュネーブ	WHO との研究打合せ	H12 5/16~5/21
バスア・スマナ	フィリピン	レイテ島	寄生虫予防学会 (WHO、フィリピン国保健省) 参加	H12 6/13~6/19
紀伊國 献三	スイス	ジュネーブ	世界保健期間理事会、研究打ち合わせ	H13 1/17~1/21
紀伊國 献三	インド	デリー	第一回世界らい制圧会議 (WHO)	H13 1/29~2/1
紀伊國 献三	エジプト	カイロ	世界保健期間 (WHO) 東地中海地域事務局会議	H13 3/25~3/31
バルア・スマナ	フィリピン		JICA Training course for the Prospective Experts on primary Health care	H13 7/19~7/31
バルア・スマナ	フィリピン	マニラ	WHO-shot-Term consultant on Leprogy Elimination in VietNam, Cambodia and the Philippines	H13 9/2~9/29
開原 成允	イギリス スイス	ロンドン ジュネーブ	MEDI NFO (国際医療情報学会議) WHO と会 議	H13 9/13~9/11
バルア・スマナ	ブラジル		WHO-WDR0, Temporary Advisor to visit Brazil and attend meetings	H14 1/26~2/6
小出 大介	ベトナム		ベトナム・バックマイ病院プロジェクト短期 派遣専門家 (JICA)	H14 8/1~8/14
高橋 泰	メキシコ	メキシコシ ティ	米国心理学協会本部 (ワシントン) での打合 せとメキシコ厚生省訪問・打合せ	H18 2/20~3/1

3. 国際学会などの委員

該当なし

4. 国際学会学術発表

氏名	国	都市 渡航先名	内容	期日
川北 祐幸	中国		華東地区第3回医療情報総会	H8 7/22~7/29
紀伊國 献三	アメリカ		世界保健総会出席のため	H10 5/6~5/17
陳 霞芬	中国	珠海・香港	第7回日中韓語学会学術総会・研究発表会	H13 9/10~9/15
小出 大介	イギリス	ロンドン	国際医療情報学会、演題発表 (Med Info 2001 London)	H13 8/31~9/7
河口 洋行	スペイン	バルセロナ	国際医療経済学会への参加及びポスター発表	H17 7/11~7/13
河口 洋行	中国		国際医療経済学会への参加及びポスター発表	H21 7/11~7/15

5. その他

氏名	国	都市 渡航先名	内容	期日
紀伊國 献三			チェルノブイリ事故救援活動調整会議	H9 9/26~10/3
紀伊國 献三		モスクワ	ロシア放射能研究所との研究打合せ	H11 12/2~12/6
紀伊國 献三	ロシア		チェルノブイリ自己対策会議	H12 12/7~12/10

(8) 医療福祉学部医療福祉・マネジメント学科（医療福祉学科）

1. 業務出張

氏名	国	都市 渡航先名	内容	期間
長谷川 豊	中国		中国リハビリテーションセンターにて衛星利用遠隔リハビリテーションシステムについての打合せ	H9.6.24～6.26
長谷川 豊	中国		中国リハビリテーションセンター開設 10 周年記念式典に出席	H10.10.28～10.30
東口 重信	中国		海外研修・ボランティア活動引率	H13.7.30～8.13
山口 光治	ベトナム		夏季海外研修・活動ベトナムグループ引率	H14.7.29～8.12
山口 光治	ベトナム		ベトナム・ホーチミン市の福祉事情調査	H15.8.10～8.14
浅香 勉	中国	北京	海外研修引率(2004 年度海外保健福祉事情視察団)	H16.7.29～8.12
須藤 昌寛	ベトナム	ホーチミン	「海外保健福祉事情」海外研修活動参加学生引率のため	H18.7.31～8.14

2. 公的協力 (JICA)

氏名	国	都市 渡航先名	内容	期間
長谷川 豊	ケニア		JICA のケニアコメディカル訓練センタープロジェクトに参加	H9.7.31～8.23
長谷川 豊	ケニア		JICA ケニアプロジェクト実施協議調査国への参加	H10.1.18～1.30
長谷川 豊	ケニア		ケニア国医療技術教育強化プロジェクト調査のため	H11.3.6～3.16
長谷川 豊	ベトナム		国際医療協力研究委嘱事業	H11.9.19～9.24
長谷川 豊	ケニア		JICA ケニアプロジェクト運営指導調査団にかかる団員として参加するため	H12.2.27～3.8
長谷川 豊	ベトナム		厚生省・国際協力研究委託費による研究調査	H12.8.22～8.27
長谷川 豊	ケニア		厚生省・国際協力研究委託費による研究調査	H12.9.10～9.18
長谷川 豊	ケニア	ナイロビ	国際協力事業団・ケニア共和国・医療技術教育強化プロジェクトの専門家として派遣のため	H13.3.1～3.2

3. 国際学会などの委員

氏名	国	都市 渡航先名	内容	期間
鈴木 二郎	スウェーデン	ストックホルム	ヨーロッパ精神医学会 (APE) 及び世界精神医学会 (WPA) 各国会長会合出席のため	H14.5.2～5.6

4. 国際学会学術発表

氏名	国	都市 渡航先名	内容	期間
林 玉子	台湾		conference on the Organization and Management of Elderly Homes の演者	H11.5.29～6.4

5. その他

氏名	国	都市 渡航先名	内容	期間
斉藤 謁	アメリカ	サンフラン シスコ	国際公用心理学会への参加	H10.8.9～8.14
西口 守	オーストラ リア		オーストラリア RCS 実施に伴う訪問問題の視察	H11.3.28～4.2
斉藤 謁	オーストラ リア		第二回世界心理療法会議に参加	H11.7.4～7.8
長谷川 豊	ベトナム		開発途上国大都市の公衆衛生対策のための国際保険 協力の実施対策に関する研究調査のため	H11.12.22～12.28
斉藤 謁	スウェー デン	ストックホ ルム	XXV I I International Congress of Psychology	H12.7.23～7.28
中野 いく子	アメリカ	コロンバ ス、ピッツ バーグ	科研費調査	H13.2.27～3.9
大石 剛史	アメリカ	ピッツバ ーグ	科研費調査	H13.3.5～3.9
大石 剛史	アメリカ	ピッツバ ーグ	科研費研究における海外視察研究	H16.2.19～2.26
小嶋 章吾	カナダ	ケベック	Fourth International Conference on Social Work in Health and Mental Health	H16.5.23～5.27
小嶋 章吾	オーストラ リア	アデレー ド	ソーシャルワーク世界会議出席他	H16.9.28～10.5
大石 剛史	韓国	ソウル	科研費研究による調査	H19.2.25～2.26
小嶋 章吾	カナダ	バンクー バー	Jewish Senior All trance of Greater Vancouver へのヒアリ ング・見学	H20.3.19～3.26
小嶋 章吾	イギリス	ヒースロー	総合ソーシャルケア協議会訪問・ヒアリング*	H21.3.8～3.15

(9) 薬学部薬学科

1. 業務出張

氏名：渡邊敏子

出張先：中華人民共和国・北京

目的：北京パラリンピック研修学生の引率

日時：2008年9月4日（木）～9月10日（水）

氏名：角南明彦

出張先：Queensland, Australia

目的：授業「海外保健福祉事情」のオーストラリア海外研修で学生（9名）を引率

日時：July 31 – August 13, 2007

2. 公的協力 (JICA)

3. 国際学会などの委員

武田弘志

氏名：Hiroshi Takeda

委員：Editorial Advisory Board of Current Neuropharmacology

期間：

4. 国際学会学術発表

武田弘志、辻 稔、宮川和也、竹内智子

演者名：Hiroshi Takeda, Kazuya Miyagawa, Tomoko Takeuchi and Minoru Tsuji

発表演題名：Increase in hippocampal synaptosomal-associated protein 25 in mice adapted to chronic variable stress

学会研究会名：WorldPharma2010 (国際薬理学会)

日時：2010/7/13-23

場所：Copenhagen, Denmark

演者名：Minoru Tsuji, Kazuya Miyagawa, Tomoko Takeuchi and Hiroshi Takeda

発表演題名：The 5-HT₇ receptor mediates fear conditioning through the amygdaloid extracellular signal-regulated kinase signaling in mice

学会研究会名：WorldPharma2010 (国際薬理学会)

日時：2010/7/13-23

場所：Copenhagen, Denmark

演者名：Kazuya Miyagawa, Minoru Tsuji, Tomoko Takeuchi and Hiroshi Takeda

発表演題名：Prenatal stress induces anxiety-like behavior together with structural

and functional disruption of central serotonin neurons in mice

学会研究会名 : WorldPharma2010 (国際薬理学会)

日時 : 2010/7/13-23

場所 : Copenhagen, Denmark

金野柳一

演者名 : Konno R, Hamase K, Maruyama R, Zaitso K

発表演題名 : Mutant mouse and rat lacking D-amino-acid oxidase, and serine racemase knockout mouse

学会研究会名 : 1st International Conference of D-Amino Acid Research

日時 : 2009. 7. 1.

場所 : 兵庫

演者名 : Miyoshi Y, Hamase K, Okamura T, Konno R, Zaitso K

発表演題名 : Simultaneous determination of D-serine and D-alanine in the mutant rat deficient in D-amino-acid oxidase

学会研究会名 : 1st International Conference of D-Amino Acid Research

日時 : 2009. 7. 3.

場所 : 兵庫

角南明彦

演者名 : Ishimaru N, Sunami A

発表演題名 : Functional characterization of SCN5A mutation, F1293S, associated with Brugada syndrome

学会研究会名 : Biophysical Society 51st Annual Meeting

日時 : March 3 - 7, 2007

場所 : Baltimore, Maryland, USA

演者名 : Katayama N, Konno K, Kawakubo A, Ishimaru N, Sunami A

発表演題名 : Role of L1462 in Na_v1.5 channel DIII-S6 in voltage-dependent gating and antiarrhythmic block

学会研究会名 : Biophysical Society 53rd Annual Meeting

日時 : February 28 - March 4, 2009

場所 : Boston, Massachusetts, USA

(10) 小田原保健医療学部看護学科

1. 業務出張

- 井村真澄 協定調印式参加：タイ 19.7.22～7.29
藤村龍子 看護部 ICU 研修：アメリカ 19.9.3～9.11
島内 節 大学間協定：韓国 21.10.13～10.15
井村真澄 大学間協定：韓国 21.10.13～10.15
荻野 雅 大学間協定：韓国 21.10.13～10.15

2. 公的協力 (JICA)

3. 国際学会などの委員

- 操華子 編集委員会会議 (アメリカ タンパ) 18.6.10～6.15
操華子 学会 (APIC 主催第 35 回学術集会ならびに学術雑誌編集会議：アメリカ)
20.6.15～6.19

4. 国際学会学術発表

5. その他

- 井村真澄 研修 (イギリス ロンドン) 18.6.17～7.17
小林美亜 学会参加 (ポルトガル リスボン) 18.8.23～8.29
天野志保 研究のデータ収集 (オーストラリア) 18.12.4～12.10
荻野 雅 学会参加 (フィリピン マグゼット) 19.2.22～2.23
藤村龍子 学会参加 (オランダ アムステルダム) 19.4.18～4.22
山岸暁美 ヒアリング調査 (UK) 19.3.11～3.17
操 華子 研修 (アメリカ ダラス) 19.3.12～3.15
清水清美 研修 (ロンドン) 19.3.24～3.31
島内 節 共同研究 (カナダ、アメリカ) 19.4.28～5.6
加藤憲司 学位記受領 (スウェーデン) 19.5.10～5.13
操 華子 学術集会 (アメリカ) 19.6.24～6.28
井村真澄 共同研究 (ノルウェー) 19.8.27～9.5
清水清美 視察 (ドイツ) 19.11.16～11.20
島内 節 日韓地域看護学会共同学術集会 (韓国) 19.11.21～11.24
加藤憲司 研究会議 (スウェーデン) 20.5.2～5.7
操 華子 APIC 主催のサーベイランスデータ分析ならびに報告のための研修会 (アメリカ)
20.8.11～8.16
片倉直子 ロンドンにおける地域精神看護活動の研究調査 (イギリス) 20.8.30～9.7
島内 節 フィンランド在宅看護現場視察・共同研究イベント・オブ・ライフ・自立支援の調
査打合せ (フィンランド) 20.8.31～9.7
相原洋子 第 18 回国際疫学会 (ブラジル) 20.9.19～9.25
薬袋淳子 第 18 回国際疫学会 (ブラジル) 20.9.19～9.27

- 相原洋子 第 40 回アジア太平洋州公衆衛生学会 APACH2008 (ベトナム) 20.11.3
～11.6
- 森真喜子 荻野雅 "その他 (韓国カトリック大学との共同研究) 20.10.27～11.1
- 荒木田美香子 International Congress on Chronic Disease Self-management 参加
(オーストラリア) 20.11.24～11.29
- 野村美香 研究所の視察と情報収集 (オタワ) 21.3.4～3.8
- 荒木田美香子 The Why Try Hands Training (アメリカ) 21.4.20～4.24
- 加藤憲司 Behavior Genetics Association (アメリカミネソタ州ミネアポリス)
21.6.17～6.22
- 田中和奈 イギリスにおける認知症高齢者の看取りの現状実態把握 (イギリス)
21.2.21～2.28
- 操 華子 APIC 主催第 36 回学術集会他 (アメリカ) 21.6.7～6.11
- 青木雅子 学会・研修 9th International Family Nursing Conference 他 (アイスラ
ンド) 21.5.31～6.7
- 島内 節 学会 IOCHNR (オーストラリア) 21.8.16～8.20
- 井村真澄 研修 THE BIOLOGICAL NURTURING (イギリス) 21.4.15～4.20
- 島内 節 軽度要介護高齢者の自立支援の国際共同研究打合せ (アメリカ) 21.7.29
～8.3
- 島内 節 学会 ICCHNR (オーストラリア) 21.8.14～8.22
- 堀田 幸 学会 (ICCHNR : オーストラリア) 21.8.16～8.20
- 島内 節 業務・学会 ICCHNR 国際地域看護学会 (オーストラリア) 21.8.14～8.23
- 相原洋子 第 45 回アジア太平洋公衆衛生学会 (台湾) 21.12.3～12.6
- 加藤憲司 学会 ESF workshop (ドイツ、ミュンヘン) 21.9.9～9.14
- 山岸まなほ その他 (コロラド大学デンバー校 : アメリカ) 21.10.29～11.7
- 荒木田美香子 学会 (International Conference on Psychosocial Factors at Work
(タイ) 21.11.30～12.3
- 加藤憲司 研修コロラド大学 (アメリカ) 21.2.28～3.7
- 加藤憲司 学会 (ESF workshop : ドイツ、ミュンヘン) 21.3.20～3.26
- 森真喜子 研修 (国際看護研究会のスタディーツアー) 22.2.28～3.5
- 操 華子 学会 (The Social for Healthcare Epidemiology of America (アメリカ、
アトランタ) 22.3.18～3.22
- 野村美香 科研費の米国・カナダ研究者とのミーティング 22.3.6～3.13
- 清水清美 科研費研究 (オーストラリア) 22.3.22～3.26
- 山本敬子 学会参加 (13th world Congression Pain : カナダ) 22.8.26～9.4
- 相原洋子 研修 (ロンドン大学 : イギリス) 22.9.5～9.10
- 加藤令子 その他 (セイナヨーキ大学 : フィンランド) 22.8.2～8.9
- 野村佳代 その他 (セイナヨーキ大学 : フィンランド) 22.8.2～8.9
- 島内 節 共同研究 (韓国) 22.8.3～8.4
- 清野純子 第 24 回ヨーロッパ健康心理学会 22.8.27～9.5
- 荒木田美香子 生活習慣病予防に対する保健指導の横断的な質の評価に関する打ち
合わせ 22.10.2～10.4

(11) 小田原保健医療学部理学療法学科

1. 業務出張

2. 公的協力 (JICA)

- ・ 終幸伸、中国、業務 (中国中西地区リハビリテーション人材育成プロジェクト短期専門家派遣: JICA)、平成 21 年 7 月 18~31 日
- ・ 佐藤仁、中国、業務 (中国中西地区リハビリテーション人材育成プロジェクト短期専門家派遣: JICA)、平成 22 年 1 月 18~31 日
- ・ 上村さと美、中国、業務 (中国中西地区リハビリテーション人材育成プロジェクト長期専門家派遣: JICA)、平成 22 年 8 月 23 日~平成 23 年 8 月 31 日
- ・ 終幸伸、中国、業務 (中国中西地区リハビリテーション人材育成プロジェクト短期専門家派遣: JICA)、平成 22 年 8 月 12~25 日
- ・ JICA 国際緊急援助隊医療チーム (登録メンバー) 平成 22 年 3 月~

3. 国際学会などの委員

4. 国際学会学術発表

- ・ 武田 要: 特別講演 脳卒中片麻痺患者の歩行~楽に歩くためには~ 平成 21 年 3 月 28 日 国際理学療法科学学会 (中国: 大連)
- ・ Watanabe M, Higuchi T, Tani H, Imanaka K: Perception of shifted weight during upright standing: effects of attending weight control and displacement. 学会 (The 12th ISSP World Congress of Sports Psychology) 平成 21 年 6 月 17~21 日、モロッコ、マラケッシュ
- ・ Kaname Takeda, Junji Katuhira, Aya Takano : An analysis of gait in the third trimester of pregnancy - gait analysis of the single support phase in the frontal plane 学会 (XIX FIGO World Congress of Gynecology & Obstetrics) 平成 21 年 10 月 3~10 日、South Africa, Cape town
- ・ Hiiragi Y: Effects of side slope surfaces on the knee joint, 第 11 回アジア理学療法学会、平成 22 年 10 月 10~13 日、Indonesia
- ・ Momiyama H: Investigation of the Shoulder Joint Impingement Following Abduction - Difference in angle of shoulder rotation, 第 11 回アジア理学療法学会、平成 22 年 10 月 10~13 日、Indonesia
- ・ Sato H. : CURRENT STATE OF PROPRIOCEPTIVE NEUROMUSCULAR FACILITATION EDUCATION IN PHYSICAL THERAPY SCHOOLS IN JAPAN. 学会 (第 11 回アジア理学療法学会), 平成 22 年 10 月 10~13 日、Indonesia
- ・ Miura N: Change of soleus muscle spinal motor nerve excitability of sports habits and gender discrimination in healthy adults. Indonesia Bali 11th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy H22. 10. 10-13

昇寛：エルゴメーター用 Toe-Heel ペダル運動器での運動効果 ー筋電学的検討ー
学会（第4回北京国際リハビリテーションフォーラム）平成21年10月27～11月1日、中国
HIROSHI Nobori：Invention and Making of the Spring Pedal Movement Device（8th
International Meeting of Physical Therapy Science in Chengdou），平成22年3月
27日，中国成都

- 柘幸伸：特別講演 演題名 A motion analysis with compact sensors, 第4回北京国際
リハビリテーションフォーラム、平成21年10月28～10月30日
- 柘幸伸：演題名 Effects of side slope surfaces in the walk, 第5回北京国際リハビ
リテーションフォーラム、平成22年10月30～11月2日
- 佐藤仁：The application of PNF. 学会（The 5th beijing international forum on
rehabilitation），平成22年10月29日～11月1日，中国北京
- Watanabe M, Kurosawa K, Tani H, Higuchi T, Imanaka K：An effective strategy to
accurately shift the body-weight while performing a partial weight bearing task.
学会（11th International Congress of The Asian Confederation for Physical Therapy.
平成22年10月10～13日
- Sato H.：Attempt of Guidance of the Manual Hand Resistance by a Manual Hand
Dynamometer. 学会（8th International Meeting of Physical Therapy Science in
Chengdou），平成22年3月27日，中国成都

5. その他

- 初山日出樹：Special Olympics Clinical Director 研修（足病医の研修会 アイダホ.USA）
平成21年2月6～13日
- 三浦和：海外技術協力セミナー：日本理学療法士協会 国際部 H23.1.22.23（企画運営）
- 三浦和：日本理学療法士協会 国際部部員 平成21年8月～

(12) 小田原保健医療学部作業療法学科

1. 業務出張

山路博文：中国（北京）：海外保健福祉事情引率 H22.8.10～8.22

2. 公的協力（JICA）

菅原洋子：中国（北京）：中国中西部リハビリ専門職養成プロジェクト H22.8/2～8/14

鈴木孝次：中国（北京）：中国中西部リハビリ専門職養成プロジェクト H22.8/2～8/14

阿部浩美：中国（北京）：中国中西部リハビリ専門職養成プロジェクト H23.1/12～1/21

3. 国際学会などの委員

4. 国際学会学術発表

鈴木孝次：

「Usefulness of OSCE (Objective Structured Clinical Examination) for Occupational Therapy Education-Based on OSCE, Intramural Lesson and Clinical Training-」
15th Congress of the World Federation of Occupational Therapists 7th, May in Santiago,

「The validity of OSCE using standardized patients in the occupational therapy education」

An International Association For Medical Education Conference 2010

7th, September in Glasgow

「Efforts in the field of OSCE for Occupational therapy education in Japan」 9/8
An International Association For Medical Education Conference 2010

8th, September in Glasgow

「What can be effective indexes to evaluate patients with mild disturbance of consciousness?」

5th Beijing International Forum on Rehabilitation 30/October in Beijing,

山路博文：

「Mindfulness approach (Tea tao and Flower tao) in Japan」

World Congress of behavioral and cognitive therapies 2010

5th, June in Boston

「Psychological assistance for stroke patients」

The 5th Beijing International Forum on Rehabilitation Beijing

31th, October in China

(13) 福岡看護学部看護学科

期 間	名 称	国	参 加 者
平成 22(10).8.16～19	シンガポール市内の病院等施設見 学 (マウントエリザベス病院他)	シンガポール	小田正枝
平成 22(10).8.14～19	2010 年リプロ・ヘルス欧州研修	スウェーデン	濱寄真由美
平成 22(10).11.10～13	韓国老年社会学会及び草堂大学大 学院での講義	韓国	長弘千恵
平成 22(10). 8 .23～9. 1	研修 ・アメリカにおける訪問看護の実際 ・認定看護師教育について ・看護職のワークライフバランス	アメリカ	ベヴァン 宏美

(14) 福岡リハビリテーション学部 (理学療法学科、作業療法学科、言語聴覚学科)

1. 業務出張

氏名	出張先	目的	期間
池崎清信	USA(サンフランシスコ)	2006 米国神経外科学会年次総会 他参加	18.4.22-18.4.27
古川昭人 池崎清信 諸岡健雄	韓国 (ソウル他)	三育大学国際セミナー講演及びリハビリテ-ション施設訪問並びに国際交流に関する視察	19.4.21-19.4.25
満留昭久	韓国	国際交流協定書調印式	21.10.23-21.10.27
石橋英恵	チリ (サンチアゴ)	第 15 回世界作業療法士連盟学 会・世界作業療法士連盟代表者会 議参加	22.4.24-22.5.8

2. 公的協力 (JICA)

氏名	出張先	目的	期間
奈良進弘	中国 (北京)	JICA (リハビリテーション専門職養成プロ ジェクト)	17.7.21-17.11.30
新川寿子	中国 (北京)	JICA (リハビリテーション専門職養成プロ ジェクト)	17.11.24-18.3.2
奈良進弘	中国 (北京)	JICA (リハビリテーション専門職養成プロ ジェクト)	18.2.21-18.6.15
奈良進弘	中国 (北京)	JICA (リハビリテーション専門職養成プロ ジェクト)	18.8.8-18.11.1
奈良進弘	ミャンマー (ヤンゴン)	JICA (人材養成プロジェクト事前調 査)	19.6.29-19.7.7
奈良進弘	中国 (北京)	JICA (リハビリテーション専門職養成プロ ジェクト)	19.7.11-19.7.25
奈良進弘	中国 (北京)	JICA (リハビリテーション人材養成プロジェ クト事前調査)	19.11.26-19.12.27
奈良進弘	中国 (北京)	JICA (リハビリテーション人材養成プロジェ クト)	20.4.24-20.6.17
奈良進弘	中国 (北京)	JICA (リハビリテーション人材養成プロジェ クト運営指導調査)	20.6.28-20.7.4
新川寿子	中国 (北京)	JICA (リハビリテーション人材養成プロジェ クト運営指導調査)	20.6.28-20.7.4
奈良進弘	ミャンマー (ヤンゴン)	JICA (リハビリテーション強化プロジェ クト)	20.8.6-22.8.4
新川寿子	中国 (北京)	JICA (リハビリテーション人材養成プロジェ クト)	20.9.1-22.9.30
北島栄二	中国 (北京)	JICA (リハビリテーション人材養成プロジェ クト)	22.3.14-22.3.20
千代丸信一	中国 (北京、西 安)	JICA (リハビリテーション人材養成プロジェ クト)	23.2.16-23.2.25

3. 国際学会などの委員

氏名	委員	期間
奈良進弘	Treasurer, Asia Pacific Occupational therapists regional group/Asia Pacific Occupational therapy congress	2007.6～2011.11
新川寿子	日本作業療法士協会 WFOT 世界会議招致委員会 委員	2007.6～2009.6
石橋英恵	日本作業療法士協会 WFOT 世界会議招致委員会 委員	2007.8～2008.12
後藤純信	29th International Congress of Clinical Neurophysiology (ICCN2010)プログラム委員	2008.1～2010.11
石橋英恵	世界作業療法士連盟 日本代表第2代理 日本作業療法士協会 国際部 部長	2009.6～2011.5 2011.5～2013.5
奈良進弘	Chief editor, Asian Journal of Occupational therapy	2009.7～2011.6
新川寿子	第16回世界作業療法士連盟大会・第48回日本作業療法学会 社会交流・接遇委員会副委員長	2011.1～2014.12
新川寿子	第16回世界作業療法士連盟大会・第48回日本作業療法学会 学術委員会 委員	2011.1～2014.12
石橋英恵	第16回世界作業療法士連盟大会・第48回日本作業療法学会 WFOT 代表者会議支援委員会 副委員長	2011.1～2014.12

4. 国際学会学術発表

演者名	学会研究会名	日時	場所
後藤純信	2005 Society for Neuroscience	17.11.11－17.11.18	USA(ワシントン)
発表演題名	Familiarity facilitates the cortico-cortical processing of face perception		
新川寿子	2005 International Occupational Therapy Conference	17.9.16－17.9.21	中国(青島)
発表演題名	Practical use of the activity for elders with senile dementia		
庄司紘史	第6回日中ウィルス学会	18.6.22－18.6.24	中国(上海)
発表演題名	Non-herpetic acute limbic encephalitis		
奈良進弘	14 th World Federation of Occupational Therapists	18.7.13－18.7.30	オーストラリア(シドニー)
発表演題名	Attention assessment in geriatric clients－an application of cued attention shift tasks		
新川寿子	14 th World Federation of Occupational Therapists	18.7.24－18.7.30	オーストラリア(シドニー)
発表演題名	The relation of time allocation and the Health-Related QOL in persons with hemiplegia		
桐本光 後藤純信	28 th International Congress of Clinical Neurophysiology	18.9.8－18.9.15	イギリス(エジンバラ)

発表演題名	Muscle synergism among the triceps surae muscles during sustained plantar flexion		
矢倉千昭	World Physical Therapy 2007	19.6.1－19.6.8	カナダ (バンクーバー)
発表演題名	Body composition and physical function are associated with blood pressure levels and arterial compliance in middle-age and older adults		
奈良進弘 新川寿子	4 th Asia Pacific Occupational Therapy Congress	19.6.22－19.6.27	中国 (香港)
発表演題名	Beginnings of occupational therapy education in mainland china· Opinions of freshly graduated OTS		
後藤純信	2009 IEEE/CME International Conference on Complex Medical Engineering	21.4.8－21.4.17	USA(デンビ°)
発表演題名	Feasibility of Exploratory Eye Movements in Patients with Neurological and Psychiatric Diseases		
後藤純信	Neuroscience meeting 2009 (Society for Neuroscience)	21.10.15－21.10.22	USA(シカゴ°)
発表演題名	Exploratory eye movements in psychiatric diseases		
奈良進弘	15 th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists	22.5.3	チリ (サンティアゴ°)
発表演題名	Is there a revival of occupational therapy in Myanmar		
新川寿子	15 th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists	22.5.7	チリ (サンティアゴ°)
発表演題名	Cooperation for the improvement of rehabilitation services in Mainland China		
上野雄文	16 th Annual Meeting of the Organization for Human Brain Mapping	22.6.4－22.6.12	スペイン (バルセロナ)
発表演題名	Difference Between real sequential finger and imagery movements: An fMRI study		
後藤純信	2010 IEEE/CME International Conference on Complex Medical Engineering	22.7.11－22.7.16	オーストラリア (ゴールドコースト)
発表演題名	Innovation for Visual Stimuli: From the Retina to Primary Visual Cortex		
庄司紘史	BIT`s 1 st World Congress of Virus and Infections 2010	22.7.31－22.8.2	韓国 (釜山)
発表演題名	①Herpes simplex encephalitis/non-herpetic acute limbic encephalitis in Japan ②Seroepidemiological analysis of central nervous system infections induced by herpes simplex virus type 1 and 2 in Japan		
佐々木 淳	International Society of Hypertension	22.9.24－22.10.1	カナダ (バンクーバー)
発表演題名	A comparative study of Olmesartan and Valsartan on Insulin sensitivity		
後藤純信	29 th International Congress of Clinical Neurophysiology (ICCN2010)	22.10.29	日本 (神戸市)

発表演題名	Utility of exploratory eye movements in patients with neurological and psychiatric diseases.		
後藤純信	29th International Congress of Clinical Neurophysiology (ICCN2010)	22.10.29	日本 (神戸市)
発表演題名	Quantitative analysis of VEP on difference between sinusoidal pattern and rectangular pattern.		
後藤純信	29th International Congress of Clinical Neurophysiology (ICCN2010)	22.10.29	日本 (神戸市)
発表演題名	Neural basis of familiar voice recognition in preschool children: A near-infrared spectroscopic study.		
後藤純信	29th International Congress of Clinical Neurophysiology (ICCN2010)	22.10.29	日本 (神戸市)
発表演題名	Aging of the parallel visual pathways in humans.		
後藤純信	29th International Congress of Clinical Neurophysiology (ICCN2010)	22.10.29	日本 (神戸市)
発表演題名	Face-sensitive neural responses in the occipital cortex without visual awareness.		
後藤純信	29th International Congress of Clinical Neurophysiology (ICCN2010)	22.10.30	日本 (神戸市)
発表演題名	Transcranial direct current stimulation over the motor association cortex induces plastic changes in the ipsilateral sensory-motor cortices.		
後藤純信	29th International Congress of Clinical Neurophysiology (ICCN2010)	22.10.30	日本 (神戸市)
発表演題名	Electrophysiological Correlate of Auditory Temporal Assimilation between Two Neighboring Time Intervals: A Principal Component Analysis.		
後藤純信	29th International Congress of Clinical Neurophysiology (ICCN2010)	22.11.1	日本 (神戸市)
発表演題名	Changes in visual evoked magnetic fields during mental arithmetic task.		
後藤純信	29th International Congress of Clinical Neurophysiology (ICCN2010)	22.11.1	日本 (神戸市)
発表演題名	Visual information processing in patients with unilateral spatial neglect (USN): A study of the evaluating an exploratory eye movement.		
上野雄文	40 th Annual Meeting Neuroscience 2010	22.11.13-22.11.21	USA (サンディエゴ)
発表演題名	Characteristics of the brain function related to a simple motor task in schizophrenia patients		

5. その他

氏名	出張先	目的	期間
石井久敬	韓国 (ソウル)	第 6 回日韓両国の若い精神科医のための合同研修会参加	17.7.13~7.18
満留昭久	フィリピン (セブ)	第 9 回アジア・太平洋小児科学会	19.1.24~1.27
奈良進弘	中国 (北京)	作業療法教育の実施状況の視察と助言等	19.4.22~4.26
満留昭久	中国 (北京)	日中医学研究者制度 20 周年記念式典参加	19.8.25~8.29
石井久敬	韓国 (ソウル)	第 8 回日韓両国の若い精神科医のための合同研修会参加	19.8.23~8.27
古川昭人	スウェーデン (ストックホルム)	高齢者福祉関連施設視察訪問	19.8.27~9.4
新川寿子	中国 (北京)	北京国際リハビリテーション フォーラム参加	22.10.29~.11.1

※共同演者

日田勝子	15 th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists	22.5.5	チリ (サンティアゴ)
発表演題名	Development of the Japanese Playful Assessment of Neuropsychological Abilities : Correlations between test scores and age in eye-hand coordination and visual perception tests, and praxis tests		
日田勝子	15 th International Congress of World Federation of Occupational Therapists	22.5.5	チリ (サンティアゴ)
発表演題名	Development of the Japanese Playful Assessment of Neuropsychological Abilities : Correlations between test scores and age in equilibrium tests, antigravity posture tests and of somato-sensory tests.		
後藤純信	Neuro Talk-2010	22.6.17	シンガポール (シンガポール)
発表演題名	Visual Agnosia and Cerebral Akinetopsia		

V. 各学部各学科の
自己点検・評価と今後の課題

V. 各学部各学科の自己点検評価と今後の課題

(1) 保健医療学部看護学科

1. 教育面

1) 教育内容

平成 20(2008)年保健師助産師看護師学校養成所指定規則等（以後、指定規則とする）の改正に伴い、平成 21(2009)年度より新カリキュラムを導入した。カリキュラム改編の主な内容は、①指定規則改正に沿った科目構成とし、基礎分野、専門基礎分野、専門分野Ⅰ、Ⅱ、統合分野の構成とし、②「成人看護学急性期実習」および「成人看護学慢性期実習」を各々4単位から3単位とした。また③統合分野の実習として、「統合実習」2単位を新設した。くわえて④「地域看護学実習」を3単位から4単位へ増やし、⑤卒業要件単位数を127単位から128単位へ変更した。

2) 臨地実習

学生は4年間で11実習科目、合計27単位を98実習施設の協力のもと履修している。各教員は小人数グループの学生を担当し、臨床現場に出向いて施設側の実習指導者と協働して教育している。実習中は科目責任者や常勤教員と非常勤教員との打合せ会議にて意見交換をし、連携を取りながら学生指導に関わっている。平成 22(2010)年度は3年生の実習前教育として、実習先の看護師に来ていただき看護技術教育を行った。

3) 国家試験対策

補講や学習会、模擬試験の年間計画を国試担当教員と3、4年生の学生国試係とで話し合って作成し、実施している。学科教員は学生の個々の学習状況に応じて面接指導をし、学習支援を行っている。看護師国試合格率は全国合格率および全国大学合格率より上回ることができた。しかし保健師国試合格率は全国合格率および全国大学合格率にはおよばなかった。国試の不合格者に対しては、本人の希望があれば卒業1年間にわたって学習方法の相談や国試の受験手続きのサポートを行っている。

看護師	本学 合格率	全国 合格率	全国大学 合格率	保健師	本学 合格率	全国 合格率	全国大学 合格率
H21年度	99.2%	89.5%	97.9%	H21年度	79.8%	86.6%	87.9%

2. 学生支援面

看護学科では、アドバイザー担当教員が各学生に履修指導や学生生活の相談にのり個別にサポートを行っている。授業や実習等を複数回欠席した場合は、学生と連絡をとり、早期に学生の状況を把握しながら問題が深刻化する前に対応するよう努めている。また、必要に応じて保護者と連絡を取りながら学生支援を行っている。メンタルな問題を抱えた学生も散見されるようになり、今後学生への個別な対応の時間確保や教員の細やかな対応が更に必要とされる状況である。

就職に関しては進学する学生を除くと、就職希望者の100%が病院や行政機関などへ就職している。医療施設等からの求人数は年間約3万人と多く、今後も同様の状況が続くと思われる。

3. 研究面

平成 21(2009)年度の研究業績として著書4編、原著7編、研究1編、学会発表22演題であった。研究費の獲得状況として、平成 21(2009)年度は科学研究費若手研究(B)1題、日本訪

間看護振興財団訪問看護・在宅ケア研究助成1題であった。平成22(2010)年度は科学研究費基盤C1題、厚生労働省地域医療基盤開発推進研究事業1題、公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団研究助成1題、安田記念医学財団1題であった。

その他、学内研究費として平成21(2009)年度は一般研究費1題、奨励研究費3題が採択された。平成22(2010)年度は、一般研究費2題、奨励研究費4題が採択された。これらの研究結果は翌年度の7月に学内研究費発表会で報告され、大学紀要に研究報告書として掲載している。

4. 学科内FD活動

看護学科のFD活動として、原則月1回FD学習会を開催している。前年度(平成20(2008)年度)は、FD学習会で「協同学習」の理論や効果的なグループ学習の進め方の理解を深めた。このような点を踏まえて、平成21(2009)年度はジグソー学習法を導入し始めた授業を公開授業とし、学科教員が授業参観し、グループ学習法の効果や本学科で導入する場合の課題等に関して意見交換を行った。その上で、領域別にグループ学習法を取り入れた具体的な授業案を作成し、ディスカッションを通して実現化に向けての検討を行った。

平成22(2010)年度は「グラウンデッド・セオリー・アプローチの概要と分析」というテーマで、同研究方法に関する抄読会を行った上で、戈木クレイグヒル滋子講師によるワークショップを開催した。

5. 国際性

平成21(2009)年度の研究ゼミ(金准教授担当の学生6名、教員3名)で、韓国のASAN病院の集中治療室を中心に見学を行った。ASAN病院は病床数2,406床で、韓国内最大規模の集中治療室(ICU)があり、159床の臓器別のICUを有する病院である。参加した学生達は韓国の健康問題や医療制度、看護教育体制などについて、日本と比較しながら両国の共通点や相違点を学ぶことができた。

6. その他

<公開学習会の開催>

平成21(2009)年度はストレスを上手にマネジメントし、エネルギーに転換するための知識・技術・態度を学習する目的で「ストレスをナーシング・パワーに変える」というテーマで開催し、64名の参加を得た。平成22(2010)年度は「がん患者の意思を尊重する退院調整と支援」というテーマで開催し、76名の参加を得た。退院調整が困難ながん患者に対して、いかに患者が安心して療養の場を移行することができるかについて3人の講師に講演していただき、参加者と意見交換を行った。

<卒業生とのつながりを強化する絆会の開催>

平成22(2010)年度は、関連病院に就職している本学科卒業生と学部生との交流の機会として絆会を催した。卒業生が大学及び後輩の学部生との交流を深めたり、学部生が卒業後も新しい職場環境に適応できるよう助言を受けたりし、有意義な時を過ごした。

7. 今後の課題

- ・実習病院、特に関連病院との交流を促進し、実習の質向上を図る。
- ・本学科の看護師および保健師国家試験の合格率を高める。
- ・外部研究費の獲得等による教員の研究活動の促進を図る。
- ・教員のマンパワーを確保し、教育技法などの質の向上を図る。

(2) 保健医療学部理学療法学科

1. 教育面

1) 教育内容

大学の3つの理念、教育理念以外に、理学療法学科は、独自の教育方針を掲げている。基礎及び基本の重視、自ら学ぶ精神、幅広い専門教育である。平成21(2009)年度はCBT(実習前コンピュータ試験)を導入、OSCEと一緒に共用試験を実施することになった。学生の発表を中心とした授業、ポートフォリオを用いた授業、実習などが行われ始めた。留年は毎年100名中2~3名となっている。

今後は、PBLの積極的な導入、共用試験(OSCE、CBT)の完全導入を行う。

2) 臨地実習

臨地実習は、3年生は評価実習、4年生は総合実習として、附属施設及び関連施設を中心に実施している(全体の約50%の学生が実習している)。しかし、附属施設及び関連施設だけでは全学生の受け入れができないため、全国に約100ヶ所の施設に実習を依頼している。そのため、実習依頼先の実習指導者を対象とした実習指導者会議を開催している。

今後は附属施設及び関連施設での積極的な臨床実習を実施することが重要である。

3) 国家試験対策

国家試験対策は、11月下旬から開始する。内容は全教員による講義、模擬試験などである。平成11(1999)年度から平成18(2006)年度までは全員合格(100%合格)を維持し、平成19(2007)、20(2008)年度は不合格の者が出たが、平成21(2009)、22(2010)年度は全員合格であった。

今後も継続的に合格率が100%になるように、現在の方法を維持、そして改善を検討していく。

2. 学生支援面

就職に関しては、担任及び就職担当者が、履歴書の書き方、面接などの指導を実施し、今までに100%の就職率である。平成22(2010)年度は2月末で100%となった。学生指導には、アドバイザー制をとり、1教員が10名の学習及び生活の支援を実施している。

今後、学生支援は、就職、学習、キャリア支援、その他として対応することを検討したい。

3. 研究面

研究発表について、今年度は、アジア理学療法学会が日本(千葉市幕張)で開催され、学会担当委員なども本学の教員であったことから、多くの演題を発表した。同時に、本学大学院生も多く発表したため、本学科合計で44演題となった。

著書、原著論文も多く執筆された。著書は翻訳なども含み、7本、原著論文は35論文である。この中には筆頭が本学大学院生で共同研究者として発表しているものも含まれている。

今後も、継続的に研究が行われるように実施したい。科学研究費など公的な研究助成費を取得することも積極的に推進したい。

4. 学科内 FD 活動

理学療法学科単独の FD は、水曜日毎朝の勉強会と小田原保健医療学部理学療法学科等との合同の教育 FD 研究会である。水曜日の朝の勉強会は英文の研究論文の紹介を中心に、各研修会、講習会での話題提供の場である。

両学科の合同教育 FD 研究会は年 2 回実施している。前期（6 月）は東京青山キャンパスで、後期（1 月）は小田原キャンパスで授業の工夫に関するセミナーと研究発表が行われた。

今後は、教育 FD を体系的に推進し、学習方法について検討を行っていききたい。

5. 国際性

国際交流のひとつに、JICA のプロジェクトに本学教員が協力した活動がある。平成 22(2010)年度は、JICA 中国中西部地区リハビリ人材養成プロジェクトに対し教員の長期派遣が行われた（8 月から 1 年間、科目指導として 1 名 2 回、ベトナム科目研修 1 名）。

研修生の受入れは、基礎研修 6 名、平成 22(2010)年度国別研修「リハビリテーション中核人材養成」コースに基づく技術研修 8 名、スリランカからの研修生 1 名であった。

留学生は、平成 22(2010)年度には本学科に 1 名（中国）が入学し、本学科には合計 4 名の留学生が在籍、大学院理学療法学分野には 1 名（中国）が入学し合計 4 名が在籍している。これらの学生には、アドバイザーに加えホストファミリーを紹介し、指導及び相談を行っている。

国際学会活動に関しては、中国において学術大会の開催、セミナーの開催などを実施した。平成 22(2010)年度は、インドネシアで第 11 回アジア理学療法学会が開催され、本学からは 1 名が参加した。

今後は、積極的な留学生の受入れ、海外での学術大会の企画、セミナーの開催等を検討したい。

6. その他

本学科は、1 年に 2 回、同窓会を兼ね研究会を開催している。講演、症例発表などを主に、大田原キャンパスまたは東京地区で実施している。

毎年、理学療法情報雑誌「ザ・リガク」を発行し、関係者に配付している。内容は、理学療法学科の新入学募集状況、カリキュラム、卒業研究、国家試験の動向、国際関係（JICA などの国際協力、留学生、国際学術活動）、教員の紹介、研究活動、社会的活動、教育活動、大学院理学療法学分野の状況報告などである。

(3) 保健医療学部作業療法学科

1. 教育面

1) 教育内容

本学の基本理念・教育方針に基づき、i) 総合能力を有する専門職の育成、ii) 科学的・論理的思考のできる人間の育成、iii) チームの一員としての役割を認識し、その役割を責任もって遂行する人間の育成を作業療法学科の教育目的・目標としている。これらを達成するために、カリキュラム内容・講義内容・臨地実習の方法論等の検討を毎年重ねている。平成 15(2003)年度に設けた 2 年次から 3 年次への進級条件に、平成 19(2007)年度に初めて学生 3 名が該当し、平成 20(2008)年度には 3 名、平成 21(2009)年度には 6 名が該当した。進級条件設定による学生の進級状況の推移や、進路選択への影響を引き続き追跡していく必要がある。平成 22(2010)年度のカリキュラム改訂では、3 年次に必修で学ぶ研究法演習 I をより深めるために 4 年次に選択科目として研究法演習 II を設けた。今後、学生の研究法理解の成果を追っていく。

学生の在籍者数は、平成 22(2010)年 4 月時点で、1 年生 97 名、2 年生 104 名、3 年生 93 名、4 年生 109 名である。平成 21(2009)年度の退学者は 5 名、除籍者 1 名、留年者 19 名(2 年次 6 名、4 年次 13 名)であった。

2) 臨地実習

作業療法学科の教育課程における臨地実習は必修 19 単位となっている。実習過程は他の作業療法士養成課程とは異なり、開学以来一貫して独自の実習形態をとっている。概要は①19 単位のうち 13 単位を栃木県北・県央地域の施設を中心に実習を行う(中核実習施設と位置付け、大学関連施設も含む。)②中核実習施設における実習指導は施設側の実習指導者と本学科教員(教員が施設に出向く)との協働で行う。③他の 6 単位を「総合実習」とし、学生の自主性・社会性を育てるべく学生自ら実習施設を訪問・見学し、実習施設の選択・決定を行う。「総合実習」においては実習指導者会議及び定期的な教員の訪問は行わない。④中核実習施設指導者と本学科教員による「臨床教育運営会議」において臨床実習の企画・検討を行う。⑤栃木県内の 13 単位の实習においては、複数人数の学生を指導する、となっている。

この実習形態は徐々にではあるが自主受入れ施設に周知され、県内で実施される 13 単位の実習については定着しつつある。③の総合実習の決定方針は、他に例のない方法をとっているため、年数を重ねていくうちに方法は知られてきているが、方針の理解はまだ十分得られているとは言えない。本学科の卒業生が各地で作業療法士として勤務する施設も増えてきていることも受け、実習生受入れ施設の本学の実習方針への更なる理解と臨地実習の質の向上を進めていきたい。

3) 国家試験対策

国家試験対策は、4 年生担任・副担任及び国家試験担当教員が 1 年の計画を立て、国家試験対策ノート作り(4 年次前期)、模擬試験や国家試験対策特別講義(主に 4 年次後期)を実施している。平成 19(2007)年からは、前期より模擬試験を数回行い、国家試験に対する学生の意識付けを早い時期から高めるようにしている。また、試験勉強の滞っている学生と個別に面接をし、学習状況の確認と教示を行っている。新卒者の国家試験合格者数は平成 21(2009)年度、受験者数 93 名中 90 名(本学合格率 96.8%、全国平均合格率 82.2%)であった。

平成 20(2008)年度から、既卒者の国家試験不合格者に対し、希望者には学内の国家試験対策に参加させる支援を行っている。

2. 学生支援面

就職については、毎年、学年担任及び副担任教員を中心に支援を行っているが、就職施設の地域や作業療法領域に応じて全教員が個別に対応しており、就職希望者は100%の就職率を達成し続けている。特に本学科の臨地実習と結びつく大学関連施設及び中核実習施設への就職に関しては、臨床能力の高い学生を就職させるべく、個別対応をしている。平成19(2007)年度より、中核実習施設及び総合実習で継続的に実習依頼を受け入れていただいている施設を中心に就職説明会を開催しており、参加施設への就職に結びつけている。

平成18(2006)年度から、各学年で年1~2回程度の個別面接を行い、学生の生活状況やメンタル面を把握するように努めている。さらに必要に応じて、定期的な個人面接や頻度を増やすなど学生の個別性に応じて関わっている。場合により、保護者を含めた3者面談も行っている。綿密、迅速な学生への対応を心掛けることにより、学業支援・生活支援やメンタル支援の早期介入に結びつけている。その他、キャリア支援、生活安全支援、部活動支援など適宜行っている。

3. 研究面

研究面については、大学関連施設との連携体制の中で共同研究に力を注いでいる。平成21(2009)年度は著書6、原著論文4、総説8、研究報告10、講演29、学会発表45、学内研究費(奨励研究)獲得5であった。今後も大学関連施設とより一層の研究的連携を推し進める。

4. 学科内FD活動

毎年度末には、1日を通し学科研修会を開催している。年度内の教育活動・臨地実習・研究活動・地域連携等の見直しや今後に向けた検討を行っている。また、各教員の授業評価結果を学科会議で共有している。本学科の授業評価は、毎年概ね全学科平均以上の結果を得ている。

5. 国際性

平成20(2008)年4月から5ヶ年計画で大学が支援している、JICA中国中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクトにおいて、平成22(2010)年3月1日~3月14日の期間に学科から教員が1名出向いた。JICA草の根協力事業「ウズベキスタントシケント市における地域に根ざした障害支援事業 短期派遣専門家」においても、学科の教員1名が平成21(2009)年5月1日~5月6日、平成21(2009)年9月1日~9月12日、平成22(2010)年3月3日~3月14日の3回にわたり支援協力に出向いた。

留学生は平成21(2009)年度中国から2名(1年次、4年次)、韓国から1名(2年次)の学生が在籍していた。

海外保健福祉事情(選択科目)には毎年本学科学生も参加しており、平成21(2009)年度は5名の参加があった。

6. その他

作業療法学科の同窓会を、毎年1回の研究会(講演と臨床報告会)を兼ねて開催している。

大学関連施設への卒業生の就職、教員の兼務及び定期的な臨床指導など、連携体制のより一層の整備・充実に力を注いでいる。

(4) 保健医療学部言語聴覚学科

1. 教育面

1) 教育内容

言語聴覚学科の教育理念は、豊かな人間性と科学的な思考力、専門的な知識と技術、専門職としての価値観を修得し、言語聴覚障害患者が抱える問題を的確に解決できる高度臨床実践能力を備えた言語聴覚士を育成することにある。この理念を実現するため、4年毎にカリキュラムを改編し、次のように構成している。①総合教育科目において、人間、自然、社会、国際等に関する幅広い教養と科学的思考力を養う。②専門基礎科目では、人間の言語・コミュニケーション行動を支える生物学的基盤、心理・行動面、医学面、言語構造、音声の物理的側面、情報科学などを学ぶ。③専門科目では、各種言語聴覚障害の原因、症状、発生メカニズム、評価・診断、訓練・指導・援助法に関する知識や技術および態度を学び、言語聴覚士に必要な臨床能力を養う。

本学科では1年次から4年次にかけて体系的に学べるように、科目に演習や臨床実習を取り入れることによって、必要な専門知識・技術・態度を実践的に習得できるように、学内の言語聴覚センター及び全国の実習協力施設にて実施している。平成22(2010)年7月1日現在の在籍者数は、1年92名、2年96名、3年97名、4年92名の合計377名が在籍している。平成21(2009)年度の卒業者は88名で、留年者2名、平成22(2010)年度の卒業生は84名、留年生7名である。

2) 臨地実習

臨地実習の充実に毎年取り組み、現在は段階的な実習を実施している。1年次には本学附属の医療・福祉施設を見学し、言語聴覚士の職務を理解し、会話体験実習を通して、基本的なコミュニケーションのとり方について修得する。2年次には、臨床基礎技能習得に向けて言語聴覚センターで教員が行う実際の臨床を見学して、臨床の視点、患者の全人的理解、症状把握、臨床記録のまとめ方などを学ぶ。さらに、3年次には、講義・演習で学んだ言語聴覚臨床の評価・診断に関する知識・技術・態度を実際の臨床場面で適用できるようになることを目標に、教員の直接指導のもとに実習を行う。また、3年後期授業終了後の2月に、附属病院・関連施設で「大学関連施設実習」を行う。これは、学生が全1日さまざまな臨床場面に参加するもので、各病院・施設の言語聴覚士の臨床業務の流れを知る。4年次に学内の言語聴覚センター及び学外の実習協力施設で総合臨床能力、チーム医療能力習得に向けた総合実習を行う。本実習では、臨床実習指導者及び教員の指導のもとに評価から訓練・指導までの全臨床過程について実習する。学外の実習は、全国の実習協力施設のほか、本学の附属・関連病院・施設においても実施している。

この2年間における新しい取り組みは下記の通りである。

①コミュニケーションスキル修得プログラム

言語聴覚学科の学生にとって、コミュニケーションスキルは臨床実習に出る前に身につけなければならない最も重要な技能である。本学科では、4年間の臨床教育カリキュラムにおいて、コミュニケーションスキル修得のための体系化に取り組んできた。これらの取り組みは、従来のカリキュラムに様々な試みを加えて膨らます形

で発展させてきている。

1年次では、「言語聴覚障害学概論」の中に位置づけ、言語聴覚士の専門性、領域、連携などの学習に加え、自らの会話の特徴に気付き、年代の異なる高齢者・小児との会話に必要なコミュニケーションスキルの教育を取り入れた。そして、附属病院・関連施設の見学の際、高齢者との会話の体験を実施する。

2年次では、それぞれの専門領域において障害学総論を学び、言語聴覚障害児者との会話に必要な臨床基礎コミュニケーションスキルの修得を目指す。「言語聴覚障害診断学」の中で成人と小児についてコミュニケーションスキル演習を行った後、「言語聴覚障害総合演習」では臨床場面に参加し、言語聴覚障害児者と実際に会話体験・関わりの場に参加するという、より実践的な教育を実施する。

3年次では、「臨床実習Ⅰ」（評価実習）を行う。障害領域ごとの講義・演習を通して、評価を実施するために必要な臨床評価コミュニケーションスキルの修得を図る。

4年次では、「臨床実習Ⅱ」（総合実習）を行う。総合実習は、基本的臨床技能を学ぶ学内実習と、応用的臨床技能を学ぶ学外実習からなる。総合実習までに、指導・訓練に必要な臨床総合コミュニケーションスキルの修得を目指す。

②臨床実習コア・カリキュラム（案）作成

言語聴覚士養成の教育基盤において、必須の教育内容（知識・技術・態度）を自然科学系・社会科学系・人文科学系から言語聴覚臨床まで一貫してまとめたコア・カリキュラムというものは確立されておらず、多くの養成校は限られた時間内でより効率的な教育効果を上げるための教育システムを模索している。本学科では臨床教育を充実させ、臨床実習教育に携わる学外実習施設の先生方との協働作業の構築のため、平成 21(2009)年度に臨床実習コア・カリキュラム試案を作成し、平成 22(2010)年度も改編を加えた。臨床技能の到達目標を明示し、臨床実習指導者と臨床実習教育の目標を共有し、より充実した臨床教育を展開する中で、基礎的な臨床能力を身につけた言語聴覚士の養成を行っていきたいと考えている。

③実習実践記録の導入

実習実践記録は、学習ポートフォリオの考え方を基に、学生自身が自発的に学びの変容を多面的多角的に評価し、新たな学びに生かすために、振り返りを通して獲得した学習成果をみることが出来る記録集を導入した。学生自身が目標及び計画を立案し、自身の学びをモニターできること、また、振り返り（省察：reflection）を通してメタ認知能力を強化し、専門職として生涯学び続ける「学習のスキル」を修得することを目指している。

3) 国家試験対策（対策の早期化と体系化、及び不合格者への対応強化）

本学科の国家試験対策は 3 年次から小テスト、模擬試験、国家試験のガイダンスと学生の国家試験に対する意識改革に早期から取り組んできた。1 年を 4 期に分割して、各期での目標を明確化し、特に過去の学生の GPA と国家試験成績の相関が高い ($r=0.67$) という分析結果を受け、年間を通して GPA に基づいた対策、学習達成度別指導を早期から取り入れ、低成績者の能力向上に大きく貢献したと言える（平成 21(2009)年度合格率 96.6%、平成 22(2010)年度 96.4%）。また、教員が専門基礎科目、専門科目を担当制で明確化し、科目の出題傾向を分析し、その傾向に応じた対策を実施してきた。年間を通し

平成 21(2009)年度 14 回、平成 22(2010)年度 15 回の模試を実施し、全過去問題を抽出した過去問模擬試験、学科教員が作成するオリジナル問題は年間 10 回実施し、知識を統合させた新たな問題にも対応できるよう考慮した。また、早朝講義（毎朝 30 分）、夏季 2 週間（7 月下旬～8 月上旬）約 50 コマと冬季（1 月中旬 2 週間）約 20 コマ、重点科目の対策講義を行った。今後は全科目の対策講義の実施を視野に入りたい。不合格者平成 21(2009)年度 12 名、平成 22(2010)年度は 1 名に対して、日中の学習部屋の提供、模擬試験の受験対策講義への参加、定期的な個別面談を行い、全員合格に向けて支援を行った。その結果、全国の 4 年制大学の既卒者合格率（約 40%）の平均を大きく上回る数字となった（平成 21(2009)年度受験者 12 名、合格者 12 名 既卒者合格率 100% 平成 22(2010)年度受験者 1 名 合格者 1 名 既卒者合格率 100%）。

2. 学生支援面（学生への個別対応、就職、キャリア支援）

学生の生活状況や学習態度、メンタル面の把握の為に個別のアドバイザー制度を設け、定期的な個別面談を行い、深層化する問題の早期発見、早期対応に努めた。特に、親元を離れ不安な 1 年生には 4 月に新入生セミナーを実施し、学生同士の交流、学年を超えた交流の機会を設けた。加えて、定期試験後、成績が不良な学生には面談を行い、アドバイザーが自ら学生一人一人に成績表を渡すことで、学生の習熟度及び勉学の悩みに適宜助言、指導を行うことができた。

進路・就職活動指導は、3～4 年次に各学生が卒業後 1 人の社会人として自立するにあたり、その意識を明確化し、意思決定にいたる過程を支援することを基本方針とした。学生に 1) 専門職としての適性の検討、2) 求職施設の絞り込み、3) 求職のための具体的・実践的な活動、4) 個別的希望・意欲・独自性を積極的に表現する能力等について、個別に支援した。オリエンテーション、希望調査(4 月)、就職面談シミュレーション(7 月)、就職説明会(8 月)、個別面談による意識確認や活動継続もしくは休止などの助言を通じて、就職活動を円滑に行えるよう支援を行った。その結果、学生の就職活動の効率化が図られ、平成 21(2009)年度、平成 22(2010)年度共に 100%の就職率を達成した。

3. 研究面

平成 21(2009)年度の言語聴覚学科教員 15 名の研究業績は、原著論文 10 編、著書 13 編、総説 5 編、講演 57 件、学会発表 56 件、研究報告 10 件であった。また、研究費申請状況は、学内研究費申請 10 件／採択 10 件、文部科研費 4 件、厚生労働科学研究費 6 件であった。平成 22(2010)年度は平成 21(2009)年度以上の研究業績が得られており、更なる研究活動の活性化が期待される。

4. 学科内 FD 活動

平成 20(2008)年度より学科内 FD 活動を開始した。「臨床教育の質の向上」をテーマにコアカリキュラム案を作成し、臨床教育体制の大きな示唆を得ることが出来た。今後は、年 3 回程度の定期的な FD 活動を実施していきたい。

5. 国際性

平成 22(2010)年 2 月、韓国ナザレ大学より言語聴覚障害学専攻の学生 20 名が来学し、施設の見学及び本学学生との交流を深めた。各々の大学におけるカリキュラムや実習などを学生がスライドで発表しあい、活発なディスカッションも行われた。平成 22(2010)年 8 月には、海外社会保健福祉事情の引率で、学科教員谷合がベトナムに同行し、現地での交流や現場での体験を通して、交流を深めた。

6. その他

本学科同窓会おおり会との連携の下、年 1 回の卒後研修会、年 5 回程度の臨床教育会を開催し、卒後教育の充実を図っている。平成 20(2008)年から始まった卒業生ネットワークの構築と卒後教育の充実のため、卒業生に配信するメールマガジンを通じて就職、研究会、学科の現状等の情報提供及び卒後教育の充実を進めた。

また、年 2 回の保護者懇談会を設け、学科の現状や実習、学生生活、就職活動に関する全体説明を実施した。さらに、学業や実習等の相談を個別に対応できるようアドバイザーとの個別相談の場を設けるなど、保護者との連携を強化した。

(5) 保健医療学部視機能療法学科

1. 教育面

1) 教育内容

学科の教育理念は、本学の3つの基本理念と7つの教育理念を踏襲し、以下の3つを掲げている。(1) 専門科目では解剖・病理・生理学の基礎知識と関連づけながら段階的に理論を修得することで知識の定着を図るとともに、英文教科書を積極的に活用し、幅広い最新の知識を身につけ国際性を養う。(2) 学内の実習・演習では講義と密接に連携した課題を用いることで、修得目標を明白にし、勉学意欲を高めるとともに科学的洞察力を養う。(3) 低学年から数多くの臨床体験を積むことで、医療職に携わる人間としての心構えと気配りを十分に持ち、チーム医療の中心を担うことのできる豊かな人間性を育み、即戦力を有したプロフェッショナルを育成する。

この教育理念を具現化するため、カリキュラムは学年進行に沿って、段階的、体系的に学習できるよう、1・2年次に総合教育科目と専門基礎科目、3年次に専門科目、4年次に応用・発展科目を配置している。実習関連では、1年次に病院見学、2年次に社会福祉学実習と外来見学実習、3年次に保育実習、ロービジョン医学実習、定期的な外来実習、高齢者視機能評価実習、そして平成22(2010)年度から新たに園児視機能評価実習を開始した。4年次に臨地実習及び園児・視機能評価実習を実施している。学科カリキュラムは完成年度を迎えた平成18(2006)年度に視能訓練士養成カリキュラムの大綱化に沿って大幅な見直しを行い、翌平成19(2007)年度に一部の手直し(解剖学・物理学の単位増、若干の科目統廃合など)を行った結果、現在体系的なカリキュラム編成となっており、卒業に必要な単位数は129単位以上である。専門科目の理解度は概ね良好であるが、ごく一部の学生は授業に十分ついていけず、このような学生に対して、平日の空き時間や夏期・春期休暇中に補講を実施している。近年目立つ入学時の基礎学力不足に対して1年次の視機能概論でライティング、専門基礎英語、専門科目に必要な理科の導入講義、2年次後期にディベートの演習を実施しているが、学生間での学力や学習意欲の差が大きいことと履修時間の確保が課題である。在籍者数は1年生50名、2年生54名、3年生50名、4年生47名(平成22(2010)年4月1日時点)である。救済措置として全ての専門科目で再試験を実施しているが、進級条件に満たない学生数は平成21(2009)年度2名、22(2010)年度10名であった。今後留年者の減少に努めたい。

2) 臨地実習

4年次の前後期に各6週間、計12週間行われる臨地実習は、平成21(2009)年度・平成22(2010)年度ともに39施設で実施した。臨地実習終了後、学生は報告書を作成し、3年生も全員出席して臨地実習報告会を開催している。臨地実習に先立ち、毎年2月に臨地実習指導者会議を開催し、実習指導者側から提案された問題点や要望を実習前のオリエンテーションにフィードバックし改善を図っている。オリエンテーションでは臨地実習の流れを説明し、車椅子誘導の仕方、接遇講座とロールプレイなども行っている。実習指導者からの評価は、良かった点、改善すべき点をコメントにして学生に還元し、後期臨地実習及び今後に役立ててもらっている。3年生までの学内実習では、

検査技術や原理を習得することはできるが、臨床に直結した知識や実践力の修得が十分ではない。そのため、学外での園児視機能評価実習や、高齢者視機能評価実習等を新たに取り入れ、臨地実習に出たときの実践力を身につけさせるカリキュラムを工夫している。

3) 国家試験対策

成績下位者を対象として補講を実施している。3年生では夏期1週間(約10名)、春期2週間(約10名)、4年生では学年全員を対象として卒業試験3回(5月、9月、1月)、成績下位者10名程度を対象とした模擬試験を5回(11~12月)実施し、学力の向上が認められない学生にはマンツーマン指導を12~1月にかけて1ヶ月間実施している。平成20(2008)年度に引き続き、平成21(2009)年度、22(2010)年度も国家試験に全員合格した。なお、国家試験不合格の場合にあっても、特別に卒業試験の受験を認め、聴講生等の手続き等を紹介し、勉学を継続できる環境作りに努めている。

2. 学生支援面

1) 学生支援・就職

就職活動に対するモチベーション及びスキルアップを目的として、卒業生による就職活動体験講座、企業就職者による面接講座を企画、実施している。就職活動支援としては、ゼミ単位での履歴書の添削指導、個別模擬面接、求人情報のメール配信、病院見学のセッティング及びサポートを行っている。求人件数を増やすため、地元就職を希望する4年生の地方出身県の眼科を中心に約1,000件の求人票を送付している。求人は、平成21(2009)年度は133件(190名分)、平成22(2010)年度は131件(249名分)と学生一人に対して3~5件の求人率があった。平成21(2009)年度と22(2010)年度の、卒業生を母数とする就職率は100%であった。1期生輩出から6年が経過し就職後に離職する者も予想されるため、卒業生の再就職の状況把握とその斡旋にも努めている。

2) 生活安全支援

交通安全・生活安全に関する注意喚起は4月のオリエンテーションを皮切りに大学SST資料を使って繰り返し行っているが、夏休み明け9月から年末を中心に事故発生率が上がる傾向がある。出会い頭や後退時等、不注意によると思われる事故が多い。現状では事故発生率は5%強で学内でも低い方であるのに対し、違反は約6%と全学と比較して高い傾向にあり、今後の指導に工夫が必要である。学科の特徴として女子学生の比率が高いため、一人暮らしで犯罪被害に巻き込まれないための自己防衛対策についても具体例を挙げ、繰り返し指導を行っている。

3) メンタルケア支援

4年間の継続担任制を採用し、年次ごとの個別面談等を通じて学生個々の状況をできるだけ細かく把握できるよう努めている。講義の連続欠席・学内実習の様子等につき学科教員間で速やかに情報を共有し、問題がありそうなケースについては同級生を通じて教員に相談するよう指導している。学生間、教員-学生間の関係・連絡も密にし、早い段階で対処可能な体制をとっている。専門的ケアが必要なケースについては学生

相談室・地域の外部医療機関と連携し、適切な対応に努めている。当事者・周囲を含め、落ち着いた大学生活を送るための環境作りの支援にさらに努める必要がある。

3. 研究面（研究業績総括、研究費申請および獲得状況）

1) 研究業績総括

平成 21(2009)年度は著書 5 編、原著論文 1 編、講演 3 題、学会発表 4 題、研究報告 5 件であり、平成 22(2010)年度は、原著論文 4 編、学会発表 9 題（国際学会 3 題）、講演 13 題、研究報告 4、その他雑誌執筆 4 であった。

2) 研究費申請及び獲得状況

文科省の私学補助事業「教育・学習方法等改善支援」において平成 20 年に続き平成 21 年度に「地域社会と連携した視能訓練士教育—実践教育の開発と発展—」として補助を受けた。また、平成 22(2010)年度に文科省科学研究費補助金（基盤研究 B、代表者：新井田孝裕）が採択された（～平成 26（2014）年度）。課題名は「多職種連携による心身障害児・者の客観的視機能評価法の確立と普及」である。学内研究費は毎年技術助手を除くほぼ全員が採択されている。

4. 学科内 FD 活動

毎週 1 回ミーティングを開催し授業や実習の短期的問題点を話し合い、内容改善を図っている。ここから出てきた長期的問題点に関しては夏期及び春期休暇中に不定期のミーティングを開催し大幅な授業や実習の内容変更を行っている。現在進行中の課題として各講義間の連携を強化し、学生がシームレスに勉学できるようシラバスの詳細化と授業内容の充実を図っている。また実習評価方法の見直しも行っている。

5. 国際性（国際交流、留学生）

ベトナム、中国、オーストラリアなどアジアを中心にその国の保険福祉の状況を知る「国際保険福祉事情」という授業があるが、平成 22(2010)年度に視機能療法学科の学生一人がオーストラリアで約 2 週間研修を受け、貴重な体験をしてきた。学科として本授業の研修参加を積極的に学生に呼びかけている。

6. その他（学科同窓会、保護者会、学科のトピックスなど）

1) 学科同窓会

年 1 回定期的に全学的に開催されるマロニエ会総会に加え、学会開催時（特に弱視斜視学会や視能矯正学会）を利用して学科独自の同窓会を不定期に開催している。平成 21(2009)・22(2010)年度にはそれぞれ 20～30 名ほどの卒業生が集まり、教員を交えて懇談し、近況報告や情報交換を行っている。

2) 保護者会

「風花祭」と同日開催される教育後援会「会員のつどい」の学科別懇談会では平成 21(2009)年度 40 名、22(2010)年度 52 名の保護者にご参加いただいた。学科の現況や臨地実習、学生生活、就職活動に関する全体説明に加え、各クラス担任との個別懇談を行っている。こうした保護者個別懇談会は、水戸、仙台などの数箇所でも実施して

いるが、遠隔地にお住まいで参加できない保護者も多いため、臨地実習での宿泊・交通費負担のお願いや成績不良学生の保護者への周知徹底等は学科から資料・手紙を郵送して対応している。

3) 学科のトピックス

平成 19(2009)年度より視能訓練士を養成する全国の養成施設が加盟する日本視能訓練士養成施設連絡協議会の事務局を担当しており、厚生労働省からの国家試験に関する調査依頼の取りまとめを含めて学校間に必要な連絡事項の伝達、教員研修、広報活動(ポスター・リーフレットの作成とホームページの開設及び更新)、国家試験不適切問題の検討、日本視能訓練士協会及び日本眼科医会との連携、学業優秀な卒業生への優秀賞の授与などさまざまな活動を実施している。本協議会は、平成 22(2010)年度に全国視能訓練士学校協会として再出発した。

(6) 保健医療学部放射線・情報科学科

1. 教育面

1) 教育内容

放射線・情報科学科の教育目標は、国際医療福祉大学の基本理念及び教育理念に則り、学科の教育基本方針の下、本学が目指す「人間性豊かな医療専門職の育成」と、当学科の目指す「時代が必要とし、将来を担える診療放射線技師の育成」を目標に掲げ、教育内容・教育方法の改善を図っている。

専門的知識を学ぶとともに、日々進歩している技術に将来にわたって対応できる基礎学力を身につけ、自ら思考し判断できる力を養うため、必要な基礎知識と、真理や本質を追究するものの考え方・学び方の基礎・基本を習得できるよう、基礎科目から専門科目、実験・実習への連携を強く意識し、それを実現するための体系化されたカリキュラム編成で教育を進めている。また医療の現場で進む医療情報システムにも対応できるよう、医療情報関係の講義も組み込まれている。さらに人間性の涵養には一般の講義の他に、決め細やかな指導ができるようプレゼミ、2年ゼミ、卒研ゼミなど、担当教員を決め、学習支援、学生生活支援等の個別指導も行っている。

入学者の多様化に伴って、近年、1、2年次の成績不振者が増加傾向にあり、学科教育委員会を中心にリメディアル教育の一環として数学の補習授業やプレゼミナールの実施などの対策を進めてきたが、平成20(2008)年度から2年次の成績不振者に対する学習・生活指導を目的に2年ゼミを実施した。大きな改善を見るに至らなかったが、到達レベルを維持して成績不振者を無くすといった根本的な改善につながるような施策を今後も継続的に実施していく必要がある。また、これまで学科独自に実施してきたA0、推薦入試合格者への入学前教育について、任意ではあるが外部業者を使った対応を行っており、入学者の基礎学力レベルが向上することを期待している。

2) 臨地実習

学科臨床実習委員会を中心に臨床教育の充実と円滑な実習運営に必要な施策を実行した。

早期に臨床を経験する意味でプレゼミナールの中で1年生対象の附属病院見学を実施し、施設の機能や自職種の役割の理解と学習意欲の喚起及び医療人としての自覚を促した。

3年次に行われる臨床実習では、教育と臨床現場が密接に連携し、大学での講義と現場の知識・技能を関係づける実習体制の維持・改善と教育効果の向上を図りながら実習を進めている。平成22(2010)年度は臨床実習指導者ガイドラインの指導内容について見直しを行い、改訂版を各施設に配付することで教育水準の確保に努めた。また、臨床実習指導者会議や実習施設訪問等を通して、施設側との意見交換を行い、円滑な実習が行える環境を維持した。実習期間中の学生のケアについては、連絡体制を構築し電話やメールでの相談に加え、休日を利用した個別面談の実施など学生の不安要因の解消と適切な指導に努めた。実習後の指導についても、実習施設からの評価を学生個人にフィードバックできる指導体制の整備を行った。更に、実習に伴う学生個人の経費負担軽減の観点から新規実習施設を確保し、臨床実習指導体制の強化を行った。

今後も実習施設との更なる連携強化により教育水準の維持向上を進めていく必要がある。

3) 国家試験対策

国家試験対策については、留年者を増やすことなく高い国家試験合格率を維持することを目標に国家試験対策委員会を中心に対処を進めた。平成 22(2010)年度カリキュラムから国家試験対策科目として放射線学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲを設け、その一環として全 8 回の実力試験を実施し、学生の学習状況の確認と到達目標を明確にして効率的な学習を進めることができるよう指導にあたった。更に、実力試験結果を基に、成績不振学生を対象とした特別クラス指導を実施し、また、夏季補講、国試直前補講を実施した。結果として留年者は平成 21(2009)年度及び平成 22(2010)年度で 10 名以下、国家試験合格率は平成 21(2009)年度現役生 94.2%であった。今後は留年生をより少なく、国家試験合格率をより高くするために、現対策の更なる強化及び新たな対策の取り組みを検討する必要がある。

国家試験不合格者への対応としては、卒業後も聴講生として受入れることで継続して指導に当たっているが、指導環境の変化等の事情により効率よく行われているかは疑問である。対策として、平成 22(2010)年度は登校できない聴講生に対して模擬試験問題及び資料を郵送し、結果を学生から返信させることで生活環境に依らない継続的な指導の実践を試みた。今後も受講生のニーズに合わせた対策を検討する必要がある。

2. 学生支援面

就職・進学支援については、学生課と就職担当教員、学科就職対策委員会が中心となり、情報収集及び紹介等を行い、卒業年次の学生に対しては学科独自の就職活動のガイダンスを実施し、就職活動全般にわたる指導を行っている。就職に関する個々の学生への対応はもちろんのこと、学科として診療放射線特論の中で、履歴書や小論文の書き方、面接の仕方等の実践教育を実施するとともに、いろいろな経歴をもち、いろいろな病院、職場に勤めている先輩達から就職活動、就職先の状況などを話してもらい、自分の進路決定の一助としてもらっている。今後も学生が就職への意識を明確にするよう努める多様な企画を実施し、社会的ニーズに対応した指導を行っていく必要があると考えている。

学生生活支援については、学生委員・学科イベント担当教員が中心となって、学生活動を支援した。学内行事では、2 年生による新入生歓迎会や運動会の企画及び運営の補助を行うなど、学生との一体感を演出できる工夫をしている。また、入学式及び大学祭での学科別保護者懇談会開催時に、保護者に対し大学と一体となった学生支援協力を要請するなど多方面から指導できる工夫を施している。学習面においては、学生委員が中心となり理由不明欠席者の早期発見と早期の教育的な指導を行なっている。問題を抱えた学生に対しては、メンタルケアも含む生活支援を、学年担当教員及びゼミ担当教員、学生相談室が連携して対応している。しかしながら、教員から学生を呼び出さない限り、学生の方から積極的に教員に相談にやってくる事例は極めて少ない。教員と学生との交流を促進するために、これまで以上に何らかの工夫、企画を考案する必要があるように思われる。また、安全で安心な学生生活を送れるよう、学年担当

教員が、交通安全や防犯、薬物乱用防止などに対する意識の高揚などの指導を定期的に行っている。今後も継続して実施していく。

3. 研究面

多数の教員は国内外の学会での発表、論文投稿を行っている。科学研究費の申請は、各教員の判断で実施しており、厚生労働省科学研究費を獲得している(1名)状況である。また、学会の要職を担う教員も多く、各分野専門領域の学術大会の大会長やプログラム委員を務める等放射線領域の学問の進展に貢献している。

4. 学科内 FD 活動

成績不振者への対応や各科目の理解度の向上を目指し、学科教育委員会での議論を学科共通の課題として認識し対応することを目的に、平成 19(2007)年度から学科 FD を年 2 回実施している。講義や実験の改善をテーマに講義アンケートの結果や自身の反省から、どのような工夫、改善が必要かを各教員から報告してもらい討論を実施している。特に、新任教員や教育経験の浅い教員などが教育活動を行う際の一助となっており、一定の効果があると評価できる。

5. 国際性

平成 19(2007)年度から本学の提携大学である、台湾・元培科技大学で開催された学会に、本学科を卒業した本学大学院生が 1 名ずつ参加し、学術口頭発表を行った。また、平成 20(2008)年度には元培科技大学から本学へ研修に訪れた 2 名の学生を受入れ、X 線 CT、MRI 及びデジタル画像処理に関する講義・実験を実施した。

平成 19(2007)年度から、一つの卒業研究室が、海外学術研修として韓国の高麗大学の放射線科学科での学術発表会と、延世大学セブランス病院で臨床実習を行い、韓国の医療技術者の教育と実践の現状を把握するとともに、日韓の医療技術者を志す学生同士の交流を行っていた。平成 22(2010)年度からはこれを学科行事として拡大し、学術発表会を英語によるプレゼンテーションとするなど、今まで以上に国際性を見につけるにふさわしいプログラムとしている。

(7) 医療福祉学部医療福祉・マネジメント学科 (医療経営管理学科)

1. 教育面 (教育理念、カリキュラム、在籍者数、単位認定)

1) 充実した教育内容とその特徴

医療経営管理学科は平成 9(1997)年に医療経営管理に関するわが国で初めての学科として誕生した。文系・理系を問わず、医療福祉分野を目指す学生を育成する教育理念のもと、医学系科目、経営学系科目、情報学系科目など幅広い履修科目を設定している。1年次及び2年次は担任制、3年次及び4年次はゼミナールにより少人数の学生が担当教員の指導を受けることができる学習環境を整備している。3年次は4週間の長期間にわたる病院実習を行い、病院の事務職としての業務を体験する貴重なカリキュラムを設けている。医事課、診療情報管理室など病院組織の各部門の実務に触れることは履修内容の理解度を自ら知る機会になると共に、就職活動を意識した経験につながる。4年次は関連職種連携実習に参加することにより病院管理の観点からチーム医療の重要性を学ぶことができる。また、4年生は卒業論文の作成が必修科目に位置付けられている。研究テーマの設定からデータの収集分析など一連の研究活動を学習できる。大学での講義と病院実習など体系的な病院マネジメントに関する学習により、質の高い医療経営スタッフの専門家を育成してきた。

平成 21(2009)年度の在籍者数は1年生 162名(SHM 全学生)、2年生 86名、3年生 85名及び4年生 114名、平成 22(2010)年度は1年生 184名(SHM 全学生)、2年生 54名(SHM のうち HM 系 2 コース)、3年生 79名及び4年生 85名であった。早期から学習状況を把握すると共に、2年生から3年生の進級時には進級判定会議を設け、担任教員や学生委員が連携しながら成績不振者に対する学生指導を重視している。

医療経営管理学科は平成 21(2009)年 4 月、同じ医療福祉学部の医療福祉学科と統合し医療福祉・マネジメント学科となった。医療も福祉もマネジメントも学べる学科として、入学後は広く医療福祉分野の履修を行い、2年次にコース選択を行う。これまでの医療経営管理学科に対応するのは「診療情報管理コース」「医療福祉マネジメントコース」など 2 コースに位置づけられている。また、学科の特色である少人数教育として1年次には入門ゼミが開講されるなど極め細やかな指導体制が受け継がれている。

2) 臨地実習の概要

通常の履修科目により知識を習得すると共に、病院実習として医療機関の実務を経験することは学生にとって貴重な体験となっている。特に、医療経営管理部門は病院事務職の業務を理解することが重要であり、病院組織における複数の部門を計画的に体験できることは本学科カリキュラムの特色である。また、病院業務には欠かせない診療報酬制度の流れを習得するためには1ヶ月のサイクルを理解することが必要となることから、3年次の夏季休暇期間を対象に4週間の実習を行っている。実習先医療機関は北海道から沖縄まで全国に渡るなど、特定地域に埋没することなく全国レベルで病院医療界を捉える広い視野を育むことができる。実習前の事前学習はゼミナールにより実施され、実習後は実習報告会を開催し成果を発表している。ゼミナール担当教員と実習病院担当教員が複数で連携しながら担当することで教育効果を高めている。平成 21(2009)年度の実習施設は 36 病院、実習生 85 名、平成 22(2010)年度の実習施設

設は 34 病院、実習生 79 名となっている。

3) 資格試験対策

医療経営管理学科では、より専門的な学習を行うことを目的として、平成 13(2001)年度から「緩やかなコース制」による、医療福祉経営コース、診療情報管理士コース、医療情報・医事コースの 3 つのコースを設けている。

医療福祉経営コースは、医療福祉の経営管理に貢献できる人材の育成を目的としている。医療福祉の経営管理スタッフが必要とされる「法律」「簿記・会計」「人事・労務管理」「質評価・サービスマネジメント」「経営戦略・分析」「医療制度」であり、多様な分野の知識を身につけ、その基盤となる各種資格取得を目標とする。このコースで目指す経営学検定試験は平成 21(2009)年度入学生 43 名 (93.5%) が資格取得しており、SHM2 年生 HM2 コース学生の 9 割超の合格実績である。また、病院財務を理解する上で基礎知識となる日商簿記検定にも力を注いでいる。

診療情報管理士コースは、医療機関で扱う診療情報に関する実務に強く、しかも幅広い医療的知識と管理手法を研究し獲得できる人材を育成することを運営方針としている。本学科は日本病院会の受験指定校（いわゆる「認定校」）となっており、診療情報管理士認定資格を希望する学生も多い。学科カリキュラムにおいては 3 年次前期までに指定科目の単位を習得することにより、3 年次及び 4 年次の認定試験の受験機会を得ることができる。通常授業から受験指導までの一連のカリキュラムを確立した結果、平成 21(2009)年度卒業生の資格取得率は 77.8% (約 8 割) を達成している。平成 21(2009)年度の認定大学の平均合格率は 44.3% に対し、本学科は 68.1% とはるかに上回る。また、本学科の合格者数はのべ 63 名であり、これは認定大学 13 校の全合格者の約 3 割を占め、全国一の合格者数である。

医療情報・医事コースは、医療情報及び医療事務に関する実務に強く、幅広い知識と手法を研究し獲得することを運営方針としている。医療機関の運営を考えていく場合に診療報酬に関する知識は不可欠である。診療報酬請求事務能力認定試験は平成 19(2007)年度入学生は 23 名もの合格者となっている。さらに、電子カルテをはじめ医療情報に関する知識については医療情報基礎知識検定試験の合格者は 63 名、社会人レベルの難易度を有する医療情報技師能力検定試験においても合格実績が得られるなど医療情報部門における目標資格として定めていている成果が現れている。

なお、医療福祉・マネジメント学科においては、2 年次にコース選択が行われ、診療情報管理コース及び医療福祉マネジメントコースによる推奨資格を対象として継続した取組みが実施されている。特に、医療経営分野における実践的な素養として情報系スキルを重視する観点から、国家資格である IT パスポート試験に取り組んでいる。受験対象者による個別学習会を構成した結果、合格率は全国平均 51.9% に対し、本学 78.9% を得るなど優秀な合格実績を有している。

2. 学生支援面

医療経営管理学科の特色である少人数のゼミナール教育は、日常的な学生指導のひとつの結果として高い就職率の実績につながっている。昨今、大学生の就職難が一般報道され、特に文系大学の就職は氷河期であると表現されるように厳しい状況が続い

ている。そのなかで、本学科の平成 21(2009)年卒業生の就職率は 95.6%となり、平成 17(2005)年度卒業生より毎年 9 割を超える就職率を達成している。

学生のメンタルケア支援に関する基本的方針は、入学後早い時期から必須授業の出席状況を定期的に確認することから始まる。1 年次及び 2 年次は担任制による教員が担当し、学生委員及び教務委員との連携により不登校気味の学生に対し早期のケアに重点を置いている。また、3 年次及び 4 年次はゼミナール教員が担当することにより、高い専門性によるゼミ授業の他、各種資格試験のサポート、就職活動に対する全般的指導、生活安全面の諸注意など学生生活の総合的な観点から支援体制を展開している。

3. 研究面

医療経営管理学科において、厚生労働科学研究費補助金（研究題目「質効率向上と職業間連携を目指した病棟マネジメントの研究」、「医療費の構造分析と適正化に向けた政策的課題に関する研究」）などの公的研究費や研究助成金による複数の研究が行われている。著書、原著論文、総説については、医学、医療経済学、医療情報学など広範な研究領域にわたる活動が本学科の特色と言える。大学院との連携を図りながら、近年、医療界で注目されている医療ツーリズムに関する最先端の研究活動にも努めている。

また、本学科が事務局となっている「特定非営利活動法人日本 DPC 協議会」は複数の医療機関から構成され、DPC に関する医療情報を一元的に集約することにより、学部学生の卒業論文、大学院生による博士論文や修士論文の基礎データとして活用している。これらは、研究的価値が高く、診療報酬制度に対する歪みを指摘することによる改善を目的とした厚生労働省に対する政策提言事業を行うなど、他の大学にはない資産と実績を有している。

4. 学科内 F D 活動

医療経営管理学科は医学系、経営系、情報系など多彩な専門領域からなる教員で構成されているため、研究活動の領域も広範にわたっている。教員相互間の研究に対する情報交換を目的として定期的に学術会議を開催してきた。専門領域及び所属学会に関する最新の話題提供を含め、学術研究の発表に対し様々な立場から意見交換することにより、今後の研究及び教育における質的向上を目指している。これらの方針は、医療福祉・マネジメント学科においても同様に位置付けられている。

5. 国際性

医療経営管理学科には平成 21(2009)年度、中国 2 名、カンボジア 1 名の留学生 3 名、平成 22(2010)年度にはネパール 1 名、ラオス 1 名の留学生 2 名が在籍していた。留学生の勉学面及び生活面の指導は大学の国際交流センターを兼務する学科教員がチューターとなり、担任やゼミナール教員と連携しながら学生生活をサポートする体制を整備している。大学院へ進学する留学生が多く、大学院指導教員との円滑な情報交換を心掛けている。

6. その他

国際医療福祉大学附属 4 病院における医事部門及び診療情報管理部門に対するマネジメント領域について、東京事務所医療管理部と連携調整を行いながら実効ある活動を行っている。「病院運営の質的向上に関するプロジェクト（質プロ）」は、附属病院における監視機構的役割と教員指導的役割を担っている。特に、DPC 対象病院として診療情報管理部門が携わるべき事項について、医療経営管理学科教員の専門的立場から DPC 制度の理解及び具体的な運用体制に対する提案などを行った。診療情報管理部門における業務改善など定期的な現地訪問及びアドバイスは、一定の成果が得られたと考えている。

また、特定非営利活動法人日本 DPC 協議会は医療経営管理学科が事務局を引き受け、複数の教員が積極的に活動を行っている。日本 DPC 協議会は平成 16(2004)年度より活動を開始し、平成 19(2007)年度には NPO 法人化を取得している。現在の会員数は病院会員 71 施設、個人会員 41 名であり、全国の医療機関から構成されている。日本 DPC 協議会の教育研修事業として開催している年 2 回の DPC セミナーは毎回 200 名超の参加となり、医療関係メディアにも取り上げられている。平成 22(2010)年度は、のべ 8 回にわたる DPC に関する学習会を開催し、総数 600 名を超える参加が得られるなど学術的観点から社会貢献を果たしている。

(8) 医療福祉学部医療福祉・マネジメント学科 (医療福祉学科)

1. 教育面

1) 教育内容

①教育理念

医療福祉・マネジメント学科 (旧医療福祉学科) の教育理念の第1は、本学の教育理念にも掲げられている「共に生きる社会の実現」のために、生活上の様々な困難を抱えている人と「共に歩く」ことができる社会福祉専門職 (社会福祉士・精神保健福祉士・介護福祉士) を養成することである。第2に、本学の特色を活かした教育の中で、福祉だけでなく医療についての知識も持ち、実践において医療専門職とチームアプローチできる福祉専門職を養成することである。第3に、今後の医療福祉業界において求められる、病院や福祉施設の組織経営についての知識を持ち、医療福祉の総合的なマネジメント力を持つ福祉専門職を養成することである。

②カリキュラム

本学科の特色は、国家資格のダブルライセンス取得が可能なカリキュラムを組んでいることである。社会福祉士国家資格の取得を基本に、これに加えて精神保健福祉士若しくは介護福祉士のいずれかの資格の取得を目指すことができる。第二に、ゼミを中心に徹底した少人数教育を行っていることである。1年次の入門ゼミに始まり、4年次の卒業研究ゼミまで、4年間一貫した少人数教育を行っている。第三に、徹底した実習教育を行っていることである。社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士コースそれぞれに実習が設定されており、2年次～4年次にかけて実習を通して専門性を高めている。また国家資格取得に必要な実習以外に、医療福祉実習などの上乘せ的な実習など、より専門性を高めるための実習教育を行っている。第四に、多様な医療福祉の専門性を高めるためのカリキュラムの工夫である。学科内の他コースの科目を取得できるカリキュラムを構成することで、より多様な医療福祉の専門知識を身につけることが可能となる。また、各コース独自の特別講義を開設するなど、国家資格に必要な科目にさらに上乘せした教育を行っている。

③在籍者数

数年前まで福祉専門職を目指す学部への入学者は全国的に減少傾向にあった。本学科もその傾向を受け、平成21(2009)年度に学科再編を図った。再編後は定員数を縮小したものの、独自の努力によって年々志望者は増加傾向にある。平成22(2010)年度の在籍者数は、1年生185名 (医療福祉・マネジメント学科全体。介護福祉士コースは内28名)、2年生117名 (福祉系3コースのみ。全体では172名)、3年生103名 (旧医療福祉学科)、4年生105名 (旧医療福祉学科) である。学科再編後は、定員を超える在籍者を確保している。今後も魅力ある教育を行い、福祉専門職への志望者を増やす努力を継続する必要がある。

④単位認定 (留年など)

旧医療福祉学科では、2年次から3年次への進級要件を定め、本格的な実習に入る3年次に向けた学びの動機付けを図っていた。学科再編後は、進級条件に加え各コースごとに科目履修条件を設定し、さらなる学びの動機付けを図っている。留年生に関しては、担当教員による個別指導を丁寧に行い、次年度での進級を支援する

体制をとっている。

2) 臨地実習

実習先は、本学関連施設をはじめ栃木県内及び近隣の都県における医療機関及び福祉施設等の協力を得て実習を行っている。実習先は4年次の実習も含めると100箇所を超える。各教員、実習施設との関係性を築き、良好な実習指導ができるよう努力している。各コースごとに、実習報告会、実習指導者会議などを開催し、実習についての実習指導者の方との共通理解の促進、実習内容のフィードバックを丁寧に行っている。特に、平成23(2011)年度からの社会福祉士の教育カリキュラムの改定に伴い、実習内容のあり方について新カリキュラムに対応するための協議を、実習先と行っている。

3) 国家試験対策

国家試験対策としては、4年次に行う特別講義等を通して、社会福祉専門職としての知識のさらなる深化を図っている。また、4年次において、卒業研究の担当教員が、国家試験への学習に向けたアドバイザーの役割を果たし、個別の学習支援も行っている。この他、国家試験に向けたガイダンス、学習部屋の確保、3年生による炊き出しなど、学科を挙げて国家試験への対応を行っている。これらの努力の結果、毎年社会福祉士、精神保健福祉士とも全国の合格率を大きく上回る合格率を挙げている(社会福祉士50~60%、精神保健福祉士ほぼ100%)。しかし、社会福祉士に関しては不合格になる学生も依然多く、今後合格率をより高めるための学習方法や学習支援策をさらに検討していく必要がある。

2. 学生支援面

1~4年次を通して行われる少人数制のゼミにおいて、学生生活、学習上の相談にのり、親身な学生支援を行うよう努力している。ゼミ担当教員は、学生の生活全般に対して配慮する責任を持ち、個別相談などを通して、学生の生活や学習状況の把握に努め、個別対応を含めた支援を必要に応じて展開している。また、学科会議等で、配慮の必要な学生についての情報共有をはかり、学科全体として学生を支援していく体制を整えている。4年次には、卒業研究ゼミの担当教員が、国家試験、就職活動についての全般的な相談支援を行っている。学生一人ひとりに対し、教員の担当を明確にすることで、丁寧な支援を行えるよう心がけている。

3. 研究面(研究業績総括、研究費申請及び獲得状況)

平成21(2009)年度の研究業績は、著書21編、原著論文5編、総説3編、研究報告9編、講演32編、学会発表22編、研究助成金獲得1編、学位取得(博士)1名であった。多様な研究が行われているが、今後の医療福祉に関わる総合的な研究を、学科を挙げて取り組む必要性などが今後の課題として挙げられる。

4. 学科内FD活動

学科内の教育内容の質向上を図るため、各学年のゼミの担当者会議を定期的に行き、教育のあり方について議論している。また、社会福祉系大学でつくる協会主催の研修

会にも積極的に参加し、よりよい教育のあり方について学びを深めている。特に近年は社会福祉教育のカリキュラム改定があり、より良い社会福祉専門職教育ができるよう、学科内の会議でその対応を検討している。今後は OSCE 等の導入なども視野に、さらなる教育の質向上を図っていく必要がある。

5. 国際性

これまで学科としては、韓国、台湾、中国などの留学生の受入れを行ってきた。留学生には学生生活をサポートする担当教員を定め、学習及び生活上の相談にのる体制を整えてきた。しかし、学科として積極的に国際交流を図る姿勢はいまだ示されておらず、今後の課題といえる。

6. その他

平成 22 (2010) 年度には、学科として初めての同窓会を開催し、多くの卒業生の参加を得た。卒業生はすでに、現場の中堅職員を担う年代に入っている者もあり、今後卒業生のフォローアップ教育を通して、卒業生の専門性の向上に寄与していく必要がある。学科としては卒業生の定期的な研修の場所として、卒業生研究会などを毎月実施している。また、精神保健福祉士コースの卒業生を対象とした研究会などが毎年開催されている。

今後は、社会福祉士会、精神保健福祉士協会、介護福祉士会、医療社会事業協会などの職能団体とも連携した実践者教育の場を、学科として充実させていくことも重要である。大学として、実践者と共に、研究活動を展開していくことも望まれる。今後、検討をしていく必要がある。

(9) 薬学部薬学科

1. 教育面

1) 教育目標

薬学部の教育理念は、本学の三つの基本理念である「人間中心の大学」「社会に開かれた大学」「国際性を目指した大学」と同様であり、かつ、それを基に(1)“くすり”の専門家としての専門的な知識や技能の習得にとどまらず、多様な学問領域に関心を持ち、使命感、倫理観、責任感、思いやりの心などの豊かな人間性を持つ人材を育成すること(2)真理や科学の本質を追究するものの考え方の基本を修得し、学問を創造的に追及するとともに、将来役立つ知識と技能と態度をバランスよく身につけ、自ら考えて判断できる問題解決能力を持った人材を育成すること(3)現在または近い将来の地域医療の問題、地域社会のニーズを捉えることができ、さらに、視野を広げて国際的な医療問題についても考えることができ、様々な国の人々と連携、協働できる素地を持った人材を育成すること、という教育基本方針が設定されている。薬学部では、これらの理念と目標に合致した教育を具体的に行っており、また国際的な連携・協働の力を養うために相応しい選択科目を配置している。

2) 教員構成

平成22(2010)年12月1日現在の専任教員は、教授19名、准教授5名、講師3名、助教12名の計39名である。さらに、助手3名が配置されている。学生数(入学定員180名、収容定員1,080名)に対して、大学設置基準に定められている専任教員数(専任教員33名、そのうち教授17名、実務家教員6名以上を置く必要がある)は満たしている。しかし、薬学教育評価機構が中心となって実施される「薬学教育(6年制)第三者評価」の評価基準からすると、学生数に対する教員数は十分とはいえないのが現状である。

各専任教員は、担当科目について高い指導能力と見識を有しているが、更なる資質・能力の向上に日常的に努めている。具体的には、薬学教育協議会の教科目別教員会議、各分野に関連する学会・研究会などに参加し、新しい薬学教育に対応した知識を身に付けている。実務家教員は本学附属病院において実務を行い、専門知識の維持・向上に努めている。学内で開催される学内研究費研究発表会と教員研修会には、毎年ほぼ全教員が参加している。

3) カリキュラム

6年制薬学教育では、薬学教育の質を高め、それを一定水準に保つために、学習者の一般目標と到達目標が明記された「薬学教育モデル・コアカリキュラム」が作成されており、全教員がこのコアカリキュラムに沿って授業・実習を進めている。特に臨床教育に関しては、大学構内及び各地区の附属医療施設・関連施設を整備・拡充し、教育と臨床活動の有機的な連携を実践している。これにより、1年次から障害や病を持つ人と直接触れ合う機会を得ることができ、医療人としての倫理観と使命感を身につけることに大きく役立っている。2年次から4年次後期にかけては、実務実習モデル・コアカリキュラム事前学習の全項目を網羅した講義や医療系実習を多く取り入れ、なかでも実務実習事前学習実習に関してはモデル・コアカリキュラム以上のコマ数を当てている。そのため、全体としてはモデル・コアカリキュラムで定める122コマを超える設定となっており、充実し

た内容となっている。

4) 学生指導体制

入学直後には、勉学と生活の両面から教育の全体像を俯瞰できるようなガイダンスを実施するとともに、実力試験を通じて新入生の基礎学力を把握し、学力不足の学生に対しては総合教育科目にて補充を行っている。各学年の履修指導については、前後期授業開始前、各実習前、定期試験前などにガイダンスを通じて適切に行われている。また、学年主任制とチューター制を導入しており、学生の学習面・生活面に対するサポート体制を整えている。チューターとなる教員が担当する学生一人一人と定期的に面談を行い、成績に応じた学習方法を指導したり、メンタル面を含めた健康状態、交友関係、進路などについて質問・アドバイスをこなっている。学年主任はチューターから学生の情報を集め、偏りのない充実した学生指導ができるよう統括を担っている。平成 22(2010)年度からは、1~3 学年の留年者を「学習支援室」と称した一講義室に集め、そこで自習学習させる体制を強化している。毎日、教員が交代で該当学生の遅刻・出席状況や学習ノートなどをチェックし、学習・生活態度を向上させる努力をしている。

2. 研究活動

1) 研究業績

薬学部において、平成 21(2009)年度は著書 43 編、原著論文 20 編（国内 11 編、国際 9 編）、総説 8 編、講演 22 件（国内 17 件、国際 5 件）、学会発表 63 件（国内 57 件、国際 6 件）、学内研究発表 21 件であった。また、科学研究費など研究助成金の採択件数は 10 件であった。平成 22(2010)年度もほぼ同等の研究業績が得られており、さらに大学院生による研究発表も盛んに行われている。6 年制薬学教育では、2 年間（5、6 学年）の卒業研究も設定されており、今後更なる研究活動の活性化が期待される。

2) 先端漢方医薬学教育研究センター

平成 21(2009)年 10 月に、国内の薬系大学で初めて、産学連携による漢方医薬学の教育・研究拠点としての「先端漢方医薬学教育研究センター」が設立された。本センターは「教育部門」と「研究部門」の 2 部門で構成される。「教育部門」では、従来の生薬学並びに天然物化学関連の基礎教育に加えて、西洋薬と東洋薬に関する国際薬学史、天然生薬や漢方薬を使用する医療の母体である中医学、臨床における漢方治療の実際などについてより専門性の高い教育を行う。一方、「研究部門」では、科学的根拠に基づいた漢方医療の推進を目的とした基礎研究を実施する。これらの教育・研究活動を通じて、西洋医薬学のみならず東洋医薬学にも精通した薬剤師並びに薬学者の育成を目指している。

3. 社会的活動

栃木県で唯一の薬学部として、地域の薬学教育の発展に向けた努力を以前より続けている。学生の実習先のほとんどが栃木県内であることから、県の病院薬剤師会、薬剤師会、女性薬剤師会などとの連携・協力を積極的に図っており、種々の研修会の開催や指導薬剤師養成のためのワークショップなどへの協力体制を敷いている。

一般市民に対しては、講演会（フォーラム）の開催やラジオ番組などを通じて、薬と健康に関するものから食の安全や環境衛生に関わるものまで、薬学に関する幅広い知識・情

報を分かりやすく提供している。フォーラムに関しては、下表に示すように平成 21(2009)年に 4 都市、平成 22(2010)年には 2 都市において開催された。また、茨木放送のラジオ番組「知っていますか？クスリのお話」に、平成 21(2009)年に 3 名、平成 22(2010)年には 7 名の教員が出演した。さらに、平成 22(2010)年 10～11 月には本学においてイブニングタイム公開講座が開催され、薬学部教授陣が「くすりと健康」をテーマに計 8 回の講演を行った。今後もフォーラムなど地元地域と近県で開催し、地域における健康と保健・衛生の保持・向上を図っていく予定である。

産業界との共同研究の推進にも努めており、上述したように平成 21(2009)年には産学連携による「先端漢方医薬学教育研究センター」を設立し、漢方医薬学の教育・研究拠点としての役割を担っている。

表 薬学部フォーラム（実施結果）

開催日	開催場所	内 容
2009年9月6日	山形：山形グランドホテル	特別講演「心の健康とくすり」（和田秀樹） 基調講演「地球からの贈り物 身近にある薬・薬用植物」（有澤宗久） パネルディスカッション「薬剤師の最前線」（小瀧 一ほか）
2009年9月13日	浦和：浦和ロイヤルパインズホテル	テーマ：くすりと健康 基調講演「地球からの贈り物 身近にある薬・薬用植物」（有澤宗久） 特別講演「心の健康とくすり」（和田秀樹） パネルディスカッション「薬剤師の最前線」（小瀧 一ほか）
2009年9月20日	高崎：エテルナ高崎	テーマ：くすりと健康 基調講演「地球からの贈り物 身近にある薬・薬用植物」（有澤宗久） 特別講演「がん向き合う 自分の身体と時間を大切に」（向井亜紀：テレビタレント） パネルディスカッション「薬剤師の最前線」（山田治美ほか）
2009年9月27日	宇都宮：宇都宮東武ホテルグランデ	テーマ：くすりと健康 基調講演「ストレスと漢方薬」（武田弘志） 基調講演「地球からの贈り物 身近にある薬・薬用植物」（有澤宗久） パネルディスカッション「薬剤師の最前線」（旭 満里子ほか）
2010年10月3日	宇都宮：宇都宮東武ホテルグランデ	講演「中高生のこころを救う ～若年層の精神疾患とその対策」（天野 託） 講演「東洋医学と西洋薬学の融合」（黒岩祐治）
2010年11月3日	大宮：大宮ソニックシティ	テーマ：これからの日本の薬剤師教育を考える 基調講演「これからの薬剤師教育に期待すること」（金澤一郎） 基調講演「医療における薬剤師の役割と臨床教育」（堀内龍也：日本病院薬剤師会会長） 基調講演「大きく変化してきた薬剤師の役割」（土屋文人） パネルディスカッション「これからの日本の薬剤師教育を考える」（黒岩祐治ほか）

4. その他（保護者への対応、就職支援）

保護者会は、年一回開催される「教育後援会・会員のつどい」に併せて実施している。内容として、実務実習関連、教務・国試対策関連、学生生活・就職関連の報告が各担当教員からあり、その後、質疑応答と個別対応を行っている。また、平成 21(2009)年度からは年一回（11 月）、1 年生の保護者を対象に“授業・実習参観”を実施し、入学半年後の授業や実習の様子を見学する機会を設けている。これには、平成 21(2009)年、平成 22(2010)年とも約 30 名の保護者が参加した。参観後は希望者に対して個別面談を行い、就学状況などに関する情報を提供している。そのほか、学生の現況などを記載した「薬学部だより」を年 2 回保護者に郵送しており、大変好評を得ている。

就職支援として、平成 22(2010)年 11 月に 5 年生全員を対象とした就職ガイダンスを実施し、外部講師による講義が行われた。また、希望者には模擬面接や履歴書添削指導などを行っている。今後、合同就職相談会、附属病院・関連病院説明会及び企業、薬局、病院などによる個別説明会が予定されている。

(10) 小田原保健医療学部看護学科

1. 教育面

1) 教育内容

小田原保健医療学部看護学科は、教育目的として「グローバル社会の健康ニーズに応えられる創造性豊かな看護職者の育成」を掲げ、卒業時の学生像として「自ら学び、練磨し続ける能力を持った看護職者」「高度医療・地域保健医療に貢献できる看護職者」を目指している。この教育目的を達成するために、育成する能力として「柔軟な思考と判断力」「情報活用能力」「コミュニケーション能力」「的確なアセスメントに基づく高い看護技術」「チームケアを推進する力」「国際的・学際的対応能力」の6つをあげ、学習を積み重ねていけるようカリキュラムを構成している。

看護師学校養成所指定規則の変更に伴い平成21(2009)年度より、「フィジカルアセスメント」「統合技術演習」「看護研究法概説」の必修科目を「看護カウンセリング論」「看護情報論」「関連職種市民協働活動論」を選択科目として設けた。また平成24(2012)年度から導入される保健師教育カリキュラム改正を鑑み、大田原キャンパス、福岡看護学部とともに、本学における保健師教育のあり方について検討会を行ってきた。現在、平成24(2012)年度から開始される新カリキュラムに向け、教員間で看護学科として育成したい看護師像を検討し、教育目標の見直し、各科目での教育内容の精査を行い、さらなる教育の充実と効率化を図っている。

2) 臨地実習

実習科目は10科目、23単位を72施設で行っている。厚生労働省「看護基礎教育の充実に関する検討会」による看護師教育の技術項目・卒業時の到達度を基に各領域で獲得すべき看護技術と到達度を検討し、看護師として獲得すべき看護技術13領域、保健師としての看護技術4領域、全項目数242からなる到達度表を作成し、看護技術力獲得の評価を行っている。平成20(2008)年度卒業生の看護技術到達度の自己評価最頻値が到達度と一致しなかったのは2項目のみであり、教育目標としている看護実践能力がほぼ獲得できていると評価できる。

今後の課題として、卒業した学生が地域へ貢献できることを考慮し、近隣地域の実習施設の開拓及びより適切な実習環境の充実を図る必要がある。

3) 国家試験対策

平成21(2009)年度の看護学科卒業生の国家試験合格率は、看護師国家試験が94.5%、保健師国家試験が80.0%であった。平成22(2010)年度は、前年の結果を検討し、10名の教員からなる国家試験対策委員会を組織し、3年生、4年生を対象に国家試験対策を行った。3年次では後期にガイダンス、第1回模擬試験を実施し、個別面接にて振り返りを行い国家試験勉強への取り組みについて動機付けを行った。4年次には、4月のガイダンスを皮切りに、各領域の講義を16回、補講を18回、全国模試は保健師試験、看護師試験とも3回ずつ、学内模試は保健師試験3回、看護師試験5回を行った。教員は担当学生に随時個別面談を行い、準備状況の把握や勉強の進め方の指導を行った。また後期には、試験結果の伸びが遅い学生を対象にゼミを開催し、保護者との面談も行った。他に、業者による外部補講を15回にわたって実施した。昨年国家試験に合格しなかった卒業生へは全国模擬試験の案内を送るなど、担任が定期的に連絡を取るなどの対応を行った。

2. 学生指導面

1) 担任制の導入

学生のサポート体制として、1～3年生では教員5名が担任となり、履修指導、学業及び生活に関する相談、家族との連絡調整を行なっている。また、ポートフォリオを用い、学生の目標達成に向けて主体的な取り組みをサポートしている。4年生では担任の教員を7名に増やし、通常の担任業務に加えて、国家試験や就職に関する個別面談も行っている。同時に学年担任同士が定期的に情報交換を行っている。学生の家族に対しては、入学式、大学祭、学位記授与式の際に懇談会を開催している。そこでは、学生生活における様子などの情報共有や、保護者から個別に相談をうける機会を設けている。

2) 感染症予防対策

平成21(2009)年及び22(2010)年に、感染症予防対策としてツベルクリン反応検査、小児感染症の予防接種を実施した。平成21(2009)年には新型インフルエンザの流行に伴い、学内での発症者の把握と管理、感染症予防対策の策定と実施を行った。平成22(2010)年度も百日咳、インフルエンザ等の感染症発症があり、感染症管理と学内の予防対策を徹底した。

3) 就職支援活動

教員3名で学科独自の就職対策委員会を組織し、学生への就職に関する情報提供、就職説明会の実施、就職情報の取りまとめ、病院関係者との面談・連絡・調整(関連施設、他求人病院)、関連施設のインターンシップの実施など、学部の就職委員会と調整しながら活動を行っている。平成21(2009)年度、平成22(2010)年度も就職(内定)率は100%であった(含進学)。関連施設への就職内定者は、平成22(2010)年度は34.6%であった。

3. 研究面

平成21(2009)年度の看護学科教員の研究業績は、著書5編、原著論文8編、総説2編、研究報告7編、講演8件、学会発表33件であった。また研究費獲得状況は、学内研究費1件、科研費9件であった。

4. 学科内FD活動

平成21(2009)年には、平成21(2009)年度から導入されるカリキュラムの理解を深めるため「授業展開と新カリキュラムに向けての課題」と題して、10月17日に看護学科FD研修会を行った。平成22(2010)年度は、この年3月に小田原キャンパス開設以来、初めての卒業生を輩出したことを踏まえ、学科としての教育全体を評価するため「看護実践能力の育成に向けた各領域の教育展開」と題して7月29日に研修会を行った。

各看護学領域における看護技術教育の内容・方法について情報を提供し合い、グループディスカッションで今後の課題を検討した。

5. 国際性

平成20(2008)年度に、国際交流の活性化を目指し、大学間協定を進めてきた米国、韓国及びフィンランドの各大学から講師を招き、講演を開催した。平成22(2010)年7月には台湾の国立陽明大学看護学部教授 Dr. Yiing Mei Liou 氏、9月にはフィンランドのセイナヨーキ大学看護福祉学部学部長 Dr. Asta Heikkilä 氏、11月には韓国カトリック大学看護学部教授 Dr. Soon-Lae Kim 氏による講演を開催した。また米国コロラド大学看護学部副学部長 Dr. Kathy Magilvy 氏とは、3日間にわたり講演やディスカッションを行い、交流を深めた。

(11) 小田原保健医療学部理学療法学科

1. 教育面

1) 教育内容（カリキュラム）、在籍者数、単位認定

①**教育理念**：建学の精神である「共に生きる社会」の実現を目指して、小田原保健医療学部理学療法学科が目指す人材は、①21世紀のリハビリテーション医療に貢献できる理学療法士、②科学性を備えた理学療法士、③社会（地域）生活に貢献できる理学療法士、④共に生きる社会の実現をめざす理学療法士、⑤バランスのとれた人間性豊かな理学療法士であり、常に人の痛みを理解できる人間性豊かな人材育成が基本方針である。

②**カリキュラム**：平成22（2009）年度は、一部カリキュラム変更により、新入学生から関連職種連携論が必修となり、4年後に関連職種連携論実習が加わった。講義科目と臨床実習との橋渡しをする科目として「PTスキル」という科目を配置し、1～3年生が同じ時間に合同で演習を行った。後期は、3年生が Teaching Assistant となり、1年生の PBL や 2年生の症例検討の指導を行った。平成22（2010）年度は、本校に引き続き CBT（1～3年生）や OSCE（3年生）を取り入れ、知識のみならず臨床で発揮できる情動的側面や技術的スキルの習得度を、本校及び小田原の教員で評価する体制を整えた。教育内容の質的充実が今後の課題である。

③**在籍者数**：平成21（2009）年度在籍者数：1年生51名、2年生50名、3年生51名、4年生48名であり、1年生2名（女子）2年生1名（男子）が進路変更のため退学、留年1名（4年生）、休学1名（3年生）であった。

平成22（2010）年度在籍者数：1年生60名、2年生49名、3年生52名、4年生47名であり、休学1名（3年生）、退学1名（4年）であった。

④**単位認定**：平成21（2009）年度の卒業要件は、総合教育科目、専門基礎科目、専門教育科目の総計128単位を取得することであった。進級条件は、3学年までの必修科目の単位を全て修得することである。平成22（2010）年度入学生からは、総合系の導入教育を加えたため、129単位の取得が卒業要件となった（旧カリキュラム：128単位）。

2) 臨地実習

平成21（2009）年度及び平成22（2010）年度の基礎実習（1年次：1単位45時間）と検査実習（2年生）は、9カ所の協力病院にて実施した。平成21（2009）年度の評価実習（3年次：3単位135時間）及び総合臨床実習Ⅰ、Ⅱ（4年次：6週間×2カ所、12単位540時間）は全国80施設の協力を得て実施した。平成22（2010）年度の実習では、全実習施設に対する関連病院での実習実施率は、評価実習が約21.5%、総合臨床実習が30%であった。今後、徐々に実施率を挙げ（平成23（2011）年度；評価実習50%・総合臨床実習50%を目標値）、関連施設の指導者と密な打ち合わせを行い、質的にも充実した実習内容にしていきたい。

3) 国試対策

平成21（2009）年度は、第一期生の国家試験対策であり、後期10月から開始した。

具体的には、十数回の模擬試験及び国家試験対策講義（外部・内部講師）を対策の中心とし、成績を向上させる支援策も用意した。平成22年（2010）年度（二期生）

は、前期から解剖学・生理学・運動学の整理を呼びかけ、平成 21(2009)年度を基本に国家試験対策を実施した。

2. 学生指導面

各学年に担任制を設け（2名）、学年の学事の企画・実施を行った。また、開学時からアドバイザー制を実施している。1年から4年生まで8名のアドバイザー教員が5～6名の学生を受け持ち、学習面や生活指導についてもきめ細かな学習・生活支援のできる体制をとっている。4年次には、就職委員会の委員に加え、アドバイザー教員も就職の支援を行った。

3. 研究面（研究費獲得）

平成 21（2009）年度の理学療法学科教員（11名）の研究業績は、著書3編、原著論文10編、総説1編、講演35件、筆頭者としての学会発表9件（うち国際学会2件）、学会発表18件であった。また研究費獲得状況は下記の表の通りである。

	平成 21(2009)年度		平成 22(2010)年度	
	学内研究費	その他研究費	学内研究費	その他研究費
採択件数	7	0	6	0

4. 学科間FD活動（本校理学療法学科・小田原理学療法学科合同）

本校理学療法学科（FD委員長：丸山仁司）が主体的に取り組み、小田原保健医療学部理学療法学科も加わって、合同のFD活動を年間数回実施している。平成 22(2010)月 1月 9-10日（土日）小田原保健医療学部において、第9回FD研究会が行われた。特別講演では、「理学療法教育の原点と変遷」が行われた（埼玉医科大学の黒川幸雄）。他に小田原保健医療学部から「コア・カリキュラムについて」（初山日出樹）、本校から「大学FD」（丸山仁司）と聴衆分析による「わかりやすい」講義の検討（下井俊典）の講演が行われた。7月3日（土）には東京豊島区の百日草ホールにおいて、第10回教育FD研究会が開催され、特別講演双方向型授業の紹介（下井俊典）が行われた。

5. 国際協力関係（JICA協力活動）

【JICA 第3回技術協力プロジェクト中国中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクト】

柘幸伸：短期専門家派遣、平成 21(2009)年 7月 18～31日

佐藤仁：短期専門家派遣、平成 22(2010)年 1月 18～31日

上村さと美：長期専門家派遣、平成 22(2010)年 8月 23日～平成 23(2011)年 8月 31日

柘幸伸：短期専門家派遣、平成 22(2010)年 8月 12～25日

三浦和：JICA 国際緊急援助隊医療チーム(登録メンバー)平成 22(2010)年 3月～現在

(12) 小田原保健医療学部作業療法学科

1. 教育面

1) 教育内容

①**教育理念**：小田原キャンパス作業療法学科の教育目標は障害を持つ人々の能力を目的に向かつて最大限に導き、社会での活躍へと援助し、それに伴って人々の心を支えることができる精神力、知識、技術を身につけた職業人を育てる事です。そのために①心や体に障害を持つ方々の心に寄り添える豊かな心と創造力 ②論理的思考に裏打ちされた評価・指導・援助が行える技術と応用力 ③医療・福祉・保健・教育の分野で活躍できる柔軟な適応力とコミュニケーション能力の3つの力を育てていきたいと考える。

②**カリキュラム**：1年次には幅広い教養と専門の基礎知識の獲得、2年次には疾病に関する基礎的医学知識と作業療法評価・検査技術の獲得、3年次には作業療法の治療・指導・援助技術の習得 4年次には作業療法理論と施設・地域での多様な作業療法実践の理解の習得を目標に構成されている。専門科目は演習中心の科目が多く、小グループに分かれ数名の教員が同時進行で授業を実施することや、2人の教員が交代で同じ授業を実施し、1人1人が確実に技術を習得することを目標にしている。

③**在籍者数**：22(2010)年度の在学者数は1年生53名、2年生51名、3年生49名、4年生47名である。1年間の退学者数は4年生1名、留年者数は2年生1名である。

2) 臨地実習

平成20(2008)年度から実習地の調整をはじめ、今年度の実習は2割を関連施設において実施することができ、実習指導に対して大学との連携を強めた実習をすることができた。今後も関連施設での実習を増やしていく予定であるが、ほとんどの関連施設が大学から遠方にあるため、学生の自己負担を減らすことが今後の課題である。開学から15年が経過し近隣との関係も良好であり、大学周辺の病院・施設の実習先の確保が可能になっているため、できる限り実習に掛かる学生の負担を軽減できる方向に考えていきたい。

平成22(2010)年度4年生の総合実習では、3名が不合格となり留年することとなった。うち1名は学力不足と考えるが、2名は実習途中で自ら実習を中止することとなった。教員は実習地に何度か出向いて協議を重ね、学生とも面談を行ったが継続できなかった。総合実習は長期にわたるので、実習前の学生指導を徹底することと早期の対応ができる体制を作っていきたい。

3) 国家試験対策

昨年1期生の国家試験合格率は93.8%で、3名の不合格者があった。この結果を踏まえ、国家試験対策は3年生の冬休みより模擬試験を行い、4年次の夏休みにグループ学習の体制を整え、学生がお互いに協力して試験勉強ができる環境作りを行った。実習終了の12月中旬からは模擬試験を毎週実施し、学生自らが現在の実力を自覚し弱点を知り対策に取り組んだ結果、確実に点数を上げてきている。また、成績不良者に対しては、毎日の出校を義務付け教員が試験勉強を支援した。昨年不合格であった3名中1名が再度国家試験に臨むことになり、12月から現4年生と同じグループ学習で取り組み、国家試験に備えた。

2. 学生支援面

小田原保健医療学部では、昨年、学生相談担当の臨床心理士が交代した。これまでの担当者も学生のために尽力していたが、時間帯の関係などで相談者は多くなかった。臨床心理士の交代を機に相談時間や場所等を見直し、教育後援会総会の際にも保護者に対して説明を行ったところ、UPIの結果により通知を出した学生の半数以上が相談室を訪れるようになった。これにより、各学科での教員の負担は軽減されたと考える。

作業療法学科は学年担任制をとり、1年次より原則4年間同じ担任と副担任が諸々の相談にのっている。担任は、各学年の年度初めに全学生との面談を行い、学生個人の状況の把握と信頼関係の構築に努めている。4年生については国家試験と就職について年間3～4回程度個人面談を行い、きめ細かい指導体制をとっており、週1回の学科会議で学生の状況を報告し、教員間の情報共有と学科での指導の一貫性に努めている。

保健室対応をこれまで看護学科長であった医師と看護学科教員、緊急時の判断は本学附属の熱海病院で対応してきたが、看護学科教員数の減少から、保健室対応は学科毎の対応となり、学科としての対策をたてる必要があると考える。

3. 研究面（研究業績総括、研究費申請および獲得状況）

平成22(2010)年度の研究業績は原著1編、著書5編、学会発表国内12・海外6、総説2編、講演12であった。科学研究費は2名が獲得し、学内研究費は2名が該当している。

4. 学科内FD活動

これまで学科内での教育方法に関する会議は、主に臨床実習に関する討議が多かった。臨床実習での学生の躓きを軽減し、十分な成長が可能となるように評価実習での学生指導を強化してきた。また、実習指導者との連携を図るために、年1回指導者会議を開催している。領域別に指導上の問題について実習地側と大学側の認識の一致を図っている。

5. 国際性

中国中西部リハビリ専門職養成プロジェクトの支援のため、8月に2週間2名（菅原、鈴木）と1月に10日間1名（阿部）が北京に派遣された。また、海外保健福祉事情の引率教員として1名が中国北京に同行した。2月にはシンガポールの作業療法の大学の教授による講演が開催された。海外保健福祉事情の授業では毎年10名以上の学生が各国へ参加している。

(13) 福岡看護学部看護学科

1. 教育面

1) 教育内容

福岡看護学部看護学科は、国際医療福祉大学の伝統と「人間中心の大学」「社会に開かれた大学」「国際性を目指した大学」の基本理念のもとに以下に示す4つの教育目標を卒業時の学生像として掲げている。①人間愛を内面に蓄え、人権と命に対する豊かな感性と看護に使命感をもった人格の形成を目指す看護職者、②総合的・全人的・人格的存在としての人間理解にたって、問題解決に対応できる共感と実践力を備えた看護職者、③地域社会において豊かな教養に裏づけられた専門的知識と技術、および倫理を体得した看護職者、④国際化社会にふさわしく、我が国のみならず広く国際社会に貢献出来る看護職者、これらを目指し学習を積み重ねていけるようにカリキュラムを構成している。平成22(2010)年度は学年進行中の2年目である。学生がこれらの教育目標を理解し、卒業到達できるように、看護学の全領域の教員が導入教育「基礎ゼミナール演習・実習」から学生にかかわり、進行中である。

今後の課題として、保健師課程カリキュラムの改編に伴い、平成24(2012)年4月の開講に向け科目や進度等を再検討中である。また、全キャンパス共通科目の「海外保健福祉事情」「関連職種連携論」の導入、GPA制度やポートフォリオの検討を予定している。学年進行3年目となる23(2011)年度は、3年生全員の海外研修と各論実習を実施予定である。

2) 臨地実習

平成22(2010)年度は、1年生は早期体験実習と位置づけた「基礎ゼミナール実習」及び「コミュニケーション・生活支援実習」を、2年生は「看護過程論実習」をそれぞれ4施設で実施した。学年進行に伴い、成人看護学実習、老年看護学実習、リプロダクティブヘルス看護学実習、小児看護学実習、在宅・地域看護学実習、総合看護実習を3年次後期から4年次前期に実施予定である。

今後の課題として、学生の臨床実践力向上のために実習施設との連携強化の必要性が挙げられる。これに関連して福岡看護学部は県内・近隣の看護系大学13大学と連携し、ケアリング CSD (clinical staff development) をテーマとした取り組みを開始し、実習先の臨床指導者の教育力開発につなげていく予定である。さらに実習施設が遠隔地かつ多岐にわたるため、臨地実習指導の非常勤助手の活用が必要となる。

3) 国家試験対策

国家試験対策は、2年生の後期試験終了後に学生及び保護者の代表に対してオリエンテーションを実施した。最近の状況・国家試験関連書籍の紹介など国家試験の情報提供を行った。また、学習支援の一環として国試クイズを計画し、每日一題を学生の携帯に発信している。春季休暇中も継続。今後の課題として、3年次からは学生の中から国家試験対策委員を選出し、教員による国試対策委員会と協働して国試対策の充実を目指す予定である。同時に、3年次早期に国試模擬試験を実施する予定である。

2. 学生支援面

学生のサポート体制として、学年ごとにアドバイザーを配置した。1年生、2年生とも学生10名に対し教員1名が担当した。さらにその上に学年担任を2名配置し、問題解決に努めた。教員は履修指導、学習に関する相談、保護者との連絡調整などの対応を行った。特に依存傾向の強い学生に対しては、自主的な取り組みが出来るように方向づけを示し、働きかけた。メンタルケアについては、カウンセラーを置き、学生の相談内容によっては専門医の紹介をした。学生生活安全支援では、学生委員が中心となり、学内禁煙・登下校の安全面について注意喚起するとともに、警察署による講話や食品安全面では保健所による講話を実施した。

3. 研究面

平成22(2010)年度の専任教員(24名)の研究業績は、著書8編、原著論文9編、総説1編、研究報告22編、講演36題、学会発表37件(うち国際学会3件)であった。研究費の獲得状況は科学研究費補助金基盤研究(c)1件、学内研究費として採択されたのは7件であった。

4. 学内FD活動

平成22(2010)年度は、福岡リハビリテーション学部と合同FD研修会を行った。「学生の知りたいを引き出す教育力」をテーマに全体討議を行った。その内容は福岡リハビリテーション学部・福岡看護学部紀要第6巻に掲載した。文部科学省補助事業の大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム「看護系大学から発信するケアリング・アイランド九州沖縄構想」のFD・CSD開催のうち、福岡看護学部が担当したテーマは「授業運営の評価―授業後の評価の視点―」、「国試を見据えた授業づくり」、「フィジカルアセスメントをどう教えるか」、「看護診断の正しい理解のために～事例展開と解説」、「看護診断と中範囲理論」であった。これらは大学教員及び臨地実習指導者の教育力開発に寄与した。この活動は平成23(2011)年度も継続する。

5. 国際性

平成23(2011)年1月韓国仁済大学校10名の学生と福岡看護学部の学生及び教員との交流会を開催した。他に、国立台湾師範大学健康科学部ヘルスプロモーション専攻大学院生27名との交流会を開催した。今後は、平成23(2011)年8月予定の海外保健福祉事情(国際保健論:3年・必須)の海外研修の実施に向け、学習プログラム内容の検討をする必要がある。具体的には、全教員による指導や研修先毎の担当教員を置くとともに、語学強化策を検討する。

6. その他

保護者懇談会を開催し、学科の現状(学修・学生生活等)の全体説明会を実施した。更に、アドバイザーによる個別相談を実施し、保護者との連携を強化した。今後は、学生が大学内で活動している様子を写真集にまとめ、保護者宛に配布する予定である。

(14) 福岡リハビリテーション学部理学療法学科

1. 教育面

1) 教育内容

①**教育理念**：福岡リハビリテーション学部理学療法学科の教育理念は、国際医療福祉大学の3つの基本理念と7つの教育理念のもと、「共に生きる社会」に役立つ保健医療福祉専門職の養成を行い、(1)保健医療福祉分野に国際貢献ができる人間の育成、(2)チーム医療に貢献できる人間の育成、としている。

②**カリキュラム**：平成21(2009)年度は、総合教育科目の中に大学教育入門科目として、「まなび学」を開講した。この科目は、1年次必修、2単位、30時間を当てており、大学入学初期に学ぶべき事柄を取り上げたものである。平成22(2010)年度は、「まなび学」を継続し、総合教育科目の中の総合系に配置した。

③**在籍者数**：平成21(2009)年度は、345人(1年82人、2年127人、3年85人、4年51人)であった。平成22(2010)年度は、5月1日現在370人(1年83人、2年89人、3年115人、4年83人)であった。

④**単位認定**：要件を満たした者に認定した。平成21(2009)年度の留年者は18人、退学者は8人、除籍者は1人であった。平成22(2010)年度の留年者は4人、退学者は9人、除籍者は3人であった。

2) 臨地実習

1年生に対しては、大学関連施設を利用しての見学実習を行った。2年生に対しては、模擬患者を想定しての検査実習を行った。3年生に対しては、多様な医療施設・関連施設での2週間の評価実習を行った。医療施設・関連施設における実習では、臨床実習指導者が出席する臨床実習指導者会議を通じて医療施設・関連施設との緊密な連携を図った。さらに、臨床実習中には教員が直接訪問し、臨床実習指導者との連携をとることで臨床実習が円滑に進むように支援した。臨床実習終了後には症例報告会を開催し、臨床実習での成果を教員が確認すると同時に、より多くの経験を学生間で共有できる場を提供した。両年とも評価実習及び臨床実習を6週間で行った。

3) 国家試験対策

平成21(2009)年度並びに平成22(2010)年度は、4年生及び3年生に対して模擬試験を実施した。3年生に対して模擬試験を2回実施し、国家試験に対する意識付けをした。4年生に対しては、グループ学習、特別講義、模擬試験、成績不良者への個別指導等を実施した。平成21(2009)年度受験生は、全員(100%)合格した。平成22(2010)年度は、80人中77人が合格(合格率96.3%)した。

2. 学生支援面(就職キャリア支援、生活安全支援、メンタルケア支援、部活動支援など含む)

生活安全講習会を年1回開催した。学生のメンタルケア支援は、精神科の医師が中心となり、円滑に進めるように基盤整備した。平成22(2010)年度からは、臨床心理士によるこころの相談室を開設し、運用した。部活動支援は、その活動実績をもとに金銭面での援助を行った。学生が学生生活を円滑に過ごせるようにチューター制を

採用し、学年横断的に班を構成し、その中での行事を学生主体で行うように誘導した。学生の相談は、チューターは勿論のこと、学年担当教員やその他の教員全員で個別にかかわるように配慮した。就職状況については、平成 21（2009）年度並びに平成 22（2010）年度の就職希望者は、全員（100%）就職することができた。

3. 研究面（研究業績総括、研究費申請および獲得状況）

平成 21（2009）年度は、著書 8 冊、原著論文 12 報、総説 6 報、研究報告 11 報、講演 13 題、学会発表 54 題の業績があった。研究費助成は、科研費 1 題、民間から 2 題採択された。

平成 22（2010）年度は、著書 6 冊、原著論文 12 報、総説 6 報、研究報告 13 報、講演 15 題、学会発表 38 題の業績があった。研究費助成は、科研費 2 題、民間から 2 題採択された。

4. 学科内 FD 活動

平成 21（2009）年度は、理学療法学科にて内部教員による発表会を 5 回実施した。テーマは、「学習意欲・自主性を引き出すにはどうすればよいのか?」、「新しい臨床実習形態の提案」、「理学療法士の育成」、「「考える」を考える」、等であった。また、臨床実習指導者会議のときに教育講演として、「臨床実習における情意教育」（原口健三氏）をテーマに教授いただいた。

平成 22（2010）年度は、同様の発表会を 6 回実施した。テーマは、「臨床実習評価表でみる学生の問題点と社会人基礎力」、「学生の主体性を育むために」、「学習方法を考える」、「本学科における再実習学生の特性とクリニカル・クラークシップの現状と課題」、「わかりやすい講義」等であった。また、臨床実習指導者会議のときに教育講演として、「臨床実習の在り方について」（森田正治氏）をテーマに教授いただいた。

5. 国際性（国際交流、留学生）

学科学生の海外研修として、平成 21（2009）年度はオーストラリアに 1 人、ハワイに 1 人、韓国に 3 人参加した。平成 22（2010）年度はオーストラリアに 10 人、韓国に 26 人、中国に 3 人、ハワイに 9 人参加した。

6. その他（学科同窓会、保護者会、学科のトピックスなど）

保護者会、学科別保護者懇談会を開催した。平成 22（2010）年度には、学科同窓会を開催した。

2 年間の報告、反省と今後の課題

この 2 年間は、定員増に伴うカリキュラムの変更や臨床実習施設の確保に多くの時間が費やされた。とくに平成 22（2010）年度は、大学関連施設でのクリニカル・クラークシップを実施し、その長所と短所がわかってきたので、次年度以降に改善策を講じる必要がある。

(15) 福岡リハビリテーション学部作業療法学科

1. 教育面

1) 教育内容

①**教育理念**：作業療法学科の教育理念は「創造力・分析力・問題解決能力・応用力・実践力・社会的対応力を身につける」である。この理念の基に学内教育、臨床教育を実践している。

②**カリキュラム**：早期よりさまざまな実習を導入し、学生の作業療法士としての意識付けを心がけている。また各学年間においても学生交流が実施できるよう IG 制度（詳細後述）を取り入れ、より良い学生生活の実現を目指している。

③**在籍者数**：平成 21(2009)年度は 194 人（1 年 41 人、2 年 47 人、3 年 52 人、4 年 54 人）であった。平成 22(2010)年度は 184 人（1 年 45 人、2 年 38 人、3 年 46 人、4 年 55 人）であった。学生の動向として、平成 21(2009)年度は除籍 1 人、退学 4 人、平成 22(2010)年度は退学 4 人であった。

④**単位認定**：4 年次への進級条件は、3 年次までの必修科目の単位全てを修得することとなっており、平成 21(2009)年度は 5 人、平成 22(2010)年度は 7 人が留年した。

2) 臨床実習

臨床実習は学内講義と臨床を結びつける意味でも非常に重要なものである。作業療法学科の臨床実習の形態としては 1 年次「基礎実習」、2 年次「見学実習（任意）」、3 年次「評価実習」、4 年次「総合実習」がある。臨床実習は、これから作業療法士を目指すための意識付けや、これまで学んだ知識・技術を元に実際の臨床の場で作業療法を体験する場でもある。学科の総合実習スタイルは「臨学共同臨床教育」をとっている。これは、学生の臨床教育を臨床実習指導者に全て任せるのではなく、専任教員が実際の臨床実習の場に参画し、臨床実習指導者の模倣を中心とし、共に学生を指導していくスタイルである。これにより効果的に作業療法士となるために必要な知識・技術・態度を習得することが可能である。

3) 国家試験対策

作業療法士国家試験の合格率は平成 21(2009)年度 92.6%（全国平均 82.2%）、平成 22(2010)年度 84.0%（全国平均 71.0%）であった。いずれも全国平均を大きく上回っている。国家試験対策としては、模擬試験、グループ学習、集中対策講義を実施した。反省点としては、もう少し早い時期より国家試験対策を開始する必要性があると考えている。また不合格学生に対しては、在校生同様に模擬試験、グループ学習、集中対策講義に参加するよう促していく予定である。

2. 学生支援面

学生支援面においては、生活安全支援、メンタルケア支援、ハラスメント防止等を積極的に行っている。具体的には学生に対しアンケートを実施し実態調査を行ったり、学生相談窓口を設置するなどに対応している。卒業生の就職率は平成 21(2009)年度、平成 22(2010)年度とも 95.6%であった。具体的な就職支援は、学生の希望する分野（身体障害分野、老年期障害分野、発達障害分野、精神障害分野）の専任教員による個別

相談の実施、就職説明会の実施などを行って支援している。

3. 研究面

研究面においては平成 21(2009)年度は著書 9 編、原著論文 11 編、総説 7 編、研究報告 2 報、講演 10 題、学会発表 42 題、研究助成 9 件であった。平成 22(2010)年度においては著書 10 編、原著論文 18 編、総説 10 編、研究報告 5 報、講演 25 題、学会発表 28 題、研究助成 5 件であった。

4. 学科 FD

学部開設以来、効果的な臨床教育のあり方の検討を続けてきたが、その結果が前述した「臨学共同臨床教育」であり、効果的な総合実習が実践されている。現在は具体的なカリキュラム編成を行い、「臨床教育-学内教育」の連携を深め、教員及び臨床施設における指導者の教育の質の向上を目指している。

5. 国際性

国際交流においては、平成 21(2009)年、平成 22(2010)年に韓国のインジェ大学及びコニャン大学の作業療法学専攻学生の実習を受け入れた。実習は高木病院、柳川リハビリテーション病院、重症心身障害児(者)施設柳川療育センター、有明総合ケアセンター等、当グループ関連施設及び精神科領域においては福岡市の西岡病院にて実施した。教員の役割としては、実習全般にわたる施設との調整や、留学生の生活全般にわたるサポート及び専門領域の講義の実施であった。また、学科学生との交流の機会を設け国際交流を深めた。

学生の海外研修では、平成 21(2009)年度はハワイに 1 人、韓国に 2 人が参加した。平成 22(2010)年度はオーストラリアに 1 人、台湾に 13 人、ベトナムに 7 人、韓国に 16 人が参加した。

6. その他

学科内の特性として学年担任制、コミュニケーションスキルの向上に向けた教育、IG (Interactive Group) 制度の導入がある。学年担任制は各学年に毎年同じ担当教員を配置して、学生一人ひとりの学習到達度、技術習得度に応じた教育を実施している。

作業療法士として臨床で障害を持つ方に関わっていくには、障害を持つ方の気持ちを察した対応や、障害特性に応じた接し方など高度のコミュニケーションスキルが必要とされる。

対象者への接し方を学ぶとともに、チーム医療の一員として必要なコミュニケーション能力を習得する講義を重視している。

IG 制度とは、1 年から 4 年までの縦割りグループでテーマ設定・研究・報告までを一貫して取り組む制度である。具体的には先輩・後輩で協力し合うグループ活動を通じて、より良い学生生活の実現を目指している。

(16) 福岡リハビリテーション学部言語聴覚学科

1. 教育面

1) 教育内容

①**教育理念**：大学の基本理念と教育理念のもと言語聴覚学科は、(1)言語聴覚障害学・言語聴覚療法の理論・技術の修得 (2)対象者の方の人格を尊重した臨床態度の形成 (3)対象者や関連職種とのコミュニケーション能力の促進 (4)言語聴覚療法を通して地域・社会に貢献する人材の育成、という目標を掲げている。

②**カリキュラム**：平成 19(2007)年度の開学時から、見学実習の早期経験と文章作成など学科独自の学習方法により、教育の質を高める努力をしている。完成年次を迎えた平成 22(2010)年度はカリキュラムを改編し、科目名や開講年度等の変更を申請した。

③**在籍者数**：平成 21(2009)年度は 121 人 (1 年生 41 人、2 年生 44 人、3 年生 36 人)、平成 22(2010)年度は 161 人 (1 年生 45 人、2 年生 45 人、3 年生 43 人、4 年生 28 人)であった。退学者及び留年者により学年間に差がみられる。

④**単位認定**：進級条件はシラバスに明記されているように 2 段階となっている。3 学年への進級は 2 学年までの必修の専門科目の単位をすべて修得していること、4 学年への進級は 3 学年までの必修科目の単位をすべて修得していることが条件である。この条件によって進級判定が実施され、平成 21(2009)年度は 2 年生、3 年生各 7 人、平成 22 (2010) 年度は 2 年生 8 人、3 年生 4 人が留年となった。また卒業要件を満たさなかった 4 年生 4 人が留年となった。今後、成績不振に対する学習及び心理面へのサポートがますます重要になると思われる。

2) 臨地実習

実習開始年度の平成 21(2009)年度は、臨床実習Ⅰ(基礎)及び臨床実習Ⅱ(総合)のいずれの時期にも臨床実習指導者会議を開催し、実習施設に目的、方法など本学科の指針を示し、指導を依頼した。平成 22 (2010) 年度からは臨床実習Ⅱ(総合)について臨床実習指導者会議を開催し、実習施設との緊密な連携を図った。3 年次は、医療施設で 2 週間、情報収集を中心とした基礎的な臨床実習を行った。4 年次は、多様な施設で 6 週間ないし 8 週間の総合的な臨床実習を 2 回行った。また、実習中は教員が直接訪問し、実習指導者との連携によって円滑な実習を支援した。実習終了後には症例報告会を実施し、同級生、下級生と貴重な体験を共有できるよう配慮した。

3) 国家試験対策

過去 12 年分の国家試験を科目別に分類し、授業に取り入れてもらえるよう科目担当の教員に配布した。平成 21(2009)年度は 3 年生を対象に模擬試験を実施し、国家試験への意識付けをした。平成 22 (2010) 年度は、3 年生に対して模擬試験を 1 回実施した。4 年生には、言語聴覚療法特論及び補講による補完的学習指導と実力試験を 3 回、全国模擬試験を 1 回実施した。グループ学習、特別講義、模擬試験、アドバイザーを中心に成績不良者への個別指導を行い、合格に向けての対策を強化した。平成 22 (2010) 年度第 1 期生は、24 人中 21 人が国家試験に合格 (合格率 87.5%) した。

2. 学生支援面

アドバイザー制を導入し、学生の学習面・生活面に対するサポート体制を整えている。アドバイザーの教員は担当する学生一人一人と定期的に面談し、個々に応じたアドバイスを行っている。特に休みがちな学生に対しては本人及びその家族と連絡を取り、面談を実施し、必要により専門機関への受診を勧めることにしている。一人暮らしの女子学生には、戸締りにも十分注意するよう指導した。また、薬物等の問題点については、ビデオ放映により注意喚起した。

学生への就職・キャリア支援に関しては、学生の希望する分野の専任教員が個別相談に応じている。活動状況を、本学科のニューズレター「ことのは」を通して保護者にも情報伝達している。平成 22 (2010) 年度の就職状況は、就職希望者 21 人中 19 人の就職（就職率 90.5%）であった。

3. 研究面（研究業績総括、研究費申請及び獲得状況）

平成 21(2009)年度は著書 2 編、原著論文 2 編、総説 1 編、講演 4 件、学会発表（国内）9 件であった。平成 22(2010)年度は著書 5 編、原著論文 4 編、総説 1 編、研究報告 1 編、講演 9 件、学会発表（国内）10 件であった。また、助成金の申請は平成 21(2009)年度は 4 件、平成 22(2010)年度は 5 件であった。採択されてはいないが、科学研究費や研究助成には毎年申請しており、研究活動は活発である。

4. 学科内 FD 活動

福岡リハビリテーション学部で開催される教員研修会には、各年度とも学科の教員全員が参加し、授業内容や授業方法の改善を図っている。平成22（2010）年度には、講義の内容及び研究について報告するミニ講義を3人が担当した。大田原キャンパス主催の教員研修会には、本学科から毎年1人が参加し、各年度とも学内報告会を行った。本学科では、シラバスの作成に関し年に数回検討する場を設け、教育の共有と質的向上を図った。

5. 国際性

海外研修は、平成 23(2011)年度からカリキュラムに位置づけられる。平成 21(2009)年度は、本学科学生の参加はなかったが、韓国への研修に本学科教員 1 人が引率した。平成 22 (2010) 年度は、2 年生が韓国に 6 人、ハワイに 1 人が参加した。

6. その他

平成 22 (2010) 年度は 9 月に 4 年生の保護者を対象にした学科独自の懇談会を開催し、卒業判定、国家試験、就職についての報告と、希望者には個別面談を行った。1 年生対象の一泊研修を、平成 21(2009)年度は夏季に、平成 22 (2010) 年度は春季に行い、学習やマナーについて指導・啓発した。平成 21(2009)年度から実習前演習としてランチタイムトークを実施し、コミュニケーションの取り方や臨機応変な対応ができるように指導している。また、年 2 回発行のニューズレター「ことのは」を通して、学内の行事及び学生生活の様子を保護者へ情報提供している。

VI. 2010 年度自己点検・評価の総括

2010 年度自己点検・評価の総括

国際医療福祉大学 2010 年度自己点検・評価の主たるねらいを、国際交流及び各学科の自己点検・評価と今後の課題とした。国際交流のこのねらいの背景には、本学の3つの基本理念の「人間中心の大学」「社会に開かれた大学」「国際性を目指した大学」のひとつである「国際性を目指した大学」において、これまでの本学の国際交流の現状・実績を把握し、今後の国際交流の方針を確認することが必要と思われるからである。

本学では、継続的に毎年学生アンケートを実施している。昨年からは全学生を対象に実施しているが、これらの結果をもとに、より安全で快適な学生生活が送れるよう、大学として可能な限り支援する必要があると考える。同時に、卒業生への支援についても大学の今後のあり方に大きく関わりを持つことが予想されるため、今後の重要な課題と考える。

以下に、各項目について総括を述べる。

(1) 本学の国際交流

今回は、国際交流に関する資料・情報を初年度より収集し整理した。学部の留学生については毎年 10 名前後の受験者があるが、合格者は数名程度の場合が多い。開学から 16 年間で 78 名が入学、大学院生は 101 名が入学した。留学生が入学するにあたり、目的意識、経済的な問題などの壁があるが、他に、卒業時には国家試験の受験があり、合格するだけの日本語能力の有無が大きく関与することから、本学の留学生の入学者数は少ないと考える。留学生は、半数が中国、次に韓国が多く、その他東南アジア諸国からとなっている。

学生の海外研修は、1997 年より実施しており、現在は授業科目である「海外保健福祉事情」の単位が取得できる。派遣先は、かつてはベトナム、中国、アメリカ、オーストラリアの 4 カ国であったが、近年は韓国、台湾も含まれ、多くの学生が参加している。また、国際保健協力フィールドワークフェローシップでは、平成 8(1996)年よりフィリピンへ 1 週間程度学生 1 名を派遣していた。

国際協力協定は、平成 18 年(2006)年の台湾から始まり、タイ、USA、中国、韓国、オーストラリア、ベトナムなど多くの国、大学、研究所及び病院と締結している。今後は締結先との活動がより盛んになることを期待したい。

一方、海外においては、教員による国際学術大会などでの発表、学術大会等の開催、講習会の企画など多数実施されている。

JICAによる活動は、ケニア国コメディカルプロジェクト(平成 10(1998)年より 5 年間)、ミャンマー、中国リハビリテーション専門職養成プロジェクト(平成 9(2001)年 11 月 1 日～平成 8(2006)年 10 月 31 日)、中国中西部地区リハビリテーション人材養成プロジェクト(平成 20(2008)年 4 月 1 日～平成 25(2013)年 3 月 31 日)、JICA 草の根技術協力事業：地域リハビリテーション及び障害当事者エンパワメントを通じた身体障害者支援事業(平成 18(2006)年 1 月～平成 10(2008)年 12 月)、カンボジア医療技術者養成プロジェクト(平成 11(2003)年 9 月 15 日～平成 10(2008)年 9 月 14 日)、ヨルダン障害者支援政策(平成 19(2007)年 8 月～平成 20(2008)年 8 月)などへ多くの教員を派遣し、支援している。

また、通信衛星機構(TAO)那須遠隔リハビリリサーチセンター(平成 10(1998)年 6 月～平成 13(2001)年 3 月)が開設され、中国リハビリテーション研究センターとの遠隔シ

システムによるリハビリ教育が開始された。

今後、より多くの留学生及び本学学生が、海外において学習や研修する機会が増えることを望む。

(2) 各学科の自己点検・評価と今後の課題

各学科の自己点検・評価と今後の課題について、テーマを統一してこの報告書をまとめた。教育面として、教育内容、臨床（地）実習、国家試験対策、学生支援面、研究面、学科内のFD活動、国際性、その他とした。

教育内容では、カリキュラムについては各学科において常に見直しが行われており、必要に応じた改正が行われている。今後は、教養科目の見直し、4つのキャンパスの統一性を図ることが必要である。

臨床実習では、人材の問題、実習先の確保、公平な統一された実習評価、関連施設との調整などが今後の課題とされる。また本学では、4つの附属病院及び多くの関連施設を有しているが、これらの施設での実習をこれまでよりもより充実したものにする必要があると考える。

国家試験対策は、各学科独自の方法により積極的に行われている。主に、対策講義や合宿、模擬試験などであるが、合格率を上昇させるためにも、より積極的な対策が必要であると考える。

学生支援に関しては、就職、メンタル面での指導などを担任またはアドバイザーなどの教員が積極的に行っているため、高い就職率を保っている。これらを維持しながら、今後はキャリア支援にも力を入れていく。

研究面では、論文数、学会発表数などは、学科、教員個人によって多少のばらつきが見られる。外部研究費の獲得も含めて、今後、より積極的な研究活動を期待したい。特に研究費に関しては、科学研究費などへの応募を積極的に推進し、評価することが必要である。

学科内FD活動はさまざまな形で実施されている。大学全体としてのFDはFD委員会が企画運営し、多くの教員が参加している。

(3) 学生アンケート調査とクラブ活動実績

大田原キャンパスの2年生以上の学生3168名を対象にし、調査期間を過去一年間とした学生アンケートを行った。2984名の学生から回答があり、94.2%と高い回答率が得られた。居住スタイルは約73%がアパートの1人暮らしであり、通学には自動車がもっとも多く(62%)、バス、電車とバス、自転車、徒歩の順となっている。昨年より、那須塩原駅から大学までの直通バスが開通したこともあり、バス利用者の増加が見られる。このバスは、JR線電車通学者は、乗車が無料になっている。

アルバイトも、約半数の学生が行っている。しかし、アルバイトをしなくても生活が可能と回答した学生も多い(82%)。

国際医療福祉大学自己点検・評価委員会規程

第1条 国際医療福祉大学に自己点検・評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

第2条 委員会は、本学における教育研究活動等の状況に関する自己点検・評価について、次の各号に掲げる事項を行う。

- 一 自己点検・評価の方針の策定に関すること。
- 二 自己点検・評価の実施に関すること。
- 三 自己点検・評価の報告書の作成及び公表に関すること。
- 四 その他自己点検・評価についての連絡調整に関すること。

第3条 委員会は、次の各号に掲げる委員をもって組織する。

- 一 学長
- 二 大学院長
- 三 学部長
- 四 研究科長
- 五 副学部長
- 六 学科長
- 七 大学院専攻主任
- 八 学生部長
- 九 教務委員長
- 十 図書館長
- 十一 センター長のうちから学長が指名した者
- 十二 常任理事の中から理事長が指名した者
- 十三 事務局長
- 十四 その他学長が必要と認めた者

2 自己点検結果の評価を行う場合は、前項の委員のほか学外の有識者若干名を加えることができる。

第4条 前条第1項第十四号の委員の任期は、1年とする。ただし、再任を妨げない。

なお、欠員が生じた場合の後任者の任期は、前任者の残任期間とする。

2 委員は理事長が委嘱する。

第5条 委員会に委員長を置き、学長をもって充てる。

2 委員長は、委員会を召集し、その議長となる。

3 委員会に副委員長を置き、学長が指名する。

4 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代行する。

第6条 委員会に、必要に応じ小委員会を置くことができる。

2 小委員会に関する事項は、委員会において別に定める。

第7条 委員会の事務は事務部総務課で処理する。

附 則

この規程は、平成11年11月12日から施行する。

附 則

この規程は、平成19年4月1日から施行する。

2010年度自己点検・評価委員会委員一覧

◎は委員長、○は副委員長、氏名欄の(氏名)は兼務

役職	所属	氏名	
学長		◎ 北島 政樹	
大学院長		金澤 一郎	
学部長	保健医療学部	○ 丸山 仁司	
	医療福祉学部	丸木 一成	
	薬学部	武田 弘志	
	福岡リハビリテーション学部	満留 昭久	
	小田原保健医療学部	杉原 素子	
研究科長	医療福祉学研究科	(金澤 一郎)	
	薬科学研究科	(武田 弘志)	
学科長	保健医療学部 看護学科	福島 道子	
		(丸山 仁司)	
		理学療法学科	萩原 喜茂
		作業療法学科	藤田 郁代
		言語聴覚学科	新井田 孝裕
		視機能療法学科	勝俣 健一郎
		放射線・情報科学科	(丸木 一成)
	医療福祉学部 医療福祉・マネジメント学科	(武田 弘志)	
	薬学部 薬学科	田原 弘幸	
	福岡リハビリテーション学部 理学療法学科	古川 昭人	
		作業療法学科	深浦 順一
		言語聴覚学科	島内 節
	小田原保健医療学部 看護学科	黒澤 和生	
		理学療法学科	菅原 洋子
	福岡看護学部 看護学科	小田 正枝	
大学院専攻主任	医療福祉学研究科 保健医療学専攻	中西 睦子	
		医療福祉経営専攻	竹内 孝仁
		臨床心理学専攻	勝俣 暎史
学生部長		(萩原 喜茂)	
教務委員長		(藤田 郁代)	
図書館長		(新井田 孝裕)	
事務局長		池本 龍二	

○は小委員会委員長

小委員会	所属	氏名	
	保健医療学部	看護学科	郷間 悦子
		理学療法学科	○ 丸山 仁司
		作業療法学科	高橋 きのみ
		言語聴覚学科	大金 さや香
		視機能療法学科	靱負 正雄
		放射線・情報科学科	橋本 光康
	医療福祉学部	医療福祉・マネジメント学科(HM)	山本 康弘
		医療福祉・マネジメント学科(HS)	相原 和子
	薬学部	薬学科	原 明義
	小田原保健医療学部	看護学科	萩野 雅
		理学療法学科	黒澤 和生
		作業療法学科	菅原 洋子
	福岡リハビリテーション学部	理学療法学科	甲斐 悟
		作業療法学科	多賀 誠
言語聴覚学科		安立多恵子	
福岡看護学部	看護学科	小田 正枝	
大学院		池田 俊也	
		操 華子	
		河口 洋行	
国際交流センター	センター長	福原 毅文	
	副センター長	陳 霞芬	
		石鍋 浩	

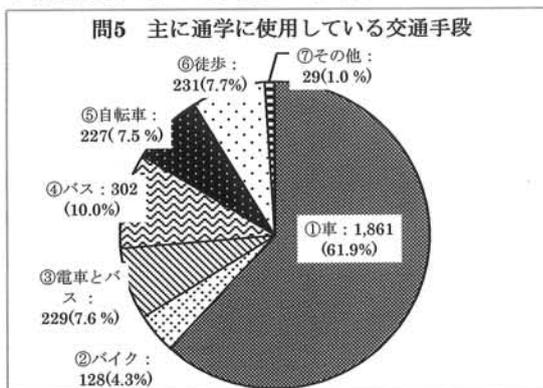
資料1. 学生アンケート結果

平成 22 年度学生アンケート結果の概要

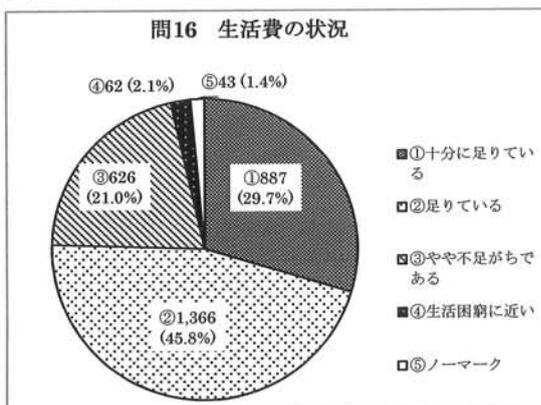
学生委員会

平成 23 年 4 月、大田原キャンパスの 2～4 年生（薬学部は 6 年生）3,168 名を対象にし、調査期間を過去一年間とした学生アンケートをおこなった。2,984 名の学生より回答を得、回答率は 94.2%であった。その結果の概要を紹介する。なお、学生アンケート調査用紙は（●●～●●頁）に掲載している。

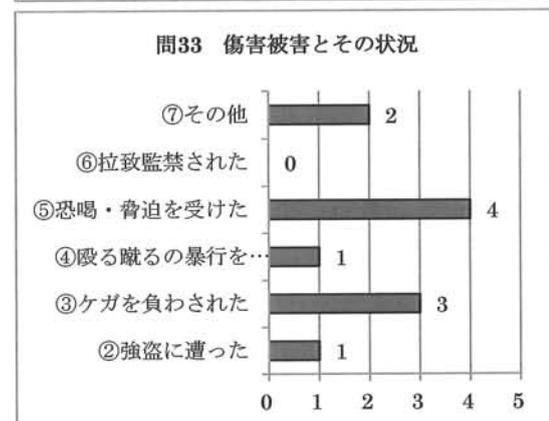
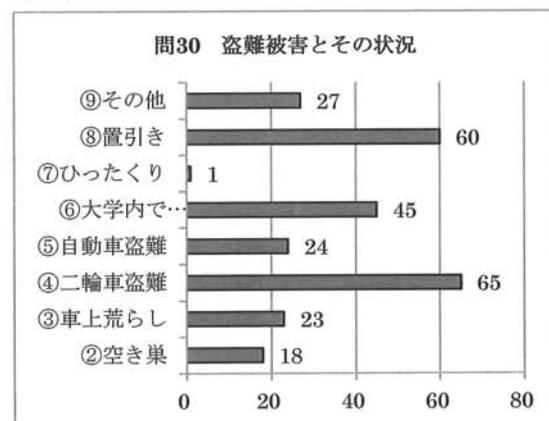
【居住スタイル】では 70.9%が「アパート」、28.4%が「自宅」、通学手段は 61.9%が「車」通学になっている。平成 20 年度学生アンケート結果とほとんど同様である。

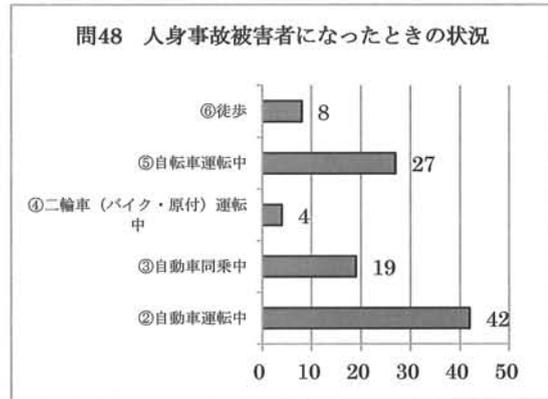
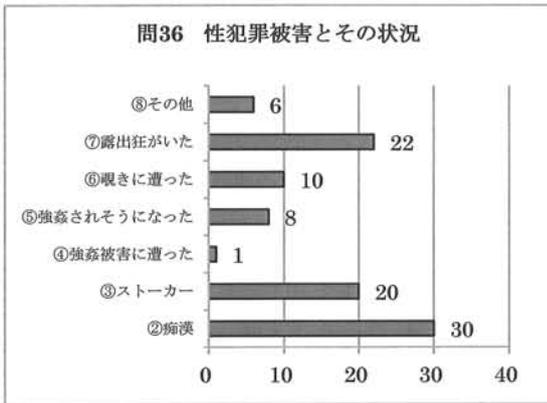


【生活費】については、「十分に足りている」と「足りている」を併せて 75.5%であるが、「やや不足がちである」が 21.0%、「生活困窮に近い」が 2.0%であった。これら生活費に関する結果も平成 20 年度アンケート結果と大差ない。

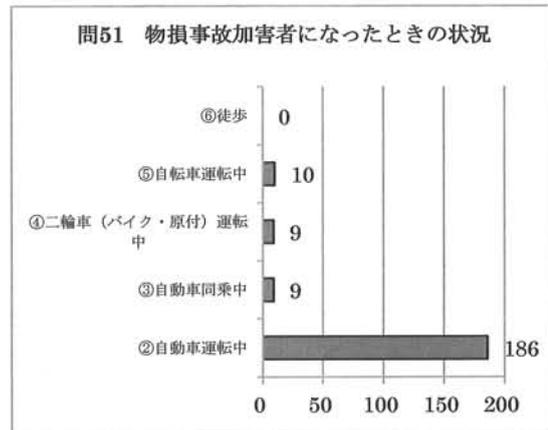


【事件・事故】では、「盗難事件にあったことがある」が 263 件（8.8%）で、特に多いのが二輪車盗難の 65 件であった。「傷害事件にあったことがある」が 11 件（0.4%）、「性犯罪にあったことがある」が 97 件（3.2%）で、「痴漢」、「ストーカー」、「露出狂」が目立つ。傷害事件や性犯罪の被害者になる危険性があることを考えて、夜間の外出を控える、窓やドアの戸締まりを確認する、などの防犯対策が重要である。また、「悪質商法被害にあったことがある」は 139 件（4.6%）で「しつこい新聞勧誘」、「架空・不当請求」が多い。平成 20 年度調査と比較すると、全体的に事件・事故の割合が低くなっている。



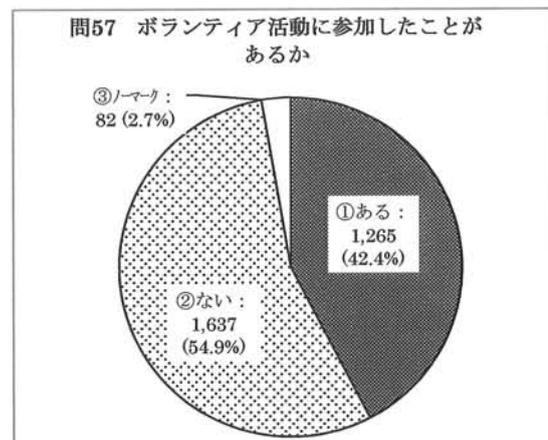
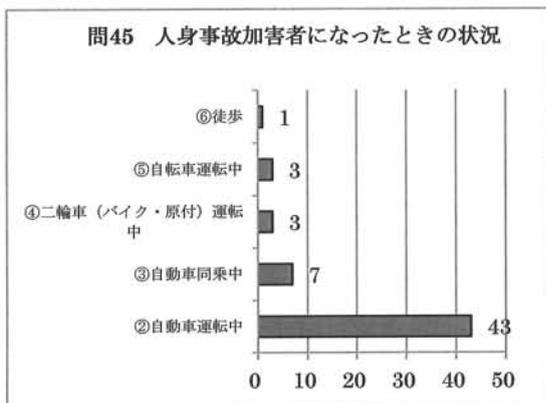


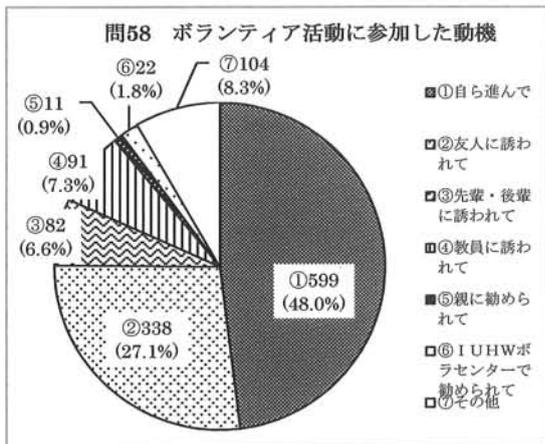
【交通事故】については「人身事故の加害者になったことがある」が 57 件 (1.9%)、「人身事故の被害者になったことがある」が 100 件 (3.3%)、「物損事故の加害者になったことがある」が 214 件 (7.2%) になっている。平成 20 年度アンケート結果と比較すると減少傾向があるが、多くの交通事故が起きている。特に加害者になったケースでは自動車運転中の事故が、また、被害者になったケースでは自動車運転中と自転車使用中の事故が多い。自分が加害者にも被害者にもなる危険性があると考えて、常に注意する必要がある。



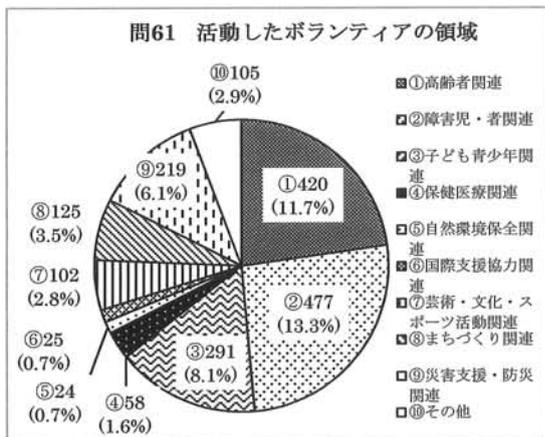
本学では地元の大田原警察署との連携を強化して、平成 21 年 4 月から毎月の本学学生が関わった交通事故や事件の状況を把握し、翌月に各学科・学年の学生を対象とした「SST (Student Support Time)」で学生に紹介して注意を喚起する学生生活安全への活動を行っている。

【ボランティア活動】に関しては、42.4%の学生が大学入学後、何らかのボランティア活動に参加している。参加動機は、「自ら進んで」「友人に誘われて」が多かった。活動したボランティアの領域は、障害児・者関連、高齢者関連、子ども青少年関連の順が多かった。





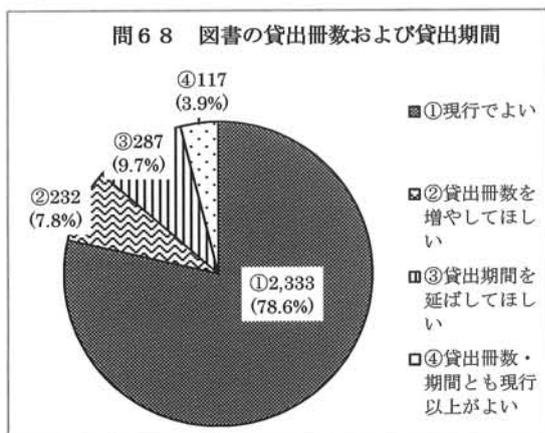
施設が 58.9%、サークル棟が 47.3%、教務窓口が 70.2%、学生課窓口が 72.6%、クリニックが 71.4%となっており、平成 20 年と比較し、わずかながら満足度が高くなっている。全体的には必ずしも十分な満足度とは言えない。



アンケートの自由記述欄には沢山のコメントが出されている(次頁)。大学としてはこれらのコメントを含めアンケート内容を検討し、改善すべき点について計画を立てて改善を進めている。

以上

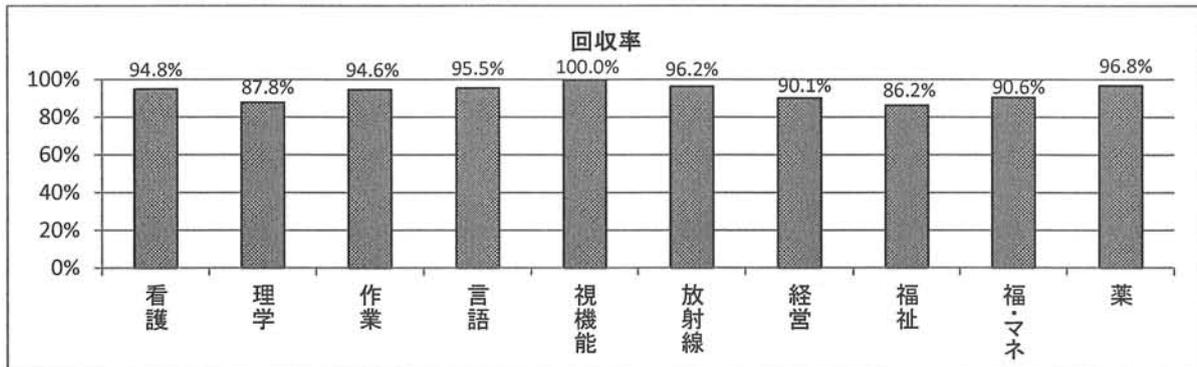
【図書館】に関しては、「貸し出し冊数および貸し出し期間」の「現行でよい」が 78.1%で、平成 20 年アンケート調査から若干増えている。



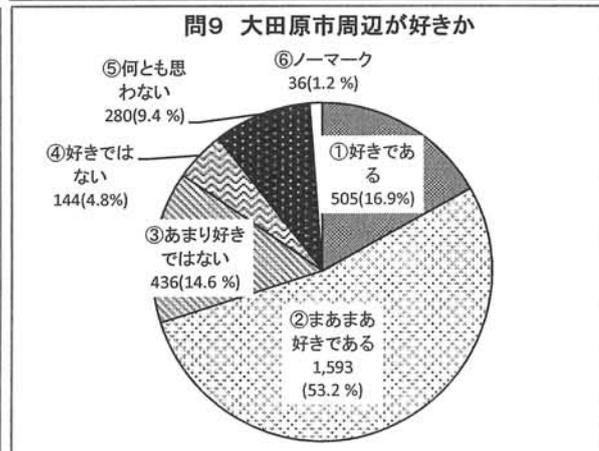
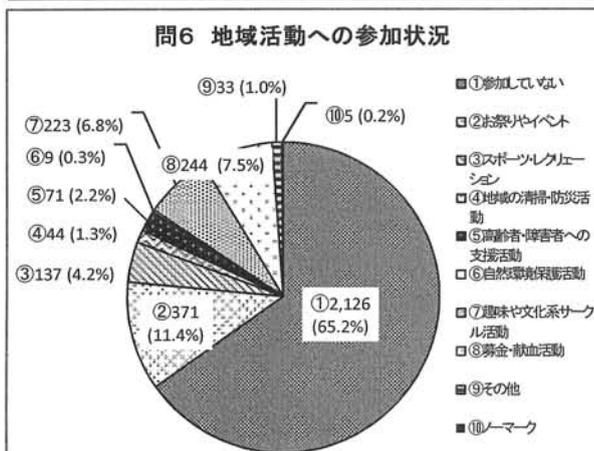
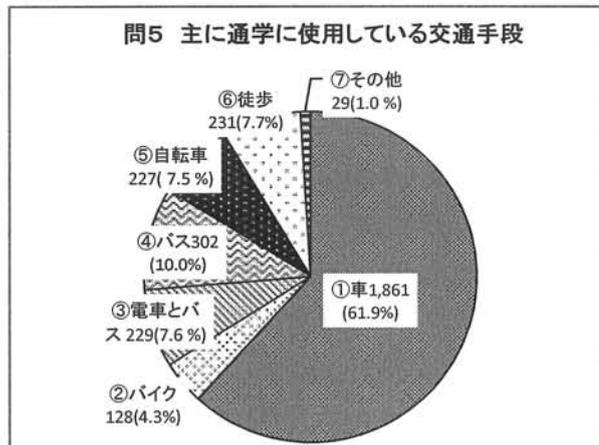
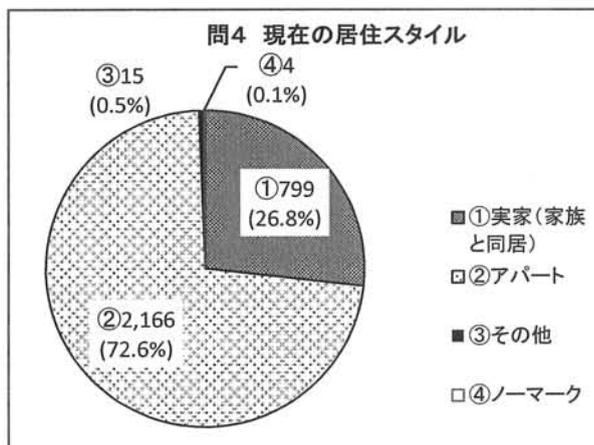
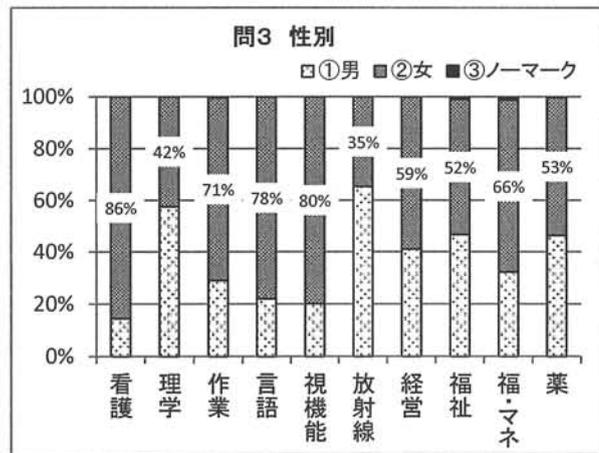
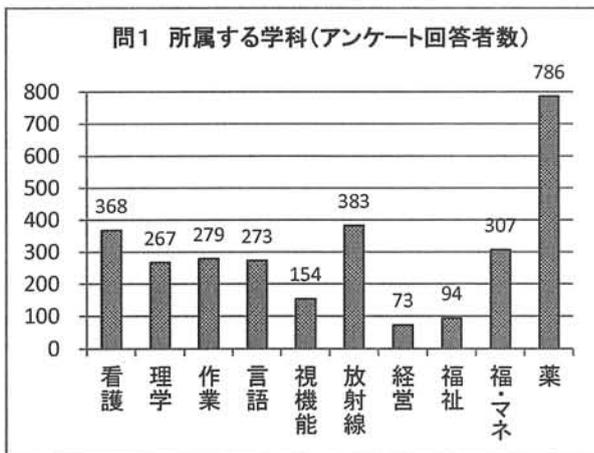
【学内施設満足度】では「とても満足」と「まあ満足」を併せて、カフェテリアが 49.4%、コンビニが 61.4%、書籍売店が 72.5%、運動

平成22年度 学生アンケート集計結果まとめ

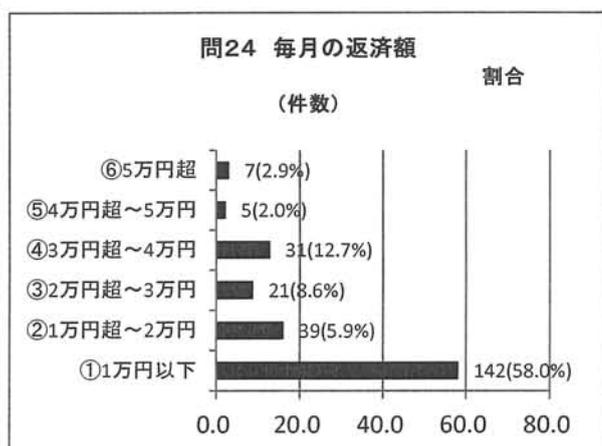
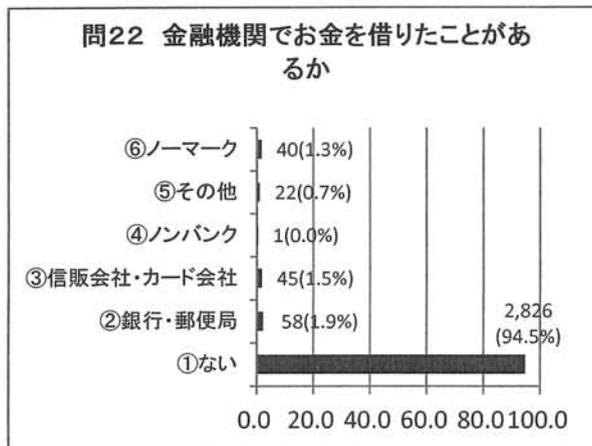
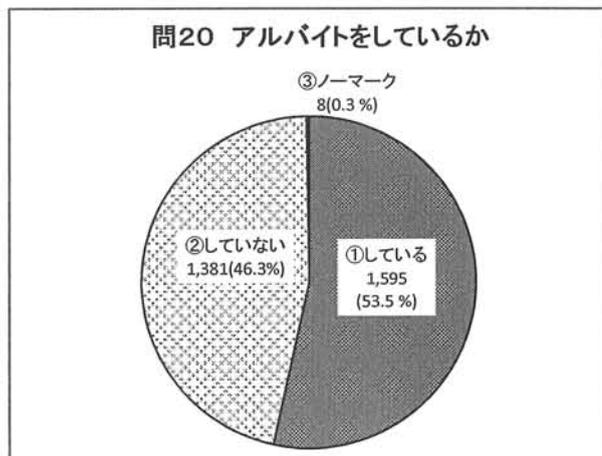
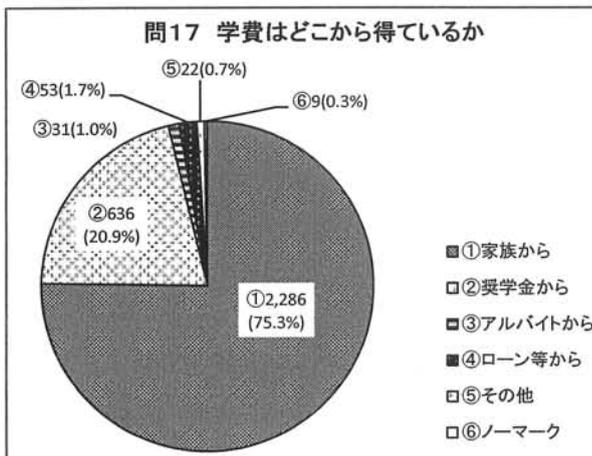
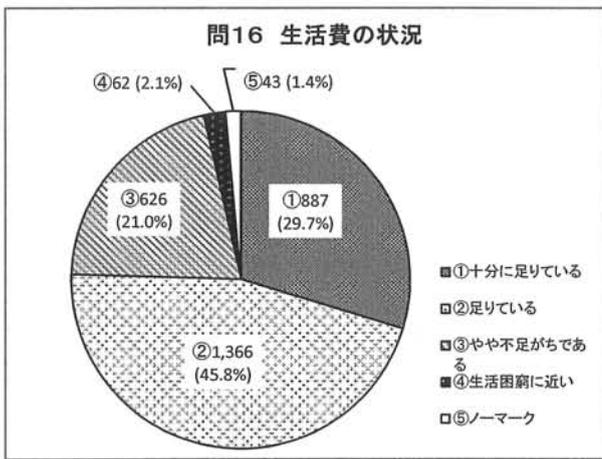
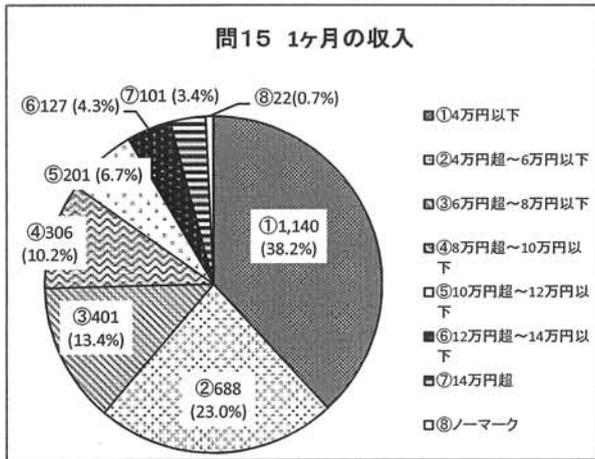
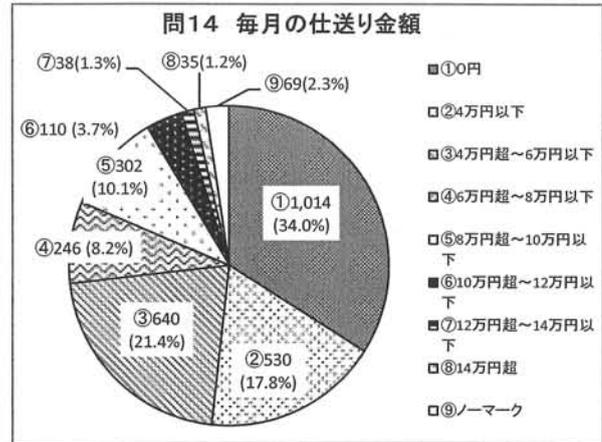
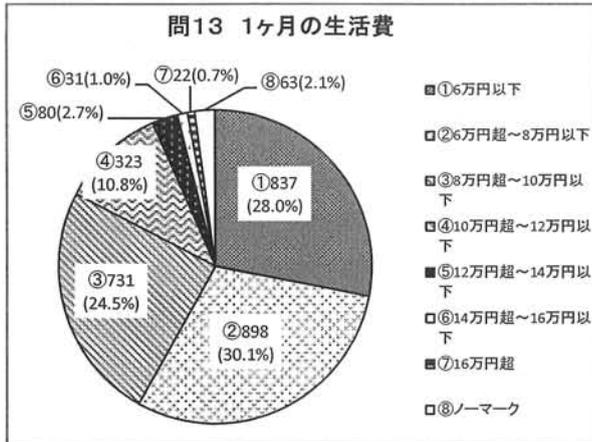
回収率



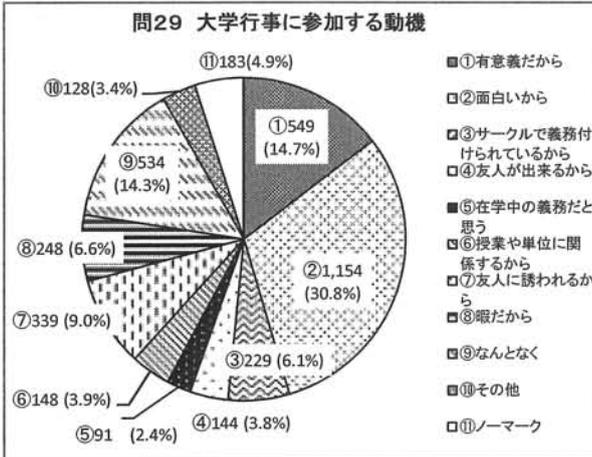
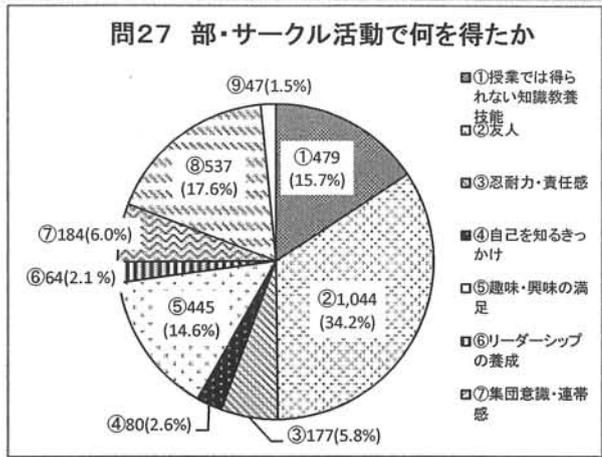
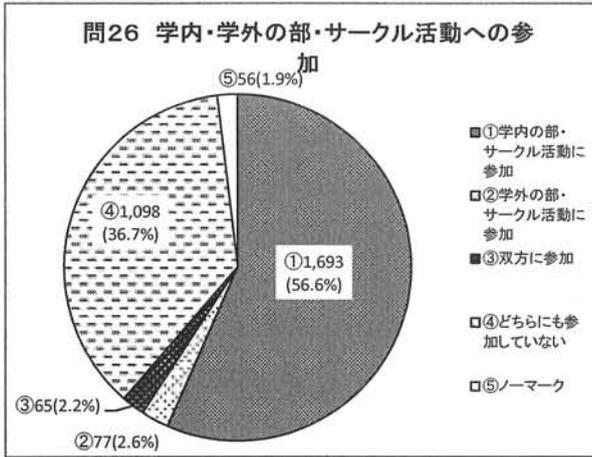
【所属等】に関する項目



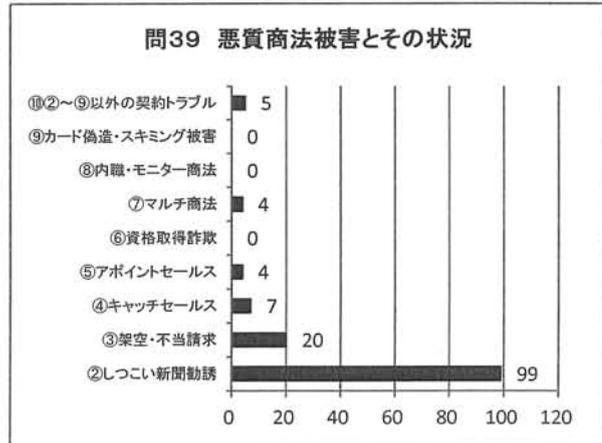
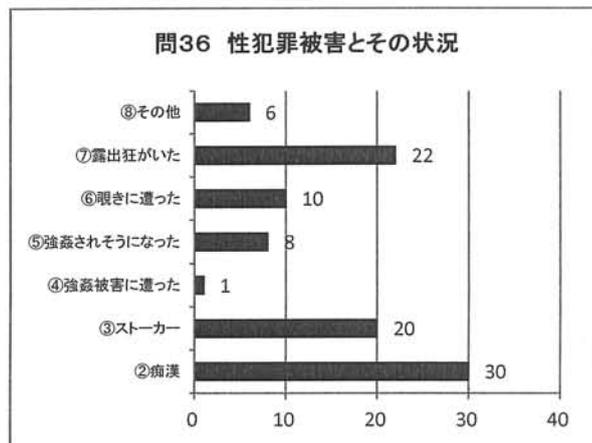
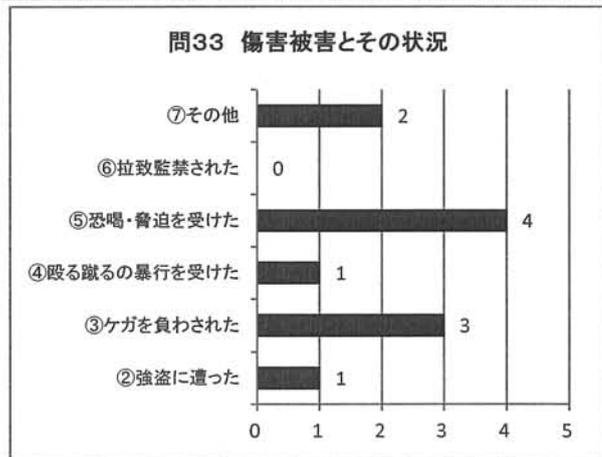
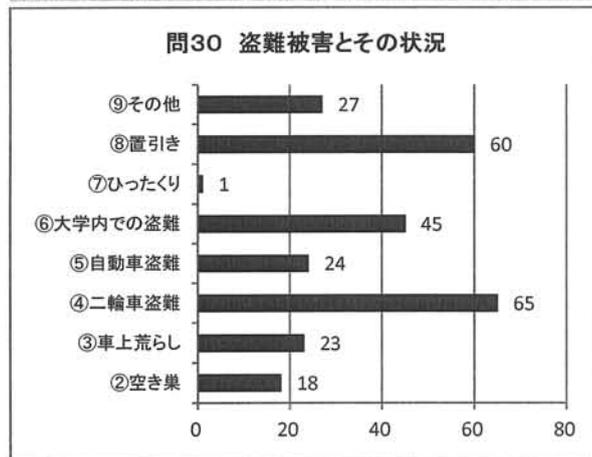
【経済状況】に関する項目



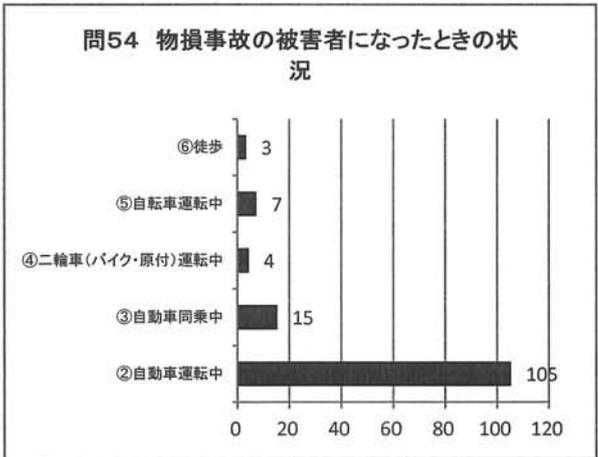
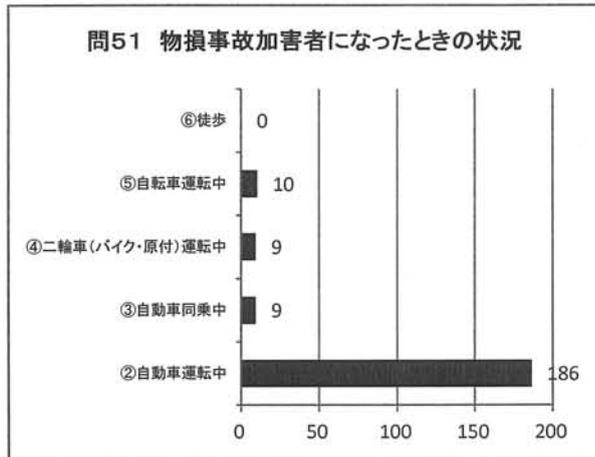
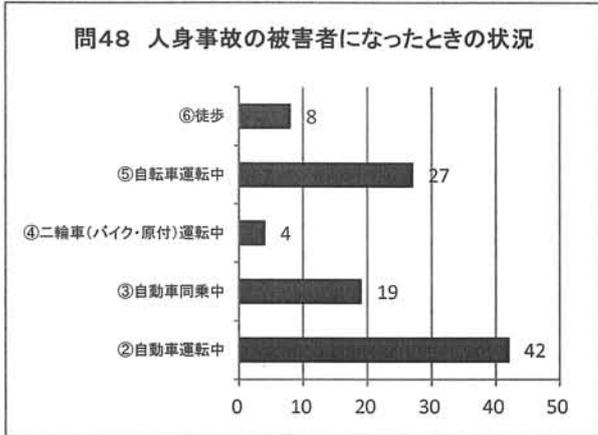
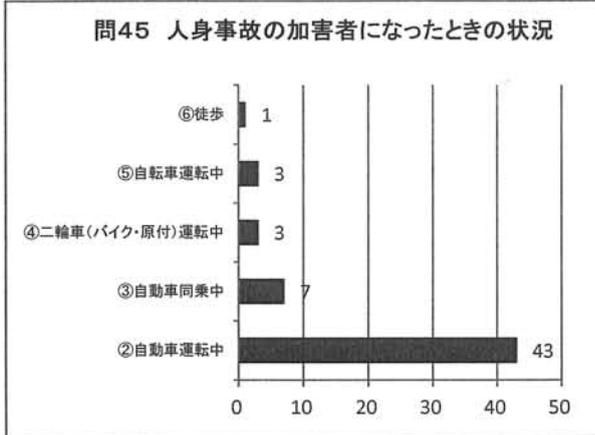
【余暇】に関する項目



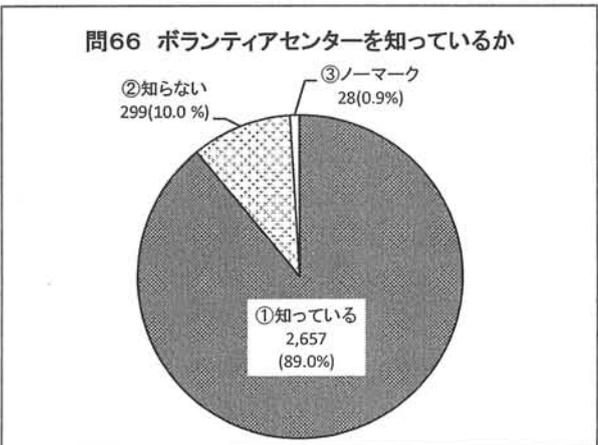
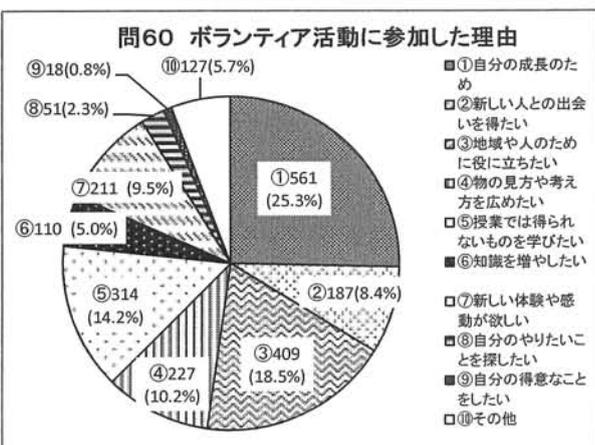
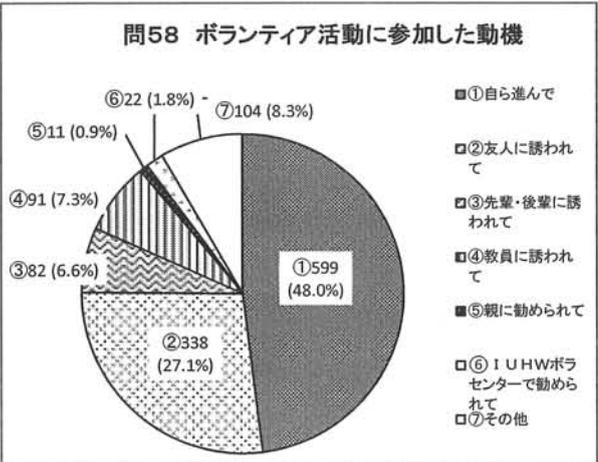
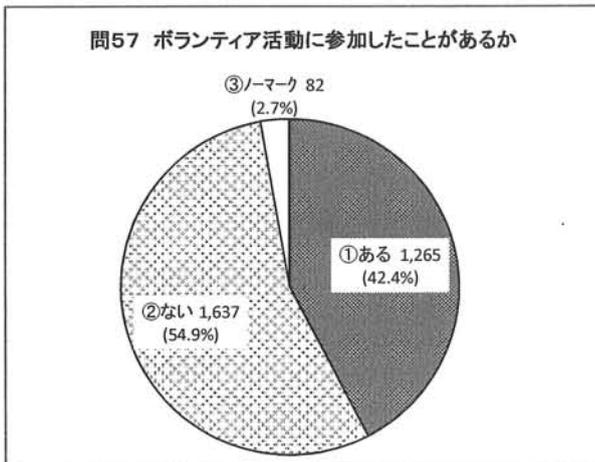
【事件】に関する項目



【交通事故】に関する項目

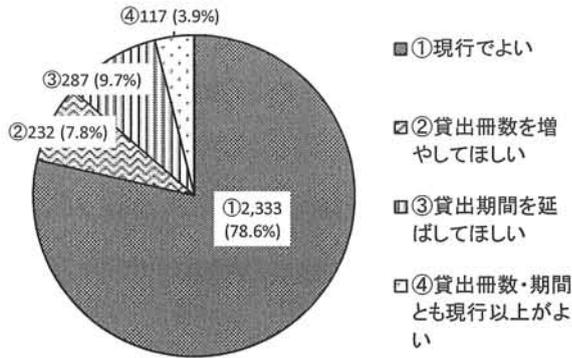


【ボランティア】に関する項目

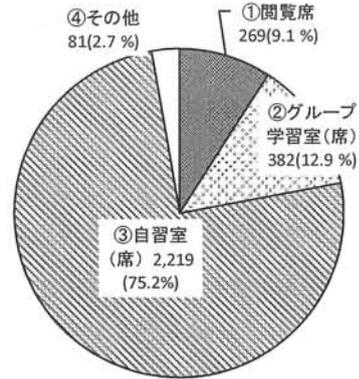


【図書館】に関連する項目

問68 図書の貸出冊数および貸出期間

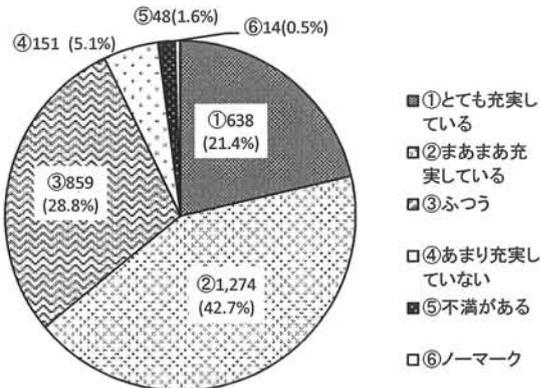


問69 増席するならどのような席がよいか

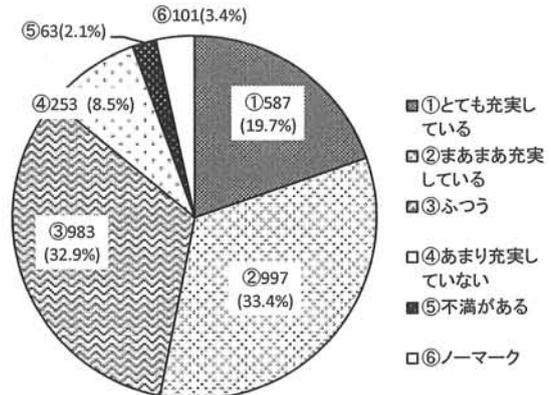


【大学生生活】に関連する項目

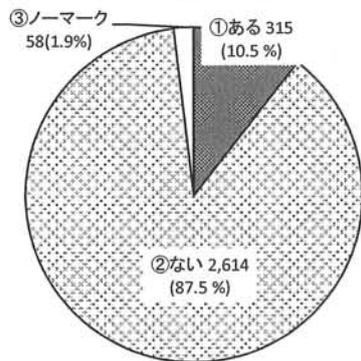
問71 学習面の充実感



問72 学習面以外の充実感

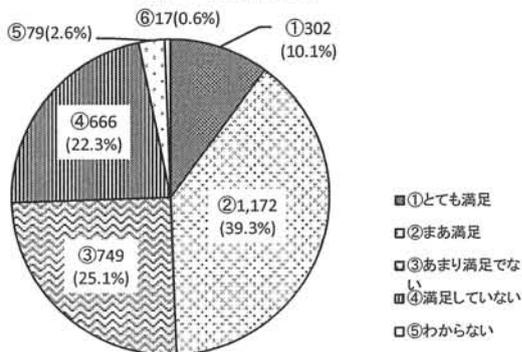


問73 教員から不当な扱いあるいは差別を受けたことがあるか

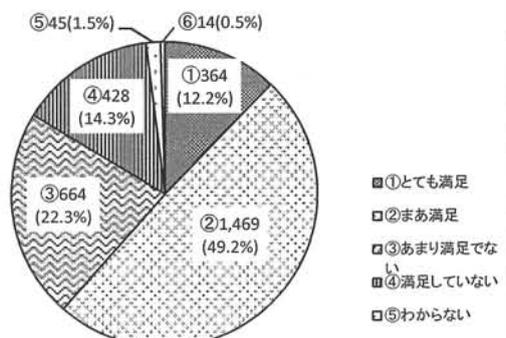


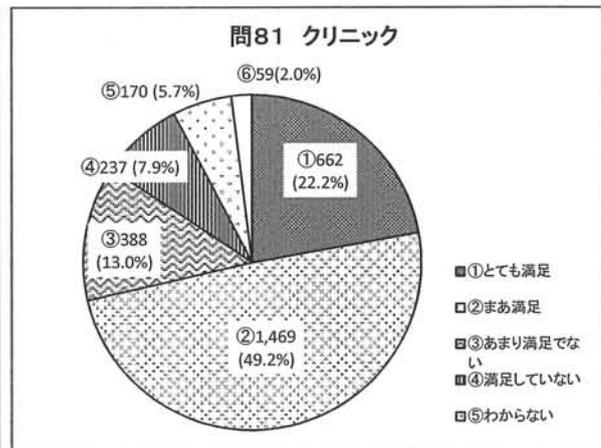
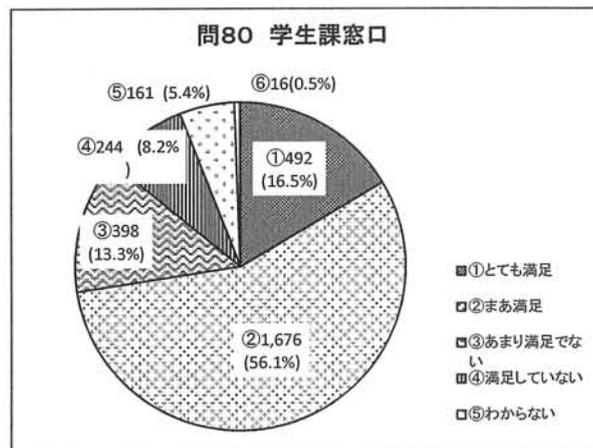
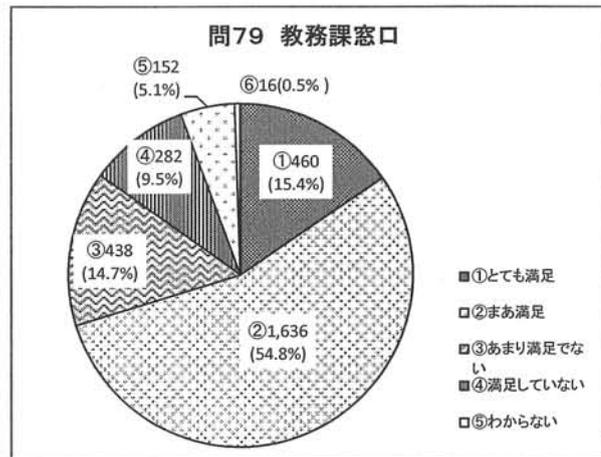
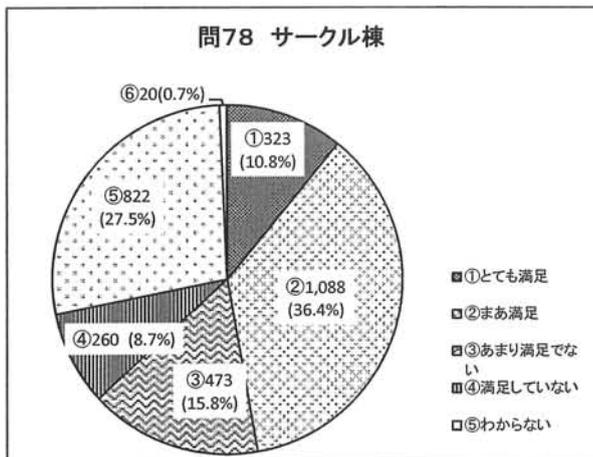
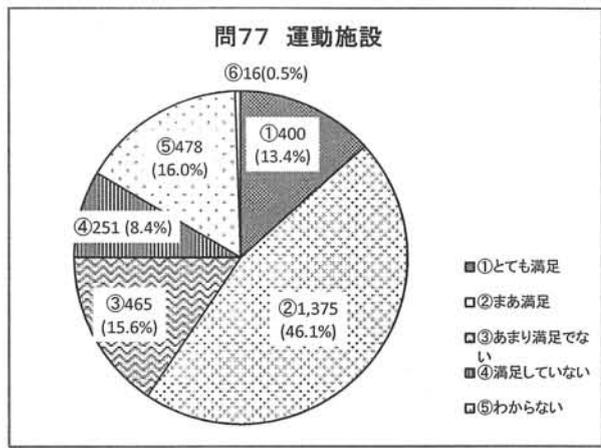
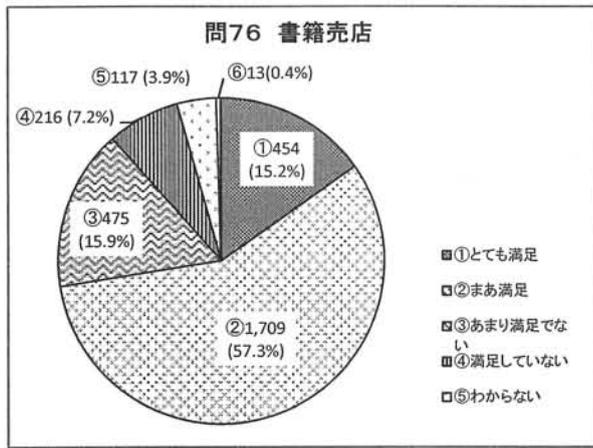
【学内施設満足度】に関連する項目

問74 カフェテリア



問75 コンビニ





平成22年度 学生アンケート

学生委員会

本学では、学生の皆さんの生活状況をよく知り、よりよい大学作りと、安全な生活確保のため、このアンケートを実施します。結果はすべて統計的に処理され、個人が特定されたり、プライバシーが損なわれることはありません。日頃の生活状況や、平成22年度1年間の生活トラブル等をありのままにご回答ください。

【所属等】に関連する項目

問 1	所属する学科を選んでください。 ①看護 ②理学 ③作業 ④言語 ⑤視機能 ⑥放射線 ⑦経営管理 ⑧医療福祉 ⑨医療福祉マネジメント ⑩薬
問 2	該当する学年を選んでください。 ① 1年 ② 2年 ③ 3年 ④ 4年 ⑤ 5年 ⑥ 6年
問 3	性別を選んでください。 ① 男 ② 女
問 4	現在の居住スタイルを選んでください。 ①実家(家族と同居) ②アパートで一人暮らし(在学中の兄弟姉妹との同居を含む) ③その他(親戚宅等)
問 5	主に通学に利用している交通手段を選んでください。 ①車 ②バイク ③電車とバス ④バス ⑤自転車 ⑥徒歩 ⑦その他

【地域生活】に関連する項目

問 6	現在住んでいる地域のどのような活動に参加していますか。(複数回答可) ①参加していない [①参加していないと回答した方は問8を、②～⑨の方は問7を回答してください。 ②お祭りやイベント ③スポーツ・レクリエーション活動 ④地域の清掃・防災活動 ⑤高齢者・障害者への支援活動 ⑥自然環境保護活動 ⑦趣味や文化系サークル活動 ⑧募金・献血活動 ⑨その他
問 7	地域活動への参加や、地域との交流を行う理由は何ですか。(複数回答可) ①人間関係が広がる ②居場所ができる ③困った時に助けてもらえる ④新しい体験ができる ⑤知識教養が深まる ⑥その他
問 8	地域活動をしらない理由は何ですか。(複数回答可) ①慣れない人とかかわるのが苦手 ②気遣いがわずらわしい ③時間を取られる ④興味関心がない ⑤その他
問 9	大学の周辺地域(大田原市・那須塩原市)が好きですか。 ①好きである ②まあまあ好きである ③あまり好きではない ④好きではない ⑤何とも思わない
問 10	大学の周辺地域が好きなどころはどのような点ですか。(回答は3つまで) ①生活が便利である ②人の気持ちがあたたかい ③のんびりしている ④活気がある ⑤周りの目や口がうるさくなくて自由 ⑥よい教育環境や就職口がある ⑦生活環境がよい(空気がきれい等) ⑧その他
問 11	大学周辺地域が好きでないのはどのような点からですか。(回答は3つまで) ①生活が不便である ②人の気持ちが冷たい ③騒がしくて落ち着かない ④活気がない ⑤周りの目や口がうるさくて不自由 ⑥よい教育環境や就職口がない ⑦生活環境が悪い(寒い等) ⑧その他
問 12	あなたは卒業後も今の地域で生活したいと思いますか。 ①卒業しても住み続けたい ②卒業したら移動したい ③どちらでもよい

【経済状況】に関連する項目

問 13	あなたの、1ヶ月の生活費(住居費・光熱費・食費・交通費等)はおよそいくらですか。 ①60,000円以下 ②60,001～80,000円 ③80,001～100,000円 ④100,001～120,000円 ⑤120,001～140,000円 ⑥140,001～160,000円 ⑦160,001円以上
問 14	毎月の仕送り金額はおよそいくらですか。 ①0円 ②40,000円以下 ③40,001～60,000円 ④60,001～80,000円 ⑤80,001～100,000円 ⑥100,001～120,000円 ⑦120,001～140,000円 ⑧140,001円以上
問 15	あなたの1ヶ月の収入(仕送り・小遣い・アルバイト代・奨学金等)はいくらですか。 ①40,000円以下 ②40,001～60,000円 ③60,001～80,000円 ④80,001～100,000円 ⑤100,001～120,000円 ⑥120,001～140,000円 ⑦140,001円以上
問 16	生活費(住居費・光熱費・食費・交通費等)の状況についてどう感じていますか。 ①十分に足りている ②足りている ③やや不足がちである ④生活困窮に近い
問 17	学費はどこから得ていますか。 ①家族から ②奨学金から ③アルバイトから ④ローン等から ⑤その他
問 18	あなたは主に何にお金を使いますか。金額の大きいものを3つ選んでください。 ①学費(自己負担分) ②勉強教材・教養費(教科書・参考書・文房具等) ③娯楽・交際費 ④大学以外の学校の授業料 ⑤通信費(電話・インターネット) ⑥交通費・ガソリン代 ⑦食費 ⑧衣服・日用雑貨等 ⑨カード決済
問 19	経済的に困ったらどうしますか。(複数回答可) ①家族から援助してもらおう ②先輩・知人・友人から借りる ③アルバイトをする ④金融機関から借りる ⑤その他

- 問 20 あなたはアルバイトをしていますか。
①はい ②いいえ
- 問 21 アルバイトをしないと生活状況はどうなりますか。
①とくに大きな影響はない ②何とか生活はできる ③経済的に苦しくなり生活できない
- 問 22 金融機関(銀行・クレジット会社・ノンバンク)でお金を借りたことがありますか。それはどこからですか。(複数回答可)
①ない ②銀行・郵便局 ③信販会社・カード会社 ④ノンバンク ⑤その他
- 問 23 どのような使いみちで借りましたか。(複数回答可)
①学費や資格取得費用 ②車や電気製品の高額商品購入 ③娯楽交際費 ④他の借入金返済 ⑤生活費 ⑥その他
- 問 24 毎月の返済額はいくらぐらいでしたか。(複数の返済がある場合は合計額)
①10,000円以下 ②10,001～20,000円 ③20,001～30,000円 ④30,001～40,000円 ⑤40,001～50,000円 ⑥50,001円以上

【余暇】に関連する項目

- 問 25 本学以外の学生と交流はありますか。
①よくある ②たまにある ③ほとんどない ④まったくない
- 問 26 学内・学外の部・サークル活動に参加していますか。
①学内の部・サークル活動に参加 ②学外の部・サークル活動に参加 ③双方に参加 →参加している方は問27へ
④どちらにも参加していない →参加していない方は問28へ
- 問 27 部・サークル活動で何を得たと思いますか。(回答は2つまで)
①授業では得られない知識・教養・技能 ②友人 ③忍耐力・責任感 ④自己を知るきっかけ ⑤趣味・興味の満足
⑥リーダーシップの養成 ⑦集団意識・連帯感 ⑧先輩後輩との人間関係 ⑨その他
- 問 28 部・サークル活動に参加しない理由は何ですか。(回答は2つまで)
①勉学に打ち込むため ②通学に時間が取られる ③アルバイトで時間がない ④集団や他人に拘束されるのがいや
⑤先輩後輩の人間関係がいや ⑥自分の関心にあうものがない ⑦費用がかかる ⑧その他
- 問 29 大学行事(大学祭・運動会)に参加するとき、その動機は何ですか。(複数回答可)
①有意義だから ②面白いから ③サークルで義務付けられているから ④友人ができるから ⑤在学中の義務だと思う
⑥授業や単位に関係するから ⑦友人に誘われるから ⑧暇だから ⑨なんとなく ⑩その他

【事件】に関連する項目

<盗難事件>

- 問 30 盗難事件の被害に遭ったことはありますか。それはどのような被害でしたか。(複数回答可)
①ない 「①ない」と回答した方は問33へ、②～⑨の方は問31・32も回答してください。
②空き巣 ③車上荒らし ④二輪車盗難 ⑤自動車盗難 ⑥大学内での盗難 ⑦ひったくり ⑧置き引き ⑨その他
- 問 31 被害に遭った時間は何時ごろでしたか。
①0時～6時 ②6時～12時 ③12時～18時 ④18時～0時
- 問 32 被害に遭った場所はどこでしたか。
①学内 ②アパート ③実家 ④バイト先 ⑤その他

<傷害事件>

- 問 33 傷害事件の被害に遭ったことはありますか。それはどのような被害でしたか。(複数回答可)
①ない 「①ない」と回答した方は問36へ、②～⑦の方は問34・35も回答してください。
②強盗に遭った ③ケガを負わされた ④殴る蹴るの暴行を受けた ⑤恐喝脅迫を受けた ⑥拉致監禁された ⑦その他
- 問 34 被害に遭った時間は何時ごろでしたか。
①0時～6時 ②6時～12時 ③12時～18時 ④18時～0時
- 問 35 被害に遭った場所はどこでしたか。
①学内 ②アパート ③実家 ④バイト先 ⑤その他

<性犯罪>

- 問 36 性犯罪被害に遭ったことはありますか。それはどのような被害でしたか。(複数回答可)
①ない 「①ない」と回答した方は問39へ、②～⑧の方は問37・38も回答してください。
②痴漢 ③ストーカー ④強姦被害に遭った ⑤強姦されそうになった ⑥覗きに遭った ⑦露出狂がいた ⑧その他
- 問 37 被害に遭った時間は何時ごろでしたか。
①0時～6時 ②6時～12時 ③12時～18時 ④18時～0時
- 問 38 被害に遭った場所はどこでしたか。
①学内 ②アパート ③実家 ④バイト先 ⑤その他

<悪質商法>

- 問 39 悪質商法の被害に遭ったことはありますか。それはどのような被害でしたか。(複数回答可)
①ない 「①ない」と回答した方は問42へ、②～⑩の方は問40・41も回答してください。
②しつこい新聞勧誘 ③架空・不当請求 ④キャッチセールス ⑤アポイントセールス ⑥資格取得詐欺 ⑦マルチ商法
⑧内職・モニター商法 ⑨カード偽造・スキミング被害 ⑩②～⑨以外の契約トラブル

- 問 40 被害に遭った時間は何時ごろでしたか。
①0時～6時 ②6時～12時 ③12時～18時 ④18時～0時
- 問 41 被害に遭った場所はどこでしたか。
①学内 ②アパート ③実家 ④バイト先 ⑤その他

<その他の事件・トラブル>

- 問 42 その他質問になかった被害に遭ったことはありますか。それはどのような被害でしたか。(複数回答可)
①ない 「①ない」と回答した方は問45へ、②～⑨の方は問43・44も回答してください。
②宗教勧誘 ③不審者(車)が徘徊 ④いたずら電話や不審な電話・メールがきた ⑤器物破損を受けた
⑥違法薬物を使用したことがある ⑦違法薬物の使用を誘われた ⑧セクシャルハラスメント被害を受けた ⑨その他
- 問 43 被害に遭った時間は何時ごろでしたか。
①0時～6時 ②6時～12時 ③12時～18時 ④18時～0時
- 問 44 被害に遭った場所はどこでしたか。
①学内 ②アパート ③実家 ④バイト先 ⑤その他

【交通事故】に関連する項目

<人身事故>

- 問 45 人身事故の加害者になったことはありますか。それはどのような状況でしたか。(複数回答可)
①ない 「①ない」と回答した方は問48へ、②～⑥の方は問46・47も回答してください。
②自動車運転中 ③自動車同乗中 ④二輪車(バイク・原付)運転中 ⑤自転車運転中 ⑥徒歩
- 問 46 事故を起こした時間は何時ごろでしたか。
①0時～6時 ②6時～12時 ③12時～18時 ④18時～0時
- 問 47 事故の場所はどこでしたか。
①大学内 ②登下校中 ③私用中の大学近辺 ④帰省先 ⑤その他
- 問 48 人身事故の被害者になったことはありますか。それはどのような状況でしたか。(複数回答可)
①ない 「①ない」と回答した方は問51へ、②～⑥の方は問49・50も回答してください。
②自動車運転中 ③自動車同乗中 ④二輪車(バイク・原付)運転中 ⑤自転車運転中 ⑥徒歩
- 問 49 事故に遭った時間は何時ごろでしたか。
①0時～6時 ②6時～12時 ③12時～18時 ④18時～0時
- 問 50 事故の場所はどこでしたか。
①大学内 ②登下校中 ③私用中の大学近辺 ④帰省先 ⑤その他

<物損事故>

- 問 51 物損事故の加害者になったことはありますか。それはどのような状況でしたか。(複数回答可)
①ない 「①ない」と回答した方は問54へ、②～⑥の方は問52・53も回答してください。
②自動車運転中 ③自動車同乗中 ④二輪車(バイク・原付)運転中 ⑤自転車運転中 ⑥徒歩
- 問 52 事故を起こした時間は何時ごろでしたか。
①0時～6時 ②6時～12時 ③12時～18時 ④18時～0時
- 問 53 事故の場所はどこでしたか。
①大学内 ②登下校中 ③私用中の大学近辺 ④帰省先 ⑤その他
- 問 54 物損事故の被害者になったことはありますか。それはどのような状況でしたか。(複数回答可)
①ない 「①ない」と回答した方は問57へ、②～⑥の方は問55・56も回答してください。
②自動車運転中 ③自動車同乗中 ④二輪車(バイク・原付)運転中 ⑤自転車運転中 ⑥徒歩
- 問 55 事故に遭った時間は何時ごろでしたか。
①0時～6時 ②6時～12時 ③12時～18時 ④18時～0時
- 問 56 事故の場所はどこでしたか。
①大学内 ②登下校中 ③私用中の大学近辺 ④帰省先 ⑤その他

【ボランティア活動】に関連する項目

- 問 57 あなたは大学入学後、何らかのボランティア活動に参加したことがありますか。
①ある → 問 58へ ②ない → 問 63へ

以下の問58から問62は問57で「①ある」と答えた方が回答してください。

- 問 58 大学に入学して初めてボランティア活動に参加したときの動機として、もっともあてはまるもの1つを選んでください。
①自ら進んで ②友人に誘われて ③先輩・後輩に誘われて ④教員に誘われて ⑤親に勧められて
⑥IUHWボランティアセンターで誘われて ⑦その他
- 問 59 活動した機会はどれですか。(複数回答可)
①学内のボランティア部やボランティアサークルに所属した ②運動部・文化部(またはサークル)で活動した
③学科の教員の募集した活動に参加した ④IUHWボランティアセンターで募集している活動に参加した
⑤学外で募集しているボランティア活動に参加した ⑥その他

問 60 ボランティア活動に参加した理由はなんですか。(複数回答可)

- ①自分の成長のため ②新しい人との出会いを得たい ③地域や人のために役に立ちたい ④物の見方や考え方を広めたい ⑤授業では得られないものを学びたい ⑥知識を増やしたい ⑦新しい体験や感動が欲しい
⑧自分のやりたいことを探したい ⑨自分の得意なことをしたい ⑩その他

問 61 活動したボランティアの領域はなんですか。(複数回答可)

- ①高齢者関連 ②障害児・者関連 ③子ども青少年関連 ④保健医療関連 ⑤自然環境保全関連 ⑥国際支援協力関連
⑦芸術・文化・スポーツ活動関連 ⑧まちづくり関連 ⑨災害支援・防災関連 ⑩その他

問 62 今年4月以降のボランティア活動の頻度で該当するもの1つに○をつけてください。

- ①週1回以上 ②月2～3回 ③月1回 ④2～3ヶ月に1回程度 ⑤半年に1回程度 ⑥活動に参加していない

以下の問63と問64は、問57で「②ない」と答えた方が回答してください。

問 63 ボランティア活動に参加していない理由はなんですか。(複数回答可)

- ①きっかけがない ②時間がない ③情報がない ④お金がない ⑤やりたいものがない ⑥知識や技術がない
⑦人間関係がつかれない ⑧過去にいやな体験をした ⑨その他

問 64 ボランティア活動に関心がありますか。

- ①関心があり、今後在学中に活動に参加したい ②関心はあるが、在学中には活動に参加しない
③関心がない

問 65 現在、どんなボランティア活動に関心がありますか。(複数回答可)

- ①高齢者に関するボランティア ②障害児・者に関するボランティア ③子供・青少年に関するボランティア
④保健医療に関するボランティア ⑤自然環境保全に関するボランティア ⑥国際支援・協力に関するボランティア
⑦芸術・文化・スポーツ活動等に関するボランティア ⑧まちづくりに関するボランティア ⑨災害支援・防災に関するボランティア ⑩その他のボランティア

全員にお聞きします。

問 66 学内にIUHWボランティアセンターがあることを知っていますか。

- ①知っている ②知らない

問 67 IUHWボランティアセンターを利用したことがありますか。

- ①ある ②ない

【図書館】に関連する項目

問 68 貸出冊数および貸出期間はどのくらいが適当だと思いますか。

- ①現行でよい ②貸出冊数を増やしてほしい ③貸出期間を延ばしてほしい ④貸出冊数・期間とも現行以上がよい

問 69 座席を増設するとしたら、どんな席を増やしてほしいですか。

- ①閲覧席 ②グループ学習室(席) ③自習室(席) ④その他

問 70 蔵書について読みたい本がなくて困ったことがありますか。またその本はどのような本でしたか。

- ①看護学 ②理学療法学 ③作業療法学 ④言語聴覚学 ⑤視機能療法学 ⑥放射線・情報科学 ⑦医療経営管理学
⑧社会福祉学 ⑨薬学 ⑩その他

【大学生生活】に関連する項目

問 71 学習面の充実感(学業への興味・意欲等)

- ①とても充実している ②まあまあ充実している ③ふつう ④あまり充実していない ⑤不満がある

問 72 部・サークル活動等学習面以外の充実感

- ①とても充実している ②まあまあ充実している ③ふつう ④あまり充実していない ⑤不満がある

問 73 教員から不当な扱いあるいは差別を受けたことがありますか。

- ①ある ②ない

【学内施設満足度】に関連する項目

以下の施設についてあなたの満足度を記入してください。

- 問 74 カフェテリア ① とても満足 ② まあ満足 ③ あまり満足ではない ④ 満足していない ⑤ わからない
問 75 コンビニ ① とても満足 ② まあ満足 ③ あまり満足ではない ④ 満足していない ⑤ わからない
問 76 書籍売店 ① とても満足 ② まあ満足 ③ あまり満足ではない ④ 満足していない ⑤ わからない
問 77 運動施設 ① とても満足 ② まあ満足 ③ あまり満足ではない ④ 満足していない ⑤ わからない
問 78 サークル棟 ① とても満足 ② まあ満足 ③ あまり満足ではない ④ 満足していない ⑤ わからない
問 79 教務課窓口 ① とても満足 ② まあ満足 ③ あまり満足ではない ④ 満足していない ⑤ わからない
問 80 学生課窓口 ① とても満足 ② まあ満足 ③ あまり満足ではない ④ 満足していない ⑤ わからない
問 81 クリニック ① とても満足 ② まあ満足 ③ あまり満足ではない ④ 満足していない ⑤ わからない

問 82 ご意見がある方は、マークシート用紙の裏面に記入してください。

ご協力ありがとうございました。

2010 年度国際医療福祉大学
自己点検・評価報告書

2011 年 12 月 31 日発行

〒324-8501 栃木県大田原市北金丸 2600-1

国際医療福祉大学（発行・編集）

TEL : 0287-24-3000（代表）

FAX : 0287-24-3100（代表）

（株）エビス（印刷製本）

TEL : 0287-20-1255